

2023年11月25日（土）

ホテル阪急インターナショナルに於きまして、甲南学園 硬式庭球部 創部100周年 記念式典を挙行させていただきました。

総勢380名にも及ぶご参列者をご来場いただき、全員円卓着席で会食ができました会場は、実に圧巻のひとつと言に尽きる素晴らしさでした。

ご来賓としてご参列いただきました皆様、ゲストとしてお越しいただきました皆様。

心より厚くご御礼申し上げます。

OBOGの皆様、中学高校大学の現役生。ご出席誠にありがとうございました。

司会進行を務めていただきましたMBS毎日放送の松川浩子アナウンサー、甲南高等学校・中学校ブラスアンサンブルの部員の皆様。素敵な司会と演奏に心より感謝申し上げます。

そして、記念式典開催に向けて多大なご協力をいただきましたホテル阪急インターナショナル様、並びにご関係者の皆様。

記念誌の作成に日夜問わずご尽力いただきましたご関係各社の皆様。

素晴らしい記念式典と記念誌になりましたことを心より御礼申し上げます。

①当日のご来賓・ゲスト・ご出席者の一覧と式次第。（全4ページ）

https://konan-tennis.jp/img/pdf/100_2.pdf

②11月23日の日刊スポーツ新聞1面特大で掲載いただきました「甲南学園硬式庭球部 100年の物語」（1ページ）

https://konan-tennis.jp/img/pdf/100_3.pdf

③皆様のご協力のもと、3年がかりで完成いたしました100周年記念誌。（全256ページ）

本PDF2ページ目以降をご覧ください。

以上をPDF形式で添付させていただきました。

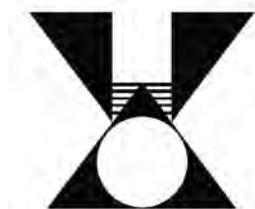
当日やむなくご参列できなかった皆様、関係者の皆様、甲南学園硬式庭球部にご興味をお持ちいただいている皆様。

是非ともご高覧いただければ幸いです。

100周年以降も、甲南学園硬式庭球部ファンを1人でも多くできるように、OBOG/コーチ/顧問、そして現役生が一体となって精進する所存でございます。

100th

甲南学園硬式庭球部 創部百周年記念誌



KONAN TENNIS TEAM

Prologue



100年後、この記念誌は部室の片隅ではこりをかぶっているかもしれない。

でも今、君が手に取った！

君のお蔭で200年もの伝統が続いている。本当にありがとう！！

これを見て、「あ～、こんなクラブやったんや・・・自分も頑張ろー！！」と
思ってもらえたら・・・。

その奇跡を信じて！！

頑張れ、100年後の後輩諸君！！

ご挨拶



創部100周年記念誌 発刊に当たって

オール甲南テニスクラブ

会長 三村 晃久

1923年4月に甲南高等学校は設立されました。全国では武蔵に次ぐ2番目、関西では初めての私立の旧制7年制高等学校です。同時に硬式庭球部が創部された、と記録されています。

甲南学園の創立者である平生鈞三郎先生は「個性を尊重して各人の特性を啓発する人物教育の率先」を教育理念として掲げ、少年時代・学生時代にスポーツの修練を通じて「肉体と精神の鍛練を積むことが絶対に必要である」と考え校内でのスポーツを奨励されました。そして100年の歳月を経た今、この記念誌を発刊することができましたことはこの上ない喜びです。

この100年の間に、甲南学園硬式庭球部から8名のデビスカップ日本代表選手を誕生させるなど世界の舞台で活躍する選手を多く輩出して参りました。あらゆるスポーツに於いて、成績を残した人達や記録を伸ばし続けている選手たちは我々が知る以上の努力や工夫、日常生活での規律正しい習慣を保ち続けていると思います。活躍されてきた甲南学園硬式庭球部の諸先輩の方々も強い信念の下、努力されてこられたと拝察いたします。その結果として歴史と伝統が築きあげられてきたことに思いを馳せますと尊敬の念に堪えません。

2020年、日本も新型コロナウイルスのパンデミックに襲われました。それからの3年間は学生諸君にとって非常に辛い時期だったと思います。大きな制約がある中で活動を継続し「この状況下でできることは何か？」を自問し続けたのではないのでしょうか？日常生活はもとより日々の練習や大会も制限され、コロナパンデミック以前なら当たり前のこととして存在していたものが存在せず、やるせなさを感じたと思います。事態の完全な収束にはもう少し時間を要するかもしれませんが、「努力し続けてきたこと」は必ずや「試練」を「学び」に昇華させてくれると信じ、益々の成長を期待したいと思います。

甲南学園硬式庭球部は団体戦での優勝を目指しています。これまでも、甲南中学校テニス部は全国中学校テニス選手権大会や全国選抜中学校テニス大会での優勝経験があり、これからも優勝するチャンスは大いにあると思います。

甲南高校テニス部はインターハイで優勝するなど活躍してきました。近年は通信制の高校が強豪校として台頭してきましたが、全国選抜高校テニス大会では近畿代表として出場するなど古豪校として甲南の名を刻んでいます。今後さらなる上位進出を期待しています。

甲南大学硬式庭球部はキャンパスのある岡本からテニスコートのある六甲アイランドへ移動し練習しています。ひと昔前と違って、授業をしっかり受け勉学に励んだ上で、スポーツにも力を入れることが求められていますので平日の練習時間は限られています。一方で、練習設備環境は充実しています。OB/OGの皆さまから頂いた寄付金を基にナイター照明の設置とテニスコートのサーフェスを全面ハードコートに変えることができました。立派なトレーニングジムも完備されています。選手たちがこれらの設備を存分に活用し、さらなる飛躍を応援しています。学生の本分は勉学であることは言うまでもありませんが、社会に通用する人物を育て輩出するにはスポーツを通して経験や知識を蓄積していくことも必要です。テニスというスポーツを通して育んだ知恵や人間関係もまたかけがえのない財産です。

今後も世界で活躍する紳士・淑女が数多く輩出されますことをご祈念申し上げますと共に、OB/OGの皆さま方には変わらぬご厚誼を賜りますようお願い申し上げます。

祝辞



硬式庭球部創部100周年 おめでとうございます

学校法人甲南学園

理事長 長坂 悦敬

甲南学園硬式庭球部創部100周年、おめでとうございます。甲南学園硬式庭球部は、旧制甲南高校が誕生した1923年（大正12年）に創部され、輝かしい伝統を築いてこられました。活躍されてきた選手の皆さん、選手を支えてきてくださった指導者はじめ関係者の方々、OB・OGの皆さんに心から敬意を表します。

平生鈺三郎先生が、「人格の修養と健康の増進を重んじ、個性を尊重して各人の天賦の特性を伸張させる」という教育理念を掲げ、甲南学園を創立したのが1919年です。徳体知の三位一体となった人物教育を続けている甲南学園にあって、学園創立4年目にすでに硬式庭球部が誕生、歴史が刻まれてきました。

これまでに、男子テニスの国別対抗戦“デビスカップ”に松岡 功選手、渡辺 康二選手を始め数多くの選手が出場を果たすと共に、中学では全国選抜中学校テニス大会団体の部、全国中学生テニス選手権大会団体の部優勝、高校では高校総体（インターハイ）団体の部優勝、そして大学では第17回及び第33回の全日本大学対抗テニス王座決定試合に優勝するなど、名門テニス部としての地位を確立し、現在においても、中学、高校、大学とも硬式庭球部の活躍は目を見張るものがあります。中学、高校、大学の一貫教育であるメリットを活かし、硬式庭球部の強化も一貫、連動している取り組みが素晴らしい成果につながっています。

甲南の卒業生は、「よき個性を輝かせて和合できる人」、「リーダーたる資質を持った人」、「周囲の共感を生み出す人」、「志を持ち、実行力のある人」、「突破力のある人」、「振る舞いの素晴らしい人・品位品格のある人」、「社会に出てからの価値が高い人」であると評価されています。卒業生の皆さんがこのような評価されているのは、中学、高校、大学で平生鈺三郎の哲学（平生フィロソフィ）を身につけ、文武両道をやりとげ、素晴らしい人格をつくられたからだといえます。「平生フィロソフィ」は、私たち甲南人の標となっています。「正志く 強く 朗らかに」生きようという平生の精神、甲南のDNAは不滅です。

2022年9月17日の神戸新聞に、『テニス弁護士、国体へ行く。文武「二刀流」甲南OB上原さん、猛勉強で一発合格、週末は練習漬け』という記事がありました。まさに「平生フィロソフィ」を身につけた素晴らしい甲南人が硬式庭球部から続々と誕生しています。

次の100年に向けて、甲南学園硬式庭球部が更に輝いて発展されますこと、そして、関係者の方々のご健勝でますます活躍されますこと、心より祈念いたします。

祝辞



硬式庭球部創部100周年 心よりお慶び申し上げます

甲南大学

学長 中井 伊都子

甲南学園硬式庭球部の創部100周年にあたり、心よりお慶び申し上げます。1919年の甲南学園創立から4年目にし
て甲南学園硬式庭球部が創部され、そこから一世紀にわたってさまざまな時代の波を越えて輝かしい伝統を紡いでこ
られたことに、驚嘆と尊敬の念を禁じえません。

旧制甲南高等学校時代からの伝統を受け継ぐ甲南大学体育会硬式庭球部は、1951年の甲南大学創立の年に早く
も誕生し、部員集めに苦労しながらも、翌年には各種公式戦への参加を開始されました。当初は専用のコートがなくあ
ちこちを転々として練習するなど、あまり恵まれない環境の中でも、「常に前進」を目標に精進し努力を重ねて今日に至
る庭球部の土台を築かれました。その上に、輝かしい戦績の数々を重ねて、現在の名門テニス部としての揺るぎない
地位を獲得されました。

良質な社会常識と倫理観そして品格を備えた人間性を養うことを目的として甲南学園を創設した平生鈇三郎先生の
「人物教育」の理念を、甲南大学はいま「人物教育のフレームワーク」というかたちで実現しようとしています。専門
教育、全学共通教育そして正課外教育のバランスの取れた学びこそが、「徳・体・知」の三拍子揃った人物を育てる
と考えています。

まさにこの「徳・体・知」を体現する甲南スポーツの範として、甲南学園硬式庭球部が次の100年に向かってますま
す発展されることを心から祈念し、そしてそのきらめきが甲南学園・甲南大学をこれからも明るく輝かせてくださいます
よう願っております。

祝辞



硬式庭球部創部 100年を記念して

甲南高等学校・中学校

校長 山内 守明

硬式庭球部創部100周年おめでとうございます。100年間のクラブの歴史の中で、数多くの名勝負が繰り広げられ、また沢山の甲南生が輝きを放ってきたことと思います。硬式庭球部OBの方に100周年のお慶びを申し上げますと共に、これまでクラブを支えて下さった顧問、監督、コーチの皆様に深く感謝の念を表させていただきます。

さて、「甲南学園50年史」を紐解くと、甲南中学校創立1919年の翌年1920年には、弁論・芸術・庭球・競技の4つのクラブがあったと記されています。しかし当時テニスコートは存在せず、庭球部は外の施設で練習をしていました。1921年末にテニスコートを設けるための地ならしがされたと記録が残っていますので、翌1922年にはテニスコートが完備され、1923年の7年制高等学校の創立と共に本格的なクラブへと生まれ変わっていったものと見られます。

創部当時の記録では、1924年に尋常科で全国中等学校軟式庭球大会での優勝を皮切りに、全国中等学校準硬式庭球大会での優勝と、常勝甲南の名声を博しました。高等科も1925年に神戸高工、姫路高校、大阪高校を降して庭球の名門甲南の礎を定められました。この後の輝かしい成果については枚挙にいとまがなく、本編に詳しく記されていることと思いますので割愛させていただきます。

さて、学園創設者の平生先生は、甲南教育にスポーツマンシップを取り入れ、その精神を涵養させることを考えられていました。「スポーツを行う時は全精神と全体力を集中し、他の事を考える余裕なく、しかも正しく強く朗かに行動するものである」と語られ、ご自身のモットーに『正しく強く朗かに』を掲げられていました。先生は「この精神をもって自身の事業に従事しようとするなら、何事も愉快地正々堂々、能率よくすらすらと運ぶことであろう。」と語られています。

甲南学園硬式庭球部のホームページでは、徳・体・知を前面に掲げられ、「“テニスだけ強ければ良い”のではなく、その後の社会生活においてもリーダーシップを発揮できる“徳、体、知”に優れた人材の育成を目標にしております。」と記されています。戦後の学制改革を経て、旧制甲南高等学校は現在の甲南高等学校・中学校と甲南大学へ発展的解消を果たしましたが、硬式庭球部では建学の精神を重んじ、現在も中高大一体となった指導体制を継続され、成果を出し続けられています。

輝かしい伝統を受け継ぎ、新たな100年に向かって平生先生の「正しく強く朗かに」という言葉も部員一同の心に留めていただき、硬式庭球部が平生精神の体現者として、運動部の範たる活動・活躍され続けることを祈念してお祝いの言葉とさせていただきます。

祝辞



甲南学園硬式庭球部 100周年をお祝いして

公益財団法人日本テニス協会

会長 山西 健一郎

甲南学園硬式庭球部100周年、誠におめでとうございます。

長年の活動と輩出された数多の人材が、我が国テニス界の歴史を創り、支え続けてくださっていることに、日本テニス界を代表し篤く御礼を申し上げます。

1923年に旧制甲南高校にて創部の貴部と、その前年に創立された日本テニス協会は、同じ時代をともに駆け抜けたいわば同士のような間柄であると、感じています。創部の年、当協会は国際ローンテニス連盟への加盟を正式に認められ、国際テニス界へのデビューを果たしました。同じく関西学生連盟リーグに加盟した貴部は、翌年に初勝利を挙げ、学生テニス界へ鮮烈なデビューを果たされています。終戦後の1951年、甲南大学は学制改革により新制大学として発足し、現在に至る新たな歴史を紡ぎだしましたが、同じ年、当協会も12年ぶりにデビスカップに復帰し、戦争で止まっていた時計を再び動かし、国際テニス界への再デビューを果たしました。以来、学生テニス界の頂点を目指し、たゆまぬ活動を続けてこられた貴部と、世界の頂点を目指し、様々な方々に支えられながら歩んできた当協会は、次の100年に向けても、共に進んでいくことと思います。

さて、その歴史のなかで輩出された人材には、目を見張るものがあります。デ杯代表選手だけでも、1933年出場の伊藤英吉氏から、松岡功氏、石黒修氏、藤井道雄氏、渡辺康二氏、小林功氏、河盛純造氏、西尾茂之氏と、まさに「綺羅星のごとく」です。そのなかで渡辺康二氏には、1963年のデ杯東洋ゾーン韓国戦以来選手として、監督して我が国を代表して戦っていたのちに、2001年には第12代日本テニス協会専務理事として諸事情により存亡の危機にあった当協会をよみがえらせ、現在も名誉副会長として当協会のみならず、テニス界全体を見守り、ご指導をいただいております。ほかにもご出身の沢山の方々に、当協会と日本のテニス界を支え、未来へとつなげる活動を担っていただいていることは、感謝に堪えません。

さて、私たち日本テニス協会は次の100年に向けた歩みを正しく導くものとするために、新しい理念・ビジョン・行動指針を作成し、発表しました。

【理念】 わたしたちはテニスを通じて人と人、国と国をつなぎ、その素晴らしさを伝え、すべての人が健やかで 幸福な人生を享受でき、多様性と調和のある社会の実現に貢献します

【ビジョン】 ・すべての人の豊かなスポーツライフに寄与します ・国内外の人々や組織と協力し、テニスの発展に尽力します
・世界レベルの選手を一人でも多く輩出し、夢と感動を届けます ・健全で安定した協会運営を行います
・公正で差別がなく、ジェンダー平等に基づき、誰もが活躍できる組織を目指します

【行動指針】 ・フェア：常に公平、公正、誠実な姿勢を貫きます
・グローバル：世界的視野を持って行動し、海外の関係者と積極的に交流します
・チームワーク：活発なコミュニケーションをはかり、互いを尊重し、力を合わせて前進します
・共創：ステークホルダーの声に耳を傾け、共にテニスの未来を築きます
・挑戦：歴史と伝統を重んじつつ、変化を恐れずチャレンジし続けます
・感謝：いつも感謝を忘れず、テニスの持つ力を信じ、愛し、伝え続けます

我が国テニスの歴史を共に創り、これからもテニス界を支えてくださる、甲南学園硬式庭球部の皆さまにも、これを気にかけていただければ幸いです。

最後になりましたが、創部100周年の節目にあたり、あらためての感謝を申し上げるとともに、今後のますますのご発展をお祈りして、お祝いの言葉といたしたいと存じます。

祝辞

甲南学園硬式庭球部 創部100周年をお祝いして



関西テニス協会
会長 馬場 宏之

甲南学園硬式庭球部、並びにオール甲南テニスクラブの皆様がこの度、創部100周年を迎えられますことを心よりお祝い申し上げますとともに創部100周年記念誌を発刊されますことを重ねてお慶び申し上げます。そして、長年の輝かしい活動実績により、関西テニス界、日本テニス界への多大なる貢献をされましたことに対し、敬意を表しますとともに感謝申し上げます。

甲南学園硬式庭球部は、100年という長い伝統の中で、デビスカップ選手、全日本選手権、全日本学生選手権、関西選手権、関西学生選手権などの大会で活躍された数多くの名選手を輩出されてきました。また、チームとしても全国選抜中学、全国中学生選手権、全国選抜高校、高校総体、全日本大学対抗王座決定試合でも関西の雄として長年に渡り、活躍されてこられました。

昔から多くの傑出した選手を拝見させていただきましたが、総じて攻撃力のある積極的なプレーが多く、華麗なプレーをいとも簡単にしてしまうような憧れの選手、また、それぞれ個性的で明るく、人間味あふれる選手が多くおられたように記憶しています。

そして、選手としてだけでなく、卒業されてからも指導者、協会の役員、大会協賛としての支援者など、幅広い分野でテニスを支え続けられ、いつまでもテニス界に貢献しようとされている人達、社会人として社会や実業界の世界でも着実に活躍されている人達も多く、まさに中学・高校・大学と一貫教育で「徳・体・知」に優れた人材育成を目指されている甲南学園の教育方針の成果と感服いたします。また、卒業後のオール甲南テニスクラブの会員の皆様の結束力は強く、その絆が原動力となって、長きに渡り、現役庭球部、オール甲南テニスクラブを支える構図が出来ており、100年の伝統が築きあげられたものと感銘を受けています。

このコロナ禍の3年間では色々な環境変化がありましたが、漸く収束の方向になってきました。関西テニス協会では、これを機に再出発の気持ちで、「テニスをする人、テニスを見る人、テニスを支える人を増やしましょう」をキーワードに取り組んでいるところでございます。引き続きのご支援をいただきたく、よろしく申し上げます。

最後に甲南学園硬式庭球部の今後益々のご活躍とオール甲南テニスクラブの益々のご発展と会員の皆様のご健勝を祈念いたします。

祝辞



祝辞

一般社団法人兵庫県テニス協会

会長 滑川 琢也

甲南学園硬式庭球部創部100周年を迎えられましたことを、心よりお慶び申し上げます。

旧制甲南高校が誕生した1923年大正12年に創部され、100周年を迎えられましたことは長きに亘り多くの大先輩方が日本のテニス界において輝かしい活躍を残された賜物であり敬意を表します。

オール甲南庭球部の伝統を継承され「テニスだけ強ければ良い」のではなくその後の社会生活においてリーダーシップを発揮できる「徳、体、知」に優れた人材の育成を目標にしてこれらテニスを通じ中学、高校、大学の一貫教育を行い、強化においても10年の育成期間で取り組んでこられました。

さて、100年という長い歴史において、中等部、高等部、大学とそれぞれ庭球部が数多くの著名なテニスプレーヤーを輩出され、本当に素晴らしい伝統を築きあげてこられました。

デビスカップの日本代表選手には伊藤英吉氏、松岡功氏、石黒修氏、藤井道雄氏、渡辺康二氏、小林功氏、河盛純造氏、西尾茂之氏ら8人の偉大な先輩が日本男子テニス界を牽引してこられました。

全日本大学王座決定戦でも、昭和38年、昭和54年に大学日本一を達成し、また何度も決勝まで進出されました。全日本学生テニス選手権大会では昭和30年に松岡功氏がシングルスで優勝、ダブルスでも準優勝され、昭和38年には渡辺康二氏がシングルス、ダブルスの2冠に輝きました。また、渡辺康二氏は、公益財団法人日本テニス協会の専務理事、副会長としてご活躍され、日本のテニス界の発展に貢献されました。昭和52年にはシングルスで中西伊知郎氏がシングルスで優勝、ダブルスでも吉田昇生氏と組み優勝され、2年後の昭和54年にも中西伊知郎氏がシングルスに優勝、ダブルスでは江見浩平氏と再び日本一に輝きました。私も現役時代の近畿大学硬式庭球部在学中には関西学生リーグ戦において、甲南大学は関西では常に優勝していた最強のチームでした。

現在は、関西大学対抗テニスリーグ戦優勝、王座出場を目標に四宮総監督、平野監督、小原コーチの指導の下、目標達成に向かって一致団結し頑張っておられます。

また、全国中学テニス選手権大会においては、1981年、2006年、2007年、2009年、2014年に5回の全国優勝を果たされ、常に兵庫県の代表校として全国大会で活躍されています。全国高校テニス選手権大会団体の部では、1957年、1958年、1959年、1964年と4回の全国優勝を果たし、個人戦の男子シングルスにおいても1954年石黒修氏、1956年平野一斎氏、1959年松本鐵一氏、1960年の浅井正順氏、1962年甲斐建樹氏ら5人の先輩方が全国優勝されています。

施設面においてもナイター付きクレーコート、ハードコート、オムニコート等すべてのサーフェスを有し、有望なジュニア選手の発掘、トップレベルのプロコーチやトレーナーなどによる指導も充実されています。

兵庫県テニス協会では毎年、楽天の三木谷浩史様よりご協賛を賜り、県下における高校、大学及び他府県の強豪校との交流や強化を目的とした三木谷杯兵庫県テニス代表チーム対抗戦を開催し、甲南高校庭球部、甲南大学庭球部の皆さんも出場いただき、毎年優秀な成績を収められ兵庫県テニス界の育成、強化を担っていただいております。

結びに、甲南学園硬式庭球部の今後益々のご発展と皆さまのご活躍を心から祈念いたしまして、お祝いのご挨拶とさせていただきます。

祝辞



甲南学園硬式庭球部 創部100周年をお祝いして

学習院庭球部後援会

会長 原田 公敬

甲南学園硬式庭球部が創部100周年を迎えられたこと、学習院庭球部後援会を代表してお祝いを申し上げます。私は前任の塚原穰会長の後を受け、本年6月より会長を務めております昭和45年卒業の原田公敬と申します。新任のこの年に貴庭球部100周年のお祝いを述べさせていただくことに、格別なご縁を感じて光榮に存じております。

貴庭球部は創部以来、何名ものデ杯選手を初めとし多くの名選手を輩出され、日本テニス会の発展に多大なる貢献をされて来られたことに深く敬意を表します。昭和8年の伊藤英吉氏を嚆矢とし、昭和30年代、40年代には松岡功さん、藤井道雄さん、渡辺康二さん、小林功さん、河盛純造さん達がデ杯で活躍される姿を憧れと期待を持って、日本中のテニスファンが応援していたことが思い出されます。その後も現在に至るまで幾度となく大学王座に輝くなど、輝かしい活躍を続けられておられます。

この様な貴庭球部と毎年定期戦を行うことが出来、技術的、実力的にはなかなか近づくことは出来ませんが、強豪のテニスと直接相まみえる貴重な機会を与えて頂いていることに感謝をしております。貴庭球部と当部の交流の始まりにつきましては、私どもの創部100周年記念誌に、昭和28年主将の小西博夫が「私が甲南主将の馬場君と親しかったのでテニス部も対抗戦をやろうということになって」と書いております。又OBOG戦については、学習院テニス部90年誌に私と同期の藤井一義さんが「同期の原田君たちとOBの対抗戦もやろうじゃないかということで始めることになった」と書かれております。現役対抗戦70年とOB対抗戦50年という長きに亘り現在に至るまで、庭球部同士としてのみならず各個人同士の交流が深められていることに、素晴らしい絆を感じております。

前述の通り対抗戦開始の70年前から現在に至るまで、各学年並びにその前後の年代も含め、現在でも楽しいお付き合いが続いていると聞いております。私も前出の藤井一義さん始め、当時主将の木本結一郎さん、辻本隆さんを始めとして近年に至るまで多くの方と交流を頂いております。又OB対抗戦や所属のテニスクラブなどで大先輩の藤井道雄さん、渡辺康二さんたち甲南OBの方と学習院のOBがテニスをご一緒させていただいております。

創部100周年を迎えられた貴庭球部が、今後100年に向かってこれまでの輝かしい伝統を守りつつ、又新たな伝統を築かれて行くことを祈念するとともに、我が学習院庭球部との楽しく且つ有意義なお付き合いが長く続くことを期待致し、お祝いのご挨拶とさせていただきます。

祝辞



甲南、灘両校の テニスの深い縁

灘中・高硬式庭球部OB会 松影会

会長 神澤 俊介

創部100周年誠にありがとうございます。

私は現在、灘中・高硬式庭球部OB会、松影会の会長を務めていますが、改めて甲南、灘両校硬式庭球部の縁の広さ深さを実感致します。

まずは、1953年に始まった甲南・灘定期戦(灘甲戦)です。私が中1の1968年6月、灘甲戦で堀田義男さん(甲南)と中島徹さん(灘)の高校単No.1対戦を観てテニスの醍醐味を味わい、硬式庭球部入部を決めました。灘甲戦の初期、1954年には石黒修さんと市山哲さんという、後年それぞれデ杯選手となる単No.1対戦もあり、渡辺康二さん(当時中1)が灘中・高の「硬式テニス部70年史」(2010年刊行)へのご寄稿でその名勝負について記されています。灘甲戦の硬式テニスは中、高共に複3本、単6本の団体戦ですが、1960年代以降、灘中が稀に勝つことがあっても、灘高は連敗続きで、近年は中高共に甲南に勝てず、この状況は兵庫県や近畿の団体戦でも同様です。

さて、私ども松影会は1990年代以降、関西及び関東で親睦のテニス会を活発化させ、静岡県掛川市のつま恋リゾートで東西対抗戦も始めました。ほどなくそこに甲南のOBOGが加わり、シニアの灘甲戦、両校校歌合唱で締める懇親会等、大変楽しく交流させて頂きました。あいにく2020年からコロナ禍に伴い、松影会のテニス会もシニア灘甲戦も途絶えましたが、今年から漸くテニス会が再開しています。問題は、常連の両校OB、とりわけ幹事役の高齢化が進んでいることであり、両校の若手卒業生が鋭意ご参加下さることを望んでやみません。

灘甲戦に加えて、両校硬式庭球部の縁が広く深い要因は、家族、親戚等で片方は甲南、もう片方は灘という例が少なからずあることです。兄弟の例は、故渡辺健一さん(旧制灘中在学時の1946年全国中等学校庭球選手権複優勝)と康二さん(甲南)や、津山宏さん(灘高1958年卒。テニスは大卒後に傾倒)と隆三さん(甲南大1966年卒)です。私の亡父の神澤得之助(旧制甲南高1938年卒)や従兄の雄次郎(甲南大1970年卒)も、甲南でテニスに励みました。また、岡橋修さん(灘高1966年卒)のように甲南小を経て灘中に入った例もあります。

私は大学入学後、東京に定住し、1987年から東京ローンテニスクラブに所属していますが、同クラブの甲南出身会員として、元デ杯選手の藤井道雄さん、渡辺康二さん、故河盛純造さん、西尾茂之さん、また、2021年全国日本ベテラン70歳単優勝の堀田義男さん等、錚々たる名選手がおられます。灘出身会員である猪熊研二さん(灘高1957年卒)が2010年に藤井道雄さんと組んで全日本ベテラン70歳複で優勝したのは、甲南、灘の超長期交友の象徴です。

今や学校スポーツのあり方が変質しつつありますが、テニスは一生のスポーツであり、甲南、灘両校硬式庭球部出身者の極めて親しいご縁、交友が、今後も末長く続くことを祈念致しております。甲南学園硬式庭球部の創部100周年を重ねて心からお祝い申し上げます。

目次 CONTENTS

ご挨拶	3
祝辞	4
輝かしい活躍の歴史	13
座談会(男子)	32
座談会(女子)	40
各学年の思い出	49
寄稿文	189
戦績	231
寄付金納付者一覧	249
記念誌編集委員会・編集後記	255

輝かしい活躍の歴史

HISTORY

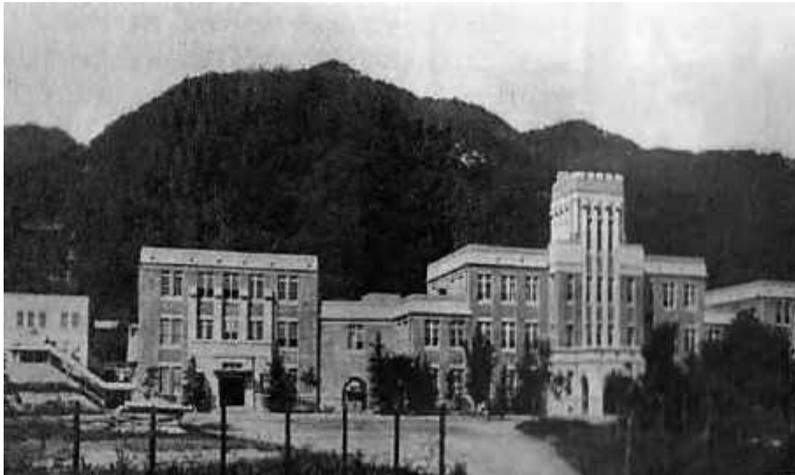
甲南テニス部の歴史はここから始まった!!

1923 ● 甲南学園 テニス部発足

大正8(1919)年に設立された甲南中学校は開校4年を経て、高校を設置する時期が来た。折から尋常科4年、高等科3年からなる7年制高校の制度が国の臨時教育会議で認められた時期だった。

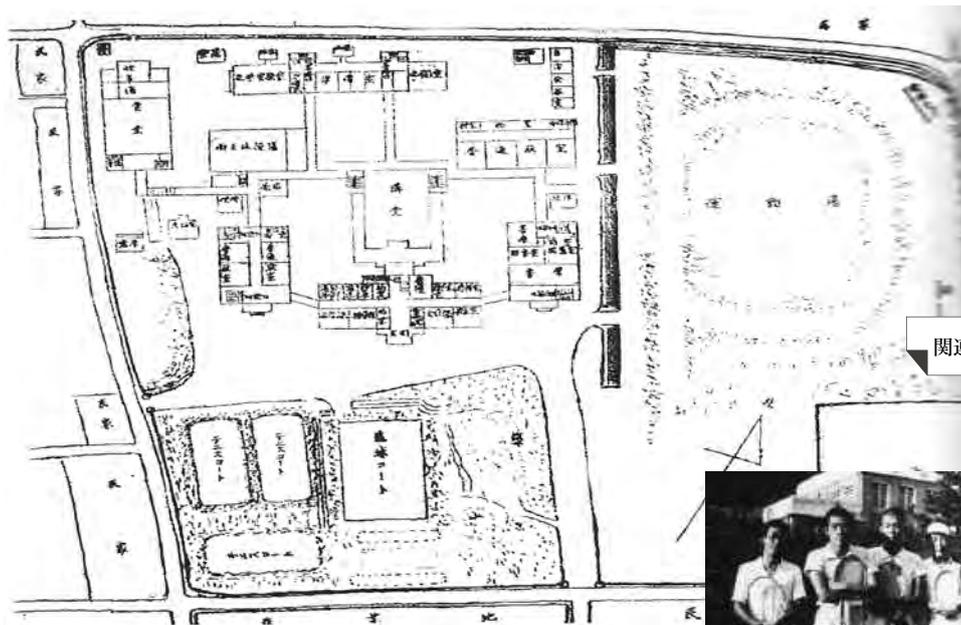
甲南の創始者・平生夙三郎氏は甲南高校を7年制高校として設置する事を決定し、大正12(1923)年5月、甲南高等学校は53名(文科28名、理科25名)をもって発足した。

設備面では講堂を含む新校舎、屋内体操場、運動場、テニスコートの建設が開始された。クラブ活動では体育系のテニス部、競争部、山岳部の3クラブが学校公認クラブとして対外活動を始めた。



◀ 設立当初の旧制甲南高等学校の全景
(一番高い建物が本館)

現在の甲南大学岡本キャンパスが元は旧制甲南高等学校の校舎であった。テニスコートは本館の南西、現在の正門を潜った西側に2面設置されていた。



関連記事はP204

▲ 本館の南西にテニスコート(2面)建設の予定図

往年のテニス部メンバー▶



黎明期

男子

甲南テニス部の忘れられない日 - 初の全国優勝! -

1924 ● 全国中等学校軟式庭球大会 優勝!!

テニス部が発足して間もない翌年の大正13(1924)年7月27日。この日は甲南テニス部にとって忘れられない日となった。全国中等学校軟式庭球大会(神戸山手倶楽部主催)で上原・神田組らで編成する甲南中学が優勝したのである!



▲庭球大会優勝記念。後列で優勝旗に挟まれているのが上原さん

▲1995年発行の「甲窓」第37号より抜粋

●全国中等学校軟式庭球大会(大正13年7月27日)の結果と総括

神田、上原、金倉、金谷を派遣せしむ。

・第四回戦 本校3-2神港商業 ・第五回戦 本校3-1関西中学

・準優勝戦 本校4-2笠岡中学 ・優勝戦 本校4-3宮津中学

嗚呼悪戦苦闘、奮闘更に奮闘ある優勝旗は母校を飾りぬ。我庭球部創部以来の最初の優勝。

我校最初の栄冠。我部の大いに誇りとする所なり。

【年報「甲南」大正14(1925)年版 庭球部々報(P187~)より抜粋】

【上原増雄さん「旧制甲南中学第3回(大正15年)卒」】

1924年、甲南テニス部が全国で初優勝した全国中学軟式庭球大会の代表選手。同年、全国中等学校庭球大会にも神田俊治選手と組んで初出場。翌年1925年の第18回大会では、3回戦まで進み、優勝した宮脇・桑原組(豊中中)に5-6と肉薄した実力者だった。大正15年、中学卒業後は関学高商に進まれ、第1回全日本学生テニス選手権(昭和4年)のシングルスに優勝される等、国内トップクラスの選手として長らく活躍された。

上原選手の名前を拝見したのが、1995年発行の「甲窓」第37号だった。阪神淡路大震災で亡くなられておられ、同級生の坂田元三さん(元甲南堂書店経営)が、「テニスで甲南の名を広める」とのタイトルで、その死を悼む思い出の記を書かれている。なお、上原さんは1969~70年の2年間、デ杯日本チームの監督を務められた。

旧制甲南高校 高専大会で9回の優勝!!

1923年に発足した旧制甲南高校テニス部は、学制改革により新制高校に移行する1948年までの間に、高専大会関西ゾーン優勝を7回、全国ゾーン優勝を2回、合計9回の優勝を誇る。



▲ 優勝記念ペナントが納まっている9つの収納箱



▲ 昭和14 (1939) 年の優勝記念ペナント

1930 ● 創部7年 高専大会・関西ゾーンで初優勝!!

● 京大ゾーン (昭和5年7月15~23日)

- ・ 1回戦 ○甲南 不戦勝
- ・ 2回戦 ○甲南 4-1 第三高校 (京都)
- ・ 3回戦 ○甲南 4-1 第六高校 (岡山)
- ・ 4回戦 ○甲南 4-1 高知高校
- ・ 決勝戦 ○甲南 (楠本、不破、伊藤 英吉、伊藤 順吉) 5-0 大阪高校

● 関西ゾーン優勝決定戦 (7月24日)

- ・ 決勝戦 ○甲南 (楠本、不破、伊藤 英吉、伊藤 順吉) 4-1 長崎高商 (京大ゾーン代表)

関連記事はP206

この大会中本校選手一同は終始健気なる奮闘を続け、如何なる相手と雖も些かも油断する所なく、最後まで頑張り、加ふるに諸兄の熱誠なる御応援により、遂に優勝の栄を克ち得る事が出来た。

来年も亦、否永久に栄ある大学の優勝旗を二楽荘山下のこの白亜城下に翻さん事を一同固く誓ったのである。

【年報「甲南」昭和5 (1930) 年版 庭球部々報より抜粋】



▲ 昭和2年 庭球部員
 横柄 上谷 金谷 平 村 花村 上西 杉野 江口 川崎
 中野 吉村 江口 藤田 中野 奥 島
 前野 山西 杉野 藤田 松森 津田



▲ 昭和4年 高等科庭球部員
 横柄 山本 上村 吉田
 中野 金子 藤田 松村 久保 上谷
 前野 江口 杉野 伊藤 松本 人江 津田

1939 ● 高専大会 全国ゾーン優勝! 初の日本一に!

▼ 昭和14年 高専大会 全国ゾーン優勝(於:京大コート)



● 第8回 高専大会 京大ゾーン

(昭和14年7月15~19日 於:京大コート)

- ・1回戦 ○甲南 5-0 松江高校
- ・2回戦 ○甲南 5-0 大阪高校
- ・準決勝 ○甲南 5-0 第三高校(京都)
- ・決勝 ○甲南 5-0 第四高校(金沢)

● 第8回 高専大会 全国ゾーン

(7月23~24日 於:京大コート)

- ・1回戦 ○甲南 4-0 水戸高校
- ・決勝 ○甲南 3-2 第八高校(名古屋)

<前略> 明日こそ宿敵八高を打倒すべく、その夜は早く寝た。いよいよ決勝戦開始。ダブルスNo.2に不覚の1敗を喫し前途が危ぶまれたが、No.1の必死の頑張りに1-1となり、勝敗の鍵はシングルスに持ち越された。No.3に大野は貴重な1点を取め、あと1点ををと期待をNo.2にかけ、第1セットを好調に先取したが、第2セットの好機を逸し惜敗し、いよいよNo.1で第8回高専大会の覇が決まる事になった。大石の真正面からの正攻法に中條も焦り気味となり、大石着々とポイントを重ねてストレートに破り、遂に初の全国制覇は成った。殊に決勝に多年の仇敵たる八高を破り得たのは吾々の最大の喜びであった。ある時は八高にある時は松山に無念の敗退を喫し、捲土重来を誓いし事幾度ぞ。今や吾々の多年の努力は実を結び、全国制覇の栄冠を握ることが出来た。これ偏に諸兄の熱烈なご声援の賜であり、ここに深く感謝する次第である。

【年報「甲南」昭和14(1939)年版 庭球部々報より抜粋】

1948 ● 高専大会 全国ゾーン 2回目の優勝!!

1948年といえば、終戦後まだ3年程。おそらく学校も日本全体も混乱の最中だったのだろう。本大会の資料を探したが、一向に見つからなかった。写真の表情も、前回の優勝時と比べると心なしか沈んで見える。しかし、甲南高校の2回の優勝ペナントをしっかりと前面に出しているところに、勇気とプライドを感じる。戦後の窮乏の暗いムードを吹き飛ばすように、2度目の全国優勝を成し遂げた先輩方には敬意を表したい。(編集委員)



関連記事はP51

1952 ● インターハイ(全国高等学校対抗庭球大会) 団体の部 初出場! その後、兵庫県代表として25回(兵庫県最多) 出場!!

インターハイテニスの団体戦(正式名称:全国高等学校対抗庭球大会)は昭和9年(1934)から始まり、令和5年(2023)で80回目を迎えた。甲南高校の名前が全国大会プログラムに載るのは戦後、昭和27(1952)年の第9回大会から。以来70年間、兵庫県予選に参加し、全国大会に進んだのは過去25回。兵庫県のなかでは第2位校を10回以上上回って堂々トップを走っている!

1956 ● 甲南高校が最も輝いていた時代!! 昭和31年(1956)~昭和40年(1965)

昭和31年からの10年間は甲南高テニス部が最も輝いた時期である。10年連続してインターハイの団体戦へ出場した。その中で、インターハイ初の「団体の部3連覇」(昭和32年~34年)をなし遂げた。

甲南高校の後に3連覇したのは、慶應義塾高校、柳川高校(2回。うち1回は14連覇)、堀越学園の3校のみ。その意味で甲南高校3連覇は今も燦然と輝く記録である。

また、この10年間の戦績は、全国優勝・4回、準優勝・2回、ベスト4・3回、ベスト8・1回と抜群の戦績を残している。「インターハイの団体戦でベスト4以上を残さないとコートで大きな顔を出来なかった」と当時の選手が今でも異口同音に語っている。

【甲南高校 インターハイ 団体の部 年度別成績】

年	成績
昭和27年	準優勝
昭和28年	ベスト4
昭和29年	ベスト4
昭和31年	ベスト4
昭和32年	優勝
昭和33年	優勝
昭和34年	優勝
昭和35年	準優勝
昭和36年	準優勝
昭和37年	ベスト4
昭和38年	ベスト4
昭和39年	優勝
昭和40年	ベスト8

年	成績
昭和43年	ベスト4
昭和44年	ベスト4
昭和45年	ベスト4
昭和46年	準優勝
昭和47年	準優勝
昭和48年	ベスト4
昭和49年	準優勝
昭和50年	準優勝
昭和52年	ベスト4
昭和56年	ベスト8
昭和58年	ベスト4
昭和59年	ベスト8

黄金期

男子

インターハイ (全国高等学校対抗庭球大会)
団体の部 大会史上初の3連覇!!

1957 ● インターハイ 団体の部 初制覇!



◀ (後列左より)
平野、藤井、藤原先生、
野々村、那須
(前列左より) 四宮、山根、岩尾

関連記事はP20

1958 ● インターハイ 団体の部 2連覇!



◀ (後列左から5人目より)
渡辺、小林、前川
(前列左より)
松本、藤原先生、
一人おいて、静、澤本、後藤

関連記事はP62

1959 ● インターハイ 団体の部 3連覇!



◀ (後列左から5人目)
藤原先生
(前列左より)
小林、西尾、松本、吉田、
前川、渡辺

関連記事はP21

インターハイ 団体の部 4度目の優勝!!

1964 ● 5年ぶりにインターハイ 団体の部で優勝!!

1964年の第21回インターハイ、下馬評では法政二高（神奈川）が優勢との声が高かった。前年度高校シングルスランキング2位、4位の3年生に加えて、後に日本のエースとなる神和住純選手（2年）がレギュラーに定着する成長ぶりを見せていた。

しかし決勝戦、“試合はやってみないと分からない”を地で行く頑張りを見せた甲南が2-1。見事な番狂合わせをやったのけた。

● 団体戦登録選手

監督：藤原 邦雄先生

選手：森 博、増成 治保、春日 徹、藤原 英一、柴山 隆彦、山岡 靖幸

金城学院(女)が四連勝		男子は甲南が五年ぶり	
テニス (名古屋)			
▽男子準決勝	甲南 2 単 1-1	法政二	1 複 1-0
甲南 2 複 1-0	市岡	0	
甲南 2 複 1-0	神和住	1	
甲南 2 複 1-0	神和住	1	
▽男子決勝	甲南 2 単 1-1	法政二	1 複 1-0
甲南 2 複 1-0	市岡	0	
甲南 2 複 1-0	神和住	1	
甲南 2 複 1-0	神和住	1	
▽女子準決勝	甲南 2 単 1-1	法政二	1 複 1-0
甲南 2 複 1-0	市岡	0	
甲南 2 複 1-0	神和住	1	
甲南 2 複 1-0	神和住	1	
▽女子決勝	甲南 2 単 1-1	法政二	1 複 1-0
甲南 2 複 1-0	市岡	0	
甲南 2 複 1-0	神和住	1	
甲南 2 複 1-0	神和住	1	



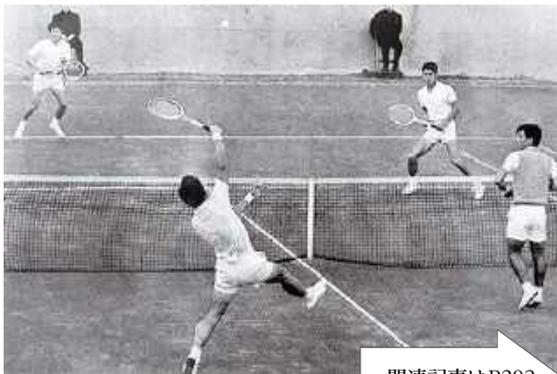
▲ 第15回（昭和40年）卒業アルバムより
写真左から 森 博、増成 治保、藤原 邦雄先生、春日 徹



▲ 第16回（昭和41年）卒業アルバムより
後列右端 藤原 英一、前列右端 柴山 隆彦、
前列右から3人目 山岡 靖幸

甲南から初の全日本チャンピオン誕生!!

1961 ● 昭和36年 全日本庭球選手権（通称：ジャパン）に於いて、藤井 道雄、平野 一斎組が学生で優勝!!



▲ 全日本庭球選手権 決勝戦
(スマッシュする藤井、右は平野)

関連記事はP203



▲ 平野 一斎のフォアハンド
インターハイ、全日本ジュニア、単複の優勝経験者であり、第1回KS杯ジュニア大会の覇者でもある

黄金期

男子

伝説の10回生 全日本のほぼ全てのタイトルを獲得!!

1954 ●

昭和29（1954）年に甲南中学テニス部に入部した中に並外れて練習熱心なグループがいた。河盛純造、小林功、前川治一郎、松本鐵一、吉田泰忠、渡辺康二の6選手である。コートが確保できない時は松本選手宅のコートで、休みの日は芦屋国際ローンテニスクラブに集まって朝一番から日が暮れるまで球を打った。仲はいいけれど、皆、No.1を目指していた。誰がデ杯選手に一番乗りするか、「夢見る競い合い」のなか、各ステージの全日本タイトルを獲得していった。



▲ 吉田（左）・渡辺ペア

年代	大会名	優勝	氏名
昭和31（1956）年	全日本ジュニア（幼年の部）	ダブルス	吉田 泰忠・小林 功（甲南中3年）
昭和32（1957）年	全日本ジュニア（幼年の部）	シングルス	吉田 泰忠（甲南高1年）
		ダブルス	吉田 泰忠・渡辺 康二（甲南高1年）
昭和34（1959）年	全国高校選手権（団体の部）	団体	渡辺 康二、松本 鐵一、小林 功、前川 治一郎、吉田 泰忠（以上甲南高3年）、西尾 忠朋（同2年）
	全国高校選手権（個人の部）	シングルス	松本 鐵一（※インターハイ三冠王）
		ダブルス	松本 鐵一・小林 功
全日本ジュニア（少年の部）	シングルス	松本 鐵一	
昭和35（1960）年	全日本ジュニア（少年の部）	シングルス	渡辺 康二（甲南大1年）
昭和38（1963）年	全日本大学王座決定戦	団体	渡辺 康二、河盛 純造、小林 功、前川 治一郎（以上甲南大4年）、野々村 浩一（同3年）浅井 正順（同2年）甲斐 建樹（同1年）
	全日本学生選手権	シングルス	渡辺 康二
ダブルス		渡辺 康二・小林 功	
昭和39（1964）年	全日本選手権	シングルス	渡辺 康二（甲南大OB）
昭和40（1965）年	全日本室内選手権	ダブルス	石黒 修（甲南高OB）・渡辺 康二（甲南大OB）
昭和42（1967）年	全日本選手権	シングルス	渡辺 康二（甲南大OB）
昭和43（1968）年	全日本選手権	シングルス	渡辺 康二（甲南大OB）
		ダブルス	渡辺 康二・河盛 純造（甲南大OB）
昭和44（1969）年	全日本選手権	シングルス	小林 功（甲南大OB）
		ダブルス	小林 功（甲南大OB）・渡辺 功（早稲田大OB）
昭和45（1970）年	全日本選手権	ダブルス	河盛 純造（甲南大OB）・小浦 猛志（関学OB）

計19個の全日本レベルの優勝タイトル

関連記事はP64



▲ 芦屋テニスクラブにて。左から渡辺、松本、河盛



▲ 後列右2人目から前川、渡辺、小林。前列左から2人目吉田

甲南大学(男子) 2回の大学王座に輝く!! 準優勝は5回!

1963 ● 全日本大学対抗庭球王座決定戦 初制覇!!



▲ 昭和38年7月 全日本大学対抗庭球王座決定戦(於:芦屋クラブ)

王座に初出場した甲南大学は、慶応義塾大学と相まみえた。ポイントは2対4と劣勢となり、しかも、No.3シングルの小林功もセットカウント0-2(当時は5セットマッチ)と絶対絶命のピンチであった。しかし、第3セットから別人のように立ち直り、劣勢を跳ね返して勝利。No.2シングルの河盛純造もセットカウント1-2から粘って逆転勝利した。

こうして、3日がかりの激戦を制した甲南大学が初の王座に就いた!

関連記事はP66



登録選手 左から

浅井 正順、河盛 純造、小林 功、和田 邦平先生、渡辺 康二、前川 治一郎、野々村 浩、西尾 忠朋、甲斐 建樹

1979 ● 全日本大学対抗庭球王座決定戦 2度目の制覇!!

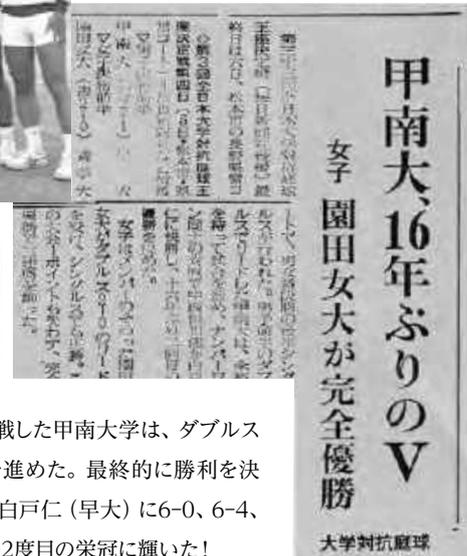


▲ 昭和54年7月 全日本大学対抗庭球王座決定戦(於:松本市県営コート)

登録選手 左から

直木 隆明、坪田 克彦、三村 晃久、江見 浩平、廣部 雅仁、蓬菜(白石) 政次、仁木 信夫、酒井 龍二、中西 伊知郎、藤原 純一

関連記事はP100



決勝戦で早稲田大学と対戦した甲南大学は、ダブルスで2-1と先行し有利に試合を進めた。最終的に勝利を決めたのは中西伊知郎だった。白戸仁(早大)に6-0、6-4、4-6、6-0と快勝し、16年ぶり2度目の栄冠に輝いた!

日本代表

男子

甲南学園硬式庭球部出身 8人のデビスカップ選手



【伊藤 英吉】
 ・明治44 (1911) 年～
 平成23 (2011) 年
 ・旧制高校
 昭和6年 (第6回) 卒
 ・デ杯代表
 1回 (1933年)

関連記事はP206



【松岡 功】
 ・昭和9 (1934) 年～
 ・大学
 昭和32年 (第3回) 卒
 ・デ杯代表
 1回 (1956年)

関連記事はP214



【石黒 修】
 ・昭和11 (1936) 年～
 平成28 (2016) 年
 ・高校
 昭和30年 (第5回) 卒
 ・デ杯代表
 8回 (1958～66年)

関連記事はP208



【藤井 道雄】
 ・昭和14 (1939) 年～
 ・大学
 昭和37年 (第8回) 卒
 ・デ杯代表
 3回 (1962～65年)

関連記事はP217



【渡辺 康二】
 ・昭和17 (1942) 年～
 ・大学
 昭和39年 (第10回) 卒
 ・デ杯代表
 8回 (1963～70年)

関連記事はP210



【小林 功】
 ・昭和16 (1941) 年～
 平成3 (1991) 年
 ・大学
 昭和39年 (第10回) 卒
 ・デ杯代表
 2回 (1967、70年)

関連記事はP215



【河盛 純造】
 ・昭和16 (1941) 年～
 平成29 (2017) 年
 ・大学
 昭和39年 (第10回) 卒
 ・デ杯代表
 5回 (1968～72年)

関連記事はP212



【西尾 茂之】
 ・昭和29 (1954) 年～
 ・高校
 昭和48年 (第23回) 卒
 ・デ杯代表
 9回 (1976～85年)

関連記事はP216

全日本学生テニス選手権大会での活躍!!

1971 ● 全日本学生室内テニス選手権大会 シングルス優勝!!
 1971年優勝 辻本 豊 (18回卒) 1977年優勝 吉田 昇生 (25回卒)



▲【辻本 豊】 この年はインカレでもベスト4!



▲【吉田昇生】 同胞対決(中西 伊知郎)を制し優勝!

奇しくも、この時の決勝戦は、吉田昇生3回生と当年のインカレチャンピオン中西伊知郎1回生との甲南大生同士の対決であった。フルセットまでもつれ込んだ接戦は、吉田に栄冠が渡った。

因みに、この2人はダブルスを組み、優勝している。また、その時の対戦相手は、灘高校出身で東京大学の神澤氏(灘中・高硬式庭球部OB会、松影会会長)ペアであった。

関連記事はP32

1977 ● 強かった中西 伊知郎 (27回卒)!!
 インカレ2回優勝、1回準優勝! インカレ室内ダブルス3連覇!

中学3年生の時、昭和48(1973)年の全日本ジュニア幼年の部シングルスに優勝するなど早くから頭角を現わしていた中西。間もなく、同少年の部でもシングルス、ダブルス共にタイトルを取ることとなる。

オールラウンダーだが、特にネットプレーの破壊力はすごかった。「中西選手のバックのハイボレーの球はバックネットを超えて後ろのコートに飛び込んでた」という信じられないような話を、香榎園テニスクラブでインカレ観戦中の観客がささやいていたという話を聞いた事もあった。

そのインカレでは、1回生(昭和52(1977)年)と3回生時にシングルスとダブルスの2冠。4回生でもシングルスで準優勝する等、圧倒的な実績を残した。

もう一つの特筆事項は、全日本学生室内テニス選手権大会において、1年生から3年生までのダブルス3連覇(ペア、1、2年次が吉田昇生、3年次が藤原純一)である。この記録は43年経った現在も大会記録として残っている。

関連記事はP32



中興期

男子

全日本学生テニス選手権大会での活躍!!

1984 ● 全日本学生テニス選手権大会 ダブルス
前田 健志 (31回卒)・坂元 俊一 (32回卒) 組 優勝!!

◀ 優勝カップを手にする2人。
左から前田 健志 (31回卒)
坂元 俊一 (32回卒)

地元開催ということもあり強豪関東勢を迎え、関西勢として大会最終日までなんとか残りたいとの思いが強かったです。

OB・OGの方々、チームの心強い応援があるなか、小柄な私と坂元君で毎試合諦めずに格上のペアを相手に勝利目指してボールを追いかけていた思いがあります。

(前田 健志)

地元の香櫨園開催であったため、大会期間中は心身共に充実し、プレッシャーを感じることなく戦えました。前田先輩の強いリードと、満員のスタンドの大声援を背に、実力以上のプレーを発揮できました。

(坂元 俊一)

1988 ● 全日本学生テニス選手権大会 ダブルス
藤井 淳 (36回卒)・四宮 康次郎 (37回卒) 組 準優勝!!

▲ 藤井 淳 (36回卒)



▲ 四宮 康次郎 (37回卒)

準決勝で優勝候補筆頭の丸山・森井組(早稲田大学)を破った藤井・四宮組。決勝戦では岩原・佐藤組(日本大学)と対戦。

香櫨園での開催ということもあり、甲南のみならず関西の他大学と関係者の全員で応援したが、あと一步届かなかった。

しかし、関東勢優位といわれた今大会での活躍は素晴らしかった。

関連記事はP32

関連記事はP202

甲南大学 女子部の名選手達!!

1959 ● 女子部の開拓者!! 坪川(田淵)順子(8回卒)!!



▲ 1961年(昭和36年)関西学生テニスリーグ戦 1部優勝時のメンバー

まだまだ女子部員が少ない中、男子部員に交じって女子部の礎を築かれた。

- 主な戦績
 - ★昭和34年 関西学生テニス選手権大会 ダブルス ベスト4
 - ★昭和35年 関西学生テニス選手権大会 シングルス ベスト4 ダブルス ベスト4
 - ★昭和36年 関西学生春季テニス大会 ダブルス 準優勝
- (※ダブルスのペアは全て、坪川(田淵)順子・玉置(斎藤)ひろみ組)

関連記事はP61

1961 ● 強かった 加賀(村上)登美子(11回卒)・木村 洋子(11回卒)組!! 1回生からインカレ ダブルス2連覇!!その後2年連続準優勝!



▲ 1961年 インカレ優勝 左から加賀(村上)登美子、木村 洋子

関連記事はP40

〈昭和36年度 全日本学生庭球選手権〉
ダブルス男女アバック優勝!! 女子ダブルス 決勝

村上登美子・木村洋子(甲南大学)	6-2	高木・黒松(早稲田大学)
	6-2	

女子は村上・木村の甲南大組と高木・黒松の早大組の間で争われ、甲南大は早大のストロークの乱れに乗じストレートで勝ち、早大の二連勝をはばんだ。



黄金期

女子

甲南大学 女子部の名選手達!!

1965 ● 木村洋子 全米庭球選手権大会 (現在の全米オープン) 出場!!

木村、一回戦で敗退
全米庭球女子単
【ニューヨーク三日発=共同】

1965年度全米庭球選手権大会は三日、当地のフォレストヒルズで開幕、女子シングルス一回戦に出場した日本の木村洋子(甲南大出)はアメリカのアーノルドに6-2、6-0で敗れた。

木村、一回戦で敗退
全米庭球女子単
【ニューヨーク三日発=共同】
一九六五年度全米庭球選手権大会は三日、当地のフォレストヒルズで開幕、女子シングルス一回戦に出場した日本の木村洋子(甲南大出)はアメリカのアーノルドに6-2、6-0で敗れた。

▲ 報知新聞



▲ 1965年全米選手権にて 写真真ん中が木村

関連記事はP40

1968 ● 井上(田原) みどり (16回卒)、中村(安保) 恵利子 (20回卒)
全日本テニス選手権に2回ずつ出場!!



▲ 左から 重萬、井上(田原) みどり (16回卒)、鈴木
1968、1969年 2年連続出場



中村(安保) 恵利子 (20回卒) ▶
1972、1973年 2年連続出場

関連記事はP40

甲南大学 女子部の活躍!!

1986 ● 坪井 実紀 (35回卒)・石井 (坂田) 昭子 (36回卒) 組 関西学生テニス選手権大会 ダブルス ベスト4



▲ レフトハンドからの強烈なサーブを武器とした坪井



▲ 写真右が坂田。左は同期の白木。ジュニア時代から有力な選手だった。

当時、園田学園を筆頭に強豪ぞろいの関西でダブルスベスト4! 甲南には坪井先輩と坂田先輩あり! と、お二人は私達後輩の憧れでした。

サウスポー坪井先輩の大きくカーブするサーブ、軽やかなフットワーク、要所で増す集中力と大きな瞳の眼力。どこをとっても美しいフォームの坂田先輩から放たれる強烈なフォアや片手バックのスライス。

タイプは異なったけれど、お二人とも練習中は厳しく、でも根気強く部員を指導して下さい感謝しています。

【37回卒 後輩一同】

関連記事はP121

2013 ● 北山 由佳 (60回卒) 関西学生テニス選手権大会 シングルス 準優勝!!



▲ 攻撃的でありながらも粘り強いプレーが身上の北山

とにかく粘り強くプレーするタイプだったが、チャンス時に厚いグリップから繰り出すフォアの逆クロスが凄かった。

試合に負けてよく悔し泣きをしていたが、ものすごい努力家で、最後の関西学生では予選上がりから準優勝を果たした。そういう部分を現役も見習って欲しい。

OGになってからもテニスを続け、全日本テニス選手権にも出場している。

【大学元監督：
宇津原 (35回卒)】



関連記事はP169

2019 ● 中谷 琴乃 (66回卒) 関西学生テニス選手権大会 シングルス ベスト4!!



園田高校時代に全国優勝の経験もありながら甲南大学へ入学。ベースラインから一歩も下がらず左右両手打ちのライジングショットを打ち込む超攻撃的テニスで、2回生の時には女子部を一部リーグ昇格に導いてくれた。

ネットプレーにも抜群のセンスを持ちダブルスでも新進優勝など戦績多数。

現在も実業団でプレーしながら大学コーチとして現役部員の指導にあたってられている。

【総監督：四宮 (37回卒)】

関連記事はP181



◀ 名門園田女子学園から入部してきた中谷。共に両手打ちのフォア・バックは強烈だった。

2021 ● 小嶋 真央 (68回卒) 関西学生新進テニストーナメント シングルス ベスト4!!

高校時代の華やかな戦績は無いが、大学進学後に大きく実力が開花。非凡な打球センスを持ち、カウンターショット、ドライブボレーなどを得意とする女子には数少ないタイプの選手。

特に大事なポイントでの強烈なバックハンドのダウンザラインで周囲を魅了するプレーが印象的。

格上の選手には抜群の集中力を発揮する不思議な選手でもあった。選手も揃い実力は有りながら大学3年生、4年生のリーグ戦がコロナ禍の影響で開催されず、悔しい思いをした不運な学年でもあった。リーグ戦をやらせてあげたかった・・・。

【大学監督：平野 (38回卒)】

関連記事はP185



▲ ボールのタッチが天才能だった小嶋



全国中学生テニス選手権大会での活躍!!

● 過去5回の優勝!! 最多優勝回数の記録を持つ!!

1981年から始まった「全国中学校テニス選手権の団体戦」。その栄えある第一回の優勝校が、我が甲南中学校である。甲南学園は、甲南中学から高校・大学へと繋がる一貫校である。中学生から腕を磨いた選手が、高校・大学へと進学し、甲南テニス部の名を背負ってプレーする。幼かった彼らが、大学のリーグ戦では見違えるほど成長した姿で甲南テニス部の伝統を繋いでいく。これが甲南テニス部の特徴の一つである。一度でもこの環境でテニスした選手はOBOGとなっても「Konan Tennis Team」として、甲南テニス部を支えていくのである。

1981 ● 栄えある第1回大会優勝!!



▲ テニスマガジン誌1981年10月号より転載

1981年第8回大会より団体戦が開催され当校も選出された。会場は東京「よみうりテニスガーデン」で、1ダブルス・4シングルの団体トーナメントで行われた。

中学生としては、初めての遠征で非常に緊張した事を覚えているが、メンバー全員で切磋琢磨して練習し、戦略を考え、ユニホームも作り（自腹）大会に臨んだ。決勝戦は、早稲田実業中学部（東京）と対戦し、見事に4-1で圧勝し、1回目の団体戦で栄えある優勝を成し遂げることができた。

（高校35回卒 弘世 芳嗣郎）

団体戦登録選手 弘世 芳嗣郎、明瀬 周二、夏梅 秀紀、小泉 英助、田中 智、熊谷 定男、丸井 隆司

2006 ● 25年の時を経て2度目の制覇!!



団体戦登録選手 沼野 孝彰、上原 伊織、
金江 紀幸、大西 潤、榎原 貴志、北野 盛也、
北 賢人、岸本 良介、三宅 祥隆、貴田 大史

この年は、甲子園で早実と駒大が延長15回引き分け後、翌日早実が優勝したことが思い出されます。同日が名古屋での全中決勝でした。

前々年1回戦負け（コンソレ優勝）、前年4位とチームの成長を感じて臨んだ試合でした。優勝候補でしたが、試合は難しく、QFまで1本落とす展開でした。

しかし、ここぞで力を出せるチームでした。SF.Fは全部員が駆けつけて、一致団結。結果、SFから完全勝利。全勝で25年ぶり2度目の優勝を成し遂げました。優勝後全部員がコートで喜び合いました。

この経験は高校大学でも生きており、今後も中高大の連携強化に繋がると考えております。

（大学60回卒 沼野 孝彰）

2007 ● 2年連続3度目の制覇!!



団体戦登録選手 上原 伊織、金江 紀幸、大西 潤、
伴 亮志、永田 薫平、上曾山 博貴、鈴木 達也、
山本 将隆、中村 錬、石宇 健人

私達が3年生の時は、前年に全中団体優勝したこともあり、頼もしい1年生達も新たに入学してチームに加わり、十分に2連覇を狙えるチームでした。

しかし、何が起るかわからないのが団体戦であり、プレッシャーが掛かる中、2連覇を成し遂げられた事は大きな自信になりました。

決勝戦では、2-2で主将の大西潤に勝負が掛かり、チーム丸となって応援し、ナイターが付き始める時間までに及んだ接戦の中、勝利を決めてくれました。

(大学61回卒 上原 伊織)

2009 ● 2年振り4度目の制覇!!



団体戦登録選手 中村 錬、矢多 弘樹、山本 将隆、
石宇 健人、綾部 翼、上曾山 博貴、鈴木 達也、
吉田 有宇哉、田中 聡介、村田 龍星

当時のチームは監督の八田先生が取材陣に対して「史上最強のチーム」というほどで、メンバーは全国トップ選手の中村錬、矢多弘樹を筆頭にタレント揃いであった。ただ開催地はとりわけ夏の暑さが厳しい熊本県、サーフェスは凸凹のクレイコート…、意外と難しい第1シード。さらに宿泊地はANAクラウンプラザで中学生だった私たちはバカンス気分であった。今思えば足元をすくわれる要素は満載だったように感じるが、蓋を開けば準決勝、決勝ともに3-0の圧倒的な強さで優勝。涙を流し喜んだ。

(大学65回卒 吉田 有宇哉)

2014 ● 5度目の制覇!



団体戦登録選手 藪田 司、梶原 洋、四宮 大地、
高尾 尚樹、中一茶、岡本 良太、武本 新平、
徳田 和也、近田 賢祐、溝辺 慶師

中学2年生が中心メンバーだった前回の全中では準決勝にて惜敗し、ベスト4と熱鉄を飲んだ。

その悔しさをバネに「次年度は必ず優勝する」との思いで、部員全員が目色を変えて練習に取り組んだ。

そして迎えた、前回大会の悔しさを経験するメンバーで臨んだ今大会では、甲南得意のダブルスでは全勝、シングルスもエースと周りを固めるメンバーの活躍で、念願の全中優勝を掴み取ることができた。

(高校68回卒 中一茶)

甲南テニスの伝統と未来への架け橋

日時 2022年12月10日(土) 15時00分~17時00分

場所 平生記念セミナーハウス 101号室

出席者 【OB】 渡辺 康二 辻本 豊 中西 伊知郎 藤井 淳 【司会】 直木 俊樹
 高校 1960(S35)年卒 高校 1968(S43)年卒 高校 1977(S52)年卒 高校 1986(S61)年卒 高校 1986(S61)年卒
 大学 1964(S39)年卒 大学 1972(S47)年卒 大学 1981(S56)年卒 大学 1990(H2)年卒 大学 1990(H2)年卒

【現役】 久保 晃平 阿部 哉太 丸尾 篤矢 壺内 寿之輔 西村 匠翔 平野 司 福家 匠音
 大学 主将 大学 副将 高校 主将 高校 副将 中学 元主将 中学 主将 中学 副将

かつて黄金期を支えたOB達が何を考え、どのようにテニスに取り組んで来たのか。この座談会ではリラックスした雰囲気の中で、主に現役選手の質問を切り口に、目標設定、甲南らしさとは、継承すべき伝統等々、温故知新の精神で本質に迫るコミュニケーションが交わされました。個人の経験等に基づく暗黙知を、座談会やその議事録等によって形式知化することは容易ではありませんが、今後の甲南テニスを考える際の一助になれば幸いです。

～目標設定について～

かつての名選手を前にして、興味津々の学生諸君。聞きたいことが山ほどありそうですが、まずは目標について聞きたかったようです。

直木: それでは、座談会を始めたいと思いますが、学生さんからOBの方々に聞きたいことはありますか？

久保: 自分達は目標を「王座出場」、スローガンとして「全ての行動は自分から」を掲げているのですが、OBの方々の現役時代の目標等を教えてくださいませんか？

渡辺: 目標が「王座出場」というのは少し簡単過ぎると思う。(一同笑い!) 王座出場や、王座で優勝が出来ればそれはもちろん喜ばしいことではあるが、テニスプレーヤーとして、目標はもっと高い所に置いた方がいいよね。それにはインカレに最低でも5~6人出るくらいでなきゃいけないとか。毎年のように王座、王座と言ってもあまり変化や新鮮味が無いし、やり方や伝統を重んじ過ぎると変わらない。何か思い切った、ドラステックな変化を期待したいね。

久保: 自分達の目標を達成する為には、もっと遠くに目標設定する必要があるんですね。今までになかった考え方です。

辻本: 「王座」というのはチームを盛り上げていくには良いものだけれども、今から考えると一種のお祭りですね。私も大学生の時は「王座でどうやって勝つのか」ということばかり考えていた。昔は球足が遅いアンツーカー・コートで、ネットで粘っているとロブが上がってくるから、スマッシュばかり練習し

ていた。でも、今はもっとレベルの高いことを考えて実践していかなければいけないよね。

中西: 自分達の時代も高校ではインターハイ優勝、大学では王座優勝が目標だった。高校時代は何としても柳川高校に勝つ、という目標があったが、当時の柳川はどこかの学校が何度挑戦しても勝てない絶対王者だった。大学では柳川の選手が中央大学に集まってきて「ここに勝たないかん」という思いでやっていたね。

藤井: 団体戦って言っても、テニスは「個人戦の総和」で勝敗が決するから、個が強くないと勝ちきれないよね。「ダブルスを2-1にして、シングルス3-3にして、5-4で勝つ」って目論んでも、個が強くないと星勘定にならない。やはり個人の實力の底上げが最優先で、「組織の目標」を掲げることは重要だけれども、普段は「個人の目標達成」に重きを置いて、チームで集まった時に団体の目標を達成するよう、分けて考えるべきではないかな。

渡辺: 重要なのは選手個人の實力を磨くことで、強い選手や見込みのある選手を「より強く」していくための方策を考えていくべきではないかな。大学だけで練習するのではなく、他の場所で修業をして戻ってくる、という様に「選手達が強くなるための方法」を取り入れ、各選手がチームに合流したときにレベルが上がっているような仕組みも有用だと思う。

中西: 基本的には個人の實力が重要で、個人の能力が上がれば、選手6人が6人ともに強かったら勝てる。それに強い連中が集まると結束もできるし、思いも叶ってくる。さらに、下級生も部内の強い選手に何とか勝つてやろうという好循環を生むので、その方向で運営していけば間違いはない。



藤井：これを言ったら怒られるかも知れないけど、甲南は団体戦で強くないと思っていてね、過去にこれだけのメンバーが揃いながらも、大学王座は二回しか優勝していないもんね。背景にある大学の規模やセレクションの話等になると長くなるけど、これらは所与のものとして受け止めて対策を練るしかないね。

久保：団体戦に重きを置くとはそういうことが大事なんですね。

中西：それと、個が強くなるためには、本当によく考えないといけないよ。当時は平日も休日も授業も関係なしに、テニス漬けだった。(一同笑い!!) だけど、今は授業を受けながら、色々こなさないといけないでしょ。限られた時間をうまく使って能力

を伸ばしていくことに重点が移っていると思う。その中で自分のポイントを取るスタイルをどうやって作り上げるか？当然、頭使うよね。

渡辺：これ、人生においても同じだよ。

辻本：その通りですね。結局、自分の考えていることが全てに表れてくるんですよ。テニスだけでなく、社会に出ても、そういうことです。自分を高めようと思って、読書や友達から伝わる内容とか、そういうものに刺激されて、

いかに自分を磨きあがれるか。また、少しでも成長出来ていないと感じたなら、自省することも重要だよ。こういうことをよ

く考えてテニスに取り組んで欲しいんですよ。そうすれば、社会に出た時に必ず役に立つ。本当の勝負は卒業してからですよ。

中西：出会い頭の成功や逆転満塁ホームランなんかはないので、日頃からの積み重ねが大切なんよ。強い所を頑張って伸ばす努力を続け、日々どの部分が成長しているのか、何が足りないかを確認しながら考えて取り組むことやね。それと、「なにくそ精神」もあるよ。かつて「他大学のセレクションの選手とは能力が違うので追いつけません」と学生に言われたこと

があるけれども、いつか抜かしてやろうと地道に技術を上げる努力を続けて欲しいです。

渡辺：個人個人が高い目標を持ち、自らの質を磨く努力を怠らなければ、当然インカレ等の個人戦でもっと好成績を残すことが出来るはず。そうすれば、結果として絶対に「王座」はついてくると思います。誤解しないで欲しいんだけど、個人戦だけを重要視しているんじゃないで、勿論、私もインターハイや王座の団体戦で甲南が優勝してくれることを夢見てるよ！

中西：近い目標と遠い目標を設定して、近い目標を一個ずつクリアしていくことが遠い目標を達成する唯一の方法ってことですな。

久保：目標設定の考え方やその取り組む姿勢について、とて



辻本 豊

高校 1968 (S43) 年卒
大学 1972 (S47) 年卒

全日本学生室内テニス選手権大会
シングルス優勝、関西学生春季
トーナメントシングルス優勝



渡辺 康二

高校 1960 (S35) 年卒
大学 1964 (S39) 年卒

日本テニス協会名誉副会長、元デ
ビスカップ日本代表選手・監督、
全日本学生テニス選手権大会シン
グルス優勝・ダブルス優勝

も勉強になります。ありがとうございました。

直木：目標に関する貴重なお話でしたが、ここからは練習の仕方や試合中の心構えなどについてOBの方々に聞きたいことはありますか？

～緊張について～

西村：フィジカルについてですが、かつては走ることによって体力をつけていたというイメージがありますが、逆に現在では、体のつくり方や筋肉の付け方に重点を置くようになっていと思います。どちらを優先した方が良いのでしょうか？

辻本：どちらを優先というよりはスポーツ選手に共通する構成があってね、それをピラミッドで例えると、底辺のベースの部分は体力ってことになる。その中でも持久系を中学生で、パワーを高校生の内ですておくこと。次に技術面がきて、頂点は心理面が強いかどうかでことになる。

中西：昔は土のコートだったから、冬は霜が降りて練習ができないので、とにかく走るしかないし、トレーニングするしかなかった。

渡辺：自分たちの時代は走るだけだね。山を走るだけ。

辻本：よく走りましたね。大学2年の合宿の宿泊先のお風呂で、長嶋茂雄さんに会って「近代スポーツの基礎は体力、ランニングですよ」って言われて、それで走るようになった。(一同笑い) 兎にも角にも、まず体力が無ければ、技術もメンタルもついてこない。そこを忘れないで欲しい。



中西 伊知郎

高校 1977 (S52) 年卒
大学 1981 (S56) 年卒

全日本学生テニス選手権大会
シングルス優勝・ダブルス優勝、全
日本学生室内テニス選手権大会
シングルス優勝

平野：団体戦を含め試合前は緊張しますが、その緊張を良い方に持っていくためにどうされていたのでしょうか？自分にかかる言葉とか、どういう気持ちで試合に臨めばよいか等を教えて貰えますか？

渡辺：甲南の伝統というか、気質としては緊張しない(一同笑い)。あまり物事を深刻に考えず、普段の状態ですて臨めるのが甲南のいい所。こういう伝統は引き継いで欲しいね。「このゲームを取ったら勝ち」とか考え

始めたら、緊張が高まって、つい「いつもと違うこと」をしてしまう。そんな時こそそのんびりと構え、「まだまだ先は長いんや」という思いでプレーすること。そうすると「勝ちびびり」が無くなり、もっと戦績は上がっていくと思うよ。

中西：それと、緊張するのは、何かに自信がないからやわ。自信を付けるには豊富な練習量しかないからね。ハードな練習で自信をつけたら、試合は気楽な気持ちですてやりたい。負けても命は取られないのだから。

藤井：「負けても命までは取られない」という点はまったく同感。結局は、試合に臨むまでの「準備」が極めて重要で、「自分はいくら以上やれない」というところまで追い込んで準備をしたのが問われる。準備不足が原因で、試合中に緊張してしまつたら後の祭り。しっかり準備をした上で、本番は開き直つて臨む。これしかないね。それでも「勝ちびびり」する人は・・・う～ん、その人の性格の問題やね！(一同笑い)

中西：気楽にやるっていうのは、負けてもいいという意味と違うよ。気楽にやった方が勝てるチャンスが増えるってこ



と。気楽っていうのは自分に過度のプレッシャーをかけないこと。その上で、自分がベストを尽くせばそれでええんよ。

～プロ選手になるには?～

福家: 自分はプロになるという大きな目標があります。それを実現するためにどうすればよいのか、今何をすべきなのかを逆算して考えていますが、先輩方はどのように考えて練習に取り組まれていましたか?

辻本: 私は、海外でプレーし始めたのが二十歳を過ぎてからで、その時代でも遅すぎた。早めに世界に出て、自分のレベルがどれくらいなのかを、把握することが肝要じゃないかな。若いうちから海外を回って、同年代のトップ選手と同じ土俵で戦って「実力差」を実感して欲しい。そうしないと、どんな力をつけたいといけないのかが分からないでしょ。

渡辺: 自分は中学生の頃は全然ダメだった。同級生の中での実力は5番手ぐらいやったかな。高校の後半になって、全日本ランキングに入りたいみたいな欲が出てきて、そこから急に強くなってきた。だから、長い目で焦らず、一生懸命日々トレーニングして、一球でもボールを多く打ちたいと思っていたら必ず強くなれるよ。



直木 俊樹

高校 1986 (S61) 年卒
大学 1990 (H2) 年卒

福家: 強くなったきっかけは何だったのでしょうか?

渡辺: インターハイ・シングルス決勝で同僚の松本鐵一君(インターハイ三冠王)に負けた刺激が強すぎて、めちゃくちゃ悔しくてね。それがきっかけやね。(一同笑い!)

藤井: ところで、学生時代、国内アマチュアでもトップクラスだった中西さんはどうしてプロ

に転向されなかったのですか?

中西: 当時ね、オレンジボウルに出場して、イワン・レンドル(後に世界No.1)と対戦して、結構競ったんだけど負けてね。でもボールの質が全然違うの。これは勝てんかって。他にも、すごい連中ばかりで、そんな中でプロとして食べていくのは厳しいなという感覚もあった。同期にはジョン・マッケンローもいたし。(一同大爆笑!)

久保: 同期にマッケンローとか初めて聞きました!(一同また

また大爆笑!)

藤井: 高校3年生の時にウィンブルドン・ジュニアに派遣されて欧州を2か月ほど転戦させて貰った。当時ジュニアの試合に出場している選手は15~16歳が多くて、18歳にもなると、もうプロのサテライトを廻っているんだよね。ウィンブルドンの予選を松岡修造君と見に行つて、そのレベルの高さとドッグ・ファイト(格闘)と言われるほどの激しい試合を観て衝撃を受



藤井 淳

高校 1986 (S61) 年卒
大学 1990 (H2) 年卒

全日本学生テニス選手権大会ダブルス準優勝、関西学生テニス選手権大会シングルス優勝

けたわ。自分は数年後にこの場所で勝ち抜いていけるイメージが全く描けず、自信喪失したことを覚えてるなあ・・・。

中西: 外国の選手って、すごくハングリー精神があるよね。早くからプロになってツアー回って、ちょっとした賞金で次の大会に行く。負けたら手持ちのお金が無くなるから帰らないといけなくなる。だから、絶対に賞金を稼がないといけない、みたいな。でもね、きちんと人生設計もしてて、24~25歳でのATPランキング目標を設定して、そこに達成しなければやめる、と一緒に回っていた連中が言った。それから大学に入ることもできるし、違う世界や違う人生もある、という考え方をしている人が多かったなあ。

藤井: 因みに、この年のウィンブルドンは同い年のボリス・ベッカー(17歳7ヶ月で史上最年少優勝)が優勝した。同い年の高校生がウィンブルドンで優勝ですよ。世界との格差を見せつけられましたね。なんか、プロになることは難しいとばかり言ってるみたいやね。そういう意味じゃないよ。今は錦織君の例もあるし、世界との差は縮まってると思う。とにかく、プロを目指すのであれば、一日も早く世界のレベルを経験して欲しいな。

福家: とても厳しい世界ですね。でも、挑戦したいと思います!

～メンタル・タフネス等～

阿部: 自分はダブルスが得意で、シングルスと成績の差が出ている。先輩方は何を考えてダブルスとシングルスをやっていましたか?



中西：テニスの基本はシングルスやと思うよ。コート一面をいかに使うか。シングルの能力が高い選手はダブルスの能力も高い。シングルのいろんな引き出しを持つとダブルスにも使える。



久保 晃平
大学 主将

渡辺：シングルスとダブルスでは全然違うボールを打つ必要があるでしょ。シングルスは長いボールでベースライン近くに打つのが基本だし、ダブルスはボレーヤーの足元を短いボールで狙うのが基本でしょ。そういう能力って、単複やることで養われたと思うし、両方やることで技術の幅が広がると思うよ。

中西：この技術があって初めて、コートを広く使える。阿部君の場合、ダブルスが得意なんだったら、サービスやボレーが上手いんでしょ？ストロークもアングルをつけるのが上手いんだと思う。あとは、渡辺先輩がおっしゃったベースライン付近を狙う長いストロークが打てたら完璧やんか。それらを上手く組み立てたら、シングルスも絶対勝てるよ。

阿部：ありがとうございます。シングルスに足りない技術を練習して、単複共に好成績を目指したいと思います。

平野：試合に臨む際に、自分の軸や気持ち等ゆるぎないものがあると思いますが、その辺りを教えてくださいませんか。

辻本：これはね一番大事なことで、勝負って試合前から決まってると思う。例えば第1シードの選手と試合するときでも、相手の方が強いと絶対に思っちゃいけない。自分が少しでも下だと思つて必ず負ける。心理面で優位に立つてることが絶対条件なんだよね。相手も人間なのだから必ず弱点があるはずなのに、心理面で優位に立っていないと、それに気付けない。勿論、相手をリスペクトすることは大切だけど、自分の方が強いんだから必ず勝つてやるというマインドがないと競つたら必ず負ける。

丸尾：自分はキャプテンをしていて、チーム全体のモチベーションをどうやって上げていけばいいんでしょうか？部員それぞれに個性があって、個人戦ではモチベーションが上がるのに団体戦では低くなる人とか、レギュラーとイレギュラーの間に意識の差があるとか……。色々難しいです。

渡辺：モチベーションを上げるには、何か良い刺激を与えることが有効と思うよ。例えば、いい所を見つけて褒めること。その時はすぐに反応しなくても必ずそれが頭に残っていて、どこかのタイミングで頑張ろう、というモチベーションに変わると思う。個人戦で頑張つて結果を出した選手には「甲南テニス部のヒーローやね！」みたいな声掛けを試みたらどうかな。そうすると自覚が出てきて団体戦も頑張るかも知れない。こういうことを考えて行動するのが、キャプテンとしてのリーダーシップじゃないかな。

丸尾：部員一人一人の個性を理解して、その良さを引き出していくことが大切なんですね。ありがとうございます。

西村：トップに立つ人と、あと少しでトップに立てそうな人との差は何ですか？自分では頑張つていても、あともうちょっと結果が足りないと感じています。

辻本：結果が出ない理由は何が原因なのか徹



阿部 哉太
大学 副務

底的に分析しないとダメかな。自分で試行錯誤することが第一だけど、第三者に見てもらうことも重要な。自分で自分のことを客観的に観ることは難しいもんね。上にいる選手と自分との差は何なのか、分析できるアドバイザーを探して自分でそれを落とし込めたら一番いいね。

西村：コーチからメンタルが弱いと言われる。鍛え方はありますか？

辻本：あるけども、それは内緒や(笑)。メンタルが、どの場面でどうなっているかなんて自分では分かりにくい。だから、自分のプレーを第三者に見てもらってアドバイスをもらう。そこにお金と時間をかける。そうして、メンタルの長短所を徹底的にディスカッションして理解しないとね。でも気を付けないといけないよ。適当なことを言う人もいるから。(一同笑い) 結局は、普段の生活から自我をしっかり持って、メンタルを鍛えるって意識が大切な。

～自分の武器～

福家：試合をやっている中で、自分には絶対的な武器があまりないのでそれを持ちたいと考えています。先輩方の武器は何でしたか？

渡辺：武器は頭脳や(笑)。自分はバックハンドが得意ではなかったんで、フォアハンドでばかり打っていた。フォアに回り込むための鍛えた足があったからこれが出来た。

辻本：私は両手のバックハンドかな。昔はラケットが重かったから両手になったけど、リーチが狭くなるから足腰が必要だよ。これはボール拾いで鍛えられたね。兄がネットプレーヤーだったから影響を受けて、両手をやりながら前へ出ていくスタイルに変えていった。そしたら大学から勝ちだした。

中西：自分のスタイルはネットプレー。ストロークなんていらん(一同笑い) ネット取ったもん勝ちやわ。シングルスでネット出て行って、ラインぎりぎりにパッシング決められたら仕方ない。でも、相手もミスするから、前に出て来たボールを半分止めたら勝てると思っていた。

福家：ミスをしないで長いラリーをして、チャンスがあったらボレー

で仕留めるようなテニスをしていきたいと思っている。

渡辺：皆さんの中でネットプレーが得意な人がいるかな？(数人が挙手) 頼もしいね。最近ではみんなグラウンド・ストロークが中心だから、ネットプレーができると良いね。

壺内：ボレーをやった方がいいですか？

渡辺・辻本・中西・藤

井：絶対やった方がいい!

中西：テニスはミスを待つスポーツじゃなくて、ミスをさせるスポーツ。広いコートはどこにでも打てたら、ミスなんてしてくれない。でも、ネットに出たら狭いところを狙わないとアカンでしょ。そしたら、ミスが増えてくる。ストロークはネットを取るためにあると考えて欲しい。

渡辺：甲南の伝統は、やっぱり攻撃テニスやね。



丸尾 篤矢
高校 主将

～甲南らしさ、とは～

久保：僕は大学から甲南にきたので、3年間しか甲南に携わっていない中で、その甲南らしさという言葉を理解できてないところ



ろがあって、その辺りを教えていただきたいです。

藤井：テニススタイルにおける「甲南らしさ」というのは、リスクを取る攻撃型テニスかな。強かった先輩方にもこのスタイルが多いし、逆に、粘ってミスを誘って勝っていてこの人すごいな、という人は余り思い浮かばないな。

中西：攻撃は最大の防御という感じかな。言い方が悪いけどやっぱり甲南ってええ格好がしたい。エースとった方がかっこいいので、エースを取りにいきたい。テニスはエースよりミスの方が多いいんだけど、やっぱり「エース取ってなんぼや」と



壺内 寿之輔
高校 副将

いう風にちょっと思ってたかな。たまたま自分はサーブスダッシュして、ボレーで勝負しにいったエースを取りに行くスタイルになったけど、ストロークでもええんよ。守るストロークじゃなくて、「隙があればエースを狙いに行くんだ」くらいが甲南のスタイルかな。みんなはどう？

久保：攻撃的かといわれると、守備的な人が多いと思いますね。

丸尾：自分の場合、ダブルスは攻撃的ですが、シングルスは守備的です。持久力に自信があって相手が疲れたところを攻撃していく。先輩方がおっしゃっている攻撃的なテニスはできていないですね。



渡辺：とにかく、ポイントを取るパターンを思い描いて、それがミスになったとしても落ち込まない。計画通りフォアに廻り込んでストレートに打って、それをミスして落ち込んでたら、悪い方へ向いてしまう。だから、日頃の訓練で平気、平気といつでも思っていないと。落ち込んだ姿を相手に見せるとますますやられるからね。



西村 匠翔
中学 元主将

辻本：つまり、甲南らしいテニスとは、フォアでもネットでもなんでもいいんだけど、ミスを待つんじゃないで、攻撃してポイントを取るスタイルを完成させてるってことじゃないですかね。

中西：そうですね。だから自分のスタイルを貫いて、負けたらそれはそれで相手が上手かったからしょうがない。割り切りかな。相手も研究してくるから、いかにそれをさせないでおこうと思ってくるわけだから。

藤井：ちょっと突っ込んでもいいですか。とは言いながら皆さん試合中にすごく緻密に計算されてますよね。試合を観ていてそれを強く感じますよ。ただ単に攻撃してやろう、ネット取ってやろうではなくて、試合のポイントの流れの中で相手がどう動いてくるかを予測している。これには確率論的な思考が必要で、駆け引きや大胆な部分があっても、「何でポイントを取って、取られているか」、それを踏まえてプレーを組み立てられ

ている。それに、リズムが何とも良い感じで、テンポが速いですね。独特で真似したくなります。

渡辺：別に秘密主義じゃないけど、人に言わないだけで、皆さん陰で相当な努力をしている。みんながやらないときに何かをやる。そういうことがどれだけ出来るかが肝やね。

直木：その他に「甲南らしさ」ってありますか？

辻本：私は中学3年のときに甲南へ転校してきたんだけど、それまで堺の方の中学校で、ファッションがものすごく違ってたのを今でも覚えている。(一同笑い)細めのズボンを履いてる。向こうは太めのズボンなんです。いわゆるパンカ

ラですね。それと、ジャズや乗馬をやっている人がいてね、趣味が多彩だった。やっぱりかっこよくシティーボーイ的な感じが非常に強かった。それも伝統かなと思ったりする。神戸独特の感じかな。

中西：甲南の伝統って、やっぱりいい格好しい。(一同笑い)スマートにテニスをやりたい。シティーボーイ的な。

渡辺：性格的には、腐らなくて能天気なところがあるけども、それが甲南らしさであり強みでもあるんじゃないかな。だからみんな思い切ってやんなはれ。自分のやりたいことを先輩がギャーギャー

言っただけでやめさせるのは甲南の伝統じゃないし、自由気ままに自分のテニスをやりなさいっていうのが甲南のいいところじゃないかと思う。形にはめないとこが甲南らしさって思うけど。

中西：基本的なところはあるけど、それ以外は自由でいいと思うよ。今はYouTubeなんかで、色々情報が取れるでしょ。「これは自分でも出来るんじゃないか」とか、「こういうテニスをしたら面白いんじゃないか」とか、とにかくやってみることが大事なんじゃないかな。まだ14歳から20歳ぐらいでしょ？まだまだ頭も体も柔らかいから、柔軟な姿勢で、自分のテニスを作っていくのがいいんじゃないかな。

藤井：それと、甲南らしさっていうのはやっぱり「自主自律」ってことだね。甲南には強力で抑え込むようなコーチも監督もいないでしょ？それが良い意味での伝統やね。だからこそ自分で自分をどれだけ追い込めるかみたいなところがあるの

で、そこを真剣に中学・高校・大学でもやって欲しいなと思う。それをやり切れば仮にテニスが無駄目でも他でも通用すると思うので、その経験を是非してほしい。それが伝統というか、いい意味で未来をつくる。この経験があるかないかで、人生長いから後で相当影響してくると思うよ。結局、テニスの実力は関係な



いよ。

直木：それでは、最後になりますが、渡辺先輩から「未来へ託すメッセージ」をお願い致します。

渡辺：テニスも何でもそうだけど、一流を目指すことなすこと全部やっぱり一流でなきゃ。練習内容も、「もうこれぐらいやつたらいいや」っていう妥協は絶対禁物。

練習はこれで十分か？と常に自問しながら取り組むこと。例えば、ニューボールをどれだけ使うのか知らんけど、ニューボールもどんどん使いたくだけ使わなきゃ。一流っていうのは、ニューボールをどんどん使って練習して、古いパコパコのボールでやってたらダメだわ。

久保：渡辺先輩、予算が足りません。(一同大爆笑)

渡辺：心構えの話よ！ボールもそうだしウェアもそうだし、ラケットもそうだし、コートもそうだし、全部やっぱり妥協しないで一流のところでテニスをやっていきたいと強く念じてください！それが一流を目指す根底の条件だと思う。だからこれは一流か？と常にやることなすこと、1回自分で問うてみて、それからやってみてください。ということです。そうして頑張って充実した学生生活を送れるクラブであってください。今日はありがとうございました！



福家 匠音
中学 副将



平野 司
中学 主将

人生を彩る甲南テニスの思い出

日時 2023年2月19日(日)13時30分～15時30分

場所 平生記念セミナーハウス 101号室

出席者 【OB】 坪川(田淵)順子 木村 洋子 中村(安保)恵利子 【司会】 山中 祐子
 大学 1962(S37)年卒 大学 1965(S40)年卒 大学 1974(S49)年卒 大学 1982(S57)年卒

【現役】 尾西 優愛 安本 華音 中山 桜 井上 美月
 大学 主将 大学 主務 大学 2年 大学 1年

～甲南大学女子テニス部の 成り立ちを知る～

甲南学園が旧制高校を経て、男女共学の甲南大学を開学したのが1951年(昭和26年)。既に男子部は活動中であったが、女子部の成り立ちはどのような経緯だったのだろうか？

山中: それでは、女子部の座談会を始めたいと思います。坪川先輩が入部された当初、女性はお1人だったんですよね？

坪川: 最初は、「甲南大学のテニス部に女性はいれない」と伝わってきていて、入部出来ないと思っていました。私は甲南女子中高の出身なので、同級生が甲南女子大学で練習していたので、当初は、そこへ行って一緒に練習していました。たまたま出場した新人戦で優勝して、顧問の先生から「女子が大会で優勝するのは、この学校が始まって以来だ」ということで、すぐに大学の雑誌に載せないといけないうし、学長にも報告しないといけないうから優勝カップと賞状を持っていらっしやいと言われました。それがきっかけで、甲南大学テニス部の部員として認められて活動を開始したという感じでした。といっても、今のような厳しい活動とは全く違ってのんびりしたものでしたよ。

山中: 木村先輩はいつからテニスを始められたのですか？

木村: 私は中学3年生の時にたまたま外国にいて、テニスはプロに習っていました。高校1年生のときに甲南女子学園に戻ってきて、そのまますんなりと甲南大学に入学し、テニス部の女子部に入りました。だけど、坪川さんがそんな苦労なさったなんていうことは知らなかった。

山中: 木村先輩は坪川先輩が4年生のときの1年生ですが、9人もいらっしやったんですよね。

木村: 9人のうちインカレに出たのが、1つ下の学年も入れて確か全日本学生部のダブルスに6組出ましたね。甲南は男子部の方がすごく強くて、デ杯選手が大勢いらっしやったんで、女

子はそれと比べたら、少なかったですけど。

山中: いえいえ凄い戦績だと思います。中村先輩がテニス部に入られたきっかけを教えてくださいませんか？確か最後まで続けられたのは学年でお一人だったんですよね。

中村: そうなんです。私は、中学時代に軟式テニスを3年間してから箕面高校に進学したんですけど、硬式テニス部しかなかったんです。仕方なく硬式を見様見真似で練習してたら、3年生でインターハイに出場出来たんですよ。でも、甲南大学に進学したら、テニスは辞めて英語の勉強しようと思ってて、自動車学校にも通ってました。そしたら、当時の1つ上の山田先輩から何度も勧誘されました。最初はずっと断ってたんですけど、ここで断ったら、もし入る気になったときに入れてもらえないかも知れないと思って行き始めた。そしたら、それがリーグ戦の前だったんですよ。もう自動車学校なんかいける訳ない(一同笑い!)。それで結局入部したんです。

山中: そうなんですね。部活へ勧誘するくんだりは今も昔も変わってないですね。コートはどちらにあったんですか？

坪川: 当時は「甲南クラブ」という今の甲南小学校の北側にあった民間のテニスコートを借りて練習してましたね。テニスコートが3面あって、土日は会員さんが使われて、平日は甲南大学のテニス部が使えるようになってました。その代わりコート整備をするという条件だったんです。でも、女子が入る隙はありませんでした。そのうち、住吉川の土手との間に一面コートが出来て、そこで練習しましたが、チョット間違っただらすぐボールが川へ飛んでいくようなところで(一同笑い!)。あと、今の甲南大学の図書館があるところに旧制高校のバスケットコートとテニスのコートが2面あったんです。そこでも授業で使わない時間に練習してましたね。

中村: 私の頃は住吉川沿いの西コートで練習してました。本当にコートしなくて、更衣室もなかったんですよ。それで、本校の倉庫からリヤカーでネットやトンボやブラシを積んで持っていきます。1年生は私1人だったから、2年生が手伝ってくれて、じゃんけんをしてリヤカー係を決めていました。私が



勝ったら2年生がリヤカーを引いて、私はお茶を持つ係になったりという、心地よい生活をしてました。

～強かった甲南大学女子テニス部 1部リーグ戦で優勝!～

尾西：当時からリーグ戦はあったんですか？

坪川：リーグ戦はありましたよ。最初は女子部は2部でした。私の一つ下に斉藤ひろみさんが入部してくれて、もう1人理学

部の女性が1人入ってくれたんですけど、理学部は勉強が忙しいから練習には全く来ないの。しかし3人は居るから、とりあえずリーグ戦に出場する事に決めました。しかし未だ一人足りない。そこで甲南女子テニス部で大学理学部に進んでいた広瀬さんを「当日だけ絶対に来てっ」と口説いて(笑い!)、ようやくリーグ戦に出場しました。私と斉藤ひろみさんとでシングルス2つとダブルス1つで



坪川 順子

大学1962 (S37) 年卒

全日本テニス選手権出場、関西学生テニス選手権シングルスベスト4・ダブルスベスト4

3点取り、2部で優勝して、入れ替え戦もなんとか勝って、1部に上がったのよ。

尾西：うわっ、1部だったんですね。

坪川：そうよ、強かったの。私の3つ下のここにおられる木村

さん達(甲南女子高校テニス部員)が、甲南大学に来てくれば、もしかしたら1部で優勝できるんじゃないかという感じでした。そしたらちょうど村上登美子さんという強い方が神戸海星女子学院高校にいて、熱心に勧誘しました。木村さんと村上さんは高校のときに国体選手だったんですよ。実はちょっとあんまり仲良くなかったみたいなんですけど(一同笑い!)

木村：最高のライバルでした。村上さんと私は高校時代に幾度となく決勝戦で当たりました。

坪川：木村さんと村上さんが甲南大学女子テニス部に入ったら、怖いものなしだと思っていましたから、入部してくれた時は本当に嬉しかった。それで、お二人の活躍もあって1961年

(昭和36年)に1部のリーグ戦で優勝できました。ただ、その当時は、女子は、王座対抗戦がなかったのもとても残念でした。あつたら絶対に優勝していたと思いますよ。

尾西：1部で優勝したことがあったんですね。すごいです!

中村：私の頃も1部でした。リーグ戦の前に新人戦があってバカンバカン打って、0-6、0-6で負けたんですよ。そしたら、木村さんに「あんたちよっとおいで」と呼ばれて、「完璧主義すぎる」ってすごく怒られた。木村さんは覚えておられないと思



木村 洋子

大学1965 (S40) 年卒

全日本テニス選手権ダブルスベスト4、全日本学生テニス選手権ダブルス優勝2回、関西学生春季テニストーナメントダブルス優勝3回・シングルス準優勝、関西学生テニス選手権ダブルス優勝3回・シングルス準優勝



同級生の男子部員にその1時間ほど、練習してもらってました。それがとってもよかったと思っています。

木村：私達はラリー中心の練習をしていました。そのなかでも一番きつかったのは男子とのラリー練習ですね。そのときだけは最後にぶっ倒れました。甲南の男子はすごく強かったですから。あんなに厳しいっていうかつらい思いした練習は初めて。当時はラインを引く白い石灰でラインを引いていたんですけど、暗くなってボールが見えなくなると、ボールに石灰をまぶして練習しました。他には球出しなどはやってませんでしたね。球出しは最近の練習方法だ

いますが・・・。

木村：うん、全く覚えてないですね。(一同笑い!)

中村：そのすぐあとにリーグ戦があったんですが、そこからテニスの考え方が変わったんです。それまで一発で駄目だったら終わりと思ってたけれど、団体戦だからとにかく我を捨てて、ひたすらボールを拾って、チャンスが来るまで待ちました。私は、リーグ戦で育ててもらったようなものです。おかげでインカレに行って、全日本にも行きました。インカレではシードがついたんですよ。

～強くなるために必要なこととは?～

山中：現役の方は、今、どのような練習スケジュールですか?

尾西：平日は授業後に3時間練習し、土日は1日練習なんですが、合計したら4時間半ぐらいです。後はトレーニングをやっています。

山中：昔は、授業の合間にテニスをするというより、テニスの合間に最低限の授業に出るって感じでしたが、今は六甲アイランドまで行かないといけないんですよ。

安本：そうですね、今は授業が終わってからの練習です。先輩方に当時の練習やトレーニングのメニューを教えていただきたいです。

坪川：私達の頃は、トレーニングなんてやらなかったんですよ。唯一のトレーニングと言えば、雨が降ったら走る。それぐらいでした。練習では人一倍ボールを打ってましたね。練習が9時からなら8時に行って、やりたい人同士で練習する。毎日1時間余分に練習するということがすごく大事なんです。私は、

と思いますが、個別の技術を上げていくにはとても良いと思います。

中村：ローラー引きは、ハードなトレーニングになってましたね。土のコートだったので、ホースなんかないからバケツで水を撒いて、ローラーを曳くんです。水溜まりがあれば先輩に怒られるから、結構大変でした。トレーニングにもなっていたけど、そういう精神的なもの、我慢っていうのは、とても大事だと思います。

木村：私は「鬼キャプテンの木村」って言われてね。(一同笑い!)ここへ来る前も、1年後輩の人に「座談会に行くんだ」って話したら、「木村さんのおかげで、今もいろんなことがあったときに頼れる足腰、精神そういうものが培われたと思いますから、今となれば感謝してます。そのときは「鬼キャプテン」と思ってたけど」って言われました。(一同大爆笑!)

坪川：今の方たちはいろんな練習やトレーニングの方法の情報が与えられてますから、それを大切にしてください。トレーニングは本当に大事だと思います。テニ



中村 恵利子

大学1974 (S49) 年卒

関西学生春季テニス選手権大会
シングルスベスト4、関西学生テニス選手権ダブルスベスト4、
関西学生室内テニス選手権シングルス
ベスト4



尾西 優愛
大学 主将

ス以外にどれだけトレーニングをして基礎体力をつけるか、それが強くなっていく一つのポイントだと思います。

山中: テニスだけじゃなくスポーツで結果を出すためには、メンタルがすごく重要だと思うんですけども、メンタルを鍛えるためには、やはり鬼キャプテンがいないと駄目ですか？

木村: いや、メンタルだ

けは、自分自身の問題ですよ。

坪川: 私も人に鍛えてもらうものではないと思います。私は、先輩はいませんし、人にテニスをしなさいって言われたことは一度もありません。やめとけと言われたことはたくさんありましたけど(一同笑い!)。まず、4年制の大学に行くこと自体、親から「お嫁に行かれへんやないの。」と言われるような時代だったんです。さらに、色は黒くなるし、テニスなんてやるべきでないという時代でした。だから私は大学1年のときからお料理は習いに行っていました(一同大爆笑!!)。料理の先生にも、「どうしてテニスなんかしてるんですか。色が黒くなるし、お嫁には行きませんよ。」とずいぶん言われました。だから私の場合は誰かに言われてやるんじゃないくて、誰もすすめてくれないけど、私がやりたいからやってたんです。多分そういう自分の意志をしっかりと持つことが、精神的な強さに繋がったと思うんですよ。

中村: 私達の時代に某女子大学がすごく強かったんですね。そこには有名な強権的な先生がおられてね。その学生は、みんな従順に従っている子たちでした。その学校とリーグ戦で戦う時は、必ず腕組みしながら後ろで座られるんです。私は、「見とけよ、あなたが教えた子たちをやっつけてやろう!」と思って頑張りました。私は、センスはないけどそういう根性だけはあったかもしれない。(一同笑い!)

坪川: 結局、やれと言われると人はやりたくなくなるんですよ。私は1、2回生のときは個人戦に申し込んでもらえなかった。悔しかったです。みんなは、私がテニス部を辞めると思ってたんでしょうね。でも、ここで辞めたら、終わりだと思ったんです。だから、自分の意志で試合も申し込んだし、部活も続けました。それでこそ、何か残せるものが身につくけど、辞めたら自分に何も残らない。メンタルが強くなって、そういう自分の意志をもってるかどうかじゃないですかね。

中村: 私は、押し付けられるのが嫌いで、自分で考えたテニスをした人間だったから、なんで自分のやりたいテニスをしないんだろうと思ってました。「なんで私はこんなんだろう?」って考えることはすごく大事だと思うんです。それはテニス以外のことにも通じて、自分の気持ちがない人は駄目ですね。

山中: 試合中のことなのですが、ミスが増えてきたときに怖くなったりすることもあると思うのですが、そういうときはどう対処されますか？

坪川: そういうときは確かに怖いですね。ミスが増えてくるっていうのは、相手のボールをきちんと判断できてないことが原因だと思うんです。思ってるよりも、スピードが速かったり、バウンドが跳ねてきたりとか何か理由があるはずなんです。この理由を考えて対応したら、ミスは減るんじゃないかと思います。

木村: それとやっぱりハート、気持ちだね。ミスが出したら弱気になるんですよ。これは誰だって当たり前で、弱気になると入れにいっちゃって余計ミスに繋がるんですよ。だから弱気にならずに、テニスの三原則をチェックしてみてください。「足を動かして、ボールをよく見て、最後までしっかり振り切る」です。これを常に自分に言い聞かせて、練習するんですよ。一つや二つ負けてもいいんですよ。後悔するような負け方をしないように思い切ってやらないもったいない。中村さんのように、強気になって打っていけばいいんじゃない？

中村: 結局、入らなくなるっていうことはいろいろ考えるわけ。これ取られたら、15-30になる、これ取られたらゲームになるとか、邪念が入ってるから、集中できなくてミスが出る。何も考えず、しっかり自分が練習してきたことをする。それができるのは、練習の裏付けだからね。練習してなかったら裏付けも何もないから。集中しているとポイントのことなんか考えない。いつの間にか、ゲームが取れたっていうレベルまで集中できたら、大体ものにできる。相手が強過ぎたら負けるときは負ける。でも、どうにかしたら勝てる試合をものにしたいならとにかく集中することだと私は思います。

井上: 私は、自分の理想のテニスと勝つ為のテニスが違うことに悩んでいます。私は打って勝つテニスがしたいんですが、



安本 華音
大学 主務



中山 桜
大学2年

勝つ為にはもっと粘り強くロビングとかを使ったりしないといけないなって思っているんです。でもどうしても理想のテニスが頭にあって、邪魔してくるんです。

中村：勝つ為のテニスというよりは、結果として勝つだと思ふのね。私は甲南女子大の小川厚子さんのフットワークが華麗で理想でした。そういうのが出来るとき

は、すればいいんですよ。だけど、それだけじゃ駄目なときは絶対出てくる。例えば、団体戦であなたにポイントかかったら、みんなのために頑張らなきゃいけないじゃない。じゃあ、したくないけど、ここはロブで粘って、自分のペースに戻ったときに、又、自分のテニスをしようっていうメリハリが必要だと思うの。理想のテニスが出来ない時は我慢する。そしたら、また新しいものが見えてくると思う。こういう勝ち方も楽しいよねって思えるようになると思う。自分の考えに固執し過ぎない方がいいんじゃないかな。

木村：自分のやりたいと思うテニスをやればいい。だけど、自分の理想ばかり追っかけたら勝てないっていう壁にぶつかりますから、そのときに自分がどういうふうに変えていけばいいのか、自分で考える。そして、勝つためにはやっぱり打つばかりでなく、少しロビングを使うとかいろいろ考える訳でしょ。そうするとテニスが変わっていく。そしたら勝てるテニスになっていける。でも一年生だからまだ理想のテニスを追いかけたらいいと思いますね。

坪川：打って勝つということ自体は正しいと思うけど、勝てないのには理由があるはずよね。打って返すには適さないボールっていうのは絶対にあるじゃないですか。いつも自分に都合よく打てるボールばかり相手が出してくわけではないから。自分がエースをとっても、今度ミスしたらトントンでしょ。打てるボールを失敗したって、そんなことはいいんです。だけど、絶対無理でしょっていうボールを無理に打って失敗するのはやめ

た方がいい。見極めがすごく大事ってことよね。

木村：今、皆さんがおっしゃったテニスは、あなたの理想としている打って勝つテニスだと思いますよ。あなたが理想とするテニスを目指すのが一番いい。頑張ったらいい。

～強さの秘訣～

山中：木村さんはインカレのダブルスで2年連続優勝されているのですが、ダブルスの練習や秘訣等教えていただけますか。村上さんと組まれていたのですが、元々ライバルですよ。どんな感じだったのでしょうか？

木村：本当にすごいライバルだったんです。全国高校で1位2位を年中競っていた仲ですから。大学で同じテニス部に入ってきた時はびっくりしました。彼女はストロークがとても安定していて、私はネットプレーが得意だったので、2人が組むとやっぱり強いんですよ。彼女がすごくいいストロークを打ってくれるから、それを見計らって私がポーチにでたり、あがってきたスマッシュを叩いたり。すごくよくコンビネーションのとれたダブルスペアだったんです。

坪川：私は今でも、その昔にダブルスの名プレイヤーだった方々と一緒にいる機会があるんですが、今でも本当にお上手ですね。特にネットでの動きが、普通の人には出来ないような動きをする。ストロークも突き玉やロブを上げるタイミングなんかが絶妙です。ダブルスはやっぱり別物です、シングルスは違う競技だと考えておいた方がいいと思う。

中村：私はどちらかと言えばシングルプレイヤーだったので、ダブルスの時はストロークの事を考えてた。基本的にペアがボレーをしやすいような球を作ってあげるのが仕事だね。だから





シングルスとダブルスのストロークは違う。自分がどんな角度にどんなボールを打ってあげたらペアがポーチにしやすいか、を常に考えてた。ペアに花をもたせる気持ちがストローカーには必要ですね。

坪川：ネットでポレーやスマッシュを決めた時は、そのボールを作ってくれた人に感謝しないとね。サッカーでいうところのアシストですね。「あなたのお蔭でエースをとれたわ。ありがとう！」ってね。そうやってお互いを思いやる気持ちがダブルスには一番大事よね。学生の皆さんは出来てますか？

尾西：出来てないところもあるかも知れません。気を付けて実践します。

木村：ダブルスはパートナー次第で変わるから、得意とするプレーをキャプテンはよく見て、組み合わせを考えないとね。ストロークのいい人とネットプレーの上手い人を組ませてあげるとか、考えてあげればペアとしてだいぶ違っていくんじゃないかと思います。パートナー選びっていうのはキャプテンの責任よ。例え、余り仲が良くなくても勝つということに対しては一緒に一生懸命になるから、その辺のことは考えず、プレースタイルが合う人を選んであげたらいいと思いますよ。

尾西：私もキャプテンをしていてチームを運営することの難しさというのは感じてるんですが、木村さんと中村さんは当時キャプテンされていたということで、大切にしておられたことなどがありましたら教えていただきたいです。

木村：私は「鬼キャプテン」と言われようと、「甲南大学の女子テニス部が強くなればいい」と思っていました。勝つことが一番大事と考えていましたから、厳しくして強くしてあげることが任務だと思います。勿論、むやみやたらと厳しいのは駄目ですよ。「その人のためになる」ということを念頭に置いて、根底に「愛情を持って厳しく育てること」がすごく大事だ

と思う。

尾西：キャプテンとしての覚悟でしょうか……。嫌われるかも思っちゃいます。

木村：キャプテンは嫌われてもいいんですよ。愛情を持って接したら、選手たちはその厳しさをちゃんと受け止めて、一生懸命に練習して強くなる。練習っていうのは、本当に心を込めて一生懸命真摯に努力しないと駄目だと思います。結果として、勝ち出しますので、キャプテンの信頼は高まって、苦勞も報われますよ。

尾西：自分もそういうキャプテンを目指したいです。

木村：私がテニスをしてきて、一番自慢できることは、キャプテンをしているときに全日本学生のダブルスに6組出たことなんです。甲南大学テニス部の女子部だけで6組も出たっていうのはめったにない話でしょう。それが、私がテニスやってきて一番嬉しかったことですね。

～甲南らしさとは？～

坪川：こんなこと言ったら時代が違うって言われそうな気がするけど、私は甲南ってすごく仲がいいことが特徴じゃないかと思っています。当時、男子の強豪校もあったけど、すごく暗い印象がありました。テニスをやらされているみたいな感じかな。のびのびとしていて明るくて楽しい雰囲気甲南の特徴だと思います。

木村：明るくて楽しいだけで終わったら駄目ですよ。やっぱりテニスは勝ち負けを競う個人スポーツなので、ダブルスパートナーも対戦相手に成りうる。でも、甲南って、その辺もわきまえた上で仲がいい。だから、本当に明るくて楽しくて素晴らしいテニス部なんです。私は卒業して随分経ちますが、未だに「あ～で



井上 美月
大学1年



きたらまた甲南のテニス部でテニスやりたいな」って思いますよ。それほど甲南のテニス部が好きです。本当にいいチームだと思います。

～ OGの方々の卒業後の テニスライフは？ 「えっ、全米オープンに出場!?!」～

坪川：私は結婚したらもうテニスはしないだろうと思ってました。そういう時代だったというか。でも、40歳くらいのときにママさんテニススクールっていうのが流行りだして、再開しましたね。学生時代に会員だった芦屋クラブにまた入会して、それから今日までずっとやっていますね。

中村：すごいですね、私は口だけテニス(笑い!)。結婚して長崎に行ってテニスは続けていて、国体に出たんです。でも、41、42歳の頃に靭帯がきれて、お医者さんに「普通の生活はできますが、選手生活は手術しないと駄目です。」と言われたけど、手術はしなかった。そこからは選手生活はやめて、子どものテニスの球出しをしてたんですけど、子どもの手が離れたのを機に、「同じことしてお金儲けができるのはコーチか!」と思ってルネサンステニススクールというところに入って、47歳から今年72歳に至るまでテニスコーチをしています。60歳で引導を渡されると思ったら、「車椅子になるまでやってください。」と言われてね(一同笑い)。年配の人も習いに来られるけど、基本的なことだけをきちんと教えてあげたら、そ

れなりに上手になっていくんです。出来るようになって喜んで顔を見るのが楽しくてね。それが今の一番の楽しみかな。おかげさまで、甲南で培ったことが今までずっと生きて、そういう生活をさせていただいています。

木村：私は卒業してからずっとテニスを続けています。その中で自慢できることをお話しますね。卒業してすぐに日本テニス協会から紹介状をもらって渡米したんですね。そのときにアメリカにいらっしゃった藤倉さんというとても強い有名な男性がいらっしゃって、「木村さんいいよね!」とって、いろんな試合に出させてもらってたんです。そしたらある日突然、「木村さん、今度当たる相手に勝ったら、全米選手権に出れるよ!」って言われて「そんなことないでしょ!」って言ったら、「あの子が全米に出る資格を持ってるから、あの子に勝ったら木村さん入れるから頑張りなさい。」と言われてその試合に出たんですよ。それで彼女と対戦したんですけど、相手が若くて結構荒かったんですね。私はどうしても勝ちたいと思って、普段ロビングはあんまりやらないんですけど、ロビングをあげたらミスしてくるから「これだ!」と思って、粘って勝ったんです。全米選手権に出られるなんて夢にも思っていませんでしたが、そしたら、なんとなんと出られたんですよ!だから全米選手権に一度出てます!知らなかったでしょ?(笑い!)

るよ!」って言われて「そんなことないでしょ!」って言ったら、「あの子が全米に出る資格を持ってるから、あの子に勝ったら木村さん入れるから頑張りなさい。」と言われてその試合に出たんですよ。それで彼女と対戦したんですけど、相手が若くて結構荒かったんですね。私はどうしても勝ちたいと思って、普段ロビングはあんまりやらないんですけど、ロビングをあげたらミスしてくるから「これだ!」と思って、粘って勝ったんです。全米選手権に出られるなんて夢にも思っていませんでしたが、そしたら、なんとなんと出られたんですよ!だから全米選手権に一度出てます!知らなかったでしょ?(笑い!)

全員：すごーい!!

山中：失礼ですけど予選じゃなくて本戦ですか?

木村：はい。USオープンがオープン化する前、全米選手権っていう名前でした。その時は、テニスの神様が「一生懸命やってるからご褒美をあげよう」って降りてきてくれたみたいで



した。1回戦でコロッとやられましたけど、私が一番自慢できるエピソードです。

中村：その時の第1シードって誰でした？

木村：第1シードは「マーガレット・スマイス・コート」夫人（元世界1位、全豪オープン会場の1番コートは彼女の名を冠した「マーガレット・コート・アリーナ」）でした。その時代です。1965年、これだけは結構物忘れがひどい私も忘れない。（一同笑い！）

山中：誰も木村先輩が全米選手権に出られたことを知らないんじゃないですか？

木村：誰も知らないんですよ。日本庭球協会から派遣された選手じゃないから。そのころは日本庭球協会が推薦した人じゃないと全米選手権には出られなかった。だから、一番自慢できるところは、自力で出たってことなんです。その後も、キング夫人とかコート夫人とかそういう方々とも全米選手権ではないけど、他の試合で一緒してもらった。

全員：それもすごーい！！

木村：今はとくに選手は引退して、コーチじゃなくて、ボランティアみたいな感じでボール出しをしています。毎日ボール出しをやってくれて人がいるから、はいはい！とか言って。さっき中村さんが言ったように、その人たちが上手になるのがすごく嬉しいんですよ。こないだできてなかったのにできるようになったとか。自分でも本当にテニスが好きなんだなと思います。

坪川：新聞に出てたんですけど、年をとって長生きして、元気で、っていうのに一番適してるスポーツがテニスだって。テニスは健康にいいみたいです。

木村：私も今年81歳になります。テニスのおかげで元気でいれると思う。

～未来へ託すメッセージ～

坪川：現役でやってるときは苦しいとか、嫌だとか、学業もあるし大変だろうと思うんですけど、やり続けたら何か起こる。楽しみながらやるということが私は一番だと思う。自分がやりたいように。もちろん先輩の言うことをきかないで好きなことしていいという意味ではありませんけどね。自分が主人公になっ



て楽しんでやっていって欲しいですね。

山中（学生）：最近モチベーションがあがらない時もあったんですけど、今日のお話を伺って今ここにいないメンバーにも伝えていけたらと思いました。貴重なお話をありがとうございました。

中村：私たちがモチベーションが上がらないことなんて何回もあったよ。

木村：誰だってモチベーションが下がるときがありますからね。でもね、それを乗り越えて一生懸命やればやるほど、それがきっと必ず楽しい思い出として残ってきますから。できるだけ一生懸命やって、できるだけ真摯に一生懸命テニスに取り組んで欲しい。私はもうそれを願ってやみません。ぜひ頑張ってください。

中村：私もそう思います。やりきったということがすごく今後の自分の人生の糧になります。やりきったということが、何かしら他の事にも通用するようになるので、最後まで辞めずに頑張って、自分なりに出し切ってほしいですね。そしたら絶対後悔なんてないです。あの時、嫌で嫌でたまらなかったけど、でもやっぱりあのときやってよかったね、って。後になったら絶対いいことしか思い出しませんから。本当大変だと思いますけど、ぜひやり切ってください。それだけを希望します。頑張ってください。ありがとうございました。

井上：いろいろ悩みとかお話をさせていただいたのですが、アドバイスしていただいて、ありがとうございました。まだ一年生だからと甘えず練習に身を入れてやっていきたいと思います。そして、先輩方が築いてきてくださった伝統を守っていききたいと思います。

現役一同：今日は本当にありがとうございました。

座談会出席者



前列左から：藤井 淳、中西 伊知郎、渡辺 康二、辻本 豊
後列左から：直木 俊樹、西村 匠翔、福家 匠音、丸尾 篤矢、壺内 寿之輔、平野 司、久保 晃平、阿部 哉太



前列左から：中村 恵利子、坪川 順子、木村 洋子
後列左から：山中 祐子、尾西 優愛、安本 華音、中山 桜、井上 美月

各学年の思い出

MEMORY

旧制甲南
中学校
卒業生

3回 1926(T15)年卒

上原 増雄 神田 俊治

2回 1927(S2)年卒

坂野 清夫 高橋 善雄

3回 1928(S3)年卒

金倉 英一 松村 彰一

4回 1929(S4)年卒

江口 治郎 金谷 修一
川延 誠治郎 杉生 二郎

5回 1930(S5)年卒

井出 新太郎 入江 明
上村 添次郎

6回 1931(S6)年卒

秋田 鋭吉 伊藤 英吉
菊池 二郎 久保 正一
由良 誠朗(正夫)

7回 1932(S7)年卒

楠本 忠次

8回 1933(S8)年卒

伊藤 順吉 神澤 益次郎
千浦 太郎 不破 栄一 光村 正一

9回 1934(S9)年卒

岡田 直広

10回 1935(S10)年卒

豊原 廉次郎

11回 1936(S11)年卒

野村 正五郎

12回 1937(S12)年卒

神澤 得之助 灰谷 彬

13回 1938(S13)年卒

片岡 健二郎 立川 光章 田中 実
堀田 正朝

14回 1939(S14)年卒

岩井 周三

15回 1940(S15)年卒

小倉 克彦 杉生 篤亮 高松 秀二
和田 邦平

16回 1941(S16)年卒

伊藤 俊一 大石 勝 黒田 英一

17回 1942(S17)年卒

大野 英和 片岡 幸三郎
佐藤 希久丸 永井 弥太郎
浜崎 良男 古川 欣一

18回 1943(S18)年卒

加藤 周一 住友 義輝 藤原 邦雄

19回 1944(S19)年卒

田代(小林) 大三郎 古谷 昭

20回 1945(S20)年卒

飯田 修一 久賀 浩佑 小池 正男
中西 香爾

21回 1946(S21)年卒

小倉 淳平 吉川 精一 小島 誠
武居 明 二見 巖 三好 清勝

22回 1947(S22)年卒

井上 昭二 馬宮 修一
貴志(戸島) 清志 吉田 真策
柳生 等和

23回 1948(S23)年卒

伊藤 謙哉 大谷 忠雄 武居 精
山中 直樹 吉田 宏

24回 1949(S24)年卒

大久保 忠彦

25回 1950(S25)年卒

赤浦 英男 朝倉 康景 岩本 邦宣
武居 敦 立川 清兵衛 中根 守久
林 孝雄 溝部 擴 村永 和生
目崎 昭司 森 健夫

26回 1951(S26)年卒

張 吉夫 西林 保樹 陌間 啓芳
久島 健一 松岡 通夫 三杉 隆輝
山城 正之

旧制甲南
高等学校
卒業生

旧制甲南高等学校の思い出

旧制高校22回 井上 昭二

小生の旧制甲南高校尋常科、高等科合わせて7年間は、昭和15年から22年と正に支那事変に始まり大東亜戦争と戦時色1色に塗りつぶされる戦時体制の中にあった。

然し、甲南ではその割に外国語(英語、ドイツ語)の勉強も自由であった。

勤労働員、或いは軍事訓練等の間はかなり勉学の機会が与えられた。これも偏に平生先生の強い御意思が背後にあってのものではないかと思う。

平生さんは人格形成に必要と文芸、スポーツを奨励された。

其のお蔭で、運動ではテニス部で、文化面では合唱をグリークラブで、楽しむことが出来た。

テニス部は結構伝統のある部で、我々の先輩にも、後輩にも英国のデビスカップに出場する実力者がいたと記憶する。小生の在学時代は戦時中であり、新しいテニスボールの入手も儘ならず、古いボールを何度も毛を立てて使う等、苦勞したことを覚えている。

戦後第1回のインターハイが昭和21年京大のコートで行われ(ダ



▲ 昭和21年 第1回インターハイ(京大コートにて)



▲ 卒業式の日に庭球部よりペナントを贈られる

ブルス2組、シングルス3人、メンバーは戸島、馬宮、井上、大谷の4人)、1回戦は金沢の四高に大勝したが、次の大高戦で3-2で敗退した。(小生はダブルスに出場し、何れも勝つことが出来たが)

京都大学に入学後も庭球部でテニスを続けることが出来たが、何しろ食糧不足の時代でお腹が空いて困った事を覚えている。

その後、社会人となっても、テニスだけは続けることが出来、海外勤務の折も(三菱商事勤務) テニスで交遊を広め、仕事にも大いに役立たせた。

勤めを終わってからは、故郷の神戸に戻り、学園都市のテニスクラブに入り、89歳まで続けることが出来たが、そこで終止符を打った。

というような次第で、甲南時代に始めたテニスは小生の生涯の友となり、今日96歳を迎え、尚、健康でおられるのも、テニスのお蔭と感謝している。



▲ 昭和12年 インターハイ優勝

インターハイテニス 優勝で幕閉じ

旧制高校25回 赤浦 英男

虚弱で気が弱いくせに、好き嫌いははっきり言い、外で遊んでいても嫌な児が入ってくると家に帰ってしまう幼少時代、悪戯っ子達に私は内弁慶と呼ばれていた。ベッドで過ごす時間が多い昨今、忘れていた思い出が不思議なくらい蘇ってくる。

須磨区にあったキリスト教系の鶴ヶ池幼稚園がその舞台で、近所のタマエちゃんとセツコちゃんと三人仲良し。ところが年上の彼女二人が先に卒園した間なしに、私がエキリに罹り、続いて猩紅熱等を患うのを見て、祖父が「可哀相にこんなに小さい子がよう大きくなるやろか」と心配されたそう。当時のことで私が覚えていたのは、幼稚園の二軒南隣のM医院に大変お世話になったことぐらい。

それから80年以上も経った今頃、何の拍子か、ふと思いついたことに・・・幼稚園の帰りM医院を覗き、人力車があればその人力車に乗せてもらって家まで帰ってきたこと。又数年後、医院廊下のガラス戸越しに紺色の詰襟の学生さんの姿が見えたら多分甲南の学生さん。一寸話をしてはと云われたが、間もなく東大へ進学された様、そのまま今どうされているだろうか、M先生の息子さんと思われるが。

話が前後するが、2年余の出席で3年保育を卒園し、入学したの



▲ 昭和13年 インターハイ優勝

が東須磨小学校。全生徒数2600余名、1、2年生の半分は昼からの登校、通称ヒル行き、各組に外国人が混じり、又学校給食のない当時、弁当持参の学校行事日には区役所から弁当が学校の別室に届く生徒もいた様であった。

又当時、1、2年生の机は二人分が横一列にセットになった机だった様で、男女同席、私の隣席は大柄なMちゃん。弁当持参日のおかずはエキホスの空き缶に入れたみそ汁だけ。私の弁当を横目でチラチラ見る姿は今でも忘れられない。

3年生になって男女別のクラス替え。4年生になってすぐ担任のI先生が女子のK先生に代わられ、I先生はお国のため軍隊に行かれることを知らされた。

5年生になると2年先を目指して中学校、商業工業学校進学希望者は教室中央二列に席替え、テストの時間だけ担任先生が入り替わった。しかし6年生になると学区制とかで神戸市の西にある東須



▲ 昭和14年 インターハイ優勝

磨小学校からは東の神戸一中受験不可になるも、反対の声は一切聞かなかった。担任のT、書道のU両先生に相談したところ、まだ受験申込期日に間に合うから、一中よりさらに国鉄3駅（六甲道・住吉・摂津本山）東の武庫郡本山村にある私立甲南高校尋常科を受験することになった。

またM先生のお世話で高等科在学中のH先輩が案内役、父が付き添いとして初めて見る学舎、立派な門扉越しに続く中広い砂利道、両側は緑に覆われた中暫く歩くと正面玄関、今もって静かな面影を残しているのが懐かしい。

入学してすぐ運動部文化部の入部勧誘があり、テニス好きの父の勧めもあってテニス部に入部。ところがテニスは敵国イギリスのスポーツということで、アメリカの野球とともに廃部となり、復活は尋常科4年になってから夏の全国中学校テニス大会からとなった。コートも甲子園は進駐軍が使用のため中百舌島に変更。国鉄大阪駅から地下鉄に乗り換えの際に、私の持っ

たボストンバッグを見たヤミ屋に「兄ちゃん、何持っとんや、買ったるで」と言われ、付きまとわれたのも思い出である。

肝心の試合の方は忘れたが、翌日から参加せず、即ち初日の1～2回戦で負け、相手は京都の商業学校の選手だった。ただ昼食は母の手作り弁当、進駐軍放出缶詰のコンビーフの美味しかったこと。食い意地の張っていた事は確かである。

何よりも旧制高校庭球部として最高の喜びは、昭和23年に開催された最後のインターハイテニスでの優勝である。祝賀会で目で見えた優勝旗の縁取り錦はボロボロ、竿の先でなびいていた優勝校名と選手名記入の大きなりボンは黄色く汚れていた。又優勝カップは下部の細いところで曲がったまま。声変わりで歌った応援歌「嗚呼我勝てり勝戦、我が喜びに友は舞う、溢るる想い感激の・・・いざもろともに叫ばなむ」は生涯忘れない。但し私はマネージャーN氏の補助として先輩への試合結果報告と寄付依頼に多忙を極め、じっくりと優勝の喜びを味わえなかったのは残念。

その後K先輩自宅でのテニス祝賀会、現役も参加のプレーの後は、遠慮会釈のない学生に戻ってのコンパであった。

大学卒業後しばらく勤務先でテニスを楽しみ、徐々にゴルフにも手を出し、途中で癌の発症もあってベッドの中でのTV観戦ゴルフ、新聞雑誌の拾い読み、積ん読本の整理、週2回医者への自宅訪問往診はまだしも、日用品の買い物の付き合いで精一杯、テニスは万年2軍からゴルフ同様TV観戦へと徐々に？

オール甲南テニスクラブの発展と併せて、同じコートで汗を流し涙した諸兄弟のご多幸を願ってペンを置きます。



▲ 昭和23年 インターハイ優勝旗



▲ 昭和21年 戦争で廃部となっていたテニス部復活記念



▲ 昭和23年 インターハイ優勝



▲ 昭和23年 インターハイ優勝祝賀会 片岡邸コートにて

高校 1951(S26)年卒

伊藤 博 伊藤 嘉朗 小川 一三 奥田 二郎

大学 1955(S30)年卒

男子 馬場 武彦



▲ 新制高校第1回卒業記念写真



▲ 1回大学卒業アルバムより

甲南学園硬式庭球部
 KONAN TENNIS TEAM
 since 1923

2回

高校 1952(S27)年卒

大江 晃市 清水 博一 松本 正三 山口 為章 吉田 孝一

大学 1956(S31)年卒

男子 坂本 達雄 清水 博一 吉田 孝一

甲南テニス生活の10年

高校・大学 清水 博一

甲南生活10年間をテニス部で過ごした清水博一です。先ず、その間にご指導を頂き人生の基盤を作っていただいた諸先輩、同僚諸氏に改めて御礼申し上げます。

終戦の翌年1946年4月に夙川小学校から旧制甲南高等学校尋常科に入学し、帽子の校章は中学校の「中」でなく、いきなり高等学校の「高」となり、この校章を誇らしげに被っていました。又ぼろぼろの帽子に高下駄でマントを羽織った先輩達の姿も忘れ難い風景でした。然し僅か1年で中学校の義務教育化により紋章の「高」が「中」に変わり、がっかりした記憶もあります。

入学時には体育系また文化系のクラブに入部するよう勧められ、即テニス部に入部しました。当時、ガットもナイロンなど無く、シーブのような高級品があらう筈もなく、鯨の腸のガットが一般的だったと思います。

甲窓65号に投稿された井上昭二氏が入学時の最上級生で最後の旧制インターハイ大会で優勝された時のお一人だと記憶しています。三高（現・京大）のコートサイドではマナーなど関係なく、大声で必死に応援したことを鮮明に覚えています。ポイント取得毎に大きな太鼓音もあったかも。

学校のコートは戦中に芋畑に変わり、戦後すぐ、先輩達の手で修復されたと聞いていました。甲南のテニス部は知名度が高かったせいもあり、我々新入部員は当初20数名でしたが、1年後は3、4名に減っていました。7学年が2面のコートを使用するので低学年生は何時も球拾いと素振りのみ、又ポールも表面のフェルトが残っている事など殆ど無く、水に濡らし毛立てブラシでフェルトを起し乍ら使っていたとの記憶もあります。よほどテニスが好きでない限り退部してゆくのが自然だったのでしょうか。一方、学業も厳しく通常7年の甲南生活が14年と言う替え歌もあり、危ない時は必ず先輩に相談しろと言われました。私は常に低空飛行でしたが、テニスに熱中でき、先輩の手を煩わせる事も無かったと思います。

さて大学入試時ですが、親父が大学医学部勤務で勉学に明け暮れる姿に接し、一生勉強しなければならないのは「ごめん」。早く平凡なサラリーマンになりたいと思っていた所、幸い大学が同じ場所で開校されましたので、新制2回生として進学の様な形で入学しました。所がこの4年間で岡本の教室にいた時間は卒業に必要な最小限の単位取得の為だけで、殆ど住吉のテニスコート或は各種トーナメントのコートサイドでした。自分のテニスでなく、学生界のホープ松岡功、小林要両氏の応援の為で、殆どのトーナメントで最終（決勝戦）まで彼等の傍にいたと思います。

卒業時に単位ぎりぎりですらうじて京阪電気鉄道に入社できたものの、大卒同期生が20数名、且つ半数以上が国公立出身だったので彼らに負けるものかと、過去に経験のないほど必死に勉強しました。これはテニスを通じ「負けるな、努力」と言う精神を叩き込まれた結果だと思えますし、幸い上司にも恵まれ、幸運にも70歳直前まで仕事に就くことが出来ました。

今尚90歳を前にまだまだ元気一杯、最後の人生を満喫しています。これも全て甲南テニス生活の10年がベースであり感謝、感謝の一言です。



▲ 2回大学卒業アルバムより

3回

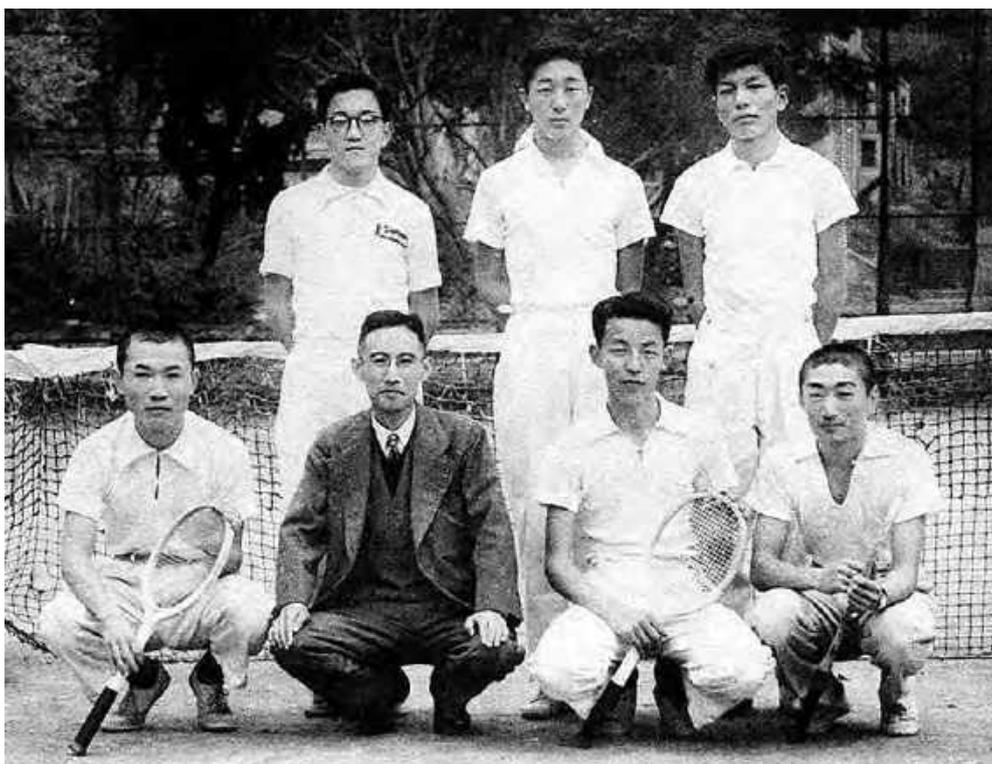
高校 1953(S28)年卒

岸本 禎夫 小林 要 松岡 功 松本 恭一 吉川 浩司

大学 1957(S32)年卒

男子 小林 要 高畑 宗一 中村 憲司 松岡 功 松本 恭一 吉川 浩司

女子 佐藤 良江



▲ 3回高校卒業アルバムより



▲ 3回大学卒業アルバムより

甲南学園硬式庭球部
KONAN TENNIS TEAM
since 1923

4回

高校 1954(S29)年卒

高石 勝 武内 鏡 辻田 悦三 濱崎 忠三

大学 1958(S33)年卒

男子 外村 耕一 高石 勝 辻田 悦三 中野 雅央 濱崎 忠三 傍士 俱明

甲南大学 経済学部 イコール テニス部の 思い出のエピソード

大学 傍士 俱明

私は現在87歳、人間通常60数年前の出来事は殆ど“忘却の彼方”ですが、私の甲南大学テニス部在籍4年間の出来事は未だに大きく記憶に残って居ります。以下思い出すままに綴ります。



▲ 4回高校卒業アルバムより

新制甲南大学（経済学部＝テニス部）に新制大学4回生として入学したのは昭和29年（1954年）4月であり、当時のテニス部員は殆どが甲南高校よりの繰り上がり入学でありましたが、私は大阪府立池田高校よりの編入学でした。「スポーツ枠入学」を適用された第1号だったと思います。

当時の部員は第1回生が馬場武彦主将以下2名、第2回生は清水 博一主将以下7名、第3回生は松岡功主将以下8名、第4回生の我々は高石勝主将以下6名で、総員20数名であったと記憶して居ります。新制大学であったため他校と比べ部員は少なくこじんまりしていましたが、纏まりの良いチームワークが優れたテニス部であったと記憶して居ります。

練習はJR住吉駅近くの住吉川の側面にある“甲南テニスクラブ”のクレーコート2面を借りて、月曜日～土曜日迄朝9時より日没まで毎日の練習であり、当時は監督、コーチの制度が無かった為、指導は全て先輩や同輩で有り、雨天並びにコートコンディションの悪いときには六甲ケーブルの土橋駅や保久良神社の仏舎利記念塔迄の約2時間程のランニングで体力を鍛えられました。

一方この間の学業の方は?と云うと、当時は英語、体育は単位修得必須で有った為、練習時間を抜けて可能な限り出席して居ましたが、ゼミナールの方は殆ど出席できず、卒業が危ぶまれましたが、担当教授がテニス部に理解があり、無事に卒業証書を手にする事が出来ました。

4年間の練習中のエピソードと言えば、1920年代の日本テニス界の超レジェンドである清水善造氏（ウィンブルドンダブルス準優勝者）が住吉川のコートの近くにお住まいである為、ご勤務の帰途、時折立ち寄り、「一寸打たして下さい」と云われ、ほんの10分程ボレーの練習をさせて帰られる事が時折あり、我々にも一言一言一打一打に教えられることが数多くありました。

当時のテニス部の毎年の活動方針といえば、第一に全日本王座決定戦団体戦の優勝であり、第二に全日本学生選手権（通称インカレ）（個人戦）と春秋の関西学生選手権（個人戦）の優勝がメインであり、その他神戸4大学（神戸大、神戸商科大、神戸外大、甲南大学）対抗戦。

関東の大学との交流の為、学習院大学、早稲田大学との定期対抗戦も始めました。これらの試合による戦績としては、2年生の時に全日本王座決定戦に優勝のチャンスが有りましたが、運悪く3期生の松岡功選手がデ杯選手に選ばれ日程が重なり出場出来ず、借しくも関西学院大学に敗れたのが残念でしたが、4年生の時に全日本学生（インカレ）にダブルスで高石勝君と組み優勝を果たせました。



▲ 1957年全日本学生庭球選手権大会 ダブルス優勝

この優勝の時のエピソードをご披露致します。優勝戦は慶応大の石黒（後の日本初のプロテニスプレーヤー）村上組を4セットで下しましたが、真夏8月の40℃を越す酷暑の中、4時間余りの熱闘で、当時はスポーツドリンクなどなく、チェンジコードの折、“塩舂めと水の補給”のみで、ベンチコーチに同僚の辻田悦三君がタオルと水の補給をして居りましたが、当時は水をがぶ飲みすると汗を出して体力が消耗するという事で、水を隠してほとんど飲ませて貰う事が出来ませんでした。今思えば、辻田君の名ベンチコーチの采配が優勝に繋がったと思っています。

又このインカレダブルスの優勝は前年度の松岡、小林組に続く2年連続の甲南大学の連覇であり、甲南大学テニス部の第一期黄金時代に貢献したと自負しております。

このインカレ優勝のエピソードとしては、優勝後にコートサイドにて同僚、後輩の選手たちが甲南大学校歌を斉唱して優勝を称えてくれた事が未だに脳裏に残って居ります。

以上の如く断片的な思い出では有りますが、私にとりまして4年間のテニス中心生活の中でも人並みの遊び（パチンコ・麻雀・ちよい飲み等）も諸先輩に教えられ、その後の社会生活にも多に影響を与えて頂きました。

同輩の今は亡き高石勝君、外村耕一君には良い思い出を作って頂き感謝するとともに、今も交流のある、辻田悦三君、濱崎忠三君、中野雅央君と共に、命ある限り甲南大学テニス部の思い出を語り合っていく所存です。



▲ 4回大学卒業アルバムより

高校 1955(S30)年卒

石黒修 田中道朗 那須一郎 林泰司 村西康弘

大学 1959(S34)年卒

男子 桑原弘久 城武正祐 田中道朗 那須一郎 村西康弘 吉川弘



▲ 5回高校卒業アルバムより



▲ 5回大学卒業アルバムより

甲南学園硬式庭球部
 KONAN TENNIS TEAM
 since 1923

6回

高校 1956(S31)年卒

阿部 晴彦 稲鍵 雄康 乾 英文 落合 滋 佐々木 正浩

大学 1960(S35)年卒

男子 阿部 晴彦 稲鍵 雄康 落合 滋 齋藤 正巳 佐々木 正浩 清水 孝雄 曾我 勇 鳥井 信一郎 長尾 武典



▲ 6回高校卒業アルバムより

第6回生の仲間たち

高校・大学 稲鍵 雄康

創部百周年を迎え、高、大6回生の紹介を阿部晴彦さんから始めたいと思います。彼は高2で一年先輩の石黒修さんとペアを組み、全国高校で大活躍をしました。強力なスマッシュで勝ち進む様子をコートサイドから誇らしげに応援していたものです。彼はその後、主将を務めました。彼と私は高3から大学2年まで共にダブルスを戦い、彼のスマッシュのお陰でシード選手を度々撃破もできましたが、3年の春、肩を痛め、残念なことに第一線から引くこととなります。

その後、私は芦屋高校卒のレフターとして、独特の強力サービスで登場した長尾武典さんと組むこととなります。最終学年時に全国学生テニス選手権ダブルス決勝まで進出。敗れはしましたが、その試合を観戦された朝日生命の社長が長尾選手をスカウト。長尾さんは朝日生命に入社し、5年間、社長と共に朝日生命久我山のスポーツセンターをベースに硬式テニスの普及に努めます。それは海外にも及び、米国、韓国その他多くの国々の歴訪指導が続いたとの事です。後に社会人のトーナメントで活躍し、日本テニス協会の監事まで務めました。若い頃からのご縁のあった宮内庁事務所との関係は現在も続いており、要請があればそれに応え、上皇、天皇陛下のお相手を務めることもあるようです。

長年に及ぶテニスの普及活動に敬意を表したいと思います。

同学年のテニス部仲間は皆活躍していました。

曾我勇さん（長田高校出身）は頭脳明晰でその試合運びも抜群で、学校対抗では、いつも安心のポイントゲッターでした。

齋藤正巳さんはマネージャーとしてボール代のやりくりで常に頭を痛め、その相談相手が学内予算委員会に出席し、ぶん取り合戦で手腕のあった落合滋さんでした。ボール代の増額対応に四苦八苦で、ご苦労様な事でした。

清水孝雄さんには関西学生テニス連盟に出向し学連幹部としての手腕を発揮してもらいました。

乾英文さんは中学3年の春に体調を崩し退部しましたが、中学在学中に灘中の市山哲君と互角の勝負で頑張っていたのを覚えています。大学時にはゴルフ部に貢献し、選手として活躍されました。

鳥井信一郎さん（附属池田高校出身）は大学入学と同時に入部。海外留学（ノースウエスタン大学）までの短期の在部でしたが、春の関西学生新人選手権に皆で参加したのはいい思い出です。その人柄の良さに惹かれ、私など一生のお付き合いとなりました。

佐々木正浩さんは周りのみんなに愛された「文学青年テニスプレーヤー」。いつも本を手放さず、だれよりも読書家でした。

私も中、高、大とテニス部に在籍し、部活動あつての学生時代を過ごしました。振り返ればいい仲間恵まれた幸せ者でありました。先輩方、後輩の皆さまと同期の仲間心から深謝致しております。



▲ 6回大学卒業アルバムより

7回

高校 1957(S32)年卒

中野 敏彦 藤野 洋一 北城 守 松岡 久雄 宮原 幾男

大学 1961(S36)年卒

男子 久保 喜則 中野 敏彦 北城 守 宮原 幾男



▲ 7回高校卒業アルバムより

甲南中・高 庭球部の思い出

高校 藤野 洋一

はじめに、小生昭和13年生れ84歳となり、記憶力も薄れている為、拙い思い出であることをご容赦頂きたいと思います。

昭和26年、戦後も落ち着いた頃、私達は甲南中に入学した。未だ大学は無く(中2の時設立)、マント姿の高校生が眩しかった。母親の勧めでテニス部に入部、人気のクラブで10数人入ったと思う。それが半年位経つと、6~7名に減っていた。練習は厳しく、ランニングから始まり、主にボール拾い、ラリーは夕刻近く僅かだったと思う。残った者数人は、夏休みや他のコートで練習し、腕前を挙げた人だった。

中3になって、同期メンバーを紹介すると、上手な順に①松岡久雄(高2でキャプテン)、②西原清(高校でゴルフに転向、甲南大で全国トッププレイヤー)、③北城守(甲南大テニス部でキャプテン)、④中野敏彦(甲南大テニス部)、⑤谷本勝(高1で退部、慶応大)、⑥藤野洋一(高2でマネージャー、慶応大で当初庭球部)の6名と他に1~2名だった。一番下手な私だったが、中3の時、中野敏彦と組み、全国幼年ダブルスで見事優勝した。他には、灘甲戦の思い出が深く、今でも相手の名前を憶えている。

高2になって、私は全校自治会選挙に立候補した。テニス部の

組織票に恵まれ5位(最下位)で当選した。自治会では、主に会計を担当したので、運動部の予算獲得合戦等、テニス部は有利であったと思う。マネージャーとしては、大阪の奥商会でボール等購入した思い出がある。

当時の庭球部は、黄金時代だったと思う。4年先輩の松岡功さん、韮公園の国際試合でボールボーイをした。2年先輩の石黒修さんとは、慶応大の体育会テニス部に誘われ入部した。(途中退部、テニス同好会を発足し、現在も続いている)。3年先輩の高石さん、1年先輩の阿部さん、稲鍵さん、乾さん。その他先輩の皆さんには、本当に色々とお世話になりました。一方、下級生の皆さんも錚々たるプレーヤーが揃っていた。1年下に平野、藤井、四宮、野々村。2年下に静、

岡庭。3年下に渡辺、小林、河盛、前川、松本。4年下に西尾。皆さん素晴らしい後輩でした。後に、デ杯選手、プロ選手を生み、日本のテニス界をリードした人達だった。

最後に、本年庭球部が100周年を迎え、ご同慶の至りです。甲南中学の創立が1919年、高校が1923年(大正12年)、同時に庭球部が設立した訳です。長い歴史に感動すると共に、多くの物故者に、心からご冥福を祈ります。そして、庭球部の更なる発展を期待しております。



▲ 7回大学卒業アルバムより

甲南学園硬式庭球部
KONAN TENNIS TEAM
since 1923

8回

高校 1958(S33)年卒

坂野 忠夫 四宮 陸男 武内 克彦 那須 善彦 野々村 俊雄 平野 一斎 藤井 道雄 山田 克吾 山根 義弘

大学 1962(S37)年卒

男子 東 輝雄 奥田 稔 那須 善彦 高橋 一隆 中野 邦夫 野々村 俊雄 平沢 雅章 平野 一斎 藤井 道雄
山田 克吾 山根 義弘

女子 坪川(田淵) 順子

私が大学入学した頃は

大学 坪川(田淵) 順子

「女子はテニス部に入れない」。この噂は本当だった。当時は女子が4年制大学に行くこともあまり歓迎されておらず、周りの大人からは「テニスなんかして色が黒くなったらお嫁のもらい手が無くなります。お料理、お茶、お華のお稽古に行きなさい」と言われた。それでも短大に行った仲良しの友達の練習に時々いられてもらっていた。

たまたま出た秋の新人戦で優勝。するとテニス部顧問の和田先生が飛んで来られて、「明日優勝カップを持ってきなさい。写真を撮ります。女子が体育会で優勝するのは初めての事だから広報誌に載せます。学長にも報告します」と言われ、おっかなビックリ。入部したのかどうかかわからないけれど、辞めるわけにもいなくなりました。

2年生になった時、斎藤(環)ひろみちゃんが入ってきた。その頃は二人で芦屋クラブで練習していた。ある時、甲南クラブの物置?(古い靴等がグチャグチャに放り込まれていた)を片付けていたら使って良いと言われ、ホコリまみれになりながら二人で掃除、きれいにした。これで部員にしてもらえたものと思いついていたのだが、関西学生選手権の時、関学の学連の人から「なんで試合に申し込まへんねん?」と言われ、「エッ!」。甲南の学連担当が申し込んでくれなかったのだ。こんな事が一度ならず二度もあった。1年生2年生合わせるとほぼ1年半は棒にふる事になる。さすがにこの時は、周りは私が辞めるものと思いついていた。だが私は辞めなかった。ふみとどまったワケは、今辞めたら誰も私がそんな経験をした事など忘れてしまい、何も残らない。それは残念だと思ったのだ。ヒロミちゃんがいた事、和田先生のエールも大きかった。

次に学校対抗にチャレンジした。部員2人でどうやって? 理学部にいた経験者に頼み込んで当日だけ出場してもらおう交渉をして、2ダブルス、3シングルスを作った。私とヒロミちゃんが負けたらそれで終わりだが、なんとか二部優勝し、入れ替え戦にも勝ち、一部昇格する事が出来た。その後、4年生になった時、1年生に甲南女子から大勢入部。その中に木村洋子さん、海星から呼んだ村上(加賀)登美子さんが個人戦でインカレ単複優勝、学校対抗でも一部優勝を果たす事が出来た。当時女子には王座戦は無く、日本一を目指す機会はなかったが、女子部は大輪の花を咲かせる事が出来た。

個人的には、秋田国体、熊本国体に出た事、第1回学生東西対抗戦に出場した事等が思い出になっている。

卒業してからも女子部は仲が良く、年一回、現役の人達とテニス

会、食事会等をして、子供連れで参加したり、和気あいあい、楽しく集まった。姫路博物館館長になられた和田先生を訪ねて姫路で集まったり、2年下に野村証券と御縁のある草川さんが居た御蔭で、一般公開されていない「野村庭園」を見学させて頂いたりした。

卒業した時は、もうこれでテニスする事は無いと思い、芦屋クラブも辞め、結婚、出産、子育て等、20年間程は全くテニスをしていなかった。それが再び芦屋クラブに戻った時はテニススクールが大盛況。ママさんプレーヤーが活躍していて、時代の変化を実感した。芦屋クラブに高木陽子さんが居た事もあり、クラブの理事、テニス協会の理事、女子テニス連盟兵庫県支部の立ち上げに携わる等、学生時代お世話になったテニス界へのお礼の気持ちだった。2回目の兵庫国体を最後に引退する迄、色々なお手伝いをした。

私は他人(ひと)から「テニスの練習をしなさい」と言われた事は一度もない。自分がやりたくてやっていたに過ぎない。が、これは大事な事だと思う。

テニスが続けたお隣で男女を問わず、大勢の友人に恵まれた。有難い事だと感謝の気持ちでいっぱいだ。



▲ 8回高校卒業アルバムより



▲ 8回大学卒業アルバムより

高校 1959(S34)年卒

岩尾 寿一 岡庭 光良 澤田 勝年 澤本 徳昭 静 敬太郎 徳永 素次郎 藤村 辰雄

大学 1963(S38)年卒

男子 岡庭 光良 澤田 勝年 徳永 素次郎 永井 俊明 林 昌男 福永 崇 藤村 辰雄

女子 玉置(斉藤)ひろみ 中江(田島)知子



▲ 9回高校卒業アルバムより

甲南中高テニス部の思い出

高校 静 敬太郎

僕は1953年(S28)に甲南中学に入学すると同時に庭球部に入学した。当時の甲南中高は全国有数の強豪校であり、新入部員は何十人も居たがコートは2面だけ。放課後から日没までの2時間ほどは中高の部員がひしめき合い、中一の仕事はボールボーイとコート整備(ローラー引きやトンプ)で練習時間は1日僅か3~5分、しかも与えられたボールは2人に1個なのでしょっちゅうネットに掛かるし、コートの外へ出ようものなら直ぐ「ラストー!」の声が掛かった。当然、1~2カ月の内に退部者が続出し、夏休み頃には同期は数名になった。コーチは居らず、諸先輩(全国トップクラスの選手が多数)が手取り足取り教えて下さった。練習量が足りないものだから、家の前の道路(幅5メートルほど)で壁(塀)打ちをしたり、芦屋クラブへ行ったり、歩いて2、3分の松本鐵一君(一年後輩)の自宅のコートなどで下積み練習をした。日課のような数kmのランニング(同期の澤本徳昭君がリーダー)も重要な練習の一環で、お陰で兵庫県高校駅伝大会に陸上競技部の助っ人として参加したこともある。

テニス道具は高価なもので、ボールは表面がツルツルになれば、生け花の剣山で擦って毛羽立てて、ガットも切れたら継いで修理して使う。ラケット自身も良く折れて、近畿高校大会の試合中のスマツ

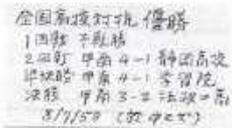
シュで「バキッ!」と折れてひん曲がったラケットで次の球を返するという漫画のようなことをパートナーであった同期の岩尾寿一君はいまだに覚えている。

それでも高校に進むころには甲南独特の紺の制服に大きなテニスバッグとラケットを担いで、校則に反して学生帽は丸めてポケットに入れて「我こそは甲南テニス部」とすっかりその気になって肩で風切って街を闊歩したものだ。同期の連中とは結束固く、US(甲南女子)やKC(神戸女学院)のバザーへ乗り込んだり、十二間道路(2号線)のスズキのアイスキャンデー屋(今でも在ります)にたむろしたり、多くの思い出が残っている。

高校では一学年上と下に名選手が多く育ってきて練習量も多くなり大会への出場も増え、それなりに戦績も上がり、全国の有名選手との交流も多くなり、文字通りテニス人生が始まった。全国・近畿の高校選手権やジュニア大会、正月トーナメント(甲子園)、全国都市対抗(伊勢志摩)、国体(富山)、ライバル灘中高との灘甲戦などが印象に残っている。

最大の思い出はやはり全国高校選手権(団体)での優勝。昭和32~34年の三連覇の二年目だったが、一年後輩の選手たちの活躍もあって法政二高を3-2で破って大きな優勝旗を手にした時の中モズのアンツーコートに映える夕日の場面は今でもはっきりと覚えている。

今、振り返ってみれば、テレビもゲームも勿論スマホもない僕たちの青春時代に、思う存分テニスに打ち込める環境に育ったことはこの上ない幸せであったと思う。同時にテニスを通じて何度も転んでは起き、また転んでは起きて頑張った自分が得たものは、社会人になっても老後の生活でも、単に人脈とか趣味とか健康といったこと以上に人生に深みと味わいを与えてくれたと思う。100周年の70年ほどを共有させてもらったオール甲南テニスクラブの永遠の発展を心より願って止みません。



▲ 1958年7月8日全国高等学校対抗優勝

甲南テニス部、ありがとう！

大学 福永 崇

昭和26年、私は小学の高学年だったでしょうか、姫路ローンテニスクラブで、テニスを始めました。

壁打ち、たまには大人の方に打ってもらったのですが、当時はテニス人口も少なく、周りにはテニスをしている子供もいませんでした。

ジュニアの試合は関西でも行われていたのですが、私は所属の問題で試合に一度も出場できず悔しい思いをしたのを思い出します。ただただテニスが好きで、試合に出れずとも小中高と練習を続けました。

その後、大学進学を考えた時にテニスを続けたい思いが強く、甲南大学を受験。合格することができ、憧れの名門大学でテニスをする夢が叶いました。

入部の手続きに行った時、練習場所の甲南テニスクラブでキャプテンの稲鍵さんに「少し打とう」と言われ、震えながらラリーをしたことを覚えています。

それからの大学生活の4年間、練習は朝9時から日没まで。

1年生はコート整備、ライン引き、練習が始まるとボール拾い、練習後は長距離のランニング。

そんな中で一番思い出されるのが、練習に遅刻してしまったことです。大変なことをしてしまったと反省の気持ちを示すため、私は翌日、丸坊主にして練習に行きました。するとそんな私の気持ちに同級生が寄り添ってくれたのでしょう。その翌日に同級生全員が丸坊主になっていました。これには先輩方も驚いたと思います。

甲南でのテニス生活は、先輩には高校時代に活躍された藤井さん、平野さん、後輩には渡辺君、小林君、河盛君などにも錚錚たるメンバーで充実した練習ができました。

関西大学対抗で関学と1位2位を競っていたため、「打倒関学」の練習。大学王座を目指して、厳しい練習が続きました。

いよいよ最終学年となり、先輩の藤井さんから次の主将をするように言われた時は身の引き締まる思いでした。今まで以上に厳しい気持ちで1年間やり抜きました。同学年のメンバーやマネージャーの永井君のおかげと今でも感謝しています。

残念だったのが、関西大学対抗戦で、渡辺・小林・河盛・野々村・浅井・福永という素晴らしいメンバーで臨んだのですが、関学に逆転され、優勝することができませんでした。

その翌年、後輩達は関学を撃破し、関西で優勝。また全国大学対抗王座決定戦では慶応大学に勝利し、初の王座となりました。すごいことを成し遂げてくれた後輩たちを誇りに思います。

振り返ると甲南テニス部での生活は、私の人生を変え、大好きなテニスをもっともっと好きにしてくれました。そのおかげで自身のテニスだけでなくジュニア育成にも力が注ぐことができ、テニスと共に人生を歩んでくることができました。甲南テニス部、ありがとう！

最後になりましたが、甲南学園テニス部100周年おめでとうございます。これから益々のご発展をお祈り申し上げます。



▲ 9回大学卒業アルバムより

高校 1960(S35)年卒

河盛 純造 小林 功 米谷 友良 前川 治一郎 松本 鐵一 吉田 泰忠 渡辺 康二

大学 1964(S39)年卒

男子 有末 正明 伊藤 優 河盛 純造 神原 武昌 熊谷 昂 小林 功 塩田 浩二 武田 俊男 橋本 俊彦
藤田 欣一郎 前川 治一郎 村上 博保 渡辺 康二

女子 中村(小林) 厚子 藤家(江口) 礼子 前川(田中) 怜子 宮村 美代子



▲ 1959年8月 全国高等学校庭球選手権大会単複団体三冠

兵庫県高校・近畿高校・全日本ジュニア・全日本高校(団体戦・単・複)と目白押しにやってくる試合に、我ながらよく頑張り乗り切ったと思っております。本人はもとより誰もが法政の配する絶大な強者達を倒すとは夢にも考えられなかったと今でも思っております。テニス部の皆様の応援のお蔭様で実現することが出来ました。特にボールボーイをして頂いた方々、ラケットのガットの修復に奔走して頂いた後輩の皆様、お世話になりました。遅時き乍ら感謝感謝!!

此のインターハイと全日本ジュニアの優勝により、日本テニス協会から初めてMiamiで行われるOrange BowlのJunior Champion-Shipに派遣されることとなりました。当時の日本の経済情勢(弗1=¥360)では、二度と欧米に行けるとは夢にも考えられなかったので、何はともあれ招待を受け、胸をときめかせて参加さ

せて頂きました。若輩ながら、アメリカの偉大な都市、全てが目新しく感じ、世界を見る目が養われました。その後の人生にとって有益な経験が出来たと思っております。

渡辺君は誰もが認める好紳士であり、数年前に鬼籍に入られた河盛純造君とは公私ともに親密なお付き合いをして頂きました。甲南中・高時代を共に過ごした素晴らしい二人に巡り会えたのは、私の人生にとって掛け替えのない友人と想っております。

甲南学園硬式庭球部創部100周年を迎えて

高校 松本 鐵一

日本のテニス界(デ杯、全日本)で大活躍された渡辺康二君から電話があり、主題の件に高校時代の戦績を吐露して欲しいと云われ、全日本高校選手権の決勝で彼と闘った記憶が甦り高揚し、執筆することになってしまいました。

甲南小学校時代に松岡功先輩がテニスで素晴らしい戦績を収められているのを見聞きし、憧れは持っていたと思いますが、野球等にも興味があり、テニス部に入部は2学期となりました。当時、渡辺・河盛(芦屋山小出身)、小林・吉田(甲子園小)が既にペアを組み幅を効かしており、小生はコートの隅でボールボーイとランニングの只管下隅生活が続きました。一方、両親からは、国立大学受験を目指せと言われており、その為の体力強化のために我慢と納得はしておりました。

高校1年の中頃に小学校の先輩でもある静敬太郎さんのダブルスのパートナーに選ばれたのを機に、喜びは無論、テニスをやる気にスイッチが入り、趣味から競技志向に気持ちが激変しました。静先輩には大変お世話になり、足を引っ張ってばかりだったと思っておりますが、唯一高校の団体戦でone-point取り、優勝出来た事だけが償い出来たのだと思っております。

高校2年の秋には名門予備校(大道塾)に入塾出来、学校では受験組に入りましたので、練習が終わると塾に走り、食事の時間も惜む人生で一番過酷な日々を過ごしました。高校3年の炎天下の7月中頃から、

思い返せば

高校・大学 渡辺 康二

1. 誰が最初にデ杯選手になるか

中学1年テニス部に入部。新入部員は25名。キャプテンだった高3の石黒修さんに入部初日にグリップだけ教わった。2年になると同期部員も半分程度に減少。ある日ラジオでデ杯フィリピン戦の実況放送があり、これを聞いた仲間数人で誰が最初にデ杯選手になるかという話が出始め、日常の話題になった。狭い部室の中で小さな仲間が大きな夢を描き始めた。中学1年入部時のテニス部全員の写真がある。この一枚の写真の中に5名の将来のデ杯選手の顔がある。石黒修、藤井道雄、小林功、河盛純造そして私。私の自慢の一枚だ。



▲ 1954年の甲南高校中学テニス部員

2. 早弁事件

当時は中高合わせて60名くらいの部員に2面のコートしかなかった。中学時代は殆どコート整備とボール拾いばかり。放課後練習でボールが打てるのは5分程度。夏休みでも午前・午後で各15分程度。ある日仲間が昼休みに少しでも早く練習すべくこっそり先に弁当を食った(私はボール拾い中)。これが先輩の高校部員に見つかり、弁当は取り上げられて放り投げられ、おまけにグラウンド20周のお仕置きを食らった。思い出すたびにこの根性ある仲間を誇らしく思う。

3. コソ錬

日曜日は部活動も休みのことが多かった。こういう時はここぞばかりに同期の松本鐵一の自宅にあるコートに集まり吉田泰忠、小林功、前川治一郎、河盛純造らとともに6人で朝から晩まで心行くまで練習した。この練習こそが我が同期を日本一の仲間育て上げた原点であると確信している。もう一つは毎朝のランニング。近くに住む大学生だった高石勝先輩、高校生の野々村俊雄先輩と中学生の私の3人で芦屋の山道を早朝走らされた。1年以上続いただろうか、嫌で嫌で仕方なかったが、今思うにこれが私の足を鍛え、バックハンドが下手だった私のテニスをフォアハンドに回り込むスタイルに変えることができたのだと思う。この早朝ランニングは、高石先輩が我が家の飼い犬に足を噛まれて以来途絶えたが、私一人の朝のランニングは習慣となった。



▲ 1958年8月 全国高等学校庭球選手権大会団体2連覇



▲ 1959年8月 全国高等学校庭球選手権大会表彰式
松本 鐵一(甲南高)単複優勝(右から4人目)、小林 功(甲南高)複優勝(右から5人目)
渡辺 康二(甲南高)単準優勝(右から3人目)



▲ 1959年8月 全国高等学校庭球選手権大会団体3連覇
前列左から 渡辺 康二、小林 功、松本 鐵一、前川 治一郎
後列左から 阪根 新、吉田 泰忠、鈴鹿 勇一、西尾 忠明、後藤 泰造、野々村 浩

4. 各ステージ全種目制覇

上記6人からなる我々の仲間は、全日本ボーイズ (U15)、全日本ジュニア (U18)、全国高校団体・個人戦単複、全日本大学王座、全日本学生選手権単複のいずれかにその名を刻んでいる。稀に見る偉業であり、生涯自慢できる仲間である。ただ、これは我々だけの手柄ではない。厳しい練習を強



▲ 1963年7月 全日本大学対抗テニス王座決定試合初優勝
左から 浅井 正順 (2年)、河盛 純造 (4年)、小林 功 (4年)、和田 邦平先生、渡辺 康二 (4年)、前川 治一郎 (4年)、野々村 浩 (3年)、西尾 忠明 (3年)、甲斐 建樹 (1年)

い、反発心をメンタルタフネスに変えさせてくれた諸先輩、特に2年上の藤井主将のお陰である。関西大学リーグでは10連勝中の関西に対し、正規のダブルスペアを崩す奇策3-0とリード、翌日3年生の野々村浩、2年生の浅井正順が勝って勝利の立役者に。4年生の小林、河盛、私は全員負けて面目丸つぶれだった。しかし全日本大学王座の慶応戦では奇策は講じず真っ向勝負。ダブルス2-1のあとNo.6の前川が7時間の激闘の末敗れたが、上位3人の渡辺、小林、河盛の4年生組が際どい勝負を制して初の王座を獲得。先輩、後輩一丸の勝利だった。

テニス部の思い出

大学 前川 (田中) 伶子

10回卒テニス部女子は3人でした。皆大学からラケットを初めて握りましたので活躍する事が出来ませんでした。私は関西女子学生新人戦で準優勝出来たのが精一杯の成績でした。因みに私の主人と息子がテニス部で2人とも全国大会出場を致しました。同期の男子は特に強く、全国王者に輝き、私達女子は専ら応援団でした。大学にコートが無く、学校を眺めながら通り過ぎ、住吉クラブに直行して練習に励み、真っ黒に日焼けし、たまにコートから歩いて授業に出る学生生活を送りました。体育祭ではテニス部として、男子は甲南女子がまだ本山にありまして、アンダースクールを略してU.S.のお嬢さんに借りセーラー服を、女子は男子学生服を着てフレンチカンカンを踊ったのを楽しく思い出されます。残念ながら80を超えますと、半数の方達が天国へ旅立ち、寂しくなりました。今は世間ではサッカーが盛んの様ですが、昔の様にテニスが人気のスポーツとなります事、100年も続いておりますテニス部が益々発展致します事を願っております。



▲ 11回大学卒業アルバムより

甲南学園硬式庭球部
 KONAN TENNIS TEAM
 since 1923

11回

高校 1961 (S36) 年卒

後藤 泰三 鈴鹿 勇一 中島 徳七 西尾 忠朋 野々村 浩

大学 1965 (S40) 年卒

男子 阿曾 勝弘 後藤 泰三 笹倉 祥男 鈴鹿 勇一 田村 浩章 梶田 忠英 中島 徳七 西尾 忠朋 野々村 浩
 松村 正純 森 弘成

女子 植杉(藤野) 修子 岡田(米沢) 吟子 小山田(沢田) 幸枝 加賀(村上) 登美子 木村 洋子 河野(中島) 仁子
 西川(草川) 恭子 古池(加藤) 洋子 森田(津村) 久子

松岡功先輩とご子息の松岡修造氏

高校・大学 後藤 泰三

私は大学11回卒で、中高大と10年間硬式庭球部で青春時代を過し、たくさんの思い出があります。今回は誰も知らない3回卒の松岡功先輩とご子息の松岡修造氏のエピソードを書かせて頂きます。

松岡先輩は中高大でトッププレイヤーとして活躍され、高校大学では硬式庭球部のキャプテンを務められました。私は松岡先輩の8代後のキャプテンをさせて頂きましたが、甲南庭球部の黄金時代に庭球部で過ごせた事はありがたいことでした。

松岡先輩は全日本で優勝され、デビスカップ選手として日本のテニス界を牽引された方です。卒業後は「東宝」に入社され、すぐに米国に赴任されて、ハリウッド映画の有名作品を日本へ持ち込み東宝の基礎を築かれました。在学中もご卒業後も庭球部の発展にご尽力され、その後の有名選手も松岡先輩を見て育ったのです。

さて、松岡先輩のご子息の松岡修造氏のエピソードは、三重県にある「もりえい病院」の森理事長から伺った話です。私は森理事長と30年以上前からの知り合いで、森氏は30年以上前にフランスに医師として駐在されていました。

ある日パリの空港事務所から「あなたは日本人の医者ですよね。今、空港に日本人が到着したが、衰弱して動けなくなっているの



▲ 11回高校卒業アルバムより

すぐに来て欲しい」と連絡がきたのですぐに空港に行くと、日焼けした背の高い日本人がベッドに横たわっていた。すぐに森医師のパリの自宅へ連れて帰り、点滴注射をして食事を与えると、若いだけあって一週間で回復した。「これからどこへ行くのか」と聞いたら、「次の国のテニストーナメントに行く」と言った。「お金は持っているのか」と聞いたら「持っていない」と言った。「それなら必要なお金を持って行きなさい」と言って空港へ送り出発させた。

数年後、森医師は日本に戻り、ある日新聞を見て、松岡修造氏がウインブルドンでベスト8に入ったと大きく報道されているのを見て、空港で助けた人がこんなに立派になったのかと感動したそうです。当時は無名でランキングもない人だから当然です。

修造氏は一流のテニスプレイヤーになって日本に戻った際、日本でのテニス大会のチケットを2枚、「パリのお母さんへ」と森理事長の奥様に送ってくるという義理堅い方だと奥様がおっしゃっておられました。松岡先輩の修造氏への教育がハングリー精神を育て、今の修造氏があると思います。

甲南の庭球部は先輩後輩の絆が強く、この伝統を我々も次世代へ繋いで行きたいと思います。



▲ 11回大学卒業アルバムより

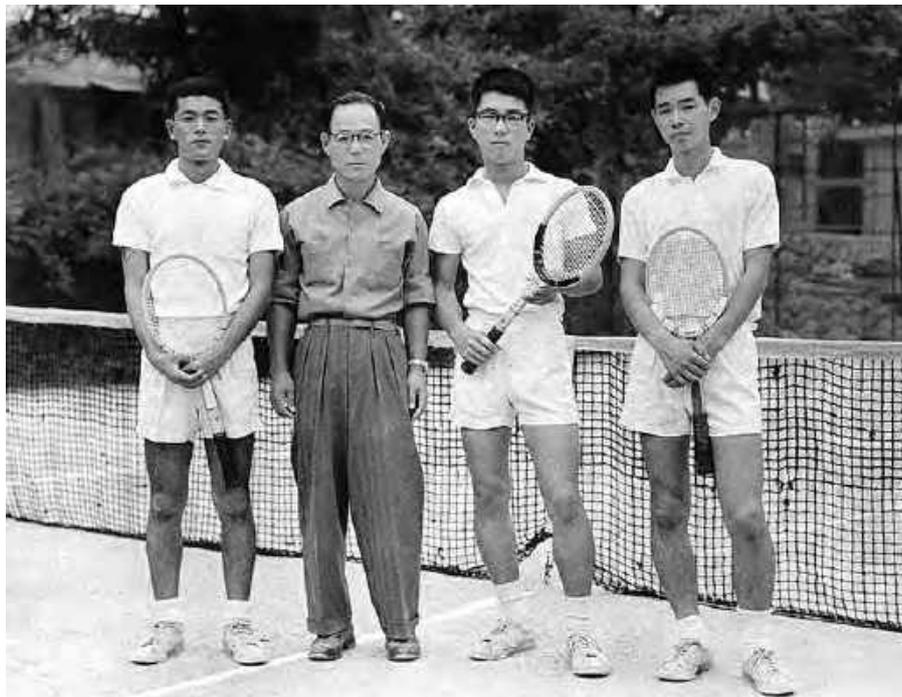
高校 1962(S37)年卒

浅井 正順 平野 洋治 真鍋 千之

大学 1966(S41)年卒

男子 浅井 正順 神社 徳彦 津山 隆三 平野 洋治

女子 穎川(重満) 邦子 木戸(斎藤) ゆたか 木村(田崎) 恵子 田中(野杵) 浄子 高木(羽根) 民枝



▲ 12回高校卒業アルバムより

テニス部の10年間

高校・大学 浅井 正順

甲南学園テニス部100周年おめでとうございます。

私は甲南中学(昭和31年)に入学してテニス部に入り、初めてラケットを握りました。スポーツは元々大好きですが、なぜテニスを始めたのか今でも不思議です。

中学1年生の時はボール拾いばかりでボールを打った記憶はあまりありません。練習が厳しかったので20人位入部しましたが、すぐ退部される方が多かった様に思います。それでも先輩方々に教えて頂き、必死で練習したと思います。3年生になると関西の大会、全国の大会に出場して負けて悔しい思いをした事が記憶に残っています。高校1年生のときは3年生の先輩に渡辺さん、松本さん等、全国トップレベルの方々がおられ、甲南高校の黄金時代でした。その方々と一緒に練習させて頂き、必死でそのレベルに近づこうとしました。そして2年生のときにはインターハイでシングルス優勝することが出来ました。先輩たちに厳しく教えて頂いたおかげです。少しテ

ニスに目標自信が付きました。

3年生の時にはジュニアの日本代表として、カナダ、アメリカ等のジュニアの世界的な試合に出場し、海外遠征が初めてなのでびっくりする事が多く、良い体験になりました。もっと強くなりたいと思いが甲南大学テニス部に入部してより以上思いました。大学のテニス部も全国レベルでもトップでした。皆、目標は個人・団体の日本一を目指しており、今では考えられない位、厳しい練習でした。その厳しい中、部員の結束が生まれ、私が2年生の時、甲南テニス部として初めて大学日本一になりました。あの時の喜びは今でも覚えております。

3年4年生の時にはトップレベルの試合で色々の方々とプレーをしました。特に3年生の冬、日本の代表チームの一員として、先輩の石黒さん(故人)、渡辺さん(2年先輩)等と一緒に

2カ月位オーストラリア遠征して、4大会の一つオーストラリア選手権にも出場し、世界のトップレベルの選手と試合をしたのも私の大きな財産の一つです。当時はオーストラリアが世界で一番強い国でした。又日本代表でもお金の余裕がなく、安いホテルで一室で2人又は3人同室で泊まっていた。私が一番若かったので2カ月位先輩の石黒さんと同室であったので、いろいろ教えて頂く事が多く、大変勉強になり、又テニスも厳しく教えて頂き、良い思い出です。世界のトッププレーヤーを目の前で見て力の差が歴然としている事が分かりました。

卒業後はテニスから身を引き、社会人として80才近くまで苦しい時も歩んでこれたのは、10年間のテニス部で心身共に鍛えられたおかげです。

甲南テニス部100周年の内、10年間過ごせたのは私の大変な誇りです。感謝しかありません。テニス部が日本のトップレベルに又なる事を夢見て、終わらせて頂きます。

ありがとうございました。

テニス部の思い出

高校・大学 平野 洋治

私とテニス部は、父親がテニスをしており、自宅にテニスコートがあった事で小学校3年位から父親と一緒にテニスをしていました。

今回創部100周年記念誌に寄稿させて頂く事をうれしく思います。

何分60年位前の事なので確かな記憶はありませんが、思いつくまま書かせて頂きます。

私と浅井君とは中学入学と同時にテニス部に入り、中学高校大学と10年間の部活でした。中学での部活はコートの整備、ボール拾いがほとんどで、球を打つ時間はわずか、それでもあつという間の6年が過ぎ、大学の部活に入りました。これ又1年というのは

合宿の時など特に大変で苦労しました。早く4年になりたいとばかり思っていました。当時の3年4年の先輩は名選手ばかりでした。私は3年の時念願の全日本に出場しましたが、なんと1回戦が故小林先輩。結果は明らかに完敗でした。しかし翌年、津山君とのペアで韓国のペアに勝ち、2回戦まで行きました。又4年の時、宿敵関学に勝ち、又慶応にも勝った事が一番の思い出です。

先輩方に竹園で祝勝会を催して頂き、散々飲んだあげく、三ノ宮で二次会。私はどうして家まで帰ったのか覚えていません。

私は卒業と同時にテニスを止めた為、体重が10kg位増え、何か運動と我流でゴルフを始め、現在に至っております。今も浅井君とも時々ゴルフを楽しんでいます。今後は健康に留意し、90才ぐらいまでゴルフの出来る体を維持したいと思っております。



▲ 12回大学卒業アルバムより

高校 1963(S38)年卒

稲鍵 尚吾 甲斐 建樹 片山 勉 眞野 邦彦 西尾 博文

大学 1967(S42)年卒

男子 今来 栄治 小山田 徹 甲斐 建樹 片山 勉 下ノ村 和男 高木 祐 田中 清文 鶴岡 吉信 西尾 博文
平山 勇 松本 道治 眞野 邦彦 山本 明弘

女子 内田 加美 久保田(中村) 民子 合田(荒井) 則子 外村(島田) 和貴子

甲南でのテニスとの出会いと思い出

高校・大学 甲斐 建樹

テニス部に入部したのは昭和32年、ソビエトが初の人工衛星スプートニクを打ち上げた年であった。球拾いをしながら暗くなった秋空を見上げて人工衛星を探したのを覚えている。

運動能力劣等生の私だったが、クラスメイトの稲鍵君と眞野君に付いて行って入部申し込みをしたような記憶がある。曖昧な入部動機ゆえ、練習は休みがち、キャプテンの静敬太郎さんに「明日から練習に出て来んでエエ」と度々言われた。

それでも知らん顔して練習に行ったが、皆と同じだけ打つ時間が与えられた。静先輩の温情がなかったら、私のテニス人生は終わっていたと思う。

もう一人、忘れてはならないのが3学年上の吉田泰忠先輩。当時灘校との対抗戦は、実戦経験のない我々が出場できるかどうかは重要な問題であったのに、熱心でない私を推して下さったのは吉田先輩だったそうだ(同級の眞野君が先輩の会議を盗み聞きして教えてくれた)。その灘校戦、完全な負け試合を「絶対に諦めない精神」で叱咤激励されて勝利を得ることができて、勝負の厳しさを体験させてもらった。

もう一つ、吉田先輩の大きな一言。中学2年の我々を集めて「この中で日本一になりたいヤツおるか!」様子見していたら誰かが手をあげて、つられてパラパラと手が挙がり始めて、私は最後から3番目くらい。吉田先輩「なるべし!但しこの中で一人だけ、甲南で1番になったら高校で1番になれる。それには、まずこの中で1番になること。」



▲ 13回大学卒業アルバムより

名門甲南は、松岡さん石黒さんはじめ(失礼ながら以下多数おられるので省略させていただく)一年置きに高校日本一に輝いておられたのだ。

同学年を見渡したところ「このなかやったら1番になれんことないな」というのがその時の感想。ここからテニスのエンジンが掛かりだした。

いっぱい球を打っていっぱい走って学年ナンバー1にはなったけど、他の学校にも強いのがいっぱいいて、そう簡単にいかないのがこの世界。関西のライバルとは春に勝って夏は負け、もしインターハイで対戦すると私が勝つ順番になる。順調に勝ち進んだ兵庫県勢2人は決勝に進出、1勝1敗の県大会の決着をつけることになった。で、めでたく順番通りに勝つことが出来た。(オホン)偉業を達成したというより、ライバルを倒して名門甲南の伝統を守れたという印象。

先輩の言葉と練習量とランニングの距離だけは誰にも負けなかったことが大きな自信であった。

大学に進んでからは特筆すべき戦績はないので、ここはいい思い出だけ。あの時の吉田先輩の言葉が高校日本一でなく「真の日本一」だったら、何かが変わっていたかも(ないと思う)。

長々と自慢話を書かせてもらったが、後輩に伝えたいことといえば、諦めずに目標をもって進んだ努力は、素質を上回ることがあること。改めて先輩・仲間・ライバルたちに感謝しなければならない。



▲ 13回高校卒業アルバムより

甲南学園硬式庭球部
KONAN TENNIS TEAM
since 1923

14回

高校 1964(S39)年卒

伊藤 久雄 澤田 隆 高垣 俊輔 木村 肇 京谷 光雄 西村 邦彦 山根 義治

大学 1968(S43)年卒

男子 市川 良三 圓崎 勝 木村 肇 京谷 光雄 西村 邦彦 村上 剛 柳田 等 山中 達夫
山根 義治 山本 敏雄

女子 下ノ村(斎藤) 道子 田中 千鶴子 西川(福原) 佳陽子



▲ 14回高校卒業アルバムより

「お手本の様な華麗なフォアハンドの伊藤君」「練習の虫 故木村君」「サービスとネットプレーが得意な京谷君」「レフティー特有の曲玉が取り柄の小生」「ネット際の魔術師高垣君」「部のご意見番西村君」「そして力強いリーダーシップで部を引っ張ったキャプテン山根君」こんなメンバーで挑んだインターハイ団体戦、準決勝で強敵法政二高に敗れた。あまり悔しさも残らない程の力の差を感じた。試合を終え東京駅からの帰路、US(甲南女子高)の部員と同じ夜行列車で遭遇(?)した。お互いに試合を終えた解放感もあり話は弾み、気持ちが少し和んだ。東海道新幹線開通の前年昭和38年夏、ほろ苦くも懐かしい青春の想い出である。

高校卒業後は大学テニス部に進む者、他の道に進む者に別れ、私は後者の道を選んだ。

以降テニスには私にとって主食(職)から副食(職)へ変わったが、テニスを通じて多くの友を得た。妻や子供達とダブルスを楽しむ時代もあった。今はテニススクールに通う孫の動画を見ながらの晩酌も格別である。テニスは私に「大切な仲間」という宝物を残してくれた。

甲南テニス部100周年に乾杯

高校 澤田 隆

中学入学当時、高校生2人の姉がテニスをしてたこともあり、私も自然に入学していた。当時の新入生の仕事は練習前のコート整備、練習中の球拾い、練習後のランニング、ラケットを持てば素振り。大勢いた同級生部員も1年後には半分位になっていた。

そんな時テニスを続けることが出来たのは2つの要因があった。第一は先輩方の強さを目の当たりにした事であった。中2の夏、応援要員として通った大阪中百舌鳥コートでのインターハイでの完全制覇、我々も頑張ればという気持ちになったのも自然な事であった。

第二は同級生の乾民治君、故小林豊君の存在である。当時両君の家には立派なテニスコートがあり、週末には思う存分練習し、楽しさを体感する事が出来た。

中3夏の関西ボーイズ(15歳以下)、手強い相手との対戦が続き、炎天下フルセットの3試合目、とうとう全身に痙攣を起こした。先輩、後輩の応援とサポートのお陰で、意識朦朧の中、何とか日没まで持ちこたえる事が出来た。私にとっては人生初めての苦しい経験であったが、「あの頃からお前も少し我慢強くなった」とは両親の後日談である。

高校生になると対外試合も増え、テニス漬の毎日、同級生部員は

テニス部の思い出

高校・大学 京谷 光雄

私は中学、高校、大学、テニス一筋です。

テニス部は全員一丸となって、目標達成すべく、基礎練習、厳しいトレーニングに明け暮れる毎日でした。

同期のメンバーは中学7人、高校7人、大学男9人、女3人、計12人の精鋭揃いの、楽しい仲間です。

戦績は色々ありましたが、大学4年の団体戦で関西リーグ戦優勝、王座対抗戦準優勝という結果でした。

我々は勝ち負けより、持てる力を如何に発揮しきれたかを自分に問い続けました。

練習環境は、中学、岡本コート、高校、学校移転の為に芦屋コート、大学、岡本コートと恵まれた環境でした。

トレーニングは保久良神社の階段、石屋川経由十二間道路とマラソンコースには事欠かない。

連帯責任による“丸坊主騒動”もありましたが、同期一丸となって解決した懐かしい思い出でした。

テニスは上達するのに時間がかかりすぎる、もっと科学的な知見

を取り入れて、効率的な練習方法を編み出す時期ですね。例えば、ゴルフのライザップゴルフ（名古屋）のように。

最後に甲南テニス部の皆様に一言

素晴らしい環境の中でテニスができる幸せを噛み締めて“甲南テニスの真髄”を存分に発揮してください、期待しています。

<今はゴルフ一筋>



▲ 14回大学卒業アルバムより

甲南学園硬式庭球部
KONAN TENNIS TEAM
since 1923

15回

高校 1965(S40)年卒

春日 徹 増成 治保 森 博

大学 1969(S44)年卒

男子 上崎 和之 春日 徹 前田 憲雄 増成 治保

女子 菊地(神谷) 晴子 多木(津村) 弓子 中島(山本) 多恵子



▲ 15回高校卒業アルバムより



▲ 15回大学卒業アルバムより

高校 1966(S41)年卒

池浦 隆一 神澤 雄次郎 柴山 隆彦 藤原 英一 古川 博康 政岡 基重 眞野 和彦 山岡 靖幸

大学 1970(S45)年卒

男子 浅野 勝彦 今井 憲雄 宇野 怜二 岡部 彰雄 神澤 雄次郎 菊池 春海 木本 結一郎 柴山 隆彦
滝澤 謙介 辻本 隆 西井 弘樹 藤井 一義 眞野 和彦

女子 井上(田原)みどり 鈴木 美代

日系コロニアとのテニスの繋がり

大学 木本 結一郎

はじめに：

改めて甲南学園硬式庭球部の創部100周年を、心からお祝い申し上げます。

100周年記念に、一筆書くようにとのお話があり、何を書けばよいのかさぶる悩みましたが、私がブラジル移住後に見た日本とブラジル間、特に日系コロニアとのテニスの繋がりについて、少し書かせて頂ければと考えペンをとりました。

早いもので私がブラジルに移住をして50年が経ってしまいました。1973年5月に、まだ地方空港のような粗末な平屋建ての羽田空港から、多くのテニス部関係の皆さんに見送られて、ロス〜リマ〜リオ経由でサンパウロに向かいました。

サンパウロのコンゴニア空港への到着は昼前だったのですが、入国すると在聖(サンパウロ在住という意味)のテニス愛好者の皆さんが十数人出迎えて下さっていました。そしてそのまま、後に私をブラジルでの父親のように面倒を見てくださった山県富士男さん(慶大卒・インカレダブルス優勝=パートナーは鶴田安雄さん)のテニスコート付の別荘に約一時間かけて向かい、終日プレーをするところから私のブラジルでの人生が始まりました。

その後、山県さんのお宅で2か月ほどお世話になったのち、近くのドイツ移民の下宿に移り約5年間をそこで過ごしました。スタート時はポルトガル語は全く分からず途方に暮れたことを記憶しています。そんな中でも、テニスは私にとって常に力強い味方であり、どこに行ってもすぐに友達が出来、おかげでひどいホームシックにかかることもなく、苦しい時期を何とか乗り切ることが出来ました。

その間には、日本人テニスプレーヤーであるという珍しさもあって、それなりの試合に出させてもらうことが出来ました。特に1974年にはグランプリがリオで開催され、私も出場することになり、当時世界のベスト10に入っていたユーゴスラビアのフラノロビッチ選手と試合を出来たり、サントス国際選手権でマルセロ・グラッシというブラジル人のダブルスの名手と組ませてもらい、アルゼンチンのトップ10の選手のペアに勝って優勝したりすることが出来ました。

そこで驚いたのは、日本ではまだアマチュアとプロの境目がはっきりとあり、プロとして賞金等を獲得するには“記者会見をしてプロに転向することを発表する・・・”という手順を踏まねばなりませんでしたが、ブラジルではテニスに関係した人であれば、自分で「私はプロだ!」と宣言するだけでプロとして取り扱われ、プレイヤーだけでは無く、レッスンプロやヒッティングパートナーも同様に考えられてい

ました。私も試合に負けて帰ろうとすると、“君は・・・回戦で負けたので、賞金は・・・クルゼイロだ。については入金する銀行口座を教えてください・・・”と言われ、テニスを通じて所得を得ることなど思いつかない世代の者として、大いに驚いたことが昨日のように思い出されます。

1974年には日本のプレイヤーとしては初めてプロになった神和住純さんが、WPTのサーキット出場の為来伯され、久しぶりに会うことが出来ました。

アーサー・アッシュ選手との試合が終わったあと、私の友人のアパートの一室で、すき焼きの鍋を囲みつつ、彼の日本初のプロ選手としての苦労話を聞きながら、テニス談義に花を咲かせたことは、私の人生にとって最も良い思い出の一つになっています。

その後、サンパウロ州テニス協会から、オレンジボウルの向こうを張って、バナナボウルという名の国際ジュニアトーナメントを開催したい。については第一回大会としてサンパウロ州テニス協会と日系コロニアが、旅費・経費を半分ずつ負担することで日本のジュニア選手二人を招待できないか、との申し出があり、日系コロニアの皆さんに図ったところ、あっという間に寄付が集まり、第一回のバナナボウルに米沢徹さん(のちにデ杯選手)と、中西伊知郎さん(甲南高・大OB)が来伯されました。

その際、バナナボウルの前哨戦がクルービ・パウリストアーノというテニスクラブで行われたのですが、その第一回戦の第一ゲームで米沢選手が不慣れなナイターでの試合だったこともあり、4本連続でダブルフォルトをしてゲームを失ったシーンは、今だに忘れることが出来ません。

ですが、そのような経緯から、その後の日本で開催されるJALカップに参加するブラジルのジュニア選手には、日本への旅費・滞在費をご負担いただく等、日本テニス協会から特別な条件を頂いたことも付記させて頂きます。

そうした内に、私たちの6年先輩(昭和39年卒業)で慶応大卒テニス部主将であった杉野禾吉さん(カキチ・故人)が来伯され、日系コロニアの中でも氏を中心に、ブラジルのジュニアを育成しようとの気運が生まれ、私たちもお手伝いすることになりました。

杉野さんはサンタクルース・ド・スールというブラジル南部の町に生まれ、ブラジルのジュニア選手の育成に尽力され、のちにATP 20位内に入るニエジ・ジラス(女子)選手、ATP100以内に入ったセーザル・キスト(男子・その後本村剛選手のコーチに就任)選手やジロー榊原(ブラジル18歳以下優勝)選手等を育てられました。

その後、ブラジルで開催されたバナナボウルやフェドカップまたA

TPの各種トーナメントには井上悦子・岡川恵美子・岡本久美子・雉子牟田明子・柳昌子・松岡修造・鈴木貴男・石井弥起さんらが来伯し好成績を残され、反対にブラジルからは杉野門下生である古庄大二郎(全日本S準優勝・D優勝)・クラウディオ鈴木(亜細亜大・関東学生S3連覇)・ジャイメ比嘉(元日大テニス部監督)さんを始めとする、多くの日系ブラジル人プレーヤーが来日し、長きにわたって活躍されています。

最後に、このようなコラムを書く機会を頂く事をもって、私の人生を振り返る時、どんな場面においても、テニスを通じて学んだ事や人間関係を基礎に、その都度素晴らしい機会と繋がりに恵まれたことに驚きつつ、それに対し心から感謝をせずにいられません。

今、甲南学園庭球部で活躍中の皆さんが、そのテニスが秘めている力を最大限に生かされ、日本国内のみならず世界中で多くの経験と人脈を育み、より豊かな人生を送られるよう強く願っています。

現在、私共が日本で仕事をする会社には、20か国語を話す17か国籍の若いスタッフが働いて下さっています。今後、日本が世界の中で、これまで以上に信頼され、確かな地位を築き続けるためには、テニスを通して成長する現役の皆さん方の、若く圧倒的なエネルギーと智慧が必要です。甲南学園硬式庭球部での経験を生かされ、世界に羽ばたく機会を積極的に掴んで頂きたいです。

最後に、甲南学園硬式庭球部関係者の皆様方の益々のご活躍と、迎える次の100年のご発展を心からお祈り申し上げます。

365日テニス漬けの日々

大学 辻本 隆

1970年(昭和45年)卒業の辻本です。

「何歳からテニスをはじめたのですか?」と聞かれたら、私自身答えられないくらい小さな歳から始めました。父の楽しみは毎日曜日に親戚や会社仲間とやるテニス。そんな訳で父親と一緒にテニスコートに行くとき親戚の子供達も来ていて、テニスコート横の原っぱでよくチャンバラごっこをしたものでした。そして、チャンバラの刀がテニスのラケットに代わって行くのは自然な流れでした。そんな訳で、大人のラケットが重く、高校卒業までエクアドルのプロ選手パンチョセグラと同じフォア、バック、ボレー全て両手打ちのテニススタイルでした。

甲南高校に入学し早速テニス部に入ったものの、わずか2面のコートで100名くらいの部員がおり、一日5分~10分くらいの練習に嫌気がさし、早々に退部。一緒に辞めた浅野君等と甲子園テニスクラブで高校卒業までテニスをしていました。

ここから我々の時代の甲南大学テニス部をご紹介します。

1966年(昭和41年)我々が1年生として入部した時の陣容は4年生は主将の甲斐先輩他、3年生は京谷先輩他、2年生は春日先輩他でした。我学年の特徴は10数名強(男子のみ)と結構な人数が入部しましたが、甲南中高のテニス部から入部したのは僅か3名

(上位選手が入部せず)で、大半が部外者(クラブテニス、他高校テニス部、初心者)の構成だったため、良くも悪くも甲南テニス部の伝統、文化や習慣を引継いでいませんでした。従って、上級生やOBの皆さんにとってはとても扱いにくい学年であったかもしれません。

一番思い出に残る試合は2年生の時の関西大学リーグ戦での常勝関学との一戦です。この時代は関学が圧倒的に強く、甲南は常に2位だった。関学は出場選手全員 All Japan出場経験者(控えの選手にも All Japan出場経験者が居た)で揃えていたが、かたや甲南は All Japan出場経験者2名と後はインカレ出場、関西学生経験者他だった。

初戦のダブルスNo.3で、私と木本君が組んだダブルスは4年生の今井/高屋組相手に5セットのファイナルまで纏れ、お互いサービスキープで8-8、そして10-8で勝ってから流れが一気に甲南に傾き、初日ダブルスは2勝1敗のリードで終えた。そして次の日のシングルスも各試合で勝ち負けが拮抗、4勝4敗で私のシングルスNo.4の試合(相手は3年生の細井選手)に大学の勝敗がかかった。細井選手は高校インターハイで優勝した?経験の持ち主相手にこれもファイナル逆転で関学を破った!相手の関学は想定外の敗戦で返還の優勝カップすら持って来ていなかったし、また我々は急遽祝勝会の為に芦屋の竹園を予約すると言う慌て様だった。この後の全国リーグ決勝では古林、栗岡、中島を擁する慶応大学と戦ったが残念ながら敗れました。

大学の4年間は365日テニス漬けの日々でしたが、私の人生での思い出の中で大きなスペースを占める出来事であったと思います。



▲ 16回高校卒業アルバムより



▲ 16回大学卒業アルバムより

高校 1967(S42)年卒

市山 隆一 魚野 秀雄 川口 正敏 須浪 国夫 瀧原 順 近澤 眞 森田 修次 西尾 佳三 野崎 兼司 廣瀬 知正

大学 1971(S46)年卒

男子 西尾 佳三 西村 啓二 廣瀬 知正

女子 【女子】田尾(鈴木)貴子 本田(立川)夏子 吉田(河野)光世子



▲ 17回高校卒業アルバムより

テニス部の10年間

高校・大学 廣瀬 知正

私は昭和36年(1961年)に甲南中学に入学し、父親がテニスをしていた事もあり直ぐにテニス部に入部し、中高大と10年間硬式テニス部にお世話になりました。

当時は約60数年前の事であり記憶が曖昧になっており間違っただ事を話す事があるかもしれないがご許し願いたい。

中学入学当時は中学高校とも岡本の大学の構内にあった(私の高校時代に芦屋の朝日ヶ丘に移転)。テニスコートはクレーで中学校舎の直ぐ北側に2面あり中高共にそこで練習していた。

上級生から順にコートに入る為に平日授業がある時、中学1年は打つ時間は1~2分程度である。

現在では想像もつかないと思うが、クレーコートのライン引きは毎日昼休みに石灰を水に溶かしてライン引き器の口に松葉を刷毛の様にしてロープを張り引いていた。慣れれば上手く引けるものである。又コートの北側に銀杏の木が2本あり、秋口には落ち葉が落ち、コート整備に時間を費やした。

練習は厳しくコート整備も煩くボール拾い練習後のランニングもハードであり、上下関係も又厳しく、練習のない雨の日は教室で説教を食らったものであった。

入学時は30名程が入部したが約1ヶ月で10名程になってしまった。

中学3年時に練習中にラインに乗り、石灰が乾いていなく足を滑らして、手から落ちて手を骨折した事もあった。

大学に入るとより厳しい練習が待っており、授業は語学と出席をとる科目しか受けられできなかったと記憶している。今から考えればみなよく卒業できたものだと思っている。

私は何とか10年間続けられたが、苦しい思いの方が多く、楽しい思いは少ない。

ただ社会人になり下積み生活を体験したことで耐えることを学んでいた為に50年間程のサラリーマン生活を無事に続け

られたと思っており、10年間の甲南テニス部に感謝している。

現在は地元のテニススクールの生徒としてテニスを楽しんでいたが、昨年の4月に心臓の異常で入院手術をしたが、薬のおかげで大分回復してきている。

ドクターの薦めもあり、どの程度運動ができるか心肺運動負荷試験を受けてみたが、テニスプレーは厳しい状況である。ドクターからは長生きを取るかテニスを取るかあなたが決めることと言われ、勿論テニスを取ると返事している。

今年の秋よりJOPベテランに復帰し試合にエントリーしている。なかなか勝利に結ばれないが、諦めないで頑張っているところである。

最後はテニス仲間と楽しい思いと笑顔でテニスを終えたいと思っている。

青春時代4年間

大学 西村 啓二

この度は、甲南学園硬式庭球部100周年を迎えられたこと、心よりお慶び申し上げます。それにあたり、今回寄稿文を依頼され、お恥づかしい青春時代4年間の思い出話をさせていただきます。

私と甲南学園硬式庭球部との関わりは、私の母校大阪府立高校の先輩柳田さんと通学時、阪急岡本駅近くの車内で出会い、鶴の一声「明日から兼松江商のテニスコートに來い」と誘われたのが運の尽き。

その年の新入部員と言えば、甲南高校からの廣瀬知正君とマネージャーの西尾佳三君の2名と私のみの布陣でした。

週末の練習は皆、大学のコートに移動して行われるのですが、私ひとり、平日コートをお借りしていた兼松江商さんの為のコート整備としてとり残されることが多く、管理人さんから風呂炊きまで命じられたりして、私のような新入部員だけではおぼつかなく、優しい上級生の協力のもと、なんとか運営していました。

コート整備においては、特にコートセンターに置かれていたドラム缶からバケツでの霧状の水まきは、とてもうまくできました。

そんな中、ボール拾いの途中、河盛純造さんからワンポイントレッスンをしていただき、「君の足運びは、とてもいいよ」と褒めていただいたこと、未だに鮮明に覚えています。

肝心の大学4年間の勝率は、さっぱりでした。しかし乍ら、心に残る試合として4年生の時に学習院大学との定期戦で、エキジビジョンマッチであるが、マネージャーの西尾佳三君と組んでインカレペアに勝利したことが思い起こされます。

ややもすると、不完全燃焼のまま卒業してしまったわけですが、あの名だたる甲南大学硬式庭球部に在籍し、その場の空気をみんなと一緒に嗅いでいたという誇りは今も持ち続けています。

齢70歳を過ぎたころ、今一度体を鍛えて何かしたいと思ったとき、やはりテニスに行きつきました。

もう一度完全燃焼すべく、テニススクールに通い、今は体もスリムになり元気に後期高齢者の仲間入りをしている次第です。

伝統ある甲南学園硬式庭球部のご活躍をお祈り申し上げます。

甲南学園テニス部100周年に寄せて

大学 本田(立川)夏子

昭和46年卒の女子は42年入学時には8名だったのが、入部当時嘱望されていた人たちが次々と退部し、3年生になった頃にはテニス歴の浅い私と鈴木貴子さんとマネージャーの河野光世子さんの3名になっていました。輝かしい伝統の甲南テニス部の先輩方の努力の賜物である関西学生女子一部リーグを維持することが私達に課せられた最大の責務でした。その年の一部二部入れ替え戦には沢松順子・和子姉妹のいる神戸松陰女子大学が確実に上がってくるので、どうしても一部3位までには入らなければなりません。1年先輩の田原さん鈴木美代さんにご指導いただき、男子からは今井さん滝沢さん真野さんに続き、宇野さんをコーチに迎え戦力強化に努めました。先輩方のご支援のおかげで何とか一部リーグに残留することが出来ました。甲南のテニス部という重圧は思いの外あり、リ



▲ 17回大学卒業アルバムより

グ戦は辛く苦しく、卒業してからはテニスから遠ざかるほどでした。ただその時の経験“何事も最後の最後まであきらめない”精神がその後の人生にはとても役立ちました。

入学当時は今の図書館のある所にクレーテニスコートが2面あり、その前に藤棚がありのどかな雰囲気でしたが、クレーのテニスコートは手入れが大変で、ラインは石灰を溶かしてジョーロのくちに落ちてくる松葉を詰めて毎回引いていましたので、綺麗に引くのが難しく、練習前は時間との勝負で、夏はバケツでの水まきもうまくなりました。1回生の宿舎は戦々恐々で、その前にはご飯を早く食べるのと風呂に早く入る練習をしました。それも今では懐かしい思い出です。しんどいことが多かったですが、対外試合などで京都大阪神戸などの大学に行くのは楽しみで、先輩からご当地名物やおいしいケーキやデザートを紹介してもらい思いっきり食べました。試合で高校の同級生に合うと甲南のテニス部ということで羨望の目で見られたこともあり、1回生の頃の土曜日は男子が大学のコートを使うので、2年先輩の津村さんやマネージャーの山本さんが練習コートを探すのが大変で、兼松江商さんや日本板硝子さんのコートを借り歩きました。その後、住吉川近くにアンツーカーのコートが3面出来ました。

甲南のテニス部は男女練習も別であり交流はありませんでしたが、1年先輩の男子は人数も多くテニスも強く、大阪組(宇野さん辻本さん西井さん)先輩は特に活動的で打ち上げコンパなど男女合同で開催するようになり、卒業後も宇野さんたちの音頭でOB会を先輩や後輩のお店で開き旧交を温めています。私は甲南の同窓会事務局のお手伝いをしていましたので、様々な先輩後輩にお目にかかる機会がありましたが、甲南は旧制高等学校の創立当初から文武両道を目指してきた学校なので、全国各地でそれぞれの分野でご活躍のOBに接する毎に甲南の卒業生であることに誇りを感じます。入学時には思いもよらなかった、甲南は卒業してから値打ちのある学校だなと感じる昨今です。

高校 1968(S43)年卒

有馬 市郎 犬飼 美秋 岡橋 輝和 久保 博司 佐渡島 周平 柴田 音吉 辻本 豊 廣瀬 恭久
望月 健二郎 山崎 純

大学 1972(S47)年卒

男子 柴田 音吉 辻本 豊 津田 淑雄 畑尾 道廣 山崎 純
女子 岩(中倉)由美子 長尾(西羅)愛子 西山(佐野)由紀枝



▲ 甲南新聞1969年6月15日

新入部員がドット増えてテニスコートをぐるりと囲むように入部してきました。

残念ながら当時の受け入れ環境が不十分で、多くの方が退部されました。ただ、今年70才を超えて、仕事の関係で小池亘さんのご息子とも巡り合え、ご縁ができた。芦屋松浜クラブでは浅野先輩の指導を今も受けており、甲南学園硬式庭球部の100年のうち50年の歴史を感じさせていただいております。

いまは望月健二郎が神戸市テニス協会の役員をされ、年に数回神戸クラブのレンタルコートで一度テニス部の門をたたいた同期が

甲南テニス部との絆

高校 佐渡島 周平

昭和37年、中学校の校舎が岡本にある時に入学、父も少しテニスをしていたので、親子で、一生共に続けることができるスポーツとの思いで入部しました。楠や松の繁るテニスコートでボール拾いと、松葉で石灰のラインを引き、ブラシ掛けで終わるコート整備の日々を過ごしていました。練習は夕暮れ時にボールもよく見えない中で5分ほどの練習が日課だったように記憶しています。

次の年から芦屋に移転した中高の校舎には、テニスコートがなく、会社の寮のテニスコートを借り練習する日々で、いつも自宅大阪から、学校、テニスコートと旅行バックにボールを詰めて、脇に教科書を入れて通学する日々が続きました。その中でも雨の日には岡本の校舎から石屋川まで往復を走ることが多く、岡橋家の前を通ることもたびたびでした。これが今の体力維持につながっていると思っています。当時は小柄ながっしりした山岡先輩がハイペースで走っておられたような記憶があります。

当時偶然でしたが、NHKラジオで全国高校のテニスの決勝の放送があり、森主将、春日、増成先輩たちの優勝の瞬間を聞くことができ、その時の感激はいまでも忘れられません。その次の年から、

集まり、真っ黒な犬飼、有馬、山崎、辻本、穂村、鹿島、久保、北川、浜田、樽谷らが集まり、力量に関係なく楽しく、今も『テニス上手』になろうと頑張る姿は入部のときの思いが正しかったことを証してくれました。

一番の思い出は、昭和39年6月の中学校三年生の灘甲戦のシングルスでした。中学校の勝ち負けを左右する試合で最後まで粘って勝った一戦です。ミスをしないう粘りのテニスで勝ち抜いたことが、守りのテニススタイルを一生のスタイルとし、経営者としても、サステイナブルな経営をしているところがここに根源があるようです。

蛇足で、私事ですが、義父鈴木恒弥も旧制甲南でテニスをしており、当時のテニス部顧問の藤原邦雄先生に結婚前の聞き合わせをして、その結果今の家族があることも、テニス部の縁と感じております。

オール甲南テニスクラブは“テニスだけ強ければ良い”のではなく、その後の社会生活においてもチームワークとリーダーシップを発揮できる優れた人材が輩出され、その伝統を担う頼もしいメンバーが一人でも多く入部され継承されますことを切に願っております。

S37 甲南中学校入学テニス部に入部、ホーレスマンズスクールへ交換学生 テニス部退部。

S43 大学テニス部当時真野さんから誘いを受けたが、実習が多いと思っていたので辞退。

就職後、大丸テニス部でテニスを続け、森良一プロの夏季スクールではアシスタントもさせていただきました。

参考までに当時の甲南新聞や第一回近畿中学校選抜テニス大会記事がセピア色でありましたので添付させていただきます。



▲ 甲南新聞中学版1969年6月27日



甲南学園硬式庭球部創部100周年にあたり

高校・大学 柴田 音吉 (啓嗣改め)

<「知育・徳育・体育」のバランスのとれた教育
一個性の尊重を重視>

私は今年73才になり、仕事は皇室御用達の日本人最初のテラー「柴田音吉洋服店」の5代目で、明治元年に創業し本年155周年を迎えます。当社が荒波を乗り越えて継続できているのは、困難に立ち向かう“闘争心”、決して諦めない“根性”、企業を継続する“情熱”が育まれた大学4年間の厳しい練習があったからと確信しており、鍛えていただいた諸先輩に心から感謝しております。

<偏差値教育の是非>

最近の甲南の後輩からよく耳にするのは、偏差値向上教育が重視され、「関関同立」「産近甲龍」といった、私にとって信じられない序列がついているのが現実だそうです。

最も信頼できる経済誌の一つである「週刊ダイヤモンド」の2018年12月10日号の「偏差値で語れない名門＝華麗なる御曹司大学」の13頁にわたる特集では、私学における「世襲社長構成比ランキング」で甲南を筆頭に、成城・成蹊が御三家と言及され、「全国の社長の出身大学のランキング」でも21位、「上場企業における社長の出身校の構成比ランキング」でも27位にランクされ、マンモス大学と異なり、甲南の学生数からすると驚異的な数字であります。上場企業の世襲社長リストにもそうそうたる有名会社の社長20名が連記されており、阪神間では全国的に有名な中小企業が多数存在しています。私の所在する「東亜経済人倶楽部」でも、大阪は大半が甲南、東京は慶応が中心で、さらに「神戸ローター

クラブ」においても甲南出身者の割合が一番です。阪神間では「会社の社長に挨拶に行けば甲南に会う」という定説がある位です。

私はテニスの方では夏に弱く、大した成績は残していませんが、関西学生シングルのベスト4、ダブルスで優勝、全日本学生ダブルスで準優勝、団体では王座準優勝位ですが、最も思い出に残っているのは3年の時、単複No.1で出場した関大戦で、4対4でポイントがかかり、2日がかりで勝利した試合と、4年生秋の関西選手権で学生トップのシングルスで ベスト8、ダブルスで準優勝した事です。その後シングルスで勝利したNo.3シードの先輩から、当時超一流企業の住友金属に入社し、企業対抗戦に出場してほしいとお誘いを受けました。何を申し上げたいかと言いますと、学業でもスポーツでも、中途半端でなく、“一芸に秀でる”と一流企業の人社も可能ですし、上述のように甲南出身の社長の会社が多数ありますので必ず未来は開かれると思います。

<セレクションの必要性>

卒業後は、36までコーチとしてパートナーの辻本豊君と共に、後輩の指導にあたりました。吉田、江見、白石、仁木君等の甲南高校から名選手が入部し、さらに天才的なりネットワークを持つ中西君が加わった時、近々王座が取れると予感し、我々同期生が果たせなかった夢である、個人戦、王座の全制覇を成し遂げてくれた時は大変な喜びでした。

OBの望みとして、とにかく甲南はより個性の尊重を重視した教育方針と環境づくりを学園にも要望させていただきたく、もっとスポーツで全国的に有名なクラブが3~5位出現してほしいです。関西では関学・関大・近大、関東では慶応・早稲田・青山等々は大変スポーツに力を入れており、我が甲南も甲南高校主体では限

界があり、より強力なセレクションの採用が必要ではないかと思えます。

<統一したスポーツコンセプトの提案>

上述の経済誌においても、甲南のライバルは関学であると明記してあります。テニス部は歴史・伝統的に鑑みて、甲南がもっと実力をつけて、甲関戦を開催出来るようにすべきと思います。神戸新聞のスポーツ欄を見ていると、関学の名が躍動し、羨ましい限りです。関学はスポーツ全クラブに「NOBLE STUBBORNEESS (高貴なる不屈の精神=粘り)」という統一したコンセプトがあり、残念ながら甲南には存在しません。

我々4年の時は、私が関学に勝つために、渡辺・河盛の超一流選手の先輩のテニスに習い、「BRILLIANT ATTACK (華麗なる攻撃)」を戦闘テーマに掲げ、3年間の屈辱を乗り越え戦利する事ができました。

結びとして、我が愛する甲南学園の発展と硬式庭球部の一層の頑張りを期待して、100周年をお祝いしたいと思います。

甲南中学高校大学硬式庭球部の思い出

高校・大学 辻本 豊

1964年4月14歳、堺市の浜寺中学から神戸甲南中学3年生に転校、田舎の中学から都会に出て来た様なカルチャーショックを受けました。甲南中高の校舎も芦屋山手に新築移転、新校舎から海を見渡せる素晴らしい環境、校風が全く違っていたのを強烈に思い出します。

早速硬式庭球部に入学するも、岡本のコートでのボール拾い、これに耐えきれず数ヶ月で退部。高校でも庭球部には入らず学校庭球部での思い出は少なく、4年間練習は神戸テニスクラブでは望月健二郎、香櫨園テニスクラブでは柴田音吉、山崎 純、岡橋 輝和など甲南高校の友人だけでなく他校の高校生も含め気楽なテニスライフを過ごし、関西ジュニア、全日本ジュニアを目指していました。

中高の庭球部に在籍したように受け止められていますが、実際はインターハイ出場経験も無く、まさかその5年後に厳しい大学硬式庭球部に入学するなど全く予想もしない環境でした。

快適な中高時代から1968年甲南大に入学、1年先輩の広瀬知正、西村啓二氏に連れられ、入学前の1月早々から岡本の兼松のコート整備に駆り出され、アンツーカーの冬の凍結

士の入れ換え、表面馴染、ローラーかけ、体育会の洗礼を受け、意思表示しない間にいつの間にか庭球部に入学スタート。

1年生はネットについて先輩の練習ボール拾い、先輩足下までダッシュ、自分の練習時はくたくたであり身が入らない日々でした。今思うにこのトレーニングはテニスに間違いのない効果がありましたが、やり方に大きな問題があるのも分からずただ走りまわっていました。

練習後半は保久良山、仏舍利、六甲ケーブル、階段、など近郊の山々を走り回り、5セットの体力はこれで培われました。保久良山は練習コートから頂上が見え、コート整備の不備、ボール拾いの遅延などが先輩から見つかり、同学年共同責任の罰で日に数回も走りました。我々も慣れたもの、ジャンケン敗者のみ頂上の見える所だけを走り、残りは山の麓の茶店で休憩、手抜きランニングも今では懐かしい思い出です。

毎年の関西リーグ戦直前の強化合宿は芦屋竹園でしたが、ここで後々まで影響を受ける出会いがありました。練習疲れを癒す竹園の銭湯、湯煙に紛れ、毛むくじらの男が現れ、当時野球界の現役、長島茂雄と裸の対面。「君達は何のスポーツをしているのか?」「テニスです。」「そうか、近代スポーツの基礎はランニングですよ。」「何気無い会話でしたが非常に重みがあり、その後のスポーツ人生の個人的指標のみならず団体の指標になりました。

強烈なインパクトを受けるのはこの大学時代の先輩、同期、友人、今数えれば2、3ページでは書ききれない経験、元々ジュニア時代は鳴かず飛ばずの戦績、大学1年でテニスのスランプに陥り地獄を見ましたが、先輩の本木裕一郎のグランドストローク、兄の辻本隆のネットプレーを見てスランプを脱出出来ました。現代のような個人指導はなく、人のプレーを見て真似る事から試行錯誤の連続でし



▲ 18回高校卒業アルバムより



▲ 卒業式

た。回り道もしましたが、色んな人々の出会いからヒントを得て思考が組み立てられ、実行に移せるかが重要であるという事を肌身で知る学生時代でした。

甲南学園硬式庭球部創部100周年に寄せて

高校・大学 山崎 純

創部100周年の記念として大学4年間をこのテニス部で過ごした一人のテニスプレーヤーとして私の記憶を残しておきたいと思いました。

私は甲南中学1年で大勢の友達と入部しましたが、2年の冬に退部しました。大学1回生から4年間、腰痛を抱えながら最後まで継続することが出来たのは同期の5名の仲間の存在でした。関西学生リーグ戦に出場したのは男子部員5名のうち、選手として辻本・柴田・畑尾・山崎（辻本・柴田は1回生から出場）の4名全員、そしてマネージャーの津田（他界）がリーグ戦から王座決定戦まで支えてくれました。

私が4回生のときは、関西学生リーグ戦優勝、大学王座トーナメントでは、準々決勝中京大学、準決勝福岡大学、どちらも相手校への遠征でした。大学王座決勝では法政大学と対戦しましたが、残念ながら3-6（於広島）で敗戦。遠征と試合までの猛練習で全員疲れていたと思いました。

リーグ戦での私の戦績は、シングルスNo.3に出場し全ての試合で勝利しました。これが私のテニス人生の心の中で誇りに思っていることです。個人戦はあまり強くなかったのですが、団体戦では「甲

南を背負っている」こと、「応援に支えられている」ものがあり実力以上の力を発揮したように思います。

また、個人戦では3回生のとき、関西学生選手権のダブルスで広瀬・山崎組で同級生の柴田・辻本組や宮川・中沢組（関学）に勝利して優勝し自宅に帰ったとき、待っていた母にハグされたことを今でも鮮明に思い出します。母のそれまでの思いが少しはわかった気がしました。亡き母に感謝です。

ところでテニスを始めたきっかけは、小学校まで野球をしていた私を中学でテニスに誘ってくれた1年年上の小川先輩でした。私は30歳過ぎまでテニスをしていましたが、その後はやっておらず60歳頃からの将来設計を考えるとやはりテニスしかありませんでした。72歳にな

った今でもテニスが出来ること、色々な年代の方とプレー出来る楽しみがあること、テニスコートに行くときには「心ワクワク」すること、幼なじみでもある小川先輩に感謝しかありません。

最後になりましたが、甲南学園硬式庭球部創部100周年おめでとうございます。甲南の現役の皆さんが過去の戦績よりいい結果が残せるように、また生涯テニスが続けられることを祈念して終わりとします。



▲ 18回大学卒業アルバムより

高校 1969(S44)年卒

片山 和寛 木村 隆史 小湊 孝 佐渡島 宇平 福原 庸介 堀田 義男 望月 礼三 山田 幸男

大学 1973(S48)年卒

男子 榎本 博行 大山 守 片山 和寛 木村 隆史 辻田 敏 望月 礼三 山田 幸男 山本 隆久

女子 置塩(上田) 恵美子 栗原(橋本) 雅子 柴田(鈴木) みな 末益(柿原) 陽子
鈴木(小畠) 陽子 西川(中島) 千恵子 西野(中川) 由美子

中高テニス部の思い出

高校 堀田 義男

1963年中学入学。ご多分にもれず、この時代テニス部には40名位が入部、その夏には10数名程度になっていた通常パターンの年次でした。結局7名が最後まで残りました。木村、小湊、片山、福原、望月、山田の各氏と私です。

振り返れば、我々の中学入学時に中高は岡本から芦屋の新校舎に移転しました。でも、そこに自前のコートが出来たのは我々が高3の春だったのです。芦屋のコートで練習できたのはほんの数か月間でした。この意味では、最も長期間、練習環境では苦労した「流浪の民」学年と言えます。中学時代は岡本の大学構内のクレー2面、高校では芦屋翠ヶ丘にあった日商岩井独身寮内の赤土2面が主たる練習場でした。他にも、芦屋の帝人、岡本の兼松、仁川の日本板硝子の各コートを使わせて頂いた時期もありました。

中学時代は大学のコート整備に間に合わすべく、授業終了後即座に、あの芦屋の急坂を芦屋川駅まで、それぞれ「転げ落ちる」ように荷物を揺らしながら走るのが常でした。今思えば良く耐えたと思いますが、それで脚力と忍耐力が鍛えられたのか!? 我々7名は全員インターハイ、

全日本ジュニアの両方或はいずれかに出場出来たのです。

さて、テニスの面では、1964年に4度目の団体全国制覇以降3年間低迷していましたが、高3の1968年に団体ベスト4、それ以降後輩が頑張り優勝は出来なかったものの、準優勝4回など第2期黄金時代と言える名門復活につなげたと自負しています。

1学年上は中学時代退部する人が増えていき、その学年は高校では



▲ 19回高校卒業アルバムより



▲ 昭和44年卒業記念部員集合写真

テニス部には誰もいなくなったのです。それゆえ、私は高1の夏から2年間にわたり主将を務めることになりました。4年ぶりの団体制覇にすべてをかけて取り組みましたが力及ばず、1968年真夏の広島での団体準決勝敗戦日、完全燃焼しきった感がありました。そして、成しえなかった全国制覇をその日後輩に託し引退しました。翌年私は、テニスの道は断念し、英国の大学進学を自ら選択しました。その英国での6年間も、その後の社会人生活においても、完全燃焼した名門甲南テニス中高6年間は私のバックボーンとして支えになったのは間違いありません。感謝あるのみです。ありがとうございました。

甲南学園硬式庭球部創部100周年に寄せて

高校・大学 片山 和寛

甲南学園硬式庭球部創部100周年記念事業として出版される記念誌に名を連ねる機会を頂き、光栄に存じます。また永年にわたり硬式庭球部を見守り、ご助言、ご支援を賜りました学園・学校の御関係者様並びにOB・OG各位に心より感謝、御礼を申し上げます。

私は中学・高校が岡本から芦屋山手町に移転した1963年4月、新校舎一期生として中学に入学致しました。屋外施設は、雨が降ると足が取られるほど泥濘み、晴天が続くとコンクリート並みに硬くなるグラウンドだけでした。校舎はさすが甲南と思わせる設備でしたが食堂はなく、職員室西隣にあった『購買部』でお昼休みに販売されるパンと飲み物が、早弁後の練習に備えるエネルギー源でした。

そのような環境の中で中学生生活とテニス部活動をスタートし、テニスコートができる高校3年(1968年)春まで、中学時代は主に大学構内テニスコート、高校時代は芦屋翠ヶ丘の日商岩井独身寮のテニスコートをお借りして練習させて頂きました。

中学下級生は授業終了時の先生へのご挨拶が終わるかどうかの絶妙なタイミングで教室を飛び出し、坂道を駆け下りて大学構内のテニスコートへ向かい、到着後即コート整備開始。そのメインイベントは『経験』と『技術』が必要とされるライン引きでした。松葉をシングルポールで叩き落として如雨露に付ける刷毛を手作りし、ラインロープ担当者と呼吸を合せて仕上げていきました。

インター杯団体全国制覇(1964年)メンバーが高校上級生に名を連ね、そして部員数も多く、中学1年生のボール練習は日暮れ前。折角コートに立たせて貰っても5分も経たないうちに『ラスト!!』、そして『走るぞ!!』の声で隊列を組んでランニングを開始しました。

日がどっぷりくれている帰宅時、岡本に向かう途中のパン屋さんに皆で立ち寄り、一息付くのが練習の締めくくりでした。

学校での練習不足を補うために、練習が休みになる日曜日は甲子園テニスクラブに同級生が集まって基礎練習、そして時には1セットマッチの順位決定戦ゲームに興じました。

対外試合のデビュー戦は、中学2年の夏に鞆公園コートで開催された関西ジュニア幼年ダブルスでした。パートナーは後に名マネージャーとして手腕を発揮する同期の山田君。二人は試合用に新調したテニスウェアに、フタバヤのラケットを携えての初舞台でした。

高校に上がると、大学ではヨット部で名スキッパーとして名を馳せた福原君と、3年からはペア替えてキャプテンの堀田君とダブルスを組むことになりました。

堀田君と組んだダブルスの初戦は1968年7月香櫨園コートでの関西ジュニアで、早生れ出場の辻本先輩、山崎先輩組に決勝で敗れました。

お二人は『勝って当たり前、負ければ丸坊主』のノルマから、ゲーム開始と同時に声を出してエンジン全開でした。高校最終の1968年は関西3位、全国7位のダブルスランキングを頂きました。

一方、1964年から3年間遠ざかっていたインターハイ団体戦は、キャプテンの堀田君、木村君、小湊君、望月君、山田君、福原君そして私の7名で全国制覇奪回を目指し、日商岩井のコートで厳しい練習を行い、藤井道雄先輩の指導も頂き、広島中央コートで開催されたインターハイに臨みました。しかしシングル0-2、ダブルス1-0で成蹊に準決勝で惜敗致しました。目標としていた団体戦優勝は果たせませんでした。目標としていた団体戦優勝は果たせませんでした。堀田君のリーダーシップのもと我々7名で『甲南ブランド』は次の世代に引き継げたと思っています。

高校庭球部引退後は甲子園、香櫨園のテニスクラブでのんびり練習し、自由を謳歌する高校生活を楽しんでいました。3月に入ると自宅まで入部勧誘があり、高校卒業式直後から同期の山田君と大学の練習に参加し、宇部の春合宿にも参加しました。

入学式後、高校同期の木村君、望月君、他校から辻田君、榎本君、山本君、大山君が入部し、1969年入学組8人が勢揃いしました。

平日の練習は、天上川に沿って国道2号線を渡ったところにあった兼松江商のアンツーカーコートで、社員が来られる土曜日の午後からは大学構内のコートで行っていました。

最上級生は学生界では数少ない全日本ランカーの木本先輩、辻本先輩の世代で、練習はコート3面を使ったラウンド2時間のプログラムもあり、一打を疎かにできない厳しい内容でした。練習中、唯一身体を休められるのは、順番で回ってくる練習試合ジャッジで座る審判台でした。

そして兎に角よく走りました。日々練習の締めは保久良山、時にはそこに学校裏山の階段、仏舎利が加わりました。オフのトレーニング、雨でのコートコンディション不良時は、甲子園球場、六甲ケーブルそして西灘のロングコースがあり、土のコートで5セットマッチを戦い切る体力と気力はランニングで養われたと思います。3年生のリーグ戦前、竹園レギュラー合宿で一緒になった読売巨人軍 長嶋茂雄終身名誉監督(当時現役サード)からお風呂の中で頂いた『ランニングはスポーツの基礎』というアドバイスは、その後のテニス生活の心構えになりました。

大学では、登竜門となる新人戦はレフティで多彩なショットを繰り出す望月君と組んで決勝で同僚の木村君、辻田君組に勝ち優勝。4年生では2年後輩の中川純二君と組んで春の関西学生選手権は準優勝。優勝狙いで臨んだ秋の大会は、残念ながら5セット目6-8で関大の木谷・井上組に準決勝で敗れました。最後の関西学生選手権だったので、あと一つ勝って、決勝に進みかけた思いは今も記憶と共にあります。

一方、常に優勝が求められる団体戦は3年生(1971)そして4年生(1972)時に連続して関西対抗リーグ戦で優勝し、3年生の時は広島中央コートで開催された全日本大学対抗王座決定戦の決勝に進むことができました。しかし勝てるチャンスがあった法政に敗れ、日程、コンディション面も含めて対抗王座決定戦で勝つことの難しさを痛感致しました。

3年生時の関西対抗リーグは近大戦が優勝の鍵でした。その中で勝てば一気に流れができるダブルスNo.2のゲーム、柴田先輩に組んで頂いて勝利したゲームは今でも脳裏に焼き付いています。私のセカンドサービスより早いと思われる近大・夫、丁組の厳しいつき玉をボレーノミで相手センターに打ち返してチャンスを待ち、最後は私のネットポジションまで入り込んで『マイボール、サンキュー』と声を発しながら打込む柴田先輩のスマッシュが決めパターンでした。

4年生のリーグ戦、関西では優勝しましたが、全日本大学対抗王座決定戦の決勝には進めませんでした。しかし、学校練習休みの日は一緒に香櫨園で練習に励んだ優れたオールラウンダーの木村君と組ん

だダブルスは、関大戦 木谷・井上組とは5セット目までもつれましたが8-6で決着し、3校No.1戦は全勝。シングルスは関大・井上君、近大・川口君には勝ちましたが、関学3年生・友金君には2セットアップ後、『Noble Stubbornness』を地で行くテニスを3セット目半ばから展開され、5セットファイナル4-6で落とし、唯一の黒星を喫しました。関西対抗リーグ戦は連続優勝、その中でNo.1戦5勝1敗は、最低限の責任は果たせたと思っています。

甲南庭球部生活10年、多くの方にお世話になり、同期とスクラム組んで無事過ごすことができました。今思えばよき指導をして下さる方に巡り会ったのが、私のテニスの原点だと思います。中学下級生の時、練習不足を補うために通った甲子園クラブで、戸田定代先生、関学OBの森良一様のお父様に基本中の基本を教わりました。そしてご自分の練習が一段落すると『打とか!』と声を掛けて頂き、乱打が終わると三ツ矢サイダーをご馳走して下さった京谷先輩そして木本先輩、辻本(隆)先輩にも甲子園クラブで指導を頂きました。

大学では、サーブからのゲーム組み立てを辻本(豊)先輩から時間を掛けて教えて頂き、肘が下がりが気味の私のサーブをジョン・ニューカム(豪)の分解写真をもとに、『左、右両方の手は天を指せ、右肘上げろ!』と根気よく指導下さいました。

今のようにプロインストラクターのレッスンやインターネットのない時代、『目』、『耳』が上達の鍵でした。私の回りには全国区の先輩、同期そして他校のライバルがおり、研究するには事欠きませんでした。

『よき指導者、助言者との出会い』は、自分のテニスを知り、レベルアップの道標となりました。そして『目標をもって、努力を惜しまないこと』の大切さを学びました。

この二つはテニス上達に不可欠であり、社会人となって会社生活を送る上でも大切なこととして心に留め、今に至っています。

中・高・大学庭球部の10年間を先輩、同期そして他校のライバルと心を通わせて全うしたことが私の人生を支える屋台骨の一つであることは間違いないと思います。

これからも甲南庭球部での出会いやメンタリティーを大切に、次の100年に向かって飛び立つオール甲南テニスクラブに心を寄せて、ご発展をお祈り申し上げます。

甲南学園硬式庭球部創部100周年記念誌 寄稿

高校・大学 木村 隆史

この度は、甲南学園硬式庭球部が創部100周年を迎えることができ、永年にわたり支えて下さった学園関係者並びに顧問の先生方や硬式庭球部の諸先輩の方々、在校の中高大の硬式テニス部員と共にこの記念すべき節目を心より祝いたいと思います。

本題に入りますが、私が高校1年になった時は、中学時代のテニス部メンバー【堀田、片山、小湊、望月、福原、山田、私の7名(敬称略)】全員がそのままテニス部に入りました。ただ、1学年上の高校2年は中学時代の後半に退部者が続出し、最終的には部員が0名になりました。高校1年になっても依然として学舎内にテニスコートの新設が無く、特に春休みや夏休みなど部員全体のレベルアップを図るためには、大学内のコート2面では到底足りなく、当時主務であった山田君はOBを頼り企業回りして、練習コートを確認するために奔走してくれていました。

戦績についてですが、S43年のインター杯団体戦(於広島)では2回

を勝ち抜き、準々決勝では学習院(東京)と対戦して2勝1敗で勝利し、準決勝は第2シードの成蹊(東京)と対戦し単0対2、複1対0の1勝2敗で敗れました。

複は私と小湊君とのペアで出場し、初回からここまで無敗で臨み、成蹊ペアにもストレートで勝利することができました。単No.2の望月君は、試合巧者の小田君に善戦及ばず敗れました。最後に単No.1同士の決戦となり、堀田君は当時関西では無敵の強さを誇っていたので勝利を確信していたのですが、然しもの関東の覇者成蹊の横沢に惜しくも敗れ、準決勝敗退が決まりました。

このインター杯広島大会後の8月中旬から東京神宮外苑クラブで開催された全日本ジュニア大会に単複に出場しました。単は2回戦で敗れましたが、複は前のインター杯の余勢がまだ残っていて、運にも助けられ決勝まで勝ち進むことができました。決勝は平井健(光く)、横沢(成蹊)組に力負けをして完敗でした。この試合で自分の非力さを改めて痛感しました。ここまでが私の高校時代の思い出です。

続いて大学時代の思い出を記します。私の大学時代は、高校からそのまま上がった片山君、望月君、山田君と他校から甲南大学に進学した辻田君、榎本君、大山君、山本君(学生連盟)らがテニス部に入部しました。私が大学3年の時にはS46年関西リーグ戦で4年振りに団体優勝を果たす事ができました。その後、王座のトーナメント方式により名古屋で準々決勝の中京大戦、福岡で準決勝の福岡大戦にそれぞれ勝利し勝ち進みました。そしていよいよ決勝は法政大学と広島で王座を懸けて戦うことになりましたが、ここまでの道程を振り返ってみると、間に関西学生や東西学生対抗戦(室内)の出場も含まれ、かなりの強行軍であったことは否めません。広島市営コートにおける王座決勝戦の大会初日は、複のNo.1~No.3まで一斉にコートに入り、それぞれ試合をするので同校選手の試合の応援が殆ど出来なく心残りでした。

私が辻田君と組んだ複では、関西リーグ戦及び王座の1回戦から準決勝に至るまで無敗でしたので、何とかこの複のNo.1で1勝を挙げるべく試合に臨みました。対戦相手は三宅、加藤組でした。炎天下の中で大接戦となりフルセットの4時間を超える長丁場になり無念にも敗れました。初日の結果は複のNo.2で出場された辻本、柴田先輩ペアのみの勝利で1勝2敗です。大会2日目は単でNo.1~No.6まで一斉にコートに入りました。私はNo.4に出場し伊東末広と対戦しました。まだ前日の疲労が残っている上に真夏の日差しがさらに厳しく、試合中に時折くらくらする感じがしていましたが、OBの木本さんが 試合開始から終了までコートスタンドから応援して下さいだったので非常に心強く感じました。結果はセットカウント3対1で勝つことができましたが、試合直後には人目を憚るようにコートブラシやトンボが置いてある倉庫のような場所に直行して、精根尽き果て倒れ込むようにコンクリートの上でそのまま寝ていました。

ちなみにパートナーの辻田君は、外見は私よりもがたいが大きくバワフルで一見屈強そうに見えますが・・・単のポイントゲッターとしてNo.6で出場しました。加藤と対戦するも2セットダウンの後3セット目のコートチェンジあたりから前日の疲れからか様子がおかしくなり、応援者に頼んで頭から水を掛けて貰ったところ、そのまま意識を失って救急車で病院に運ばれ、取返無く棄権負けという悲惨な結果となりました。王座決勝戦のトータルでの結果は、複1対2、単はNo.1で出場された辻本先輩と私の2勝のみで2対4の計3勝6敗で法政大学に敗れ、念願であった大学王座奪還は叶いませんでした。

以上が私の大学生時代のテニス部における思い出です。

甲南学園テニス部100周年に寄せて

大学 西野 (中川) 由美子

甲南学園硬式庭球部100周年おめでとうございます。私は1973年大学卒業の19回生です。ピチピチギヤルだったあの頃から早や半世紀。同世代の皆様、諸先輩方、お元気で過ごしてはいかがでしょうか？現役学生さんの祖父母世代が当時の思い出を披露させていただきます。

あの頃、甲南大学の硬式庭球部といえば、ちょっとええトコのボンや嬢ちゃんが優雅にやっている、けれど強い部だと世間では認識されておりました。実態は全く優雅ではありませんでした。(ちなみに私の特技は水撒きです。クレコートにホースは無く、夏場はバケツで水を撒いていました。バケツでサーっと、まるでシャワーのように水撒きできます！)

私は中学軟式・高校硬式とテニスをやっていて、そのせいか勧誘されて入部したのですが、特に「強くなりたい」とも、「いい成績を残したい」という意欲もないダラダラ部員でした。そんな部員だったので、休みもない、拘束時間が長い、練習がきつい、でいつも「やめたい、やめたい」と愚痴っていました。

当時の運動部は先輩後輩の上下関係が厳しくて、「1年道具、2年奴隷、3年人間、4年神様」が常識でした。私たちが2年生にな

る時、やっと道具から奴隷に昇格できると期待したのに、1年生は安保さん1人だけで「道具」を2年間せざるを得なくなりました。トホホでしたが、道具のままでは終わりがたくない！人間や神様に昇格するまでは「やめない！」という変な理由で腹がすわり、4年間続けた次第です。

夏は、日が暮れると歯しか見えないくらい真っ黒けで、蛇口から頭に水をかぶって頭を冷やし、汗だくで練習終わりは皆体から湯気が立ち昇っている女子大生。今振り返れば、年頃の女の子がなんとワイルドな生活をしていたんでしょう！

団体で三宮を歩くと道行く人が振り返って「あの娘たち、日本人？」「違うやろー。」とヒソヒソ声が聞こえたり、母から「あんたが寝るとシャツが黒く汚れそう」と言われたりでした。今は信じられないでしょうが、当時はその黒びかりが、かなり自慢でもありました。

そのころは普通の学生がうらやましく、アルバイトしたい、デートしたいと無いものねだりでしたが、今は思い出すと面白くてたまりません。一番きつかった1年生の時の思い出が特に面白い。泥んこになってローラーを引っ張ったり、リヤカーでネットやコートキープの道具を運んだり、喫茶店のお手拭きで手や顔や足を拭いたり(お店の方ごめんなさい)、などみんなキラキラした思い出です。と同時にそんなキラキラした思い出を共有できる友だちがいることが一番の財産です。やめなくて本当に良かった。



▲ 19回大学卒業アルバムより

高校 1970(S45)年卒

近江 伸次 片岡 道昭 鈴木 信一郎 高橋 潔 横山 公一

大学 1974(S49)年卒

男子 稲鍵 耕司 片岡 道昭 瀧川 俊治 中川 洋一 松下 誠克

女子 中村(安保)恵利子

わが青春の中高テニス部

高校 横山 公一

私たちの学年は昭和39年(1964年)中学入学で、岡本から芦屋に校舎が移転した一期生です。その当時は道路も舗装しておらずテニスコートも無かった為、大学のコートに練習に行くときは阪急芦屋川駅3時12分発か22分発に乗らなければコート整備が間に合わないのですが、3時にチャイムが鳴って12分発だと芦屋川駅までダッシュ、22分発だと岡本駅から大学までダッシュの繰り返しでした。大学のコートが使えない時は仁川の日本板硝子のコートや岩園の日商岩井のコートをお借りし、ジブシー活動を続けながらの練習でした。それでも練習は毎日あり、当時のマネージャー方のコート確保は大変だったと思います。

高1の時にコートが出来、デ杯選手の前輩方がコート開きにきて頂き、3人打ちで徹底的にしごかれ、練習後のランニングで海まで走らされ、途中で2人ぶっ倒れましたが、今となればいい思い出です。

1年上の先輩方は人数も実力も揃っておられ、広島でのインターハイ団体にも出られたのですが、その広島で兵庫県の役員の先生が来年は「関学やな」と言っているのが耳に入ってきました。闘争心に火をつけられましたが、我々の学年は近江君・片岡君と3名で団体戦に必要な4名に届きません。1年下の中川君を入れたのですが、その中川君の大活躍もあり、決勝戦2-1で関学に勝ち、大会役員の先生にも祝福を受け、インターハイに進むことが出来ました。

群馬でのインターハイでは柳川高校に準決勝で敗れ、3位に終わ



▲ 20回高校卒業アルバムより

りましたが、群馬からの帰りに片岡君と私の叔母が東京にいたので、寄って行こうと言っていたら、大学テニス部の木本先輩が、法政大学で神和住さんとペアーを組んでいた柳原さんの車で東京に行くからと乗せて頂きました。途中、新宿の高級そうな中華料理店に連れて行って頂き、高校生だからもっと食べろと死ぬ思いで食べさせられたのも良い思い出です。

中高6年間をテニスとランニング漬けのテニス部で過ごしたお陰で、社会人になってから困難な事があっても、根性だけは負けなぞと頑張ってきたように思います。

今後益々甲南テニス部が活躍をされる事を祈念しています。

テニス部の思い出

高校・大学 片岡 道昭

硬式庭球部創部100周年誠におめでとうございます。節目の年に立ち会えたことは、先輩後輩のみなさんのおかげと感謝申し上げます。

昭和39年中学に入学し初めて買ったラケットが軟式ラケットだったという右も左もわからない状態からのスタートでした。

中学時代、中高にコートは無く、当時大学構内にあったコートでの練習。授業が終わると阪急芦屋川駅まで猛ダッシュ、岡本駅からまた猛ダッシュ、そんな毎日が続きました。

中1では40人以上いた同級生も中2では4人になっていました。練習後の帰り道、いつも立ち寄るパン屋さんで飲み物よりも少しでも多くのパンを選んでみると、見かねたおばちゃんが水の差し入れをしてくれて嬉しかったことを思い出します。

高校時代、高3の灘高戦、夕闇迫る灘高のテニスコート。最後のこの試合に勝てば、9-0(S6、D3)で完全勝利。既に閉会式は終わり、帰宅途中の生徒が金網越しに応援してくれました。ポイントをとる毎に拍手。あの時の高揚感は今でも忘れることができません。この勝利によって勝って得る自信がこんなに大きいのかと改めて実感しました。

この時期、学生運動に影響を受け、このままテニス続けるか否かと迷っていましたが、ここは初志貫徹続けることを決意しました。

大学時代、借りていた会社のコートと大学の往復、講義は出席をとる授業だけ、これでよく卒業できたものです。試合のことはほとんど記憶にありませんが、なぜか国道2号線沿いにある鈴木商店のア

イस्कャンディ、甲南本通商店街の中にあつたナダシンの餅等、美味しかったことはしっかり覚えています。

そして「ホクラ、ブッシャリ、カイダン」(懐かしい響きです)よく走りました。今から考えれば非科学的なトレーニングだったかもしれませんが、これで体力と共に精神力も付いたように思います。曲がりなりにも中高大と10年間続けることが出来ました。誇れる戦績は一つ残せませんでした。私のなかでは密かな誇りです。社会人になっても自信に繋がりが、大いに役立ちました。

最後に一つ明治30年生まれ元テ杯選手の言葉です。

この一球は絶対無二の一球なり
 されば身心を挙げて一打すべし
 この一球一打に技を磨き体を鍛へ精神力を養ふべきなり
 この一打に今の自己を發揮すべし
 これを庭球する心といふ

(福田雅之助「テニス(硬式)」(旺文社、1967年)8ページより引用)
 ※引用に際して、旧字体を新字体に書き換えています

甲南学園硬式庭球部の輝く100年後を目指し更なる活躍をお祈りしています。



▲ 19回大学卒業送別会
 場所：多分甲南中高等学校食堂

大学テニス部の思い出

大学 中村(安保) 恵利子

私が入部したのは昭和45年春、関西学生リーグ戦が始まる前の厳しい練習真っ盛り頃の頃でした。当時のマネージャー山田氏からの熱心な勧誘に根負けした形で入学式前から練習に参加しました。当時通い始めた自動車学校にもなかなか通えなくなり、免許を取れたのはその年の秋にまで延びてしまいました。

大学の練習は高校時代のそれとは違ってランニングにもついていけない程、私にとってはハードなものでした。

当時の甲南テニス部は男女とも一部リーグで戦っておりました。リーグ戦が終わり夏休みの練習が始まった頃には4人ほどいた1年女子部員が私一人になっていました。当時のテニスコートはクレ-

ートで、ラインは石灰を水で溶かし、ジョーロで引いていました。ロープを引っ張る人2人、ラインをかく人1人と最低3人ないとコート整備はできません。なので2年生が交替でコート整備を助けて下さいました。

翌年のリーグ戦の選手選考で、私は2年生4、5人に勝ち、当時キャプテンをされていた3年生の佐野さんと対戦しました。佐野さんはスライサーで、私のようにフォアハンドでラケットを高く構えるタイプには苦手な球筋でした。

にもかかわらず佐野さんは自分の代わりに私を選手として指名されました。私に電話で「勝てる自信はあるよね」と聞かれて、私は「ハイ」と言うしかなかったのを今もはっきり覚えています。

それまで私の高校時代のテニスは、ラリーを続けて我慢することはとても苦痛な事でした。なので負けるときはあっさり負けました。しかしながら団体戦リーグ戦というのはそんな無責任な事は絶対に出来ません。

ましてやキャプテンに約束した以上、石にかじりついてでも勝たなければならぬという思いで臨んだ結果、リーグ戦で負けなかったのです。個人戦で勝てなかった相手にも勝てるようになり、4年生の時には全日本選手権にも出場してベスト8にもなりました。大学王座にも出場出来たし、甲南大学テニス部で私のテニスは花開きました。当時テニス部の顧問をされていた和田先生にも大変お世話になりました。

大学時代テニス部で知り合った他の大学のテニスの仲間達、またすぐ下の後輩達とは卒業後50年近く経っても親交を深めております。

同級生のコートを取り合った男子部員達とも連絡を取り合い、交流が続いております。

大学時代に出会った人達は人生の宝物となっています。甲南大学テニス部に在籍させて頂いたおかげで71才になった今でも、まだ「ルネッサンス佐世保」でテニスのインストラクターとして仕事をさせて頂いております。勿論、全ルネッサンステニスインストラクター最年長として。有難いことです。



▲ 20回大学卒業アルバムより
 上段左から2人目 和田 邦平先生 場所：甲南大学テニスコート

高校 1971 (S46)年卒

池田 和正 小川 隆司 川岸 尚行 小池 亘 高田 典明 中川 純二 森 俊

大学 1975 (S50)年卒

男子 小川 隆司 下井田 隆 中川 純二 本多 元彦

女子 久次(横田) 禮子 永井(井上) 尚子 中原(原田) 三枝子 吉田(藤森) 陽子

甲南中学テニス部生活の思い出

高校・大学 小川 隆司

1971年甲南中高校及び1975年甲南大学卒業の小川隆司です。

私は中高大のテニス部活動の中で最も思い出深く、そして楽しかった甲南中学時代の思い出を語らせていただきます。何はともあれ私がテニスに情熱をもち、ラケットを持つことの楽しさを大いに感じたのは中学テニス部時代です。

といっても中高一貫の部活で、特に部として全国高校での団体優勝を最大の目標にしていたから、練習は高校生レギュラーが優先で、中学生部員、特に中1、中2は球拾いとコート整備に徹する毎日でした。従って、あろうことか毎日朝から晩まで(休日や夏休みの練習で、実際に球を打つ時間は中1は午前・午後で10分ずつ、中2でも20分ずつほどしかなく、球拾いとコート整備に連日明け暮れる日々でした。

そんな環境でしたが、中2で初めて兵庫県や近畿の大会に出ますと、これが皆結構勝つんですね。そして中3になると私どもの同級生からダブルスで全日本ボーイズを始め兵庫県のジュニアで優勝者が生まれました。もちろん先輩たちは同じような環境でもっと優秀な成績を上げておられたことは周知の事実です。

中学時代仲良くなった他校の選手と談笑する際「君たちは何で球を打つ時間がほとんどないのに上達するのか?」と良く聞われました。それは間違いなく我々は球拾いしながら先輩方の素敵なフォームを見ることによって、頭の中でしっかりイメージトレーニングができたからだと思っています。「あの先輩のかっこいいサーブやフォアハンドを真似たい」が基本にあり素振りなどで習得した結果と思います。当時はつらい練習後の帰り道(夜道)で、同級生部員達と立寄る店でジュースやパンを食べ、練習の不満を言いながら談笑するのが楽しみでした。

私の中学テニス部時代、芦屋の甲南中高校にまだテニスコートがなく、従って中学1年・2年時は毎日授業終了後、速やかに岡本の甲南大学或いは当時コートをお借りしていた日商(現・双日(株))の夙川のコートへ行かねばなりません。大学コートで練習の場合は、通常授業終了時間は15時ですが、終了2~3分前には教室を飛び出す準備をし、芦屋川駅発15時11分の電車で猛ダッシュ汗だくで乗車し(通常学校から芦屋川駅まで徒歩25分弱)、15時20分頃からコート整備を始めねばならない厳しい日々でした。

また、日商のコートで練習の場合は連日大変な苦痛を味わったの

です。それは我々が中2の頃まで現在のテニスコート前の夙川方面へ行く道路はまだ舗装されておらず、トラック等の走行でガタガタ荒れ放題の道でした。その超悪路を授業終了後【15時】通常徒歩30~40分はかかる日商のコートまで、やはり猛ダッシュで走り、汗だくのまま練習着に着替え、15時30分には練習開始できるようコート整備にかかる毎日でした。連日の猛ダッシュコート通いのお陰で持久力がついたかもしれませんが、反面、ガタガタ悪路を走ることで、通学用の革靴はあつと言う間にボロボロになった記憶があります。

それでも、当時は短時間でもボールを打つことが何より嬉しく、また道具にも拘りだし、有名選手が持つラケットに憧れたものです。このような環境が一変したのは私が高1の時です。立派なテニスコートが4面、甲南中高校に設備され、これまでの不便さは無くなり練習に打ち込めるようになったことを本当に嬉しく感じたことを記憶しています。

4年間の思い出

高校・大学 中川 純二

今でもよく覚えていることは大学へ入学する前の2月中旬頃、突然夜8時ごろ、大学テニス部の2年先輩である方々6名だったと記憶しておりますが、自宅に来られて、入部への勧誘と3月初めに行われる合宿への参加のお誘いを受けました。私の大学テニス部生活は3月のこの合宿から始まりました。

私が1回生の時の昭和46年度リーグ戦は優勝し、そして王座に出場し、やはり甲南は強いんだと誇らしく思っておりました。

日々の練習については、我々1回生は4名のみで、内1名は経営理学院在籍の為講義優先であり、通常3名でコート整備と球拾いに明け暮れておりました。コート整備について3名では大変で、大学構内にあった2面のコートのライン引きが一番大変で、石灰を水に溶かしラインを引くのですが、2名でロープを引っ張り支えなくてはなりません。しかし張りが弱くなり直線では無く湾曲なラインになり先輩方に叱られたこと、又他に難儀したことは秋口から冬にかけての落ち葉拾いでした。3名では練習開始時刻までには拾いきれず残ること多々ありました。今でも良い思い出であります。

2回生から幸いなことにレギュラーの一員でリーグ戦に単複出させていただきましたが、リーグ戦の優勝は出来ませんでした。我々が4回生の時は非常に弱くリーグ戦最下位の可能性が多分にあり

ました。当然最下位になれば入れ替え戦に臨まなくてはなりません。しかし何とか最下位は免れ3位で終わることができましたが、私の不甲斐無さ、そして最下位にならなくて良かった安堵感がありました。以後私らの学年含め2~3年低迷期があったように記憶しております。

私は当時の部活生活については先輩及び後輩の上下関係、そして皆で協力して行くことの大切さを学んだと思っており、今も甲南大学硬式庭球部に感謝しております。

最後に中高のテニス部、大学の硬式庭球部が今以上に活躍していただきますよう、陰ながら応援して行きたい存じます。

甲南ファニーズ

大学 中原(原田)三枝子

私達21回同級生は、ヘチャコ、フーテン、エコ、クリマンの4人です。今は「甲南ファニーズ」というグループ名で年に一度、日本女子テニス連盟の大会に出ています。もちろんすぐに負けてはしまいますが、その後は旅行を楽しんでいます。甲南の名を汚してはいけないと思い、安保先輩にグループ名に“甲南”を入れる了解を得ました。

私、クリマンは徳山から特急で6時間かけて神戸に行きました。中高と軟式庭球部でした(山口県の中高には硬式テニス部はありませんでした)が、沢松和子さんに撞れて硬式テニス部に入りました。

甲南は男女ともに一部リーグ、毎日が部活動中心の生活でした。



▲ 21回高校卒業アルバムより

クレーコートだったので雨が降った翌日は、雑巾でコートの水を取り整備しました。テニスの合間にジャージで授業に出ていました。経営学部だったので男子ばかり、顔は真っ黒でした。4年間の下宿生活の中で、1年生の時は洗濯機、お風呂なしだったので、毎日テニスウェアは手洗い、銭湯通いでした。

あの頃の私達は個人戦よりはとにかく一部残留しなければという思いが強かったです。リーグ戦前の広島での合宿の決まり、ルールは先輩達より先にお風呂に入らなければいけません、コート整備をやり終え宿に帰ると、急いで食事等の準備をすること、とにかく動き回っていました。

また練習、試合でのボール拾いは当たり前でした。そして拾ったボールはきっちりワンバウンドで先輩の出されている手に取まるように渡さなければいけません。少しでもずれると先輩達は知らん顔? でした。上下関係はとても厳しかったです。でもそのお蔭で私達は一部に残ることができ、しかも王座に二度も行くことができました。

今思えば全て懐かしい思い出、私にとっては宝物です。多くの素晴らしい先輩たちとの出会いを頂き、後輩というだけでとても可愛がって下さいます。

2009年の都市対抗戦には辻本豊先輩、2010年の山口国体の時は渡辺康二先輩が徳山に来られました。両大会運営のお手伝いをしたのですが、お二人と話をする私をみんながビックリ顔で見っていました。

卒業後帰省してからずっとここ山口では、大きな顔? でテニスをさせてもらっています。感謝!! です。今は徳山まで新幹線で2時間弱です。美味しいふぐ料理を食べにどうぞおいでませ山口へ!!



▲ 21回大学卒業アルバムより

高校 1972(S47)年卒

生島 五三男 長瀬 佳彦 広瀬 保 福島 忠敬 古田 善敬 松江 秀一郎 山本 雅英

大学 1976(S51)年卒

男子 土持 耕治 福島 忠敬 山本 雅英

女子 泉原(大野)加寿子 徐(衣笠)彰子

10年間を硬式テニス部で過ごして

高校・大学 山本 雅英

私は、甲南中学に入学と同時にテニス部に入り、1年生の時にはボール係を担当しました。当時は学校にテニスコートが無く、約15分ほど走って下りた岩園町にある会社のテニスコートを借りて練習していました。午後3時15分にテニスコートについてすぐにコート整備をしないとイケないので、6時間目のチャイムが鳴るときには教科書をカバンに詰めて、テニスボールが一杯入った大きな袋を抱えて、終礼の挨拶が終わるとすぐに学校を飛び出していました。ある日の英語の先生の時には、チャイムが鳴る前から立っていた私を見て、終礼のやり直しをさせられたのが今でも記憶に残っています。

中学で初めてテニスをする1年生に対して、先輩が丁寧に教えてくれました。といっても冬場は1年生の私たちがボールを打てるのは午後5時過ぎで、ネットの下からほとんど見えないボールを追いかけていたのが思い出となっています。

やがて高校生になると、県大会の予選は難なく勝って本戦に出られるレベルになってきました。しかし、そこが大きな落とし穴が待っていました。高校2年の春の県大会の予選の時、すぐに勝ってくるという安易な気持ちで試合に臨んだ結果、なぜかいつも入っているショットが決まらず、ずるずると負けてしまいました。心の油断が思わぬ結果となりました。それ以降、試合のたびに身体が動かなくなり、予選1回戦負けの日々が続きました。いわゆるイップスになっていたと思います。これから先、もう試合に勝てないのではと悩んでいた時に、1年先輩の中川さんが声をかけてくれました。毎日フォアのバックサイドから相手のバックに打つ練習でした。ミスをしたらコート1周をランニングする。その練習を何日か続けているうち、フォアのバックサイドからのショットだけは自信を持って打てるようになってきました。そうして、試合で相手のバックにボールを打ち込んでネットに出てゆくと必ずロブが上がってきて、それを得意のスマッシュで決めるパターンが出来上がってきました。自分の中でそのパターンが出来上がったおかげで、これまで苦手としていたシングルスで、高校3年の時にインターハイに出ることができました。どんなに不調になっても、あきらめずに努力すれば報われるということが、その後の人生の教訓となりました。

甲南大学に進学してからも硬式テニス部に入り、また1年生としてコート整備や球拾いから始めることになりました。当時の1年生は三人しかおらず、今の大学の図書館の場所にあった土のコートの整備の時に、石灰でラインを引くときに、一人はコートの金網にロープを

くくりつけて足で押さえ、もう一人はロープを引っ張って足で押さえなければならなかったのが今でも良い思い出です。

大学4年の年は大学1部リーグ戦で、戦力不足から2部落ちの下馬評が高かったのですが、運よく相手校のオーダーミスによりシングルス6試合が没取になり、最終的には2位で1部残留することができました。

中学から大学まで硬式テニスで過ごしましたが、社会人になってからその時の苦しかった時の経験がずっと役に立ちました。以前に自分のこれまでの思い出をアルバムにしてみましたら、みんなでテニスをしている場面の写真ばかりでした。甲南中学から大学までの10年間を硬式テニス部で過ごせたことは自分にとっての宝物です。

大学4年間の思い出

大学 土持 耕治

甲南学園硬式庭球部100周年誠にありがとうございます。私の甲南中学高校時代は民間テニスクラブで練習しておりましたが、大学と同時にテニス部に入部致しました。その当時の練習場所は平日、兼松江商テニスコートで、又土日祝は甲南大学敷地内にあったコートで練習していた事を懐かしく覚えております。土日祝は、兼松江商社員の方々に終日開放、そのお世話等を1、2回生の内1人がお手伝いさせていただき、その担当を先輩がその都度決めておりました。今だから言える事ですが、1、2回生の心中は皆自分に担当させて欲しいという気持ちだったと思います。なぜなら終日の厳しい練習から解放され、「しばしの休息」のような時間を過ごす事ができたからです。

テニス部に入部した頃は、最近ではハードコート・砂入り人工芝などが主流ですが、当時クレーコート・アンツーカーコートが主流であり、コート整備に費やす労力は半端ではありませんでした。トンボ掛、ローラー掛、ブラシ掛、ライン掃き、そして石灰水でライン引き、さらには特に夏場はバケツを用いての水撒きを行ない、先輩が来られるまで完璧に仕上げなければなりません。その後我々1回生は球拾いから始まり全く休めなかったように思いました。私自身、中高テニス部に所属しておりませんでしたので、コート整備の経験がなかった分大変でした。練習終了後待ち受けていたのがランニング。私自身ランニングは苦手分野で毎回迷惑をかけておりました。ランニング終了後コート整備をして終了でした。練習は朝から夕刻ま

でしたので、又翌日もあると考えただけでも憂うつでしたが、なぜか貴重な時間を過ごしたように思いました。

大学4年間の思い出は色々ありますが、特に最大の思い出は大学4年生の関西大学リーグ戦でした。その当時のリーグ戦は4月から始まり、一部校の甲南はなんとしても残留しなければならないという使命感でありました。その当時一部4大学の総当たりでしたが、その時の甲南は実力的に厳しい状況だった為、とにかく目標が一部残留でした。初戦関西大学には何と少しでも勝つ事でしたが、オーダー交換の時に関西大学印が押されていない事に気付き、その事で甲南が勝利。次戦の近大戦は何とか勝利し、最終戦の関西学院

大学には一歩及ばず、勝利する事はできませんでしたが、結果は一部2位の成績を取め、残留となりました。しかしその当時の心境は残留を目的としていただけに、対戦相手のミスにより残留に大きく前進したのには少し複雑な気持ちでした。

最後になりますが、大学テニスを通じて私自身が学んだ事は特に礼儀規律であり、社会人となる翌年よりその思いはずっと持ち続けようと、現在もその事については感謝しております。これから甲南でテニスを始められる方は何か目的目標を持って部活を楽しみ、社会に出てからも生かしてほしいと思います。



▲ 22回高校卒業アルバムより



▲ 22回大学卒業アルバムより

高校 1973(S48)年卒

西尾 茂之 沼田 信弘 山根 敏彦 渡辺 裕

大学 1977(S52)年卒

男子 井本 佳明 中川 方仁 平田 隆也 森岡 孝太

女子 関(柿原)郷子 寺田(岡本)朗子 富松(西山)優樹子 古澤(真柴)恵 山本(川上)伸子

僅か4年、されど4年

大学 中川 方仁

<甲南大学テニス部道>

Kawasakiウッドラケット、フタパヤラケットと共に

・今と違う世界観→声を枯らした掛け声

掛け声、何時の間にかテニスコート周辺住民からの苦情で出来なくなった。

・水機き→全日本レベルのコート整備

大学内のクレーは特に難しかった。松葉でのライン引き、落ち葉拾いに薄く広く、また、霧状の水撒き、全日本レベルを目指して!

・エピソード→歴史は繰り返す

練習をサボろう!と雨上がりに更に水を撒いたら、先輩に水の溜まり方がおかしい!とバレ怒られた。

・ボールボーイ→全力でタッチ

受け取られるOB/先輩の手にワン・バウンドでいくように!(常に相手の立場を考えて)、練習最後の厳しいランニング(途中最後のダッシュ迄脱落者が出来ない様に励まし助け合い)

<春合宿>

最終日はお借りした広島市テニスコート周辺の草抜きと、壊れている場所の修理(場所を提供頂いた事への感謝)

優しかった先輩と厳しかった先輩、優しかった先輩の有り難み、上級生になって初めて分かる、厳しかった先輩の有り難みに感謝の気持ちを忘れずに。

広島に転勤になり、懐かしの市民コートで子供たちと、合宿の真似事をしながら学生時代を思い出しています。

<リーグ戦>

土持主将・山本副主将、小職が3年生の春のリーグ戦、甲南・関学・関大・近代の4校が一部リーグであった。他校は強い選手が多く厳しい大会の中、初戦は関大戦でオーダー交換の時、メンバー表に関大に記入漏れのミスがあった。リーグ戦に際し学連主催主務会議で、記載事項に抜け等があると没収試合となると合意されていた。思わず勝った一言、結果、甲南の勝利となり1部残留の目標達成できた。

<三山巡り>

その一つ六甲ケーブルまで、道には昨晚降った雪が残っている。

下り坂では滑っても不思議ではない状況で、今では考えられない無茶苦茶なランニングでした。懐かしく思い出すことは、この時の体はどんなに素晴らしかったのか、あんな時があったのかと楽しかった、苦しかった、しかし、今は筋力もバランス感覚も面影すらありません。素晴らしかったテニス部時代に感謝です。

<僅か4年されど4年>

甲南大学テニス部道のお陰で成長出来ました。甲南大学テニス部に感謝!甲南大学テニス部バンザイ!!

現役時代の思い出

大学 森岡 孝太

高校迄テニス経験なく、浪人時代に郷土の四日市出身の九鬼潤さんがアメリカ留学から帰国されテニスに興味を覚え、当時名古屋で行われた東西対抗戦に辻本、柴田、辻田、木村諸先輩が甲南大学から参戦された試合を見て甲南大学テニス部に憧れて受験。合格発表の日に兼松江商のテニスコートに顔を出し、管理小屋の横の水道で屈まれて水を飲まれていた片岡先輩に入部志願。翌日から練習に参加、場所は甲南高校テニスコート、初心者でしたので役割はボールボーイ! 山本先輩に言われた事を真に受けて全力疾走でボールを取りに行っていたので直に体力を消耗、午後の練習になるとヨレヨレ、練習後の六甲山岳コースのランニングに付いて行けるわけもなく、一人だけ遙かに遅れ今にも倒れそうにランニング。監視役で私に付かれた瀧川先輩に「あのカーブを曲がったらすぐそこや!」と叱咤激励、何度も何度も騙され、何度も目の最後の力を使い果たしたのか覚えているわけもなく精魂使い果してゴール。二年間の浪人生活で身体が鈍っていた私にとって当に地獄の甲南大学テニス部生活の始まりでした。翌朝起きると脚が筋肉痛で立ち上がれない。トイレに行って便器に座ったら立ち上がれない!「あつ、これは駄目だ、休むしかない!」とっていると、早朝に其れを見通した如く山本先輩から電話!「皆そうや!練習に来たら何とかなる!」と冷たく言い放たれ甲南高校へ。最初の数週間の練習後のランニングは何度も何度も「このまま死んだ方がましか!」と思ったものでした。今も当時の記憶が鮮明に昨日の如く蘇ります。この経験が社会人生活での財産となりました。諸先輩方「大変有難う御座いました!」「甲南大学テニス部万歳!」

私の“甲南大学硬式庭球部 考”

大学 山本 (川上) 伸子

私が甲南大学でテニスに明け暮れていたのはもう半世紀ほど前の“昭和時代”・・・。

その時代には「それが当たり前」と思っていたことが、今思うと「?!」なことがたくさんあるので、創部100周年のこの機会に少し思い出し事実を考察してみました。

①【事実】私達の時代女子は、現在の1号館南側という人通りの多い1等地?にあるコートで日々練習に励んでいた。クレーコートだったためライン引き・コート均し・水まき・雨後の水取り・ローラー引き・冬場の石灰撒き等々、今ではほとんど必要のないコート整備が1年生の日々の必須事項だった。特に「ライン引き」は、目印に合わせて二人でロープを張り、水で溶かした石灰を専用のポットでロープに沿って引くという作業だったが・・・代々続く作業のためポットの刷毛は摩耗してすでに跡形もなく、毎回キャンパス内の“松葉”を調達していた?!

⇒【考察】そのように教えられ深く考えずに毎回松葉を拾っていたが、そのお陰?で何か不具合があっても「とにかく何とかしないと・・・」と考える癖と発想力が鍛えられた?!

また、代々の先輩の「ベストタイム」があり、「1秒でも早く!」と競っていたため同期の結束力強化に繋がった。

②【事実】練習の合間の“水撒き”が必須だったがホースがなく、バケツで水を汲み、水たまりができないよう霧状に撒く技術が要求

された。最初は水たまりを作っては素早く水をとるという何とも効率の悪いことを繰り返していたが、早くしなければという緊張感の元、上達も早かった。

⇒【考察】この技術?に関しては後々他で役立つことはなかった(苦笑)

③【事実】時々、校外にあった男子の練習コートに行くことがあり、練習ボールの入った大きなゴミバケツ2個・トンボ・大きなやかん・湯呑等をリヤカーに積んで、国道2号線を天井川の辺りまで短いコートを履いて移動していた。

⇒【考察】当時は毎日の練習の疲れも手伝って、周囲の状況などに気を配る余裕もなかった?

卒業後に同じ道を車で通ることが多々あったが、「こんなところをよく平気であんな格好をして歩いていたなあ」と恥ずかしい思い出の一つ(汗)

④【事実】夕方のスマッシュ練習の時、同期の一人が「暗くてボールが見えない・・・」とポロっと漏らしたところ、ある先輩に「見ようと思ったら見える!」とボソッと言われた。同期の言葉は私達全員の思いだったため、先輩の言葉でピシッと緊張感が走った。

⇒【考察】その後「風が強い」「暑い」「寒い」「コートが凸凹」などの状況に遭遇した時にふと思い出し、気を引き締める言葉となった。

このように学生時代には「辛い」「しんどい」と思っていたことも、その一つ一つが“今の私”を作っている大切な経験だったと思える歳になり、改めて創部100年の重みと小さいながらもそこに存在していたという誇りを感じています。これからも甲南学園硬式庭球部がずっと輝きを放ち続けていられるよういつまでも応援しています。



▲ 23回高校卒業アルバムより



▲ 23回大学卒業アルバムより

高校 1974(S49)年卒

九鬼 孝 坂口 嘉雄 難波 徹 橋本 滋 馬場 恵蔵 横田 彰公

大学 1978(S53)年卒

男子 橋本 滋 橋本 昌一 豆鞆 恒平 明慶 俊一 林 恒之

女子 朝井(松本)弘子 富岡(橋本)悦子

甲南テニス部100周年記念

高校・大学 橋本 滋

橋本滋(24回(昭和53年)大学卒業)と申します。甲南テニス部に中学・高校・大学と10年間お世話になりました。その思い出を書き綴りたいと思います。

甲南中学に入学し、テニス部の門を叩きましたが、練習が大変に厳しかったことを今でも鮮明に覚えています。4月には新入部員は50人程いましたが、夏休みが終わる頃には3人に減っておりました。同期が減ってしまったことに寂しさを感じるとともに、厳しい練習に耐えて残った仲間達との絆が深まったのも事実で、その後の3年間は大変に充実したものとなりました。

高校においては、坂口、難波、馬場、横田、九鬼という仲間恵まれました。高校でも厳しい練習をした結果、西尾先輩を中心とした1つ上の先輩達が、インターハイにおいて柳川高校に次ぎ準優勝を果たしました。我々は、先輩達の雪辱を晴らすべく、練習を重ね、インターハイ県大会では単・複・団体で優勝することができたものの、全国大会においては、宿敵柳川高校にベスト8で敗れ、再び苦杯を舐めることとなりました。

今だから話せることですが、中学・高校と厳しい練習に明け暮れていたため、大学でテニス部に入るかどうか迷ったことがありました。そこで、大学テニス部で主将をされていた中川先輩に相談したところ、「10年間一つのことを頑張ると、必ずなにか良いことがあるから入部しろ」とアドバイスをいただき、入部を決意しました。

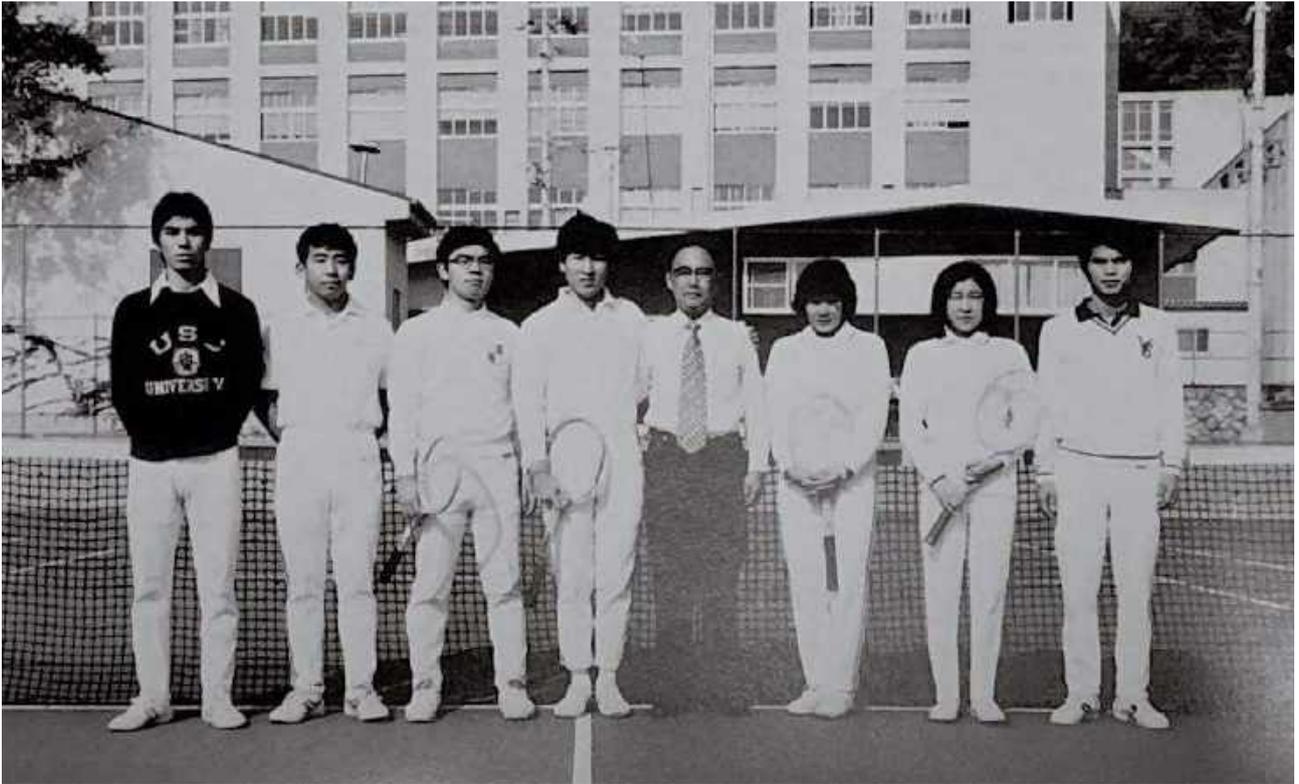
そして、大学からの新しい仲間、林、豆鞆、橋本昌一、明慶と共にテニス漬けの4年間を過ごしました。同期、先輩、後輩に恵まれ、大変充実した4年間でしたが、実は、私の学生テニス生活で最も悔しかった出来事も大学時代に起きました。

大学時代の最大の目標は、団体王座の獲得でした。私が大学4年次のときの甲南大学は、全日本の資格を持った選手を6人抱えており、優勝候補の筆頭でした。しかし、関西1部予選で、近畿大学に4-5で負けてしまい、主将としてチームを全国に導くことができませんでした。私がシングルスで負けてしまったのが最大の敗因だと思っています。このことは、40年経った今でも、年に何回か思い出すほど悔しかった思い出です。

振り返ってみますと、同期、先輩、後輩との出会いに恵まれ、厳しいながらも充実した10年間を送らせていただきました。皆様には感謝しかありません。



▲ 24回高校卒業アルバム



▲ 24回大学卒業アルバムより

なお、テニス部を引退して就職活動をしていたとき、甲南大学の後輩が、インカレでシングルス・ダブルス共に優勝してくれました。そのことは新聞でも報道され、偶然にも、その翌日に、私の第一志望の会社の面接がありました。面接官は新聞を見ていたようで、「君はこの主将だったの？ 凄いね」と言われ、トントンと内定を頂き、その後定年まで楽しく仕事を続けることができました。どうも、大学入学時に中川先輩からいただいた「10年間やればなにか良いことがある」というアドバイスは正しかったようです。

テニス部の思い出

大学 林 恒之

私が入部したのは2月末入学前。強いクラブに入れば強く成れるの思いから軟式の経験のみで入部。合宿も参加。ただ一生懸命やれば強く成れるの思いだけでひたすらやりました。

今となれば方向性指針なしのがんばりは辛かったな。後の人生における底なしの体力と耐える力が最高の財産かな？ 楽しかったのは練習後の仲間との食事かな？OB監督が恐くて、強く成りたい。旨く成りたいどうすれば良いですか？と聞けなかったのが最大の後悔。

監督もOBも何一つ技術的なことは教えてくれなかったなかで、柴田さんだけがいくつか自分の気がつかなかったこと、知らなかったことを教えてくださったのが嬉しかった。いまだにここにひびきます。

高校 1975(S50)年卒

森本 真 藪田 真彦 吉田 一宏 吉田 昇生

大学 1979(S54)年卒

男子 大谷 洋裕 牧野 隆一 吉田 一宏 吉田 昇生

女子 阿部(田頭)佳子 落合(松島)敦子 名和(松田)順子 袴田悦子 原(西尾)元子



▲ 25回高校卒業アルバムより

甲南テニス部に入って

高校・大学 吉田 一宏

甲南中学に入学し、いろんな部活があるなか、雑誌でテニス部が強いと知っていたので入部を決めました。思い起こせば中学・高校・大学と10年間で走馬灯のように思い出されます。中学1年の時は、練習を高校と一緒にやっていたという事もあり、先輩の球拾いばかりで右に左の毎日でした。1日ラケットを持てるのは7分だったのが思い出されます。練習中は真夏でも水を一切飲めない毎日が続き、いかに練習を休むか、いつやめるかという事ばかり考える毎日でした。そんな毎日が続き、2年生・3年生と上級生になっていく中で高校と一緒に練習はハードすぎてやめたいとか不満が出てきました。一緒にやるからこそ上達するのが早いのですが、そんなこともわからず自分たちの言い分ばかり言っていたのもなつかしい思い出です。

高校になるとインターハイ(団体)に出場する事が当たり前のような事だったので、まだ1年生・2年生の時は、“あゝ今年もインターハイにいける”という気持ちでいましたが、キャプテンの3年生になれば、いままでの伝統を守っていかなければというプレッシャーとの戦いでした。

運よく私たちの時代は、同学年・後輩に恵まれて比較的力のある者が揃い、県大会もそれほど苦しまずに勝てたような記憶があります。次は全国制覇を目標にインターハイに行くわけですが、当時

10連覇以上の成績を残す福岡・柳川商業の存在がありました。ここ2~3年決勝まではいけるのですが、最後にやはり柳川に敗れ、準優勝というのが続いていました。

今年こそはという思いでメンバー編成などいろいろ顧問の先生を交え作戦を考えたものでした。やはり結果は例年と同じく決勝で負け準優勝に終わり、悔しさと“柳川には勝てない”という思いでいっぱいだったのを覚えています。

大学はそのままのメンバーが上り、体育会の為当然厳しい毎日でしたが、上下関係の枠を超え教え合い、相談し合って来たのを思い出します。又、OBの方にも熱心に指導頂き、関西では常に上位を占める位置にいる事が出来ました。

そういうメンバーで大学王座(団体戦)には十分な期待をもって臨みましたが、柳川メンバーも揃って中央大学に進学し、またしても高校と同じ対戦になると予想できました。

ふと、脳裡に負け続けている記憶がよみがえりました。予想どおり大学王座では両校とも順調に勝ち進み、決勝でまたしても同じ顔合わせとなりました。

しかしながら、高校と違い9ポイント制(シングル6・ダブルス3)となる為、皆勝てるチャンスはあると考えていたと思います。宿舎でレギュラーでない者も含め意見を出し合い、色々考え試合に挑んでみましたが、またしてもインターハイと同じように準優勝に終わってしまいました。

しかし4学年全員で色々意見を出し合い考え、練習から試合へ臨んできたので、充実感と悔しさとなぜか達成感に加え、自分達は少しでも成長出来たとさすがしく帰ったのを覚えています。

勝つ喜びと負ける悔しさ、練習の厳しさ、チームワークなどたくさんの事を教えてくれた10年間でした。今思えば非常に充実した時間を、かけがえのないメンバーとすごせた事は、私自身の誇りであり財産である事に間違いありません。

有難うございました。

「カッコいい」を目指して

高校・大学 吉田 昇生

お陰さまで、インターハイ団体準優勝・シングルス準優勝、大学王座決定戦準優勝・インカレ室内単複優勝とチームメイトと共に活躍させていただいた。

思い出すと同級生の吉田一宏君と、高3から大学の練習に参加

した日々が懐かしい。2月、大学の練習はハードで当初は両足を痙攣させながら走っていた。その頃、硬式テニス部女子（関西リーグ1部）・軟式テニス部男子・軟式テニス女子と4団体で岡本キャンパス内テニスコート2面（現図書館）・住吉川テニスコート2面を共有していた。そのため練習はボール（通称・ズタ）を担いで兼松江商テニスコート（コープリビング南側）と学内コートとを移動しながら行われていた。

3月には、広島合宿、香櫨園テニスクラブを使用した芦屋竹園旅館でのレギュラー合宿と順調に行われた。移動しながらの練習であったが、4学年を合わせてもプレーヤーが十数人と少なかったため、納得いくまでコートを使用させてもらい、OBの方々から多くのことを教えていただける恵まれた環境であった。

4月の1部リーグ戦（4校制）を迎え、対戦する3校ともダブルスNo.1が全日本出場ペアに対し、甲南は「インカレ+無資格」と不利なメンバーであった。しかし、関西学院大学に負け王座出場を逃したものの、近畿大学に勝利し1部2位となった。この結果は4年後の後輩たちが果たした王座優勝に繋がっていったと思う。

河盛純造監督、那須一郎さんをはじめ多くの先輩方から「甲南はカッコよくしなさい」とも教わった。「カッコいい」は見た目だけでなく、対戦相手や審判を敬う、自らの責任が取れる、一生懸命物事に取り組む、仲間を大切するなど、プライドがもてる振舞いをするということである。「健全な常識をもった世界に通用する紳士淑女たれ」から繋がる教えである。平生八三郎先生からの教えを伝えていただいた先輩方に感謝するとともに、これからの後輩にも誇りをもって「カッコいい」を伝えてもらいたい。

100周年を心からお祝い申し上げます。

かけがえのない時間

大学 原（西尾）元子

甲南学園硬式庭球部100周年、おめでとうございます。この歴史の重みを、ただだか大学4年間を過ごした者が語るには、些か荷が重すぎる感は否めませんが…。

何と言っても日本のテニス界で華々しいキャリアを持つ男子に対して、女子は何だか華麗さに欠けた、泥だらけでボール拾いをしている地味な存在でした。それでもクレーコードでの石灰で引く線引きは、男子がとても上手で、秘訣を伝授して貰いながら、それがとても意外だったの覚えています。

まだ1、2年生の頃、猛暑の夏でも寒い冬でも、早朝からクラブに通う毎日。岡本駅から大学までの道のりで誰ともなく「ねえ、生まれ変わってもクラブ入る?」と言い出し、全員答えはすかさずNOだっ



▲ 25回大学卒業アルバムより

たのを覚えています。入部して何人かは辞めて行った中で残った5人。ここで自分が辞めたらボール拾いやコート整備でみんなが困るから…その思いだけで通い続けた日々でした。

私たちの学年が幹部になったときの目標は〈2部への昇格〉以外何もありませんでした。その1年間は彙にもすがる思いで初代女子の坪川さんにご指導をお願いして、男女問わず沢山の卒業生の方々に練習に来て頂きました。

当時の顧問の和田邦平先生に、毎年男女一緒に行く広島合宿をどうか女子だけで大学のコートや近くの公園のコートでさせて下さい、とお願いしに行きました。そんなことは歴代無いことだから、と最初は訊いて頂けなかったのですが、ご家庭のある女子の先輩方にどうしてもご指導頂きたい、と諦めずに懇願した甲斐あって実現することが出来ました。

ただ当時の下級生達はリヤカーを引いて岡本の街中をよく歩いてくれたと、今思い起しては感謝しても足りません。勿論、坪川さんのお声かけのお蔭で日替わりで沢山の先輩方がご指導に来て下さいました。

本当に多くの皆さまのご協力のお蔭で2部に復活出来た日の事は忘れられません。表か裏か分からない程日に焼けた年頃の娘に、「もう、毎日毎日山のような洗濯物ばかり! 私は貴女をテニス学部に入れたつもりはない。」と怒りながらも、その日はとても喜んでくれた母（現在92歳）にも今更ながら感謝しています。

その日からもう45年が経ち、今また、坪川さんのご紹介で芦屋国際ローンテニス倶楽部で第2? 第3? のテニスライフを楽しんでいます。試合で各地に遠征に行きますが、先日現役の頃にお世話になった先輩が応援に来て下さり、「甲南のテニス部に入って良かったよね。」と言って下さいました。今となっては辛かった思い出は何処に消え去り、懐かしい思い出ばかりです。

最後に…やんちゃな主将の私を陰で支えてくれた副将の田頭さん、時間には厳しくしっかり者だった松田さん、心優しくいつも皆に心配りをしてくれた松島さん、そして明るくひょうきんでいつも皆を和ませてくれた袴田さん、貴女たちと一緒に過ごせた4年間はかけがえのない時間でした。この場をお借りして、本当に有難うございました。

高校 1976(S51)年卒

江見 浩平 桑田 正彦 中舎 敏明 仁木 信夫 廣部 雅仁 蓬萊(白石) 政次 望月 英四郎

大学 1980(S55)年卒

男子 江見 浩平 酒井 龍二 至田 保彦 仁木 信夫 廣部 雅仁 藤岡 克朗 蓬萊(白石) 政次



▲ 中高6学年の集合写真

テニス部の10年間

高校・大学 仁木 信夫

甲南学園硬式庭球部100周年おめでとうございます。私は、S45年4月甲南中学校に入学しました。入学時から既に52年の歳月が経っていますので、その当時の出来事やエピソードの年次・日時が多少ずれているかもしれませんが、ご容赦ください。

私は硬式テニスと言うスポーツに全く興味が無く、当然経験もありませんでした。テニスは女性のするスポーツだと思っていたからです。しかし、甲南テニス部と言えば全国レベルの強さを誇る有名なクラブである事を知り、数日悩んだ末テニス部に入学する事を決め、勧誘を待っていました。ところが勧誘は無く、不思議に思いながらも自ら志願致しましたが、勧誘が無かった理由が直ぐに解りました。

何と新入生180名中60名以上の生徒がテニス部に入学して来たのです。6限目の授業が終わると同時に、新入生はテニスコートへ走ってやって来ます。やはり強くて有名なクラブは、勧誘などなくても部員は集まるのだと納得した次第です。しかし、その人数も日を追うごとに少なくなり、夏休み前には10数名になっていたと思います。夏休みに入り益々練習時間も長くなり炎天下の下、水も飲めず、球拾いにコート整備・草抜きと辛い日々が続きましたが、頑張っ

て耐え抜きました。やっと長い夏休みも終わり、2学期が始まる時点では10名の新入生が残っていました。頑張っ

て耐え抜きました。やっと長い夏休みも終わり、2学期が始まる時点では10名の新入生が残っていました。頑張っ

て耐え抜きました。やっと長い夏休みも終わり、2学期が始まる時点では10名の新入生が残っていました。頑張っ

て耐え抜きました。やっと長い夏休みも終わり、2学期が始まる時点では10名の新入生が残っていました。頑張っ

トを握ることが出来なかったと思います。彼は甲子園クラブでテニスの出来る環境にありながら、ラケットの握れない1年間をよく我慢し、耐えたと思います。やっと下級生が出来たと喜んでいた時期に、同期の山本君・堀内君・江並君の3名が残念ながら退部して行きました、理由はよく覚えていません。

中学3年生になる年、どう言う訳か中等部のキャプテンに私が指名され、断ることが出来ないまま、何も考えずに引き受けてしまいました。それから暫くして問題が起こりました。我々中学3年生全員が、西尾さんの下級生に対する立ち振る舞いに納得できず、退部を覚悟に異議を申し立て、高校生の部室へ行きました。数時間のやり取りがあったと思いますが、その日は結論を出さずに一晩考える時間を設けると言うことで帰宅し、翌日もう一度高校生の部室に呼ばれ、西尾さんの考えを聞かせて頂きましたが、我々の考えとは相違がありましたので、全員退部を覚悟したと思っておりました。

ところが、望月君が退部しないで残ると答え、白石君、桑田君、廣部君、中舎君、阪田君の5名は退部と返答したのです。私は悩んだ末、望月君を一人にはできないと思い、残る決心をしたのですが、他の5名を裏切った格好になってしまい、非常に辛かった思い出が残っています。望月君と二人になった期間は只々寂しかったので、何をしていたのか全く記憶に残っていません。中学3年間のテニス部生活で、一番きつくて辛かったです。しかし数か月後退部した5名も全員戻って来てくれたので安堵し、更なる覚悟を持つことができました。その後、神戸クラブでテニスをしていた吉田昇生さんと、その翌年江見浩平君が入部して来た様に記憶しています。またこの二人のレベルも非常に高く、甲南テニス部と全部員のレベルアップに繋がったので大変感謝しております。

高校2年生になり、テニスも少しは上達して来た様に思うのですが、私ぐらいのレベルではレギュラーメンバーには程遠いものでした。そしてこの年も甲南テニス部はインターハイ団体準優勝、優勝は福井烈君も在籍している福岡県の柳川高校でした。私のテニス部在籍中(中1~高3)インターハイ団体戦は、毎年柳川高校テニス部に破れ準優勝でした。

高校3年生になり、キャプテンに指名されレギュラーメンバーにもやっと入ることが出来、県大会団体戦で試合にも選手として出場し、全国大会のキップも手にしましたが、全国大会では選手として出場は出来ませんでした。メンバーの好意で、インターハイ団体戦準優勝の慶應高校戦に出場予定でしたが、甲南テニス部は決勝で柳川高校に勝つ為に厳しい練習をしてきました。慶應戦で私の出場によって他のメンバーが不安になることを恐れ、藤原先生に出場辞退を申し出、承諾を頂きほっとしたことを思い出します。

そして慶應高校を順当に破り、決勝戦で柳川高校との対戦が決定しました。その夜(決勝前日)、甲南テニス部から法政大学テニス部に進まれた私の3年先輩の(T・Y)さんが、ホテルサンルート渋谷の宿舎に激励に来て下さいました。キャプテンの私が明日出場しないことを知るや(この話は47年前の事なので時効と言う事でお許しくださいませ)、夜の渋谷街に連れて行かれる事となり…。何をしていたかのご想像にお任せしますが、誉められたことで無いのは

明白です。宿舎に戻ったのは空が白む頃だったと記憶しております。少し横になった後みんなで決勝会場へ行きましたが、私は喉の渇きと睡魔で決勝戦の内容をあまりよく覚えておりません。確か江見君が福井君に破れ、中西君が古賀君に勝ち、桑田・白石君ペアが破れて、1対2で福井烈君率いる柳川高校に優勝をさらわれ、又しても全国2位と言う事だけは理解できました。今この文章を書きながら猛省しております。甲南テニス部メンバーの皆様、大変申し訳ございませんでした。

インターハイも終わり、気が抜けてしまったのか、私は続けて2回も停学処分を受ける事になりました。1回目は飲酒パーティーに参加していた事、2回目はカンニングほう助を行ったこと、この事は渋谷朝帰りの件を含め、全く、ほめられた事ではないのですが、学生時代のワルサも、思い出のひとつとして、しっかり頭の中に残っております。こんな失態をしてしまった私は、当然藤原先生や同期メンバーに退部を申し出ましたが、主将交代だけで許しを得ました。本当に感謝しております。この時ほど主将としての自覚の無さ・責任感の無さを嫌と言う程思い知らされた事はなく、同時に同期の優しさに感謝したことを思い出します。

その後、甲南大学に入学する為の推薦テストを受けるのですが、1回目の成績が芳しくなく、1年先輩で甲南大学硬式庭球部の吉田一宏さんに、何とかならないかとお願ひしましたが、なかなか難しいとの返事でしたので、実力で推薦テストをクリアしなければならなくなりました。ほとんどした事のないテスト勉強に精を出し、経済学部は無事入学する事が出来ました。

大学の入学式前から白石君、廣部君、江見君そして私の4名は入部していたのですが、入学式後、甲南高校バレー部主将だった藤岡克朗君が、どう言う訳かテニス部に入部して来たのです。今までテニスをした事もない彼の入部には大変驚きましたが、翌年、甲南高校バレー部主将だった田中政明君も、同じ様に藤岡君を慕ってテニス部に入部して来ました。彼ら二人は大学4年間辞める事無く、そして藤岡君は最終学年に副主将にまで成った、人望の厚い素晴らしい同期生です。現在は一緒にゴルフを楽しんでおります。大学テニス部のことも書きたいのですが、大学時代のことは副主将の藤岡克朗君におまかせします。



▲ 26回高校卒業アルバムより

最後になりましたが、私の65年の人生で唯一自慢が出来、また誇りに思う出来事を紹介して終わりにしたいと思います。私は「継続は力なり」を座右の銘にしております。中学一年生から大学四年生まで、テニスの名門かつ強豪校と言われてきた甲南テニス部に席を置き、日本一を目標に部員一丸となって、日々練習に明け暮れました。にも拘わらず一度も甲南テニス部を日本一にする事ができず、悔しい思いをして来ました。大学三年生の王座では、福井烈君がレギュラーメンバーの中央大学テニス部に破れ、又しても高校時代と同じ全国2位と言う悔しい思いを味わいました。しかし最終学年の王座で(S54年)、関東学生の優勝校早稲田大学テニス部を破り、甲南大学テニス部史上2度目の大学王座優勝日本一を、16年ぶりに勝ち取ることが出来たのです。

頑張ってきた努力が、願いが10年越しに叶い、甲南大学硬式庭球部員全員で大学王座優勝の喜びと歓喜を存分に味わいました。この事実はオール甲南テニスクラブ100周年史の中でも、たった2回しか成し得ていない偉業なのです。と今でも大いに自慢しております。

この様な自慢話が出来るのも、甲南テニス部在籍10年間に、大変お世話になった上級生の方々、苦勞を共にしたかけがえのない同級生、我々を縁の下で支えてくれた多くの下級生の皆さん、本当にありがとうございました。

テニス部の思い出

大学 藤岡 克朗

記憶を頼りに45年程前のことを徒然に書いていきます。

私は甲南中学・高校とバレーボールを7年間(皆より1年多く勉学に励んだ結果)やり通して卒業しました。大学入学後しばらくは、これから何をしようかと模索していました。スポーツと体力には多少自信があったので、体育会へと自然的に絞られました。次は団体競技ではなく個人競技を、更により強い部を目指した結果、硬式庭球部にしましたのです。6月に入部し、テニス初心者の練習の日々が始まったのです。

入部してみると、中学高校で同級生だった吉田昇生、吉田一宏が1年先輩で偉そうにしていました。同期は7名で甲南中高出身の故・江見、仁木、白石(現在は蓬萊)、廣部、九州小倉から来た下宿生の酒井、大阪の清風高校出身の至田という面子でした。1年後には中西伊知郎も迎え、テニスエリート集団の中に身を置いたのです。後にテニスの世界で吉田、吉田の名声実績を目の当たりにして、偉そうにしてもこれはしょうがないと納得したものです。

入部当時の主な練習コートは、大学正門を入ってすぐ左手にあったクレールコート1面、西校舎から住吉川へ数百メートルの所のクレールコート1面、離れた所にあった兼松のアンツーカー2面でした。間もなく西校舎すぐ下にハードコート3面が出来上がり、そこでの練習時間が増えていったのです。正門近くのクレールコートは樹木に囲まれ、

ボールの打音が校舎にこだまし、部外者が憩うには良いのですが、我々1回生にとって仕事量の最も多いコートでした。毎朝、石灰とロープを使って白線を引かなければならないし、樹木に囲まれていて落ち葉拾いに限がなかった記憶があります。今になっては残しておいて欲しかったコートです。西校舎のクレールコートでの思い出は、経緯はよく覚えていませんが、日本初のプロテニスプレイヤー石黒修氏と中西伊知郎が練習マッチ(1セットだったと記憶)を行った際、ボーラーをしたのです。その時コートには何故か私達3人しか居なかった記憶があるのです。次回中西に会った時記憶のすり合わせをしてみたいと思います。兼松のアンツーカーでは、バケツでの水撒き技術が格段に上達したものでした。バケツの水を満遍なく鋭く散らす技術です。そのための水がコート端のドラム缶に溜めてあるのです。当時は練習中に水を飲んだらあかん、日陰に入ったらあかん(真夏の炎天下でも)という上からのお達しを命がけて守っていました。水分補給は、トイレに行く時に飲む、顔を洗うふりをして飲む方法がありました。夏の練習中コート端のドラム缶の水で顔を洗った後よく見たらボウフラが居てギョッとしたこともありました。現在でもたまに一献傾けている当時近畿大学の主将だった松江英二郎君とお互い過酷な体験を自慢し合ったものでした。因みに彼らはコート横の川にボールが飛び込んだ時、川の水で顔を洗ったらしい。

そのような練習の日々を過ごした結果、3回生と4回生時には全国王座へ挑戦することができました。私はレギュラーにはなれず団体戦の試合には出ることはできませんでしたが、全員一丸となって王座決戦に乗り込みました。3回生時には、和歌山で福井烈が居る中央大学に敗れ準優勝、4回生時には、長野で早稲田に勝ち王座をとることが出来ました。

帰りの新幹線内で優勝カップにビールを注いだのも良い思い出です(よく覚えていませんが、新幹線はガラ空きだったと信じたいです)。数年前に王座を取った時の4学年で「日本一の会」を発足させ、当時の監督であった辻本豊OBにも参加いただいて会食をしたりしています。

他の投稿された方々の文章内容と重複したところがあるかもしれませんが、その際にご容赦ください。取り留めもない文章になりましたが、我々のテニス部が益々発展して行くことを願って止みません。



▲ 26回大学卒業アルバムより

全日本大学対抗庭球王座決定試合〔男子33回〕

6月2日～8日
松本市長野県営テニスコート

甲南大学・白石 政次



このたび甲南大学は王座決定戦に於いて16年ぶりに2度目の優勝を成し遂げることができました。長い王座の歴史の中で幾度も決勝戦に臨みながら、優勝の壁を破ることができず涙を呑んだ先輩方あるいは関西リーグで夢を砕かれた先輩方が数多くおられます。そういったOB諸氏の思いや現役のしゅうねんともいえる気迫が優勝という夢を現実のものとしたのではないかと思います。

「昨年第3期黄金時代といわれた最強メンバーを揃えながら不運にも中央大学に決勝で敗れて以来、私は今年がラストチャンスと心秘かに思い続けてきました。何故幾多の

名選手を輩しながら団体戦に於いては過去1度しか日本一の座につけなかったのか？ はっきりとした答を出すことができませんでした。しかし思い悩む前にまず練習やランニングの量をふやしました。必死で走っている間に何かつかめるのではないかと思ったからです。とはいっても、「こんなに練習して本当に勝てるのだろうか、もし負けたら……。」という不安や焦りが私を悩ませた。」事後私は、この春リーグ戦終了後オーバーワークによる筋肉炎で春の個人戦を棄権しなければならませんでした。いくら練習量を増やしてもそれによって健康を害するようではスポーツマンとして失格ですし、パートナーである仁木君や部員に迷惑をかけたことで私は大いに自信を失くしてしまいました。そして王座決定戦までに全快するかどうかはわかりませんでした。そんな時部員の心遣いや、学連OBの方々の励ましの言葉にどれだけ勇気づけられたかわかりません。最後に、私が中学1年からテニスを始めて今日まで、数多くの試合で、勝った時には戒め、負けた時には励まし、試合を控えて眠れぬ夜には安らぎを与えてくれたイギリスの詩人ルジャード・キップリングの詩を、それに対するテニスの神様チルデンの言葉を引用して結びたいと思います。参考までにこの詩は、あの有名なウィンブルドンのセンターコートの入口と、ウエストサイドテニスクラブのスタジアムの入口に記されているものです。

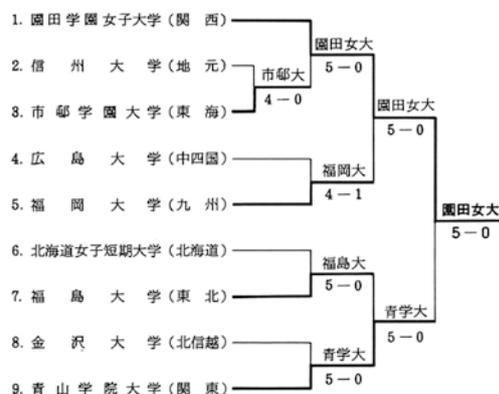
If you can meet with Triumph and Disaster And treat those two imposters just the same……

もし君が勝利と敗北という、このふたつのまやかしを全く変らぬ態度で迎えることができるなら……。

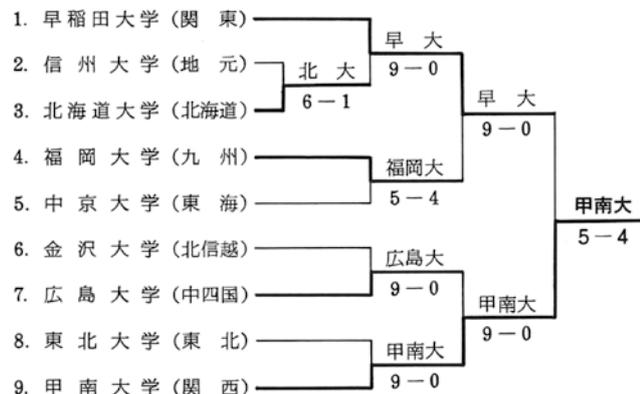
「この詩の中に、キップリングは、偉大なテニスプレーヤーが必ず持たなければならないものを、完全に描き尽くしている。そして米英両国のテニス協会は、それに対して賛意を表わしたのである。この詩はある一つの言葉を効果的に言い表わしている。即ち、勇気（カレッジ）という言葉だ。私がここで勇気という言葉を使う時、一般に度胸（ガッツ）という言葉で呼ばれる。確かに度胸という性質もチャンピオンにとっては必要だ。けれども、それは瞬間的なものであり、消え去りゆくものであり、勇気の全体像の中の極々小さい一部分を占めているにすぎない。

勇気とは、忍耐、哲人的態度、そしてはるかかなたに目標を描いて、それからじっと目を離さないでいる力などを言い表す言葉である。それは、失意、落胆、ありありと目に見える失敗などにかかわらず、自己の最終的勝利への確信を失わないことを意味するものである。」

〔女子〕



〔男子〕



▲ 第14回関西学生室内選手権大会パンフレットより

高校 1977(S52)年卒

市川 典男 大橋 紀寛 中西 伊知郎 弘世 晃嗣郎 三村 晃久

大学 1981(S56)年卒

男子 市川 典男 伊藤 英介 田中 政明 中西 伊知郎 弘世 晃嗣郎 三村 晃久

女子 大仲(奥田) 祐子 北陸 淑子 増尾(小林)由恵 吉川(久野) 真理子



▲ 27回高校卒業アルバムより

テニス部の思い出

高校・大学 市川 典男

私は甲南中学1年で入部しました。同級生で中1から大学卒業まで庭球部に在籍したのは中西伊知郎君と三村晃久君と私の3名だけなのですが、まあ、この三人のキャラクターが見事にばらばらでした。中西君は幼いころからの経験者で入部した時点で上級生を打ち負かすような実力者、三村君は未経験者ながら持前の運動神経でめきめきと実力をつけてきたプレーヤー。後輩にとってはそれぞれがよき目標だったのではないかと思います。それに対して私はというと名門庭球部に入部したこと自体が場違いの運動オンチ。持前の持久力で厳しい練習にはついていけないものの中2のデビュー以来公式戦で1勝もできないありさま。中3で裏方中心のプレイングマネージャーの役が回ってきました。でも結果そのおかげで10年間在籍し続けることができたのだと思います。というのも当時なぜか庭球部は顧問の先生もほとんどノータッチ。日々の練習は最上級生のもとで行っていましたし、部費の管理から遠征の手配まで生徒の私が行い全国大会にも同行していました。ですから高校の夏休みは練習よりも遠征先での応援の思い出が多く残っています。

その中でも一番は高校2年のときのインターハイ東京大会での団体決勝。対戦相手は前年も決勝で惜敗している柳川商業。相手のシングルスNo.1は超高校級の福井烈さんだったものの、甲南も中西君のシングルスNo.2で確実に一勝が見込めたために、勝敗はダブルスの白石(蓬萊) 桑田組に託され、一時はマッチポイントを握るまで追い詰めたものの逆転負けを喫しました。多くのOBの方も

応援に来ていただいている中で部員全員が泣き崩れたのを忘れません。

そんな悔しくもあり楽しかった高校生活も終わりに近づいたある日、吉田昇生さんに出会いこころ声をかけられました。「おい、市川! いつから大学の練習に出てくるんや? もう中西も三村も来ているぞ」「みんな大学でもう一度日本一を目指そうと頑張ってるんや、だから大学でもお前にマネージャーをやってほしいんや」と、もちろんその時点で私には大学でテニス続けるなど選択肢にありませんでしたが「もう一度日本一を目指そう」と言葉にひかれて入部を決断しました。そして3回生の時に蓬萊主将のもと、宿敵柳川勢で構成された早稲田を破り王座となりました。

1回生で主務になってわかったのは高校のマネージャーと大学の主務では責任も守備範囲もけた違い

に大きいと言うこと。さらにはその年、「オール甲南テニスクラブ」が発足しOBとの窓口業務も広がりました。流石にこれだけの仕事を一人でするのは無理と考え、まずは足固めとして学連への出向を弘世晃嗣郎君に、体育会本部は伊藤英介君(故人)にお願いしました。翌年には西尾(高井) 義輝君が副務として、下村(黒田) 慶子さんが女子マネとして加わってくれました。他にも当時はレギュラーもイレギュラーも関係なく部員全員が「日本一」という一つの目標に向かっていただけからこそ悲願が達成できたのだと思います。

甲南学園庭球部100周年記念にあたり

高校・大学 中西 伊知郎

甲南学園硬式庭球部100周年おめでとうございます。

事務局から記念誌への寄稿依頼を受け、甲南中学、高校、大学と10年間硬式庭球部で活動してきた中で、特に印象に残るのは団体戦での戦いです。

中学入学と同時に庭球部に入部し10年間の庭球部生活が始まるワクワク感を覚えた記憶があります。甲南では中高が一体となって部活動が運営され、当時の先輩諸氏が中学生の面倒を見ながら、全国大会(インターハイ)優勝を目指し厳しい練習の日々を送っていたのを今でも思い出します。私も同期と共に高校生になったら、「自力がついてくれば自然と全国大会優勝を目指すような気持ちになるのだろうな」と漠然と目標を持ったように思います。

高校生になるとはっきりと目標は「全国大会（インターハイ）優勝」となり、当時は九州の柳川高校が全国大会優勝の常連校として名を馳せていました。「打倒柳川」を合言葉にOBの方々をはじめ部員が一丸となって厳しい練習に取り組んだことは今でも鮮明に覚えています。私は幸いにも1年生からレギュラーメンバーでしたが、レギュラーはほんの一部（4名）でしかなく、当時の中学生、高校の同期（三村君、市川君、弘世君、大橋君）、諸先輩に支えていただきましたが、絶対的エースの福井烈（つよし）選手を擁する柳川高校に惨敗し、準優勝に終わり悔しい思いをしました。

2年生の全国大会も柳川高校に敗れ、3年生では県大会で報徳学園に負け全国大会への出場を逃してしまい、残念な気持ちで仕方がありませんでした。

中学、高校での6年間の庭球部も終え息つく間もなく、大学の練習に参加することになりました。当時は大学内にクレートコートが2面、住吉川沿いにクレートコートが2面、新設のハードコートが3面と、大会に応じ7面のコートを使用していました。大学の庭球部には高校からの同期に加え新たに田中君（高校時代はバレーボール部）、伊藤君が加わり同期は6名となりました。大学庭球部もOBの方々、部員が一丸となり「大学王座優勝」を目指し練習に明け暮れた毎日でした。

大学1年時は関西学生リーグで敗退、2年時は大学王座決定戦に進出する準優勝と、なかなか結果がでず悶々とした思い出があります。3年時になりようやく大学王座を優勝することができました。「選手は力を出し切り」「応援部隊は勝利を信じ、目いっぱい応援をする」これぞ「甲南学園庭球部」の良い面と思った瞬間でした。

4年時にはキャプテンを指名され連覇を目指しましたが準優勝に終わり、10年間の庭球部生活を苦しくも楽しく終えることができました。これも中高大10年間マネージャーとして頑張ってくれた市川君、学生連盟の役員として学生大会他を企画運営してくれた弘世君、自治会体育会本部で活躍してくれた伊藤君、日々の部活動を一緒になって支えてくれた三村君、田中君に感謝です。

中高大と10年間テニスに打ち込むことができたのも良き同期、諸先輩に恵まれたおかげと感謝しています。卒業後は庭球部にかかわることも少なくなっていますが、現役の皆さんの活躍を期待しています。

テニス部に感謝

大学 北陸 淑子

大学卒業から40年以上経過して何を書けばよいか? 思い出すのは入学当初のこと。

中・高の6年間、陸上部で走ってきた私が大学で、何も知らないテニス部に入ったのは、ただ運動をしたいという一念だけだったように思います。打ち方、ルールは勿論、ボールの渡し方さえ知らず、ノーバウンドで投げて目を丸くされる。ボールに向かって走り出すと

ストップできず、隣のコートの邪魔をする有様です。解らないことだらけで、落ち込みの毎日でした。4月に10名以上いた同級生が、少しずつ減っていき、することが増えていく。

1回生の夏合宿(?) だったと思います。足裏のけがで参加できなかった私は、一人抜けたら大変なことが解っていないながら、皆が「大変だった!」と言った時に「怪我して良かった」的なことを言って、総スカンを食った記憶があります。「ごめんなさい」ですよ〜

一人学部も異なり、遠方から2時間かけて通う私は、同期には無茶苦茶わがまま、自分勝手な存在だったと今更ながら思います。

しんどい、苦しい、悲しい、なんてことの方が、人の脳は詳しく覚えていてようで、楽しい思い出はと考えると思い出せない。そこで昔のアルバムを出して見ると、そこかしこに笑顔の自分がいるのにビックリ! 「新入生歓迎旅行」「学園祭、屋台の甲南そば」「同期4人でのスケート」

「新年会を我が家で開催」1回生から3回生まで全員が、こんなに田舎で、雪深い、かやぶき屋根の我が家に集まって、大騒ぎをしている。皆はどうやって来たのだろうか? 駅から3キロも歩いて来たのだろうか? なんて考えても覚えていない。1枚、1枚アルバムをめくりながら、懐かしく回想できたのは嬉しいことでした。

現在もテニスを続けられているのは、技術と厳しさを教えてくださった先輩、友情をくれた同期、笑顔の後輩。そしてテニス部に感謝です。



▲ 27回大学卒業アルバムより

関西地域代表

男子

甲南大学



紹介文

今年もやってきました。我々甲南大学硬式庭球部、激戦地区関西リーグを制覇し、三年連続、六度目の出場です。昨年、主将を勝ち取ったその瞬間から、「二年連続全国制覇」への戦いが始まっていたのです。この一年間、中西主将の下に部員一同にはしむ様々なきびしい練習に耐えてきました。つらい日も、苦しい日も、優勝、だけを合言葉に……………

▲ 1980年度全日本大学対抗テニス王座決定試合パンフレットより

高校 1978(S53)年卒

石田 将人 石本 幸一郎 北川 晃男 坪田 克彦 直木 隆明 前田 昭 松村 義幸 溝本 一人

大学 1982(S57)年卒

男子 井上 正美 上村 敏郎 坪田 克彦 直木 隆明 西尾(高井)義輝

女子 岡本(橋本) 郁子 河上(高木) 弘美 下村(黒田) 慶子 福井 裕子 山中(今村) 祐子

中高テニス部の思い出

高校 石本 幸一郎

私は、中学・高校の6年間を「甲南テニス部」にお世話になりました。思い出すままに書いてみました。

中1初めての練習で、西尾さん、山根さん、渡辺さん、沼田さん(高3) 難波さん、橋本さん(高2) がコートですごいラリーをさせているのを見て何とも言えない緊張感がありました。(これからこんな大人と毎日練習か)

45分間の昼休みは早弁をしてコート整備、近くの松林から松葉を拾ってきてラインを引く漏斗の先にセット。なかなか難しかった。(中学生の仕事でした。高校生は昼休み)

罰はいろいろ。花屋、小学校走ってこい。高2、高1、中3、中2それぞれからの「説教」(その間ずっと正座)。反省文5枚、明日までに書いてこい、坊主してこい、などなど。

(ちなみに私、中1から中3まで元々坊主でしたので最悪の罰は無し笑)

そんなテニス部なので、我々の学年国語教師の荒木先生からお前らは“軍隊か”と言われていました。(誰の親も問題なし。現在であれば。。。。)

高1の時に東京ヘインターハイの応援に行き、決勝戦で柳川高校に負け、悔しい思いをしました。(が、その後、渋谷、原宿、六本木で遊んで楽しかったなあ)

高2では県大会で負けてインターハイには行けず、高校生全員坊主になりました。(みんな坊主かスポーツ刈りかわからなかったなあ)

夏休みの練習でクーラーボックスにビールを冷やしていたら、めったに来ない顧問のロク(渡辺先生) がやってきて、アツいなあとクーラーボックスを開けました。思わず「皆で先生の為に冷え冷えビール用意しました」 チャンチャン(冷や汗)

その後は、先輩も引退し、これ幸いと夏休みバイトして与論島へ旅行。高3の一部はレギュラーたちと後輩により多くの練習をしてもらうため自主引退して勉学に励みました。

(単位ギリギリ大学無理か、しかし荒木先生に頼み込み、単位いただきました。感謝)

大人になりふり返ってみると、特に中学時代の練習の厳しさが役に立ったとテニス部と先輩方に感謝します。(テニス部の同期・後輩・先輩・よき友に恵まれて本当に感謝)

最近あらためて思うことは、6年間ご指導いただいた石井義仁校長先生は「德育・体育・知育」を教育現場で実践されていた。感謝。

数年前から甲南の伝統でもある六甲登山を毎月続けています。(有馬温泉とビールがたまりません。)

還暦を過ぎたこれからは、德育を持って地域に少しでも役に立てる事を、楽しみながら行っていきたくと考えています。



▲ 28回高校卒業アルバムより

私の大学時代の思い出

高校・大学 直木 隆明

私は中高大と10年間、甲南テニス部で過ごしました。中高は8人でしたが、大学に入っても続けたのは坪田君と私の二人でだけでした。大学では兵庫県の他校でテニスをやっていた井上君と上村君の二人と甲南出身で中高バドミントン部だった高井君(現姓西尾君)が入部して5人となりました。

当時大学のテニス部は、甲南高校テニス部出身の人が大半を占めており、実力も関西学生はもちろんのことインカレ上位レベルの方が多数おられました。コートは西校舎前のハードコート3面と住吉川沿いのクレー2面でハードコートをメインに利用していました。

大学の練習は、高校放課後の3時間程と違って1日中やっていて、必須科目の授業の時だけ練習を抜けても良いという形で、毎日の練習時間が半端なかったです。

中高6年間テニス部で培った体力と精神力にはそれなりに自信がありました。が、精神面では高校で上級生になると指示命令されることも無くなり、中学時代の下積みの苦しかった経験もすっかり忘れていました。それが大学に入ると1年生は雑用から球拾いから何から何までやらなければならない、練習時間の長さや併せ、まさしく地獄の始まりでした。

1年生の春合宿は確か浜松だったかと思いますが、まだ坪田君と高井君の3人で参加したため1日中球拾い(1年生が打てる時間は1日30分程度だったと思う)、宿舎までかなり距離があったと思うが、古ボールが入ったズタ袋を担いで休む暇もなく、地獄の合宿を過ごした記憶



▲ 1978年関西学生室内庭球選手権大会パンフレットより

があります。当時王座で優勝することが目標でしたのでその練習量も質も半端なかったと思います。

運よく私は1年生の夏に関西学生の本戦に上がることができたので本戦直前の2週間程は練習中にコートに入る時間も増え、本戦出場の先輩方と乱打する機会に恵まれましたが、これがまた地獄でした。少しでもミスをするとな「練習にならない!」と怒られ、今までに感じたことがない、試合以上のすごい緊張感の中で練習をした記憶があります。この時に高校テニスと大学テニスの違いを肌で感じたと思います。当時のリーグ戦は5セットマッチをやっていたので、それに対応できる体力と精神力は必須でした。

2年生の時は蓬菜さんという鉄人のような方が主将になられて、練習量も質も半端なかったですが、冬の早朝トレーニングの際には、三宮⇄岡本往復マラソンと芦屋浜まで走ってのサーキットトレーニングを一日おきにやり続け、普段の練習後のランニングでは住吉川を下流近くまで往復しサーキットトレをやり、また雨の日はフリーになることを秘かに期待していましたが、校舎内のスロープ(7、8階?)を永遠に走って、いつ終了するかは蓬菜さんしかわからない地獄のトレーニングをやっていました。その甲斐もあってその年に念願の王座優勝!!を勝ち取ることができました。

目標を高く持って限界を自ら作らず、毎日継続してやる努力の大切さとその先にある喜びを学び、これは社会人になっても貴重な糧となっています。

また辻本さん、柴田さん他OBの方々も熱心にコートに来てくださり、基礎練を徹底してやっていただいたお陰でスマッシュ逆クロスは今でもミスしません(笑)

現在も甲南テニス部と一緒に過ごした個性豊かな(笑)先輩・後輩・仲間達や他校の大学テニスの仲間達とテニスをしたり、色々な場面で再会したりして楽しく過ごさせていただいています。

大学卒業して40年経ちますが、同じ時代を過ごしてきた仲間と会うと今でもその当時に戻って、お互いが楽しめることは有難いことで凄いことだな!と感激しています。

改めまして伝統ある甲南学園テニス部創部100周年おめでとうございます!

益々の発展を祈念しております!

テニスを通したご縁

大学 山中(今村) 祐子

甲南学園硬式庭球部創部100周年、おめでとうございます。

テニス部に入部したのは、同じ高校の黒田慶子さんがテニス部のマネージャーになったので、練習を見に行き、自分もテニスをしてみたいと思ったのがきっかけでした。その頃は初心者でも入部できたのです。それまでテニスどころか、ほとんどスポーツもしたことがなかったので、今から考えると、なんと無謀なことをしたのか。体育会がどういふものか、全くわかっていませんでした。最初は優しい先輩が、新入生歓迎旅行(小豆島)が終わった途端、厳しくなり(笑)、もちろん、体力がないので、最初は全く練習についていけませんでしたが、練習中は水を飲んではいけなかったので、しょっちゅう気分が悪くなり、コートの横のベンチで寝ていましたが、今から考えると完全に熱中症で、よく何事もなく済んだものだと思います。とにかく、1年生の時はつらかった。何とか最後まで続けることができたのは、同期の橋本郁子さん、福井裕子さん、高木弘美さん、黒田慶子さん、先輩後輩のおかげです。

大学卒業後は、全くテニスをする機会がありませんでしたが、結婚して東京に移り、テニスを再開して某テニスクラブに入ったところ、学習院OBの方がいらしゃったので、思わず、「私、甲南なんです」と口走ってしまったのが、運のつき。それがきっかけで学習院OB戦に参加せざるを得なくなり、灘OB戦、現役激励会にも参加するようになりました。偶然にも灘の松影会会長の神澤俊介さんは私たちが4年生のときにコーチをしてくださった旧制高校OBの神澤得之助さんの息子さんでした。初めてお会いした方ともテニスをして仲良くなれることが多く、東京でお付き合いの輪が広がったのは、テニスのおかげと感謝しています。

テニス部時代は苦しいことも多かったです、その時の経験が今の自分を作っているのは間違いありません。これからもテニスを通したご縁を大切にしていきたいと思っています。



▲ 28回大学卒業アルバムより

高校 1979(S54)年卒

石原 守 井上 雅之 是枝 宏二 中川 康 中村 篤司 廣部 永隆 藤原 純一

大学 1983(S58)年卒

男子 石原 守 井上 雅之 大橋 一徳 大町 裕哉 是枝 宏二 中川 康 中西 信之 廣部 永隆 藤原 純一
細西 克弘 松岡 隆昭

女子 塩田(岡本) 美貴 西畠(高橋) 陽子 前田(岡本) 美穂 村田(竹内) 博美

テニス部の思い出

高校 中村 篤司

私の座右の銘の一つに“生涯一学生”というのがある。これはわが校中高大で留年進学留年進学を繰り返すことにより20年学生でいられるということではなく、生涯勉強が必要ということなのを言うまでもない。

私が中高テニス部であったが正直テニスについて話すべきことはない。

しかし自分のテニス部での思い出をいくつか話していこう。先ずは是枝君には謝らなくてはいけないだろう。

理由は忘れたがバスケットボールを私と是枝君のどちらかが持つて帰ることとなった。当然そんな物持つて帰りたくないで押し付け合いになり、阪急電車夙川駅で甲陽線の発車寸前の電車にボールを投げ込んで帰ったのだった。次の日、彼が凄く怒っていて、他の乗客もいるのにすごく恥ずかしかつたと、言われてしまった。確かに他の乗客のことをすっかり忘れていたのは私が悪い、反省している。言い訳させてもらえればバスケットボールは持つて帰るには邪魔なのだ。当たり前だ。あの時は多分練習の後で大変疲れていて少し機嫌が悪かったのだろう。そういうわけで、度々あの事に非難してくるのは勘弁して欲しい。もう一回言うけど、反省している。

次は藤原君には文句を言わしてもらおう。

一緒に釣りに何回か一緒に行ったのだが、何故か私の釣果が良

くないのだ。要は狙った魚が釣れないのだ。確か最初、淡路島にカレイを釣りに行ったのだが、彼はカレイを何匹か釣ったが私は釣れなかったのだ。基本投げ釣りをするので、パワーがある彼が遠くに投げられるから当然有利なのは確かなのだが、それにしても何か腹が立つ。テニスで負けるのはどうでもいいが釣りで負けるのは納得がいかない。機会があれば再戦(再戦で試合じゃないけど)を申し込みたい気もするが無しだ。この年齢となると道具の進歩とか交通関係の便利さ向上がかえって釣りをする気が出ない。淡路島なんか釣りをしていた辺り、橋が出来てビックリだ。とにかく私が釣り損ねた魚の子孫達が元気で暮らしていれば満足だ。

まあこんな感じの私のテニス部の思い出だ。アップルのスティープ・ジョブスのスタンフォード大学卒業式スピーチの「ハングリーであれ。愚か者であれ。」とは程遠いが、まあこんなものだろう。

なにせ座右の銘が「生涯一学生」だから。

私の甲南テニス部10年間

高校・大学 是枝 宏二

私は昭和48年に甲南中学に入学し、当時学校で一番強いクラブに入ろうとテニス部を選んだ。初めて練習に参加した日、同じ学年で入部したのは確か20名ほどだったと記憶する。ここから私の甲南

テニス部が始まった。毎日、毎日厳しい練習が続き、我々1年生はひたすら球拾いとコート整備をやり、一日にボールを打てるのがわずか10分程度だった。毎日怒られ、走らされ、特に夏休みの練習では水を飲んではいけないと、今の時代では考えられないこともあった。そんな日が続き、ある日、意を決して同級生全員で練習をボイコットし、帰ろうとした所、駅で当時のキャプテンに遭遇し、慌てて逃げたことが今となってはいい思い出となっている。

高校では、中川、井上、藤原、石原、廣部、中村と私の7人で高校最後まで頑張ることになった。

高校では、藤原を中心に個人戦では多くのライバルが居る中、絶えず誰かが上



▲ 29回高校卒業アルバムより

位に入り、比較的強い年代であったと思う。

我々の目標は、長年先輩方が成し得なかったインターハイ団体での“打倒柳川高校”だった。高校3年間の集大成で臨んだインターハイ団体兵庫県予選。当時は甲南、関学、報徳の三つ巴と言われていたが、正直負ける気はしなかった。そんな中、我々は順調に決勝まで勝ち進み、決勝で報徳と戦うことになった。

最後まで接戦となったが、1対2で負けた。打倒柳川もまさかの県予選敗退で叶わなかった。これが高校3年間で一番悔しい思い出となった。

大学に進むと、大半のメンバーも引続きテニス部に入部したが、中村だけは他の道を選んだ。大学から大橋、大町、中西、細西、松岡と新たに5人の仲間が増えた。更に女子部には前田美穂、塩田美貴（共に旧姓岡本）、村田（旧姓竹内）、西畠（旧姓高橋）の4人が入部してきた。男女合わせて15人の大所帯となった。大学4年間は、王座で当時スター選手を多く擁した早稲田大学を破って大学日本一となったことから始まった。この時の戦いは強烈な印象で、今でも鮮明に覚えている。

その後3年間も正月の1週間と、試験前の数日を除き、ほぼ毎日練習に明け暮れた。

当時は、授業も出席が必須の語学と体育にしか出させてもらえず、試験前には友人にノートを借りて奔走した。

甲南テニス部最後の4年間はあっという間に終わり、戦績は決して優れたものでは無かったが、苦しい練習も多くの同級生が居てくれたお陰で乗り越えることができた。社会人となった今、甲南テニス部に在籍したことで得た“忍耐力”が生かされていることは間違いない。

そんな苦楽を共にした同級生と最後にハワイに行った卒業旅行は、今でも一生の思い出になっている。

甲南庭球部 仲間と過ごした日々

大学 村田（竹内）博美

先日、原稿の執筆を頼まれた時は正直、戸惑ってしまいました。何せ、私が甲南庭球部に在籍していたのはもう、40年も昔のことです。それでも、記憶の糸をたぐり寄せていくと、かつて一緒に過ごした仲間たちの顔が浮かんできます。苦しかった試合、負けてしまった



▲ 29回大学卒業アルバムより

時の悔しさに涙した瞬間、またその悔しさをバネに練習に打ち込んだ日々……瞬く間に当時の記憶の中へと立ち返っていきました。

女子部のみんなとは、毎日太陽の下で真っ黒になってコートを走り回りました。下級生の頃は先輩に叱られながら練習に邁進し、どうすれば自分の技術を高めていけるのか、満足できずに頭を悩ませる日々でした。自分が上級生となって後輩たちを引っ張っていく立場になると、自分は先輩たちのように、後輩たちにとって適切なアドバイスを話せているのか不安になることもありました。そうして思い悩む私を支えてくれたのは、同期の仲間たちでした。側において話を聞いてくれたり、必要な時はそっと手を貸してくれたりしました。あの時は、本当に感謝しています。練習後に岡本駅近くの喫茶店に寄って、お茶を飲みながら談笑した日々は今でも忘れられません。

また、男子部とは、よく本戦前の練習に参加させてもらい、互いに試合の時は応援にかけつけました。男子部は全国に行くほどの実力を持っているため、部員は皆、実力者揃い。私は男子部の子から様々なアドバイスをもらったことで、その実力を伸ばしていくことができました。普段の練習ではなかなか交流が持てない女子部・男子部でしたが、互いに気兼ねすることはなく、休憩の合間には雑談で盛り上がることもありました。

何よりも思い出深かったのは、やはり男子部・女子部の同期と行ったハワイへの卒業旅行です。公園のテニスコートでテニスをしたり、ショッピングや食事に行ったりと、大学生活最後の思い出に残る数日間でした。大学を卒業して40年経ちますが、その頃の同期の子たちとは今でもたまに連絡を取り合っています。テニスを通じて得た仲間は、今でも私にとってかけがえのない、大切な宝物です。

高校 1980(S55)年卒

大原 健一郎 中西 次郎

大学 1984(S59)年卒

男子 岩城 俊弘 高橋 秀尚 中西 次郎 能宗 大輔 広瀬 浩二

女子 井上(富田) 潤子 坂本(木村) 弥栄子 島村 由美子

創部100周年に寄せて

高校・大学 中西 次郎

<中学校の思い出>

中学入学と同時に、先輩が「次郎、テニス部に入らないか？」と体験入部に誘われました。あまり気は進まないものの、当時の学年の大半が運動部に入っていることもあり、入部を決めました。当初は、多くの同級生がいたものの、あっという間に減っていき、わずかな人数しか残らず、寂しく感じたものです。

<高校の思い出>

人数がどんどん減っていき、最後は大原健一郎君と私の二人だけしか残りませんでした。強豪甲南と言われましたが、私は県大会の予選で敗退するなど、上手くはありませんでした。しかしながら、諸先輩、後輩たちに助けられ、6年間続けられたことに感謝しています。

<大学の思い出>

男子は、岩城、高橋、能宗、廣瀬、私の五名。女子は、木村、島村、富田の三名。四年上の年に、久しぶりに王座となり、強豪甲南の名を轟かしていた頃です。四回生の時に、団体は、一部で三位、個人は関西学生で32が最高の成績でしたが、中・高・大と十年間続けていて、学習院をはじめとした各大学との交流、諸先輩方、後輩と共に過ごせたことが、今も糧となっています。

<卒業後>

卒業後も、関西学院、近畿、学習院、早稲田、慶応、法政等、

各大学の諸先輩、同級生とゴルフ、食事会などで交流を持ち続けています。特に、学習院創部百周年記念行事にご招待をいただき、上皇、天皇がお見えになり、同じ時間を過ごせたことに感謝しています。

<最後に>

諸先輩方をはじめ、現役諸君のますますのご発展とご健康を祈念しております。

テニス部の思い出

大学 岩城 俊弘

甲南学園硬式庭球部100周年誠にありがとうございます。

諸先輩方が築いてこられた歴史を現役の皆さんがバトンをしっかりと受け取っていただき、迎えた100年に深い感慨を感じています。

かく言う、私は外部の県立神戸高校から大学テニス部に入部いたしました。

入部当時、大学4年の先輩には会長の三村さんや中西伊知郎さん、3年には直木さんや坪田さん、1年上には是枝キャプテン、藤原さんや石原さんという錚々たるメンバーのテニス部に入部したのは、高校からラケットを握り始めた浅い経験の中、今から思うと勇気があったなあと思います。



▲ 30回高校卒業アルバムより

大学では中西次郎君が主将で自身が主務を務めることになりました。彼とはラケットを握ってすぐの公式戦、高校1年春の兵庫県予選1回戦で対戦し0-6完敗だったことが思い出されます。

入部するとすぐに春のリーグ戦が始まり、王座に進んでいきました。中西伊知郎さんの強さは言うまでもありませんが、プレッシャーのかかるリーグ戦、王座を通じて坪田さんの勝負師として、スナイパーのような正確で圧倒的な強さは今でもよく覚えています。

テニス部に入部したことで、現在に至るまで素晴らしい経験を積むことができました。

ハードコートの夏の猛烈な照り返しの暑さや岡本から三ノ宮までの往復ランニング等、今となっては想像もつかないような毎日でした。また、学内外のテニス仲間やラグビー部やアメフト部等同級生体育会仲間との交流は今も大きな財産となっています。

現在は東京、田園テニス倶楽部で神原先輩や石原 卓君始めメンバーの皆さんと週末のテニスやアフターテニスを楽しみにしています。故石黒修先輩のホームクラブだったのは何かのご縁だったのかもしれない。

この晴れやかな100周年、2年前に亡くなられた一年先輩の故石原守先輩は羨ましく観ていらっやと思います。残念でなりません。

改めまして100周年をお祝いさせていただきますと共に現役の皆さんのご活躍と益々のご発展をお祈りしております。

「エースをねらえ!」に憧れて

大学 坂本(木村) 弥栄子

「エースをねらえ!」(漫画)に魅了されテニス漬けの大学生活を送りたくて、理系から文系志望に変更、希望校である甲南大学に入学。

入学手続きで校門を入ると校舎までの坂道では各部が新生を勧誘していました。懐かしい光景です。

硬式テニス部と言えば一般的には華麗なスポーツを想像される方が多いかもしれませんが、体育会のテニス部はガッツリスポーツをする場所です。人間が入れそうなゴミバケツに練習ボールを入れてリアカーで部室からコートまで運ぶ、鉛のようなローラーでテニスコートを整備する、練習後くたくたの締めめにコートから白鶴美術館近くまで住吉川沿いを掛け声とともにランニングでかけ登る、菊水旅館での合宿では食事を残すのはNGで朝からお日様が沈むまでテニス漬け。こんな日々がいまだに年齢以上の筋肉を両足につけてくれたのかもしれない。

でもしんどいことばかりではなく、「かじか」で紅生姜ののったチャーハンを同年とほおぼったり、練習後にホールケーキを先輩後輩と分け合って食べたり、大学祭では男子部と共同で甲南そばを出店したり、男子部女子部同年とシンガポールに卒業旅行して旅行中に知り合った現地メンバーの家庭で食事して盛り上がりたり、楽しい思い出もいっぱいです。

テニス部生活でもっとも忘れられない思い出は、大学3年のリーグ戦での試合。強い先輩方が卒業されて降格の危機もささやかれる状況下、緊張の極限での初戦ダブルス。リターンミスを繰り返す私に切れることなく、ペアのシマがサイボーグかと思わせるぐらいポイントを取り続けてくれて勝利。その後も応援メンバーも含め全員一丸となり苦しい戦いを3勝2敗で乗り切りました。あの日の試合後の円陣、私は一人じゃないんだと痛感しました。

大学テニス部時代に鍛えていただいた体力と気力が、その後の社会人生を支えてくれている事を深く感謝しています。



▲ 30回大学卒業アルバムより

高校 1981(S56)年卒

大内 義彦 笠原 伸二 長谷川 次郎 藤原 聡 前田 健志 三浦 耕史 山根 克哉

大学 1985(S60)年卒

男子 大内 義彦 笠原 伸二 関家 徹 長谷川 次郎 藤原 聡 前田 健志 松浦 圭三 三浦 耕史 山根 克哉

女子 岡(岩本) 香 山本(和田) 美喜

甲南テニス部100周年の中で

高校・大学 大内 義彦

①中学入学前から入学まで

先ず私と甲南テニス部の出会いは小学生のころ当時スポーツ好きの少年はほとんど野球(ジャイアンツV9時代)をしている時代でした。当然私も野球が大好きで5年生から学校の少年野球チームに入っていた。そうして6年生の時には地区大会(春)から市の大会(夏)まで進みました。しかし市の大会では体も大きくこれまで見たことのない剛速球を投げる投手と対戦。チームは惨敗しました。

そこから中学進学を考える時期になりましたが、中学で特に何がしたいということもありませんでした。ただ一つだけ、頭を坊主にするのが嫌だった。私の校区の公立中学は坊主だったのでそれを避けるには私学に行くしかなかった。(余談) そんな嫌だった坊主も大学時代はほとんど坊主で、なんてこと無かった。その当時兄が高校でテニスを始めていて、たまに家の前の道で打ち合いの相手をさせられており、初めてラケットを握ったが数回はラリーもできていた?(ような記憶)。そこで兄から中学でテニスするなら私学しかないよ!と言われ、それが先ず私がテニスを真剣にやろうと決めたキッカケでした。そして兄からどうせやるなら日本一を目指している甲南がいいんじゃないのとアドバイスをもらい、それが私が甲南受験を決めたキッカケでもありました。

②中学から高校

そして無事甲南中学に合格し、入学直ぐ上級生(中学2年)の方が休み時間毎に教室に来られてはテニス部に入部(見学)するよう一人残らず勧誘していたような。当然他クラブの勧誘もありましたが、私は入学の2、3日目にはテニスコートに行くようになりました。仮入部(見学)的ではあったが練習が始まったら私はいきなり倉庫で砂漣しをやらせていただきました。そしてコート回りでボール拾い!ボールが飛んで来たら素早く拾ってプレーされている上級生の手でワンバウンドで投げる!かなりコントロールがいった!その時テニス部ってテニスするだけじゃないやと実感しました。そしてコートでは高校日本一を目指して練習している上級生の方々がプレーされており、なんてかっこいいんだろうととても憧れました。

学校が中学1年生仮入部の間はコートに16時には出なくてはいけないということで、その10分程前に上級生の方々が私達(70人ぐらい)にネットからラケットでボール出しをしてくださり、途切れなければずっとラリーを続けていただけました。そんな状況なのでネットに掛けないよう必死でボールを追いかけて返球、なんせ途切れると

次、回ってくるかどうか?って感じだったので。そんな感じで1か月程経ち、いよいよ本入部させていただき、晴れて甲南テニス部に入部できました。

最近では中学と高校は完全に分かれているようですが、当時甲南中学高校テニス部は一つのクラブで、キャプテンは高校3年生でした。その当時は当たり前とと思っていましたが、規則(礼儀:上下関係や縦横の関係、時間等)もとても厳しい方だったと思います。上級生だけでなくOBの方々への喋り方や挨拶の仕方等は練習中だけでなく、お昼休みや雨で練習が無くなった日等に部室でみっちり上級生の方に教えていただきました。だから私は雨の日がトレーニングも含め嫌いでした。テニスのプレーの方ではなんせ日本の高校生のトップクラスの上級生の方々が直ぐ目の前で練習されておられた訳で、当時は今のよう色々な情報があるわけでもなく、ただただその前で打たれている方々の足の動きやフォームを観るだけでした。そして少し回ってくる自分の練習時間には先ほど観て頭にいったイメージでラケットを振っていました。特にその当時はバックハンドが綺麗な方々多かったので、自分で言うのもなんですが私はバックハンドが得意になりました。また当時は甲南の1は兵庫の1みたいな感じでしたので私も何とか同学年の中で1になりたいと思って練習に励みました。その甲斐あってか中学2年生の秋に兵庫県中学新人戦で単複優勝する事ができました。ただこれが私の中学から大学までの甲南テニス部在籍10年間での最初で最後のシングルス優勝でした。

その後中学から高校と最終的には高校3年生の時に団体戦でインターハイに出る(当初は優勝する?)という当時の目標に向かって頑張りましたが……。力及ばずインターハイ団体戦出場は叶えられませんでした。夏の大会(インターハイ・全日本ジュニア)も終わり、中高6年間の甲南テニス部生活はとりあえず終了、引退となりました。



▲ 31回高校卒業アルバムより

そしてさあ大学進学に向けて勉強!といっても内部推薦試験なんです、私は学校の勉強があまり得意ではなかったので、前期試験まで2週間を切っていたこともあり、暗記ものを中心に対策をして臨むしかありませんでした。

何とか前期・後期(1月)と試験を受けることができ、あとは合否の結果を待つのみでしたが、その際には、当時学級担任でテニス部副顧問もされていた古池先生には大変ご心配いただき、且つご尽力も(中高6年間の出席簿:中学精勤、高校皆勤やテニスの戦績資料集め)いただきました。古池先生には本当に感謝しています。

何とか大学の推薦試験にも合格でき、そこから私の残り甲南テニス部4年がスタートしました。大学の4年間については同期の松浦さんが投稿されるということですので私の投稿はこれで終わります。

③最後に

最後に、その後私はダンロップの住友ゴムグループに就職し、甲南テニス部10年間で培ったテニスの技術や体力や忍耐力、そしてなにより沢山の人の繋がりを活用して定年まで楽しくテニス関係のお仕事をさせていただくことができました。

会社では大先輩の中西伊知郎さん(私が中1の時、高2)、後輩ではかなり年は離れていますが河野剛さんや岡田直樹さん、最近では綾部翼さんや渡部耕平さんと甲南テニス部OBが職場(ゴルフやテニス)は違いますがおられ、仕事を離れてちょこちょこ飲み会をしては甲南テニス部の話題で盛り上がっています。

この度、甲南テニス部は100周年を迎えましたが、私の人生の中で甲南でテニスをしていたということは誇りであり一生の宝物です。

これからも末永く大好きな甲南テニス部が益々繁栄していくことをお祈りします!

我が甲南テニス部は永遠に不滅です!

甲南大学テニス部に入学して

大学 松浦 圭三

まず最初にこの度は伝統ある甲南学園硬式庭球部の創部100周年記念誌に寄稿させていただくこととなり、先輩の皆様、同期、後輩の皆様、現役の皆様にご挨拶申し上げます。

さて私の場合は、中高から入学した方と違い、一般入試で入学した者(甲南高校以外)からの目線で寄稿する様にと、同期の主将から指示がありましたのでその観点から書き下ろして参りたいと思います。

そこで私がどのような人間だったかを簡単に説明いたします。出身高校は愛媛県立八幡浜高等学校という、その名の通り愛媛県のみかと漁業が盛んな人口3万人程度の小さな田舎町です。中高と軟式テニス部に所属しておりました。主な戦績は四国ベスト8、インターハイ、国体出場についてはこの試合に勝利すればインターハイ、国体出場に出場できるというチャンスが4回ありましたが、全て



▲ 31回大学卒業アルバムより

敗戦となり全国という憧れの世界を経験しておりません。

全国大会を経験していない私は大学では必ずインターカレッジ、及び、王座決定戦に出場することを夢見て大学探しを行いました。当時のテニス雑誌を全て購入し、その中で甲南大学がその年に早稲田大学に勝利し王座を獲得した記事を見つけ、これで私の進む道は決定しました。

それではこれからは本題に入りたいと思います。我々の代は以下の出来事無くしては語れません。

当時、一部リーグは4校あり、その優勝校が王座決定戦に出場できるシステムでした。1戦目、2戦目はある程度苦労はしましたが大差をつけて勝利を取めました。残る最終戦、同志社大学との優勝をかけての1戦です。

戦略を立て、結果ダブルスを2-1でしのごと勝利の確率が80%程度にアップすると結論ができました。ところがいざ試合を行うと3-0とリードしました。部員全員大喜びです(主将は冷静でした)。というのも我々のシングルスNo.1は当時関西で敵なしで1本は確実に計算でき、実質4-0と全員が勝手に計算してしまっていた。残るシングルス5本の内1本獲れば優勝です。

しかし後から考えますとこの喜びとか安堵感が同志社大学よりも1番の難敵でした。誰も『優勝』と言う言葉は口に出しませんでしたが勝手に浮かれてしまい、結果、5本全て落とし4-5で王座決定戦への出場は叶いませんでした。

現在でも心が痛いのは、最後の1本をかけさせてしまったNo.2に申し訳ないこと、No.6で出場した私がファイナル5-6から勝ちきれなかったことについて申し訳ないということです。

その後社会人となり数年が経過し当時を経験した同期は何らかの教訓を学んだと信じております。人生において良い意味でのこの経験が何らかのプラスになっていることを祈っております。(ただ、この寄稿書を作成している時点では同期はちょうど還暦を迎えております。)

最後に現役の皆様、努力は必ず何らかの形で報われます。テニスに限らず若いうちにどんどん様々なことに挑戦してください。そして沢山失敗して、沢山挫折を経験してください。それが素敵な大人になるための条件だと思います。

高校 1982(S57)年卒

池田 亨 石本 茂 勝山 直洋 坂元 俊一 菅原 竜生 福永 成樹 古畑 龍 三宅 恒治

大学 1986(S61)年卒

男子 荒金 淳 石本 茂 坂元 俊一 菅原 竜生 徳重 敦之 古畑 龍

女子 久語(南谷) 宏美 楠本(山浦) 真早美 塚崎(松宮) 佳子 土居(清水) 靖子 中山(佐竹) 真理子
西(山岡) 玉音

感謝

高校 三宅 恒治

この度、甲南学園硬式庭球部が100周年を迎えるにあたり、これまで主体的にテニス部を支えてきていただいた諸先輩方、後輩の方々にこの場をお借りして御礼申し上げます。

私と同じ神戸市の魚崎小学校から甲南中学に入学した人は私を含め6名で、そのうち半数の3名がテニス部に入部しました。私以外の2名、坂元君、石本君はそれぞれ入学前からテニス部入りを決めていたように記憶しています。石本君は兄がテニス部の高2で、坂元君は小学校時代からスポーツ万能少年でテニスも少しやっていたと聞いてます。

ということで、当の私は水泳部やサッカー部をイメージしていたのですが、特に坂元君の勢いに押されたのと、やはり何といてもテニス部は強くて名門ということに惹かれて入部しました。

とにかく授業の合間の休み時間ごとに中2の先輩が中1の教室に来ては、日々の挨拶や先輩への言葉遣い、服装、球拾いのフォーメーションまでかなり何度何度もレクチャーされたのを覚えています。中でも今でも素晴らしいと思うのは、一番初めにテニス部の最終目標を頭に叩き込まれたことです。テニス部の最終目標は?と問われたら必ず「インターハイで団体優勝すること」と教え込まれてました。初めはインターハイが何かも分からないままに暗唱してました。このシンプルで分かりやすい目標の効果は後々の社会人になってからも実感しています。

中1の夏頃までは確か40名以上は入部していたくらい、人気なのか、勧誘が激しいのか、学年の1/4くらいの生徒は入部してました。その後、夏を経て秋になる頃には例年通り10名以下まで減っていたと記憶しています。でもやはり一時期でも一緒にテニス部で苦労した友人はその後印象深く残ってます。

最終的に自分達の学年は、坂元、石本、福永、菅原、古畑、池田、勝山と私になります。

中1~2は球拾いとコート整備、中3は審判と中1、中2の管理指導責任といった役割で、高校になるとテニスに集中するといった運営でした。なので特に中1~2の頃は少ない時間で必死にテニスを覚えたといった感じで、中1で部活に慣れてきてテニス自体が面白くなってきた頃には、同学年で食堂手前の道端や、ピロティなどでミニテニスをしてテニスやりたい病を紛らわせていた懐かしい思い出があります。その後、中2か中3の頃には地元のテニス倶楽部などに入会して学校で思い切り出来ない分を校外で埋め合わせてい

ました。

ということでテニス部自体の練習は高校生主体でしたが、その分、中学生は全国レベルに近い高校先輩のプレーを球拾いしながらずっと見ているので結果的にかんがりの良いイメージトレーニングになっていたと思います。

球拾いミス、審判ミスジャッジ、ミスコールによる罰(ランニングや反省文)も今となってはいい思い出ですが、当時は自分は意味のない量の反省文だけは嫌ってました。ある日、神戸クラブの本戦の球拾いで同学年の1人でもミスがあれば反省文5枚(? 3枚だったかも知れませんが)となり、案の定ミスがあり、連帯責任で同学年全員が翌日朝練までに提出となりました。日頃から中身の少ない量が多い反省文を練習後の夜中までかけて書かせるくらいなら、翌日走らせた方が体力もつくので意味があると思ってた私は坂元くんや皆に「もう書かんとこ」と提案し、全員で書かずに翌日の練習に行きました。

その日は生憎の雨で練習も無くなったので、かなり長時間説教されたのを覚えています。その中でチーフである坂元くんだけが特に酷い罰(暴力ではなくランニングやウサギ飛び)を受けていました。間違いなく言い出して皆を先導したのは自分であるのに、先輩はチーフの責任とした訳で未だに申し訳なく思っています。

しかしながら今から考えてみれば、最終目標設定や学年ごとのチーフ選出と責任の負わせ方など、中学や高校の部活の組織運営としては基礎が出来ていたと感心します。

自分達の学年の戦績で記憶深いのは中3で兵庫県、近畿圏共に団体戦優勝したこと、個人戦では高1の新人戦で兵庫県のベスト16に6人、うちベスト8に5人入ったのと、なんと言っても部活の最終学年である高3の時に団体戦で兵庫県優勝したこと。あの時は本当に嬉しかった。その頃はもう自分はレギュラーにも入ってなかったけど、中学時代に坂元君とダブルス組んでお溢れで優勝した



▲ 中学2年生時、高校3年生送別会 平生会館にて

時よりも比べものにならない喜びと感動を感じました。やはり最終目標が染み付いているということ、個人ではなく皆で成し遂げたという事が同じ努力してきた仲間との連帯感で大きかったと思います。なので個人戦でもベスト16や8を甲南勢で占めた時も大変嬉しかったです。

自分は高2の途中からイップスに悩まされ、大学はラグビー部に入りましたが、この中高大の両部活の経験は、社会に出てからの考え方や行動特性の基礎になっており、感謝してもしきれないと考えています。同学年だけでなく上下の学年も含めて同じ目標に向かって邁進できた仲間本当に感謝しています。



▲ 32回高校卒業アルバムより

ボクらの時代

大学 土居（清水）靖子

ラジオから流れているのは、山下達郎の「ラブランドアイランド」懐かしい～。

テニス部に入学して間もなくの頃、新生は、試合応援のため、1学年上で学連の仕事をしている山根先輩の車で会場まで送ってもらった。車？ うわあ～おとな～かっこいい！その車中でかかっていたのが、忘れもしないヤマタツだった。当時は、カーステ？カセットテープ？の時代。憧れのキャンパスライフに胸ときめかせ、キラキラ輝いていた頃。

あれから40年。今回の原稿を書くにあたって同期同士、連絡を取り合った。男子はリモート会議もしたらしい。私は、ラインのメッセージのみ。直接話をしなくても、事は進む。

世の中、すっかり変わった。

この度、執筆を仰せつかった私。こんな時にしか連絡くれないんだから・・・と思いつつ、懐かしい仲間とのSNSでのやり取りは結構楽しかった。私は、昭和61年卒業、100周年記念の年は、生誕60年にあたる。何だか縁起がいい、と思っている。

同期の男子は、インカレダブルス優勝の坂元氏や春の関西学生シングルス優勝の石本氏と同じく甲南高校出身の古畑氏と菅原氏、公立高校からきた徳重氏の5人と体育会本部の荒金氏。先の4人は、高校卒業から自動的に、大学リーグ戦に突入したと聞いている。その年は、個人戦の結果からみて当然のことながら、団体戦は、甲南が優勝と予想されていたのに、まさかの3位。団体戦の怖さを早くも知ることになる。また大阪テレビ開局の年で、関西学生テニスリーグ戦が、記念放送された。滋賀の信楽開催で、各大学レギュラーは、ホテル宿泊。お寺のようなところに宿泊した補欠組は、賑やかな夜のリーグ戦（大学対抗野球拳）に参加を余儀なくされた。お腹を出したタヌキに化けたのは、誰だったのか??? 笑。

リーグ戦以降は、イレギュラーのルーティンは、球拾い。2回生になり審判に格上げされるが、土日の練習は、そのほとんどが審判。そろそろ終了～と思ったら、痛恨のジャッジミス！心ならずも罰ランは、ずっと台に座ってガチガチになった体には堪えた。

4回生の団体最終戦でまさかの黒星だった坂元君は、試合直後、会場近くの床屋で坊主頭に変身した。こんな数々のレトロな経験も社会に出てから組織での役割分、それぞれの立場を思いやることに生かされた、と。

今回の取材で、私は初めて聞く話も多く感慨深かった。最後まで誰一人欠けることはなかった。絆は強い。心優しい同期男子のおかげで、私たち女子部は、とても活動しやすかった。本当にありがとう！

現役幹部の年に男女共に学習院戦で東京に行った。夜、関東OBとの会食。青山にある日生ビルの中の料亭だったと思う。OBの皆さんは、緊張する私たち学生を温かく迎えてくださった。和やかな宴、デザートで出てきた立派な（今までの人生の中で一番大きい）巨峰のプリプリと美味しかったこと！

当時は、スポーツ推薦はなく、初心者でも入部できた、ラケットの握り方から習ったようなもの。今は亡き神沢得之助先生にご指導いただいたことは、有り難き幸せ。

テニスに打ち込んだ日々、しみじみと振り返る機会を与えていただいたことに感謝して。



▲ 32回大学卒業アルバムより

高校 1983(S58)年卒

中川 浩 松田 裕弘 松村 敏治 吉田 正治

大学 1987(S62)年卒

男子 江島 靖 中川 浩 松田 裕弘 松村 敏治 三谷 友孝

女子 福崎(西藤) 美穂 水渡(白井) まり子



▲ 33回高校卒業アルバムより

テニス部の思い出

高校・大学 松村 敏治

この度は甲南学園硬式庭球部創部100周年誠におめでとうございます。

編集、式典に携わって戴いている有志メンバーありがとうございます。

甲南中学校に入学、部活を選択する訳ですが、まず甲南で当時華やかな戦績を飾って活躍されていた伝統の我が硬式庭球部に入部を決めました。とにかく厳しい、絶対に続かないと知人からの助言を押し切りの決断でした。テニスのテの字も解らない私が今でも生涯スポーツとして取り組むことができたのも諸先輩型の並々ならぬご指導、ご鞭撻のお陰と感謝しております。この場をおかりして厚く御礼申し上げます。

硬い台詞はこのくらいにしまして当時のエピソードとしてまず最初に思い出に残っているのが「先輩は絶対」という封建制、理不尽なことを経験できたことです。先輩が言えば黒も白となります。社会にでもこれはある意味通じる大人の事情、縦社会の経験、何より目標を達成させるための執着、執念と人生基盤構築といっても過言ではありません。

練習といえれば1年坊主はコート整備やボール拾いが主でやっと球が打てる時間となり与えられた時間は10分かつ球2球のみです。「お願いします」球出しでいきなりネットし残り1球、相手の同期中川君に「えー加減にせーよ」とどなられ、それ以来は丁寧にと「1」球の大切さ」ネットの高い位置を通すロビング主体のテニススタイルになったと当時を振り返ります。

夏休みや土日には沢山のOB方が指導に来ていただけたわけですが、中でも河盛さん、高石さんなど日本を代表する壮々たるメンバーに「将来どうなりたいのか」を問われたことを覚えています。デ杯、オリンピック、国体、インカレ、インター杯等。その中でデ杯の意味がわからなかった自分がおりました。高石さんからは毎回アドバイスご指導をいただき、忍耐力がついたのもこの時期あつてのことと深く感謝します。

近畿大会、全国大会にも出場、優勝が当たり前の風潮の中、遠征には当時画期的なSONYウォークマンでオフコースの曲でリラックスしたことが懐かしく思います。

特に江見さんのご指導はサーキットトレーニングを重視し現場と一緒に汗を流し、1日の締めはサウナスーツでの夙川ランニングとそれまでのOB先輩というより率先垂範、兄貴のような存在でした。(この場をお借りしてご冥福をお祈りします)

100年の中のわずか10年を硬式庭球部で過ごした訳ですが、集大成ともいえる関西大学リーグ戦に於いて結果2部落ちという歴史的汚点を遺してしまいました。伝統の重圧、厳しさの中にも時間の大切さであったり、結果重視の世界の中に於いてプロセスを評価していただいたり、何より先輩後輩の縦社会、育成、伝える力、超ポジティブに切り替えるメンタルを養う基盤を築けました。

家族兄弟、それ以上の家族愛、温かさが生涯の宝物として後輩達にも脈々と受け継いでいかれますことを願って終わりとさせていただきます。

テニス部で得られた経験と感動

大学 三谷 友孝

甲南学園硬式庭球部100周年、誠におめでとうございます。

このような伝統あるクラブに在籍できたことを、改めて誇りに思います。

私の学年(33回卒)は、大学・高校卒含め、松村君、松田君、中川君、江島君、吉田君、三谷。大学女子の福崎さん、白井さんです。少人数ということもあり在学当時から仲が良かったと思います。当時の思い出として、強く印象に残っている出来事を3つご紹介させていただきます。

1つ目は、在籍中にインカレチャンピオンが出たことです。前田先輩・坂元先輩のペアが見事に優勝しました。部員全員で応援に熱



▲ 33回大学卒業アルバムより

を上げ、決勝では皆がコートに立って一団でプレーをしているような臨場感があり興奮したことを今でも鮮明に覚えています。全国一番がこんなにも嬉しいものなのかと身に染みました。また、決勝相手の今鷹さん（法政大）は、大阪出身で高校の先輩だったこともあり、当時から関東学生が強かった中で「関西の雄ここにあり」と思いながら応援したことを覚えています。

2つ目は、関西リーグ戦を揺るがした「Tシャツ事件」です。オーダー交換時は、試合の服装で整列する事前確認ルールがありましたが、対戦相手の大体大がTシャツ姿で現れ、現行犯で確認された1人の単複が没収試合となりました。それを指摘した坂元先輩のファインプレーであり、これには、甲南で諸先輩方から代々受け継がれてきた「勝つための並々ならぬ信念」みたいなものを感じました。ただ、その残り試合は、大体大も強いメンバーが揃っており苦戦を強いられましたが、台頭著しい大体大の田中君に対し、宇津原君が神がかり的プレーで一蹴し、勢いそのままに甲南が勝利を収めました。この試合で、私も石原君とのダブルスで強敵の高橋・川上ペアに勝利できたのも記憶に残る良い思い出になっています。

3つ目は、これを書かないわけにはいきません。関西リーグ戦を2部落ちさせてしまったことです。あの時の、悔しく、申し訳ないという気持ちは今でも忘れられません。その当時、私は最終4年生で2部落ちしていないのは関東の慶応大と甲南大だけだと言われており、相当なプレッシャーを感じていましたし、主将の松村君はそれ以上だったと思います。リーグで最下位となり2部との入れ替え戦相手は、あの「Tシャツ事件」で失速し、前年2部落ちしていた大体大という因縁の対決でした。試合は健闘むなしく敗退し、その後のリーグ戦打ち上げ会の際、当時の吉田監督から「あ〜、強い時の監督だったらな〜!」（パワハラではありません。愛嬌込めて言われました）と嘆きの声をいただき、シュンとしたことを覚えています。全力で向き合ったからこそ、本当に悔しく苦しい思い出でありました。

この他にも、様々な苦楽がありました。甲南学園硬式庭球部で

得られた沢山の経験や感動は私の宝物です。今までも、これからも私の人生の大きな糧になると思っています。

クレークートの思い出

大学 福崎（西藤）美穂

甲南学園硬式庭球部100周年おめでとうございます。

大学卒業以来神戸を離れ、東京とニューヨークに在住しており、中々神戸に帰省できない中、36年が経ってしまいました。その間後輩たちは何度も活躍を報告してくださり、それを頼もしく拝見しながらも一度も訪れることがなかった自分に少し負い目を感じていました。

それが数年前偶然通りかかった西岡本の甲南大学クレークート、数十年の時を経て、それは当時（1980年代半ば）そのものでした。

フェンスは少し新しくなっているけれど変わってるのはそれだけ、道具を入れていた小屋は場所も当時のまま、2面だけのテニスコート、思い出が一気にあふれてきました。水がすぐに溜まってしまうクレークートの水たまりに雑巾を置き泥水を染み込ませ絞り、それを繰り返す、そこに砂を入れ、ローラーをかけブラシをかける、何度も何度も。先輩方がプレイ中に滑らないように。

夕暮れになり、ボールも見えなくなるのに終わらない100本ラリー、夕暮れの寒さが身に染みて終わらない、先輩とシングルスで練習試合をしていただき、アドバイスをお願いした時、最初から勝つ気がないように見えたって怒られたこと。

なぜか、思い出すのは当時の辛い思い出ばかりでした。でも、それがその後の私の人生の励みになり、どこに住んでもテニスで友人ができる幸せを感じ、甲南テニス部であった誇りを常に持ち続けていました。大学テニス部時代の思い出は書ききれませんが、このような機会をくださった事務局の先輩に心より感謝、御礼申し上げます。



▲ クレーコートにて

高校1984(S59)年卒

青木 豊 石原 卓 井上 雷太 植田 治一郎 宇津原 彰一 小倉 崇 黒田 和伸

大学 1988(S63)年卒

男子 石原 卓 宇津原 彰一 大田 哲也 小倉 崇 澤田 浩

辛い練習を乗り越えて

高校 井上 雷太

私のテニス部の記憶ですが、甲南中学1年の入学と同時にテニス部に入部。当時1学年160人のうちの半分80人が最初テニス部に入部していたと思います。

コートの四隅に中学1年が立ち、球拾いをしていました。体力的についていけない同期が一人辞め、二人辞め、そして夏休みに入る前には20人ぐらいになっていました。当時はまだ罰制度があり、今ではすぐにニュースに取り上げられるようなことで、考えられないのですが、疲れた顔をするなど言う理由で走らされておりました。

夏休みに入ると朝8時にはコートに入り、夕方の18時まで練習がありその間一日中走らされたり、うさぎ跳びをしたり、部室で正座させられて説教されたりで、また少しずつ辞めていく人間が出てきました。夏休み明けには8人に減ってしまいました。結果、中学2年生の時は、大学でキャプテンを務めた石原君と青木君と私だけになりました。中学2年生になると仕事が増えて1年生の面倒を見ながら球拾いをして、練習が終わると暗い中、溝の木の補修や土漉し、ネッ

トの整備と多様な仕事を3人で割り当てられこなしていました。

特に時計と審判が嫌で、少しの間違いも許されず、プロ級の先輩の球を目で追うのは中学2年生にとっては至難の技でした。時計も10秒ぐらい忘れていてバレないか冷や冷やしていた毎日でした。毎日失敗の連続で「つけびょん」と呼ばれるうさぎ跳びを昼休みと練習後にするのが日課になって、その合間にドラム缶に入れられて水をかけられたり、人間狩りと称する先輩が2メートルくらいの至近距離からサービスをぶつけてきたりと、どの位前の先輩からこのような悪しきイジメが出てきたのか不明ですが、罰とイジメを毎日こなす日々が続きました。

中3になると立場が少しずつ変わり、やっと人間らしい部活が過ごせると思いきや、連帯責任を問われ反省文をよくかかされ丸坊主も何度もした記憶があります。

高校生になると立場が一変し、一つ上の先輩が2人しかいなかったのと、途中で上級生や同期が高校から入部し、すぐやり易くなりました。多分我々も下級生にいじめや罰をしていたのだろうと、今考えれば反省しきりです。確か高校2年の終りに一つ下の代が中2の下級生にうさぎ跳びをさせていて倒れてしまい、その父親が学校に



▲ 34回高校卒業アルバムより



▲ 34回大学卒業アルバムより

殴り込みに来たことが原因で、高校の監督から罰制度を廃止もしくは罰担当の人間を一人作って、適正に罰を与えるという制度に変更されました。今ではどうなっているのか全くわかりませんが、当時は画期的で何十年も続いていた罰制度がなくなると思うと不思議な気持ちになっていました。

今になっても大会で優勝したことよりも辛い練習を乗り越えてきたことの方が思い出になっております。

社会人になって、あの時の経験がすごくためになったと、皆同期で話したり、先輩や後輩と飲んだり、仕事での繋がりで助け、助けられたりと甲南テニス部の団結力をつくづく感じております。

先輩、後輩の皆様！有難うございました

高校・大学 石原 卓

私の大学時代のテニス部の思い出は、入学したばかりの1年生の時の思い出が全てだったと思います。雨の次の日のコート整備でドロドロになって整備して、ダッシュでローラー掛けしてローラーに脚を挟まれても練習をしたこと。クレークートの整備でバックラインを1本だけ掃き忘れて連帯責任で1年生全員が坊主になったこと。先輩がサーブの練習をされている時に、サーブがネットに当たってネットが切れて穴が開いた時に体が固まったこと。練習前に突然先輩が無理矢理ネットを引っ張り回してネットが切れて走らされたこと。学

習院戦で東京に行った際に対抗戦も終わり、夜の宴会で飲み過ぎて朝寝坊して、先輩方に朝の時間を連絡するのを忘れて激怒され二枚刈りの坊主になったこと。岡山県の子島で宿泊があった時に、規則では禁煙でしたが、先輩方がコートに来ない朝早くにテニスコートに行ってコートの見えない所でコッソリ煙草を吸って吸殻をそこに捨ててしまい、後で先輩に見つかり一日中走らされたこと。香檳園に先輩の応援に行った際に、コートの見える所では煙草を吸ってはいけない規則があるのに、同期の一人が何を思ったのか屋外コートの前で煙草に火を点けて一人だけ坊主になってざまあみろ!と思ったこと。うつは〇クレークートで前日まで雨だったが翌日の朝に雨が止んでしまい、朝早くコートに行って水をジャブジャブに撒いてコートを使えなくて練習がフリーになったときの喜び。保久良山を走ってこいと言われて、途中でサボって煙草吸って美味しいと感じたとき。練習も終わりコート整備も終えて1年生だけコートに残り、同期同士で先輩の悪口を言って楽しかった時間。帰り道の岡本駅近くにあったサンタマリアと言うスパゲッティ屋に同期で行った時の同期同士の無駄な団結力。車でテニスコートには行ってはいけないのに、コートの近くに車を隠し置き、その当時の監督に見つかったが監督自身が車好きで車の事を褒められたとき。〇じもと監督思い起こすと懐かしく、今となっては楽しく感じることもばかりでした。最後になりますが、自分自身が上級生になった時に後輩達に走らせたり説教したり厳しく接していました。私の学年と共にした後輩の皆様! 本当にごめんなさい! これからは仲良くしてくださいね! 甲南テニス部! ありがとう!

高校 1985(S60)年卒

明瀬 周二 木下 康 熊谷 定男 小泉 英助 四宮 慶太郎 田中 智 夏梅 秀紀 弘世 芳嗣郎
丸井 隆司 三好 正人 横山 和典

大学 1989(H1)年卒

男子 縄田 哲也 水谷 俊彦 横山 和典
女子 坪井 実紀 福井 美樹

最高のテニス仲間たち

高校 四宮 慶太郎

日本代表のエースを筆頭に上下に全日本の選手が多かった中学・高校テニス部の学年でした。私達が中学3年の時から開催された第1回の全国中学団体戦優勝はとてもいい思い出です。

強豪チームだった甲南テニス部の伝統を受け継いだ厳しい練習や冬のトレーニングにより、強い精神力・忍耐力が鍛えられた6年間でした。

自主的に練習カリキュラムトレーニング内容を考え、強い意志でテニス部をけん引してくださっていた歴代キャプテンに改めて感謝です。当時は大人だと思っていた高校生も今思うと本当に未熟でした。自主性を尊重しながらも精神面・技術面そして人としての成長をしてくれる強い指導者がいてくださってたらと今は改めて思います。先輩たちから引き継がしていただいた中高テニス部の伝統を自分たちの学年がやり切って次世代に継承していくという点に於いては少し悔いの残る中学高校の同級生仲間だった気がします。

そんな少し悔いの残る気持ちもありますが、最高の学園そして最高のテニスの仲間たちと集えた6年間のテニス部生活でした。次の100年に向けて現役の皆さん、選手をサポートしてくださっているOBの皆様のご活躍を祈念しております。

後輩に救われた我々

高校・大学 横山 和典

甲南学園硬式庭球部が100周年を迎えられたことを心よりお喜び申し上げます。在学中にお世話になった先生・先輩・後輩の皆様へ感謝申し上げます。

私達の時代は、他の大学がセレクションを開始し数年で各大学の実力が入れ替わる状態でした。又、キャンパスではサークルが活発で汗くさい体育会に人たちも少なくなっていました。

団体戦で絶えず1部優勝候補であった甲南大学庭球部も4回生



▲ 35回高校卒業アルバムより



▲ 35回大学卒業アルバムより

の先輩が引退をした時点では、部員は我々1回3人を含む12人になっている状態でした。

そんな私達に課せられた課題は団体戦1部へ復帰であります。しかし、私はテニス部というのは恥ずかしいぐらい下手であり、同期メンバーもセンスは抜群だが練習嫌いで体育会本部にいった水谷君、

もう一人は体格抜群だが、ご実家の手伝いのため徹夜のバイトをする縄田君とセクションメンバーと戦えるものではありませんでした。余談になりますが、私の甲南高校同期のメンバーは高校1年生でインターハイ準優勝の夏梅君をはじめ多数優秀なメンバーがいました。そのメンバー達を誘えなかったのは私の不徳の致すところであり、それを救ってくれたのは、まさしく後輩です。

年々10人規模の入部があり、私が4回生の時には40人程度の部員がいたと思います。その中には関西学生優勝の藤井君、現在監督の四宮君、佐伯君とセクションメンバーに負けないメンバーが続々と入部をしてくれました。

そのメンバーのおかげで1部復帰をすることができ、何とか私の責任が果たせることができました。もちろん、私は何の役にも立たなかったことはいうまでもありません。

今でも時々先輩・後輩と飲むときがありますが、すぐにその時の関係性に戻り昔話に花が咲きます。私にとってはかけがいのない仲間であります。

そのような思い出と仲間づくりの場を提供してくれた甲南硬式庭球部が続くことをお祈り申し上げます。そして感謝します。ありがとうございました。



▲ 後輩たちと

高校 1986(S61)年卒

戸田 孝 直木 俊樹 西峪 邦彦 藤井 淳 藤尾 憲弘 藤本 拓司

大学 1990(H2)年卒

男子 尾崎 真二郎 戸田 孝 直木 俊樹 馬殿 太郎 深田 恭史 藤井 淳 藤尾 憲弘 藤本 拓司 船岡 誠
升 祥史 山本 祥史 吉田 勝彦

女子 石井(坂田) 昭子 石塚(白木) 雅子

起て甲南の快男児

中高 36回同期一同

「こんなクラブ辞めたる。明日、退部届け出したる」と何度、実行しようとしたことか。自分達が入部した1980年は、中学・高校が4面のクレートコートで約35人が共に練習していましたが、中学1年は6学年の最下級生で球拾いやコート整備の雑用ばかり。パワハラという言葉や概念もなくミスをする上級生から厳しい叱責を受け、うさぎ跳びなどの過酷な罰が課せられます。理不尽な連帯責任を負わされ、一人の失錯が全員への罰に繋がりました。「来週ノーマスやったら球拾いを引退させてやる」と云われ、連日、同期で芦屋神社に参拝。運命の日、練習開始直後に藤尾が1番コートで先輩にツーバウンド送球したその瞬間に、球拾い引退が1か月延びたりもしました。

ラケットを握らせて貰えるのは一日10分程度で、テニスは一向に上達せず。何のためにテニス部に入っているのかと疑問を感じ、多くの同期が辞めて行き、残ったのは戸田、直木、西峪、藤尾、藤本の5人。それでも諦めなかったのは、上級生になったら自分達なりのやり方で改革し、先人の築いてきた甲南テニスを守り繋いで行こうという、偏に純粋な使命感からでした。

一つ上の学年は1981年の全国中学団体で全国制覇し、個人戦でも全国レベルで活躍していましたが、自分達は県大会がせいぜい。ところが中学3年進級時に帰国子女枠で藤井が編入、またクラブテニスで既に有名選手だった四宮の入部もあり、一挙に全国レベルに押し上げます。全国中学団体はベスト4で敗退したものの、個人戦でも全国上位に食い込み、関西では負け知らず。この陣容であれば全国制覇も夢ではないと期待していた処、一学年先輩の殆どが退部するという事態が発生します。今でもあのメンバーが揃っていたら高校・大学で全国優勝していたのでは、とふと考えたりもします。

自分達のハイライトは最上級生になったばかりの1984年秋、近畿高校での団体優勝でしょう。中学からテニスを始め理不尽な仕打ちに耐えたメンバーが中心となり、臥薪嘗胆、常勝誇る清風高校に決勝で勝利したことは今でも語り草です。1985年春インターハイ団体予選は、藤井が松岡修造等とウインブルドン・ジュニア派遣選手として選出されたため参加できず、県大会で敗退しますが、清風が団体で日本一となり大いに溜飲を下げたものです。振り返れば苦難に満ちた中高時代でしたが、部内に手本となる全国上位の選手も多く、日々、高品質なイメージトレーニングをこなせる恵まれた境遇でもありました。

近頃では学生スポーツも科学的・合理的になり、もはや理不尽

な下積みを通る環境にはありません。只、いつの時代であっても正念場を乗り切るには、極限まで自分を追い込んだ経験に因る、何か自信になるものが必要な筈です。学生諸君には自主自律を旨とする甲南テニス部で、その何かを見つけるため全人格をかけてテニス道に取り組んで頂きたい。起て甲南の快男児!



▲ 36回高校卒業アルバムより
前列左から藤尾 憲弘、戸田 孝、西峪 邦彦、藤井 淳
後列左から古池先生、藤本 拓司、直木 俊樹、藤原先生、中原先生

絆

大学 尾崎 真二郎

私達の年次は甲南高校硬式庭球部出身者5名に対し、私を含む大学からの入部が7名の計12名で当時は比較的人数が多く、又、外部からの入部の方が多いという珍しい学年でした。兵庫県のごく普通の公立高校でテニスをしていた私にとって、“甲南硬式庭球部”とはスター選手が集結した正に雲の上の憧れの存在でした。当時、同じく公立高校でテニスをしていた友人と一緒に不安な気持ちを抱きながら、恐る恐る運動場を歩いて部室に向かったところ、我々の入部を同期メンバーが大きな歓声とともに受け入れてくれた事は36年も前の事ではありますが、今でも鮮明に覚えています。

在部中の4年間で何と言っても私にとって一番思い出深いのは、関西学生団体リーグ戦での入れ替え戦です。

私たちが1回生の時は善戦したものの、甲南大学硬式庭球部創部以来初めて2部に転落してしまうという悔しい結果となりました。私が入部した時点ではリーグ戦は既に終わっていたのですが、少しピリピリした雰囲気はまだ残っていました。2回生の時のリーグ戦ではリベンジを果たすべく挑みましたが、2部の1位争いで近畿大学に4対5の僅差で惨敗、1部返り咲きには至らず、大変悔しい思いをし



◀ 36回大学卒業アルバムより
前列左から、升 祥史、藤本 拓司、直木 俊樹、吉田 勝彦、藤井 淳
後列左から、深田 恭史、尾崎 真二郎、馬殿 太郎、石塚（白木）雅子、石井（坂田）昭子、藤尾 憲弘、戸田 孝、山本 祥史

ました。それから、更に1年後、3回生の時のリーグ戦では前年甲南を下して1部に昇格した近畿大学との入れ替え戦となり、正に運命的な対戦となりました。結果は前年の結果を裏返したかのような5-4の僅差での勝利、レギュラー選手ではなかった、ひたすら声を上げて応援する事しかできなかった私、又、チームメンバー全員で念願の1部返り咲きの瞬間を溢れ出る涙とともに、抱き合って喜んだ事は生涯忘れません。

個々の力を比較すると間違いなく甲南が有利と思っていましたが、2年続けてこれだけの僅差で勝敗が分かれるというのは、お互い、意地とプライドと魂をぶつけ合う、リーグ戦ならではの、団体戦の難しいところなのかもしれません。

私にとって、甲南大学硬式庭球部での4年間は今でも社会人生活の原動力になっていると言えます。それと、この4年間苦楽を共にした同年メンバーは30年以上経過した今尚、毎年交流が続いており、自分にとって、又、これからもずっとかけがえのない友であり、この絆は貴重な財産になっています。新入生のあの時、勇気を振り絞って、入部して本当に良かった、今でも心からそう感じています。

最後に現役の皆さんへ 個人戦での関西学生、インカレ、又、団体リーグ戦等、目標が色々とおもいますが、達成に向け悔いを残す事がないよう、甲南魂を発揮して、完全燃焼してください!!

又、チームメンバーとの絆を大切にしてください!!

陰ながらこれからも皆さんのご活躍を応援しています。

生涯AOHARU

大学 石塚（白木）雅子

私が小学生の頃、奈良の田舎で熱心にコーチの指導を受けている少女がいました。両親に連れられテニスコートに来ていた私は、暑い中練習に励む彼女を、陰ながら応援していました。やがて高校からテニスを始めた私にとって、すでに大阪で活躍している彼女は羨望の的でした。大学でもテニスをしたい!高校時代、県外の試合では必ずシードの下に入れられていた私にとって、伝統ある甲南大学のテニス部に入ることは夢のようでした。緊張しながら初めて部

活に顔を出すと、そこには彼女、坂田さんがいたのです。

奈良から電車を3つ乗り継いで通う部活動は、想像を絶するものでした。身体がついていかず辛くなった時には、坂田さんがいつも明るく冗談を言って励ましてくれました。レベルの高いメンバーに囲まれて練習し、次第に試合に勝てるようになると、どんどんテニスにのめり込んでいきました。

初めてのリーグ戦の前後に同期や先輩方が辞められて、部員が4人になった時期がありました。未熟で生意気な私たちは、よく先輩たちとぶつかり合い、反抗しました。その際には、神沢先生やOGの坪川順子さん、諸先輩方に変なお世話になりました。4人で何度も話し合い、よく悩み、よく泣きました。

私たちの負けず嫌いな性格が功を奏したのか、最初のリーグ戦では、2年ぶり2部復帰、その後元気な後輩たちが6人も入部し、雰囲気が一気に変わり、次の年には2部2位という良い結果を残すことができました。坂田さんは、先輩とのダブルスで夏関ベスト4という素晴らしい成績を取めました。

また、いつも仲良く団結力のある同期の男子部にも支えてもらいました。練習後の「サンタマ」、試合前に観に行った「ロッキー4」、本戦前には、クレーからハードコートに下りて男子との対戦があり、女子部の先輩に負けた男子が、罰を受けたことも忘れられない思い出です。ここだけの話ですが住吉川ランニングに行くと言って休憩した事もありました。（ごめんなさい）

テニス部で過ごした日々は30年以上経った今でも、宝石箱を開けた時のようにキラキラと輝いています。

先輩たちと真剣にぶつかり合った日々、これも今では懐かしい思い出です。その時には気付かなかったけれど、もっと強くなりたい、試合に勝ちたい、リーグ戦で結果を残したい…実は先輩たちと私たちの気持ちは、バラバラではなく同じ方向を向いていたのです。

真剣にテニスに打ち込んだことは、強靱な身体を作ることに繋がりが、大切な仲間と出会うきっかけになりました。大学時代の経験で辛いことに対しても我慢強くなり、今では豊かな人生を送ることが出来ているのです。

悩みを持った部員たちへ、私たちからのメッセージです。諦めず努力し続けてください!創部100周年おめでとうございます。

高校 1987(S62)年卒

阿部 元彦 大地 篤司 小川 武志 奥田 泰之 佐伯 孝平 阪本 真司 塩田 哲也 四宮 康次郎 杉浦 正明
延原 孝二 藤戸 謙一

大学 1991(H3)年卒

男子 大地 篤司 小川 武志 佐伯 孝平 阪本 真司 塩田 哲也 四宮 康次郎 杉浦 正明 田中 隆雄 谷内 宏隆
張 勝貴 西峪 邦彦 延原 孝二
女子 船越(植西) 真紀子 森光(加賀谷) 真利 下郷(徳岡) 麻子 松下(中川) 佳子 谷田(安井) 真紀

高校写真



大学写真



スナップショット



高校 塩田 哲也

個性的な同級生達の中でも一際異彩を放っていたのが藤戸謙一君である。入部時の彼はふ厚い眼鏡をかけた肥満児であった。しかし、1年後には当初1回すらできなかつた腹筋運動を600回以上もこなすようになり(もちろん諸先輩方のご慈愛に満ちたご指導の賜物である)、彼の腹は見事なsixpackに変貌していた。ところが肝心のテニスはからっきしである。当時(現在も)、人として未熟であった私は「なぜ藤戸は辞めないのだろう?」と思っていたが、彼は中高6年間テニス部を続けきった。卒業後、理解できたことがある。甲南庭球部とは、小学校を出たばかりの子供を先輩という名のこれまた子供達が猛烈にしごき、篩にかけること「強い意志と忍耐力」を叩きこみ「社会に通用する人間」へと育成するための卓越したシステムであった。ということである。深謝。

大学 佐伯 孝平

私たちの学生時代は、エドバークとベッカーの全盛期。この二人のプレーに魅了された。しかし私は、それ以上に、現代テニスの最高のライバル、フェデラーとナダルのプレーと人柄に強く惹きつけられた。正々堂々のフェアプレーで全力を出し切る二人の姿、そして互いを認め合い、相手を尊重してプレーする姿。勝っても負けても、試合が終わると握手をし、互いを称えるシーンに心を奪われ魅了された。ただ強い弱い、だけではなく、テニスを通じて、人間的に成長し、魅力的になっていく2人を見ると、テニスという競技をしていて本当に良かったなと思う。

今回の寄稿にあたり思い返してみると、そんなテニスという競技を、先輩や後輩、そして同期の仲間と手を抜かず一緒にできたことを誇りに思うし、私たちを成長させてくれた甲南テニス部には、感謝の気持ちしかない。たくさんの素晴らしい思い出をありがとう!

大学 谷田(安井) 真紀

3回生、2回生の4人の上手な先輩方にあこがれて6人で入部した37回生の私達。今のようなセレクション制度もなく初めてテニスを始めるメンバーもいました。残念ながら1人は怪我で退部を余儀なくされました。私達は日々努力を重ねていましたが、本戦にもなかなか上がれず3部降格の恐怖と戦っていました。そんな私達に甲斐建樹先輩、吉田昇生先輩、坪川順子先輩をはじめとするOB、OGの方々が熱心に指導して下さいたことに本当に感謝しています。同期の男子にも助けていただきました。最後、結果としては2部残留、頑張ってきたよかったです満足できました。成績は残せなかったけれど素晴らしい先輩方や後輩達、一生の仲間とめぐりあうことができました。甲南のテニス部に入って本当に良かったと今改めて感じています。

■ Profile

名前	阿部 元彦		船越(植西) 真紀子		大地 篤司		小川 武志		奥田 泰之	
学部・ゼミ	経・高寄		法・潮海		営・三島		経・一		—	
出身高校	甲南		被昇天		甲南		甲南		甲南	
部内での役職	トンボ係		なし		役に立たないコートキーパー		学連		ローラー係	
愛称	あべちゃん、プロコピッチ		まこりん		オチ		めばえ		おっくん、フレディ・マーキュリー	
名言・座右の銘	—		ケ セラ セラ		人間万事塞翁が馬		—		—	
得意ショット	ボレー		スマッシュ		フォア		フォアハンド		ボレー	
好きな選手	コナーズ、マッケンロー		シュテフィ・グラフ		オラシオ・セバジョス		—		夏梅秀紀、ボルグ	
入部した理由・ひと言	父がテニス部で勧められたから。		4年間続けられる事を求めている。		モスバーガーで部活帰りの先輩方とすれ違った時に先輩方が楽しそうに食事をされていたのを見て。		助け合える仲間がいたから。		同じ小学校の塩田がテニス部に入ったから。	

名前	森光(加賀谷) 真利		佐伯 孝平		阪本 真司		塩田 哲也		四宮 康次郎	
学部・ゼミ	法・潮海		法・渡邊		営・三島		営・河崎		経・中島	
出身高校	被昇天		甲南		甲南		甲南		甲南	
部内での役職	女子部 主務		主将		主務		副将		同期取りまとめ	
愛称	まりばん		さえきんぐ		チンピ		【表】しおちゃん 【裏】てんこち		こうじろう	
名言・座右の銘	我今何を成すべきか考える		走ってこい!		ぶっちん切れるで!3本ぐらい!#笑		反省はする 後悔はしない		—	
得意ショット	サーブにしときます		フォアのショートクロス		スマッシュ...		当たりの薄いフォアハンド		ボレー	
好きな選手	セリーナ・ウィリアムズ		西さこちゃん		アンドレ・アガシ		ヤニック・ノア		ジョン・マッケンロー	
入部した理由・ひと言	体育会というものが分かっていなくて...		みんなとテニスしたかったから。		一緒に真剣になれる仲間がいたから。		庭球部に入るために甲南中学を選択。		テニスが好きだったから。	

名前	杉浦 正明		田中 隆雄		谷内 宏隆		張 勝貴		下郷(徳岡) 麻子	
学部・ゼミ	営・一		法・渡邊		経・滝沢		経・滝沢		文・柘矢	
出身高校	甲南		西宮今津		甲南		甲南		神戸海星女子学院	
部内での役職	学連		なし		役に立たないイレギュラー		会計		なし	
愛称	おすぎ		たなやん		タニ		ちよう		あさこ	
名言・座右の銘	—		臨機応変		実は「走って来い!」が一番です		楽は苦の種、苦は楽の種		みんなちがってみんないい(はず)	
得意ショット	バックのショートクロス		スピンドロブ		威力の無いヘビートップスピン		サーブ		サーブ(あらゆる意味で)	
好きな選手	マッツ・ピランダー		マイケル・チャン		マッツ・ピランデル		ステファン・エドバリー		グラフとエドバーク	
入部した理由・ひと言	身体を丈夫にしたかったから。		高校生の時に前田さん、坂元さんのインカレダブルス優勝された試合を見て。又、シード選手の多い甲南テニス部に憧れていました。		高校時代に「青が散る」を読んだ。		テニスをするのが好きだったから。		硬式庭球部の響きに無限の可能性!?を感じて。	

名前	松下(中川) 佳子		西峪 邦彦		延原 孝二		藤戸 謙一		谷田(安井) 真紀	
学部・ゼミ	文・野々山		法・渡邊		営・一		営・星野		法・潮海	
出身高校	兵庫県立川西緑台		甲南+平生		甲南		甲南		大阪女学院	
部内での役職	副主将		雨雲呼んでくる係		体育会本部		—		女子部 主将	
愛称	けーちゃん		につきこ、につっこ		のぶ、のぶりん		ふじと		ぴーちゃん	
名言・座右の銘	一隅を照らす(目標)		蜂の知らせ 西峪で10枚		“反省文書いてこい!” 次の日 “坊主してこい!”		—		頑張りすぎなくていいんだよ	
得意ショット	逆クロスフォア		バックハンド		コート整備のローラー		ネットプレー		バックハンドのストレート	
好きな選手	シュテフィ・グラフ		アガシとチャン		夏梅秀紀		エドバーク		リサ・ボンダー	
入部した理由・ひと言	体育会の先輩がかっこいい!と思って硬式テニス部に入ることになった。		テニス部の皆が好きだったから。ひと言:卒業できたのは、女子部のお陰で感謝します。		中学で甲南に入る前からテニス部に入りたいと思った。大学時代は体育会本部や米国留学などでテニスからは遠ざかったけど、高校卒業前から、もう入部するのは当然のような感じだった。		大人になってからも続けられるスポーツを選びました。		素敵な先輩方に勧誘していただいたので。	

高校 1988(S63)年卒

大西 太郎 小林 銀次郎 須部 哲司 野谷 昌平 平野 卓雄 前川 満太郎

大学 1992(H4)年卒

男子 池本 晃英 大西 太郎 岸田 行生 小林 銀次郎 須部 哲司 平野 卓雄 藤井 範彰 前川 満太郎

女子 今川 佳子



▲ 第9回全国選抜高校庭球大会より

の日々と言うのではないかと思います。入学時に60名程入部した部員が、中学校卒業時には精鋭の6名になっておりました。

特に私達の学年で思い出深いのが、中学3年生の時の全国中学生テニス選手権大会です。私達の1年前の第10回大会で、1学年上の先輩方が準優勝されておられました。1学年上の先輩方は部員数も多く、アスリート揃いでしたので、私達の学年はいつもその陰に隠れ目立たない存在でありました。その為、密かな闘志を燃やし、先輩方の戦績を上回り、絶対に優勝をすると燃えていたのを思い出します。

残念ながら私は補欠でしたので、試合で貢献する事は出来ませんでしたが、決勝戦では名古屋市立豊正中学校に2-3と苦杯を喫しましたが、我々の学年が初めて存在感を示せた試合であり、苦しい練習を耐えてきた成果でもあり、嬉しくもあり、誇らしかった記憶がございます。

この度の100周年記念行事に際し、当時の仲間たちと頻りに連絡を取ったり、会って食事をしたり致しますが、話す内容は当時のことばかりです。

本当に同じ釜の飯を食った仲は素晴らしく、永遠であると思えます。私達の学年は、現大学監督の平野が学生の指導に当たってくれております。

常勝甲南硬式庭球部を守り続ける為に、我々、1人のOBとして出来る事は小さいと思えますが、その力を All Konan Tennis Club として結集し、素晴らしい戦績を残してくれる様に我々同期が先頭に立ってサポートをしていかないといけないと考えています。

甲南中高硬式庭球部OBであることの誇り

高校 野谷 昌平

創部100周年、誠におめでとうございます。

旧制甲南高等学校の時代1923年に創部された我が硬式庭球部が、100周年という大きな節目を迎えられた事、心より喜び申し上げます。

団体戦では全国大会優勝や準優勝、個人戦でも日本のテニス界に誇る名選手を数多く輩出している我が部は名実ともに甲南を代表するクラブであり、その歴史は100年もの長きに亘り、現役の学生の皆さんにも脈々と受け継がれている事は、OBの1人として大変誇らしい限りです。

少しだけ私達の学年の話させて下さい。

私個人的には中高6年間しか硬式庭球部に在籍致しておりません。100年の歴史の中で、私が籍を置いていた期間はごく僅か。しかし、その6年は本当に濃密な期間でございました。

余りに濃い期間であり、最近の事はちよくちよく忘れるのですが、この時代の事は全く忘れる事も無く、今も良い思い出であり脳裏に焼き付いております。

中学校時代は本当に「理不尽」と「不条理」との闘いでありました。昭和の時代に在籍された皆様は推して知るべしと存じますので敢えて書きませんが。。心身ともかなり鍛え上げられました。これを正に、血と汗と涙



▲ 38回高校卒業アルバムより

そして、次代に名門甲南硬式庭球部を150年、200年と受け継いでいって頂きたいと思えます。

現役の皆様の益々のご活躍を心からご祈念申し上げます。

この度は誠にありがとうございます！

関西学生リーグ戦の思い出

高校・大学 須部 哲司 (38回卒業生一同)

創部100周年、誠にありがとうございます。

同期一同、心よりお慶び申し上げます。

早いもので、我々も卒業後30年が経ちましたが、現在も先輩方と週末テニスに興じるメンバーや、主将を務めた平野は、大学男女の監督として、現役と共に汗を流しています。

さて、我々38回卒業メンバーにとってのハイライトは、紛れもなく4回生最後の関西学生リーグ戦だったと言えます。それはテニス部人生の集大成となる、生涯忘れえぬ思い出になりました。

また、この年1部リーグは、1部4校制5セットマッチが最後で、翌年からは1部6校制3セットマッチへ移行する、ある意味歴史的な年となったのです。

その最後のリーグ戦は、近畿大学、同志社大学に連敗し、1部残留が掛かった最終京都産業大学戦、初日のダブルス3 (大西/村上組)、2 (池本/藤井組) は、いずれも0-3のストレートで落としてしまいましたが、ダブルス1 (平野/前川組) はフルセットでの激戦を制し、辛うじて1-2でシングルスに望みを繋ぎました。ダブルス1はセットカウント1-2と劣勢の中、日没と降雨のため順延となりました。

学連からはナイター設備のあるコートへ移動して続行するよう指導がありましたが、当時の監督、吉田昇生さんがゲームの流れや、



▲ 38回大学卒業アルバムより

選手の疲労度に配慮し、順延を申し出て下さったのです。

そうしてダブルス1は、翌日何とか逆転で勝利しましたが、続くシングルスは6、5を落としてしまい、完全に後がなくなりました。

しかし、ここから奇跡とも言える逆転劇が始まったのです。

中学生時代から切磋琢磨してきた、S4平野、3前川、2大西の3人は、試合前に3人だけで「やるしかないやろ!」と士気を高め合い臨んだ結果、いずれも格上の相手にストレートで勝利し、最終シングルス1の藤井に望みを託すことになりました。

藤井は「人生で最も緊張した瞬間だった」と言っているように、非常に緊迫した大熱戦でした。

第1、第2セットを連取したものの、第3セットを落とし、第4セットもシーソーゲームとなりましたが、最後は藤井のフォアハンドのパッシングショットで勝負が決まり、その瞬間全員がコートに流れ込んで、勝利の喜びを分かち合いました。

その後のミーティングでは、4回生を始め後輩たちも全員が涙していたのを、昨日の事のように思い出します。

テニス部では辛いことも多々ありましたが、このメンバーで続けてきて本当に良かったと思える、最高の瞬間でした。

当時は甲南だけがスポーツ推薦を実施しておらず、他校よりインカレ、本戦枠も少ない不利の中、4回生は練習後に保久良山までのランニングを課す等、主将の平野を中心に全員が追い込み、一丸となって戦う団結力が、京都産業大学を優り、最後に勝利へ導いたと思います。

一方女子部は、4回生が1人という中、責任者の今川が全員を率いて、3部を死守した事も特筆すべき事です。部員数も少なく厳しい時期を乗り越えて、今があると言っても過言ではありません。

最後になりましたが、甲南硬式庭球部の、今後の更なる発展と活躍を祈念しております。

Let'Go! 甲南!!



▲ 岡本、ハードコートにて

高校 1989(H1)年卒

青木 伸二 阿部 文彦 岸 克巳 小谷(前田)英一郎 宮武 和寛 村上 宜史 村上 典由

大学 1993(H5)年卒

男子 岸 克巳 塚田 健太郎 星野 俊一 村上 典由

女子 石井(北村) 祥子 香川(佐藤) 敦子 袖岡(宮迫) 恵子 前田(仁) 佳子



▲ 39回高校卒業アルバムより

甲南テニス部の10年間

高校・大学 村上 典由

12才から22才までの10年間で、甲南テニス部とは何だったのかを考えてみた。

テニス部に入ったのは親の意向。無邪気に過ごした小学校を卒業して、ヒエラルキーの底辺に。無我夢中の下積みの日々でテニスもなかなか上達しなかったのだが、辛い辛い記憶はなっていない。

高校になって少しは人間らしいクラブ生活を送れるようになったが、盲目的にテニスを続け、大切な試合でよく負けて悔しい思いをした。反省することは多いが、悪い思い出ではない。

大学では私たちの代は強い学年ではなかったが、とにかくよく練習した。1部6校制となったことで降格は免れ、スポーツ推薦も始まり、後輩にバトンを渡すことができた。ここでも反省することばかりだが、とても充実した良い思い出である。

今振り返ると、当時の10年間は甲南テニス部でなくてもよかったかもしれない、とも思う。もっと視野を広げて、いろいろな経験を積むことも出来たかもしれない。ただ、熱中することに出会って、愛すべき仲間と熱中できたという経験は、他の選択で得られたかどうか。この点においては甲南テニス部だから得られた、替えがたい10年間だったと思う。

中高の同期は阿部・村上・村上・岸・前田・青木・宮武。大学は村上・星野・岸・塚田、女子部の宮迫・仁・佐藤・北村。阪神大震災で亡くなった岸が、今いないのが残念だが、一緒に苦楽をともにした同期・先輩・後輩のみなさんには心から感謝したい。

硬式庭球部で過ごした時間

大学 星野 俊一

1923年に誕生した甲南学園硬式庭球部が、創部100周年を迎えられたことを心よりお慶び申し上げます。そしてこの100周年を多くの偉大な先輩方とともに、OBの一人として居られることを大変嬉しく思います。

私が硬式庭球部に所属したのは1989年からの4年間です。私は外部生でしたので、制服の襟に「甲南大学硬式庭球部」のバッジをつけられた時の嬉しさは今も覚えています。

同期は村上・塚田・岸と私の4人。1回生の時は先輩への電話連絡を、帰宅途中の当時は公衆電話からしたことが多々ありました。またチョンボした時に主将から発せられる「坊主」への恐怖心。結局雪が降った翌日にコートキーブが間に合わず1回坊主になりましたが、その時のことは未だに忘れられません。4回生の時はリーグ戦で「1部」を守らねばならないと、厳しい練習を重ねました。私はレギュラーをサポートする側でしたが、村上主将の下全員で戦い、1部残留できた時には安堵しました。最後にセンターコートで撮影した集合写真は、よき思い出として今も飾っています。

硬式庭球部で過ごした時間を振り返ると、その後の社会人生活において役立つものが非常に多かったと感じます。後輩の皆さんには、貴重な学生時代を伝統と歴史ある硬式庭球部員として過ごすことを自覚し、「徳・体・知」に磨きをかけていってほしいと思います。

伝統と人材育成を重んじる硬式庭球部が100周年を機に一層輝きを増すことを祈念しております。



▲ 大学新人歓迎旅行(4回生時)

甲南硬式庭球部 出会いに感謝

大学 塚田 健太郎

甲南学園硬式庭球部創部百周年を迎えられたことを心よりお慶び申し上げます。

我々の世代は楽は無かったが、幸、喜、苦の多い世代だったと思う。

先ずは幸。多くの先輩と後輩に囲まれ、人に恵まれたことが幸だったと思う。卒業後、愛知の会社に就職。私が一回生時、四回生の先輩が私の住む街に転勤で赴任してこれ、未だ携帯電話の無い時代、私の寮に電話を頂いた。甲南の後輩二人も愛知に就職しており、以降、私達は濃密な時間を愛知で過ごした。この先輩と現在は東京で家族ぐるみのお付き合いをさせて頂いている。よくよく考えると愛知の会社に就職できたのは私が四回生の時の監督、先輩のお陰である。妻と出会ったのも甲南庭球部だ。

喜びは三回生春のリーグ戦。私はレギュラーにはなれなかったものの、四回生の先輩達の頑張りで一部に残留できた。最終の京産大戦である。ダブルス1勝2敗で折り返し、シングルスも2敗し後が無くなった中、シングルス4本を取り大逆転で勝利した。この時テニスの試合で初めて感動し泣いたことを今でも鮮明に覚えている。この時、部員全員が最後まで諦めずに戦ったことは社会人生活の礎となった。

苦は何と言っても私達が三回生となり、最高学年となった時である。当時先輩達のお陰で一部に残留できたが、戦力は明らかに大幅に落ちており、二部落ち確実と言われていたからである。私達の世代の主将を務めた村上は相当なプレッシャーがあったと思う。全体の底上げが必要だと練習メニューを考え、毎日全員で住吉二週のランニングを行った。一部六校制に変更となり、残留の見通しが出てきたが、一部の試合は秋となり、一年半、二部落ちのプレッシャーとも戦いながら最終学年を過ごした。結果、一部残留と歴代の先輩方からするとレベルの低い戦績しか残せなかったが、私達の下世代は何年振りかで王座出場を果たしてこれたのはこれも幸であったと思う。各世代で色々な経験を積んだと思うが、甲南でのテニス生活は社会人の礎となるはずだ。



▲ リーグ最終戦直後

改革 始まりの年

大学 袖岡 (宮迫) 恵子

創部100周年、誠におめでとうございます。

33年前を振り返りますと数えきれない思い出が蘇ります。仁さん、佐藤さん、北村さんと共に、輝かしい戦歴の先輩方とテニスに明け暮れる毎日。できたマメは今もしっかり残っていますが、猛練習の甲斐あって、今川先輩と全国出場を果たすことができました。

主将となった年、一芸セレクションの導入が決まり、宣伝活動が必須となります。名刺片手に地方予選へ。住居リサーチに不動産へ。セレクション会議の資料作り。合格した選手の環境作りも早急の課題でしたが、日々の練習もあり、自分の中でやりたい事とできる事とのギャップに苦しみ、悔しい思いもしていた、そんな時、手を差し伸べて下さった先輩方。また、レベルアップの為、男子部との合同練習に賛同してくれた同期、後輩たちにも感謝の気持ちでいっぱいです。小さな事しかできなかった1年目でしたが、学生の皆さんのご活躍を拝見し、熱いものが込み上げてきます。

どんな時も励まし合い、夢を語り、努力を怠らず、汗を流し、涙を流し、笑い合う。そんな尊い時間はあっという間に過ぎます。今を大切に、自分を信じ、諦めず、挑み続けたその先の栄光を、皆さん各々が掴み取ることを、切に願って止みません。さあ、次の100年へ！硬式庭球部の益々のご躍進を心から祈念申し上げます。



▲ リーグ最終戦直後



▲ リーグ戦終了後男子部全員で

高校 1990(H2)年卒

片岡 武哉 木部 久陸 時田 嘉昭 平井 大輔 行定 幸治

大学 1994(H6)年卒

男子 浅井 裕 阿部 文彦 片岡 武哉 佐藤 元彦 平井 大輔

女子 桂(津川) 宏子 河野 佳代子



▲ 40回高校卒業アルバムより

残念ながら、テニスでは満足する結果が残せなかったのが今でも悔やまれる部分です。しかし、2回生の時に副務、3回生、4回生で主務を務めさせていただき、部を代表してOBの方々への報告や連絡をする立場、また合宿の手配や、学習院戦や遠征時の交流戦のアレンジ等のために他の大学の方々との調整役となり、部を支える裏方として、テニス以外の面でも活動を行うことで学ぶことも多かったと感じております。

大学4年間のテニス部での生活は、苦しい事、嫌な事、悔しい事が殆どで、たまに嬉しい事、楽しい事があったのが事実ですが、今となっては全てが懐かしい大変良い思い出です。入部から引退までラケットを握らない日はほぼないくらい

にテニスに没頭したことは、私の人生にとって誇りであり、また自信となっており、部活を引退し、社会に出て現在に至るまで、何にでも立ち向かっていく姿勢でいられることに繋がっていると感じております。

最後となりますが、私が大学で部活を4年間続けてこられたのは、お互いに苦楽を共にした片岡くん、平井くん、阿部くん、佐藤くん、女子部の津川さん、河野さんの6名の同期、また厳しさの中にも優しく接していただいたOBの方々と先輩の方々、後輩が居られたからだと考えており、感謝でしかありません。

今後も、OBとして現役の皆さまの役に立てよう何らかのかたちで支援させていただき、甲南大学硬式庭球部が繁栄し続けることを心より祈願しております。

硬式庭球部での充実した4年間の経験

大学 浅井 裕

この度は、甲南硬式庭球部の創部100周年おめでとうございます。心より喜び申し上げます。

私は、家庭の環境もあり、テニスに携わった人や携わっている人に囲まれて育ち、1990年3月に甲南高校を卒業し、1990年4月の甲南大学への入学と同時に入部しました。

その当時は、関西学生リーグ戦が4月に開催をされており、リーグ戦に向けて練習をされているところに、新入生として入部しました。初日は、リーグ戦が行われる神戸総合運動公園でのレギュラーの先輩方の練習であり、朝から夕方まで、試合のボーラー、ボール拾いでスタートした事を、ついこの間の様に記憶しております。中学、高校ではテニス部には属していなかった私にとって、先輩方のテニスに励む真剣な姿、また厳しい練習は大変新鮮であり、この厳しい生活を4年間続けられるのかを不安に感じ、慣れるまで時間を要したのを覚えております。

さて、4月のリーグ戦が終わり、私のテニス部でのラケットを持ってボールを打つ4年間の生活がスタートしました。1回生、2回生は、部活中はボールを打てる時間は短かったのですが、その短い間に集中してボールを打つことが凄く充実していましたし、練習後の自主練は、練習の疲れを感じずにボールを打ち続けました。4年間を通して、OB、先輩の方々に色々なことを沢山教えていただきましたが、

かけがえのない仲間との出会い

大学 桂(津川) 宏子

創部100周年おめでとうございます。今から30年前…女子テニス界はシュテフィ・グラフが絶対王者として君臨し、伊達公子さんが日本のエースとして活躍中でした。私たち40期生がテニスに明け暮れていたのはそんな時代です。1回生の時、女子部員は私1人。

1つ上の4人の先輩方がコート整備から片付けまで一緒にして下さい、優しく面倒をみてもらいました。2回生の時、初心者の方の河野さんを半ば強引に引っ張り込み、共に頑張る仲間を持ちました。彼女と2人だからこそ頑張り続けられた部活動。1つ上の宮迫先輩には試合でたくさんいい経験を積ませていただきました。後輩たちにも恵まれ、練習中はあえて厳しく指導もしましたが、普段は和気あいあいと過ごし、楽しい思い出がいっぱいです。プープー言われながらの住吉川ランニング、ダンロップフォートの水缶を有り難く回し飲んだことも、またかけがえのない思い出です。笑。

30年たった今でも先輩や後輩を交えて集い、なんちゃってテニスをしたり、美味しいお酒を飲みながらの近況報告は、今のかけがえのない時間です。

現役の皆さん!楽しい時も苦しい時も共に過ごす部の仲間は一生ものです!目一杯好きなことをやれる「今」を大切に、目標に向かって精一杯頑張ってください!そして、苦しい時こそ、テニス部で培う「諦めない心」で菌を食いしばり、笑顔で乗り越えてください!これからも益々のご発展を心からお祈り申し上げます。



▲ リーグ最終戦後クレールコートにて



▲ 40回大学卒業アルバムより

高校 1991(H3)年卒

新原 英世 福岡 正晃 堀 拓真 松本 鉄郎 三澤 英磨

大学 1995(H7)年卒

男子 木内 伸光 鈴木 彰吾 中村 総一郎 新原 英世 東野 勝 三澤 英磨 行定 幸治

女子 塚田(相田) 尚子 吉本(北川) 景子



▲ 中学時代



▲ 41回高校卒業アルバムより

ポッシブル

高校・大学 新原 英世

自由に生きましよう。自分勝手でも自己中心でも無く、自由に。精神が自由で、肉体も自由で在れば、尚いいね。6年いや10年続く階層、厳しい部則と弛い校則の内、自由な精神と肉体を手に入れたい。

拘らず、偏らず、執着がない。勝ち負けが有り、戦績が残り、目標の到達を目指す。自由を手にするのは困難な環境に感じますか。然にあらず。

昨今の世の中に垂れ込める同調圧力線状帯、他人の発言を自分の発信として拡張するコピペさん、未だ、お上や専門家の御達し

に従順すぎる国民?性。

これって、間違ふことの怖れでは?

自由に考え、自分で考え、自他に尋ね、自然を鑑み、信頼する。いま、必要です。

自由って?総てのことを許す。真ぐに全てを。

蛇足 そんなあなたは自由なのか! 否否、とんでもない。もし、ロシアの大統領の子供だったら、とつくに父親をノビチョクしてます! 不自由な感情のもち主です。

人生で最も心を揺り動かされた瞬間

大学 木内 伸光

甲南学園テニス部100周年、心よりお祝い申し上げます。私が甲南大学に入学したのは、平成3年(1991年)。元々京都か神戸で大学生活を送りたいという理由だけで長野県松本市から甲南大学経営学部を受験したのがきっかけです。どちらかといえば京都の同志社大学を目指していましたが叶わずに甲南大学に入学したのが事の始まり。元々は本意ではなく始まった甲南大学生活。テニス素人だった自分がなぜかテニス部を選び入り甲南大学体育学部テニス学科生として4年間を過ごしました。現在52歳になりますが、実は自分史上最も心を揺り動かされた経験を、その本意ではなく始まったこのテニス部での4年間の中でさせていただきました。それは今でも自分の人生の中で最も心が震えた瞬間であると同時に、今もその瞬間を超えるような経験をするべく、自分の日々の仕事に向かっていますが、どうしても未だ超えることのできない貴重な体験です。ここではその貴重な経験に関して感謝を込めて書かせてもらいます。

私の人生で最も心を揺り動かされた瞬間、それは大学4年の関西大学対抗テニスリーグ戦の最終戦、対立命館大学戦で起こりました。私たちの代になった時から「近大に勝って王座に行く」という大きな目標を主将の中村を中心に掲げ、その年の1年から4年までの部員がそこに向かっていたように思います。4年の同期7人の内、3人がレギュラー候補としてテニスに向かい、残り4人が非レギュラーとして支える役を担い、明確に役割分担ができていたことも良かったのだと今になって感じます。目標としていた「近大に勝って…」は叶わず3勝1敗で迎えた最終戦。ポイント3対4でシングルスNo.1の中村とNo.2の重政の試合が残り、その2試合にポイントがかかりました。先に重政が勝ち、最後は中村。ベンチコーチとして必ず勝つと信じてはいましたが、格下になんとお茶目にファイナル突入。

たぶん、重政よりも先に終わらせたくなく、あえてのファイナル突入だったと今でも疑っていますが、事実は分らず。中村がマッチポイントをものしついでに甲南が5対4で勝利しました。その瞬間です。部員がコートになだれこみ、「うーおー」という奇声を発しながらコート上で抱き合い、大号泣しました。それは王座に出場したことの感動というよりも、皆で同じ頂を目指し、それぞれの役割の中で意見をぶつけながら成し遂げた事に対する感情であったように思います。「近大に勝って…」は達成できませんでしたが、皆で目指したあのプロセスと結末が残念ながら今でも自分にとって最高の経験で、あれを超えるような経験をしたいと今も自分の会社でチャレンジし続けています。

大学での4年間、それは間違いなく人生の中で最も貴重な経験です。甲南学園の目指す「個性を尊重し、天賦の特性を啓発する人物教育」。甲南生として甲南学園テニス部に籍を置いた者として、決して今の社会に埋もれず、型にはまらず、ぜひ自由闊達に自分自身の価値や使命、強みにしっかりと向き合い、自分自身が心から価値を感じる事の出来る仕事を生涯でいてほしいと強く願います。とはいえ、何をやるにせよ最後は体力。毎日毎日好きなテニスに明け暮れる事のできるこの大切な時間に、心身を徹底的に鍛えて下さい。そして、個人の目標と同じように、テニス部の仲間とチームとしての目標を共有し、同じ目標に向かい、共にものがいて下さい。

甲南学園に関わる全ての皆様に、そして同期の皆に幸多かれと心より願っています。

現役の皆様へ

大学 東野 勝

甲南学園テニス部創部100周年、心よりお慶び申し上げます。

甲南大学硬式テニス部へ入部された現役の皆様へ。皆様は、今、テニス部の伝統と練習の厳しさに驚いているのではないのでしょうか。準備から後片付けまで、家族と過ごす以上にテニス部での時間を過ごしておられることでしょうか。試合で負けたり練習で上手くいかず、悔し涙を流すことはありませんか。理不尽なことを言われ納得いかないことも、試合前日に緊張して寝れないことも、怪我をして仲間と行動を共にすることが出来ない時間もあるでしょう。しかし、仲間と一緒に汗を流したこと、練習や試合で勝って喜びあったこと、練習外の行き帰りや移動時間で友と笑い、悩み事を相談したことなど、その多くの時間が、かけがえのない時間です。特に同期は、プライベートの時間も多く過ごすので、一生涯の友となることでしょう。テニス部4年間の汗と涙は、皆様の力となり、社会人になってからも体力的、精神的、人間的にも自信と魅力につながっていきます。テニスが縁で人間関係が広がっていくことも事実です。どうか、たくさんの汗をかき、涙を流し、悩み、考え、笑いあって、仲間と過ごす時間を大切に下さい。

最後になりますが、先輩、後輩の皆様、そして同期として4年間を共に過ごしていただいた中村氏、木内氏、新原氏、鈴木氏、行



▲ 大学リーグ戦終了後

定氏、三澤氏に、この場をお借りして感謝申し上げます。それでは、テニス部員の皆様の御健康とテニス部の御発展をお祈り致します。

変革の流れのなかで

大学 塚田 (相田) 尚子

甲南学園テニス部100周年、心よりお祝い申し上げます。

私の学年は、私と北川さんの2名。北川さんは、学年一人で上級生になっても部活を続けていけるのか悩む私と、そんな私の不安と一緒に向き合ってくれた先輩の熱い勧誘により、大学からテニスを始めた初心者でした。

そんな状況の中、大学ではスポーツ推薦の導入が本格化し、1学年下からスポーツ推薦枠で入部する部員ができ、活動の方向性や雰囲気大きな転換期を迎えました。実力も実績もない私たちが、スポーツ推薦の部員もいる下級生を引っ張るにはどうすればいいの。部活の意義や目標が個々で違い、揺れ動く中、それでも今出来る最大限のことはなにか。悩みながら行動し続け、2部リーグに昇格を果たしました。

部を通じて、経験や能力を言い訳にせず、『真剣に達成したいことへの信念をもって取り組む姿勢』を持ち続けたことは、今もなお自ら考え、行動に移す力として活かされていると思います。

現役の皆さん、現環境がかけがえのない時間であったと振り返る時は、まだ先の話ですが、是非テニスは勿論のことながら、学業も遊びも懸命に取り組まれて下さい。

今後も部の発展と皆様のご活躍を心よりお祈りし、お祝いの文とさせていただきます。



▲ 大学クレートコートにて3部リーグ戦後

高校 1992(H4)年卒

新井 敏允 春日 勉 小林 亮輔 竹田 臣也 山根 康太

大学 1996(H8)年卒

男子 今川 究 小林 亮輔 小張 慎一郎 坂戸 秀彰 高橋 永 竹田 臣也 山根 康太

女子 笠間(早瀬) わかな 川上(加藤) 夏絵 久木山(宇都宮) 美麻 佐藤(本山) 恵子 田中 友紀子
ミヨー(内本) 京子 山本(山口) 未希子



▲ 42回高校卒業アルバムより

人は無限に頑張れる

高校 春日 勉

私は今年で満50歳になりますが、中学一年生というとおよそ37年前になり、あのコートへの門を初めてくぐった時から人生に大きな影響を与えてくれる試練があったということが、今となっては懐かしく大切な事だったと感じています。

その中で一番勉強になった事といえば、『人は無限に頑張れる』ということだと思います。テニスという試合競技は、練習をしても上には上がいるため、上位の方はそれ相応の努力を積み上げているのでマグレでは勝つことは到底できません。

ランニング一つにおいても、三ノ宮までを電車で行くところを往復走するという経験や、コート整備をするにしても15時の授業終了から15時20分までの間に仕上げなければいけないため、授業が終わると同時に一目散に走らなければいけないなど、ここでは書ききれないくらいの初めての事や、コート上の決まり事・部の決まり事・同時にこなさないといけない分担などがあり、その中で各々が乗り越えていかないといけない課題が常にある環境でした。

その様な課題のあった学生生活を13歳の中学一年生から高校三年生までの

間送らせていただいたこと、学べる課題が常に高くあった事を本当に感謝し嬉しく思います。今の自分があることの大きな面が青春の甲南テニス部であったと思います。

部活の経験が自分のベース構築に繋がった

高校・大学 竹田 臣也

創部100周年おめでとうございます。私は小学生時代サッカーをしていた事もあり、甲南中学校入学後はサッカー部に入部するつもりでしたが、テニスをしていた父の強い勧めがあり、結果テニス部に入部する事になりました。

入部後はテニスの面白さにのめり込んだ反面、今では考えられないようなテニス部の厳しさやしきたりを目の当たりにしました。半年も経たないうちに同期の半分以上が辞め、自身の体力・精神力も限界に来ていましたが、好きなテニスを続けたかった事、何よりも一緒に頑張っている同期がいた事が励みになり「体育会とはこういうもの」「球拾いはいつまでも続かない」と自身を鼓舞し続けていた事を記憶しています。そんな中、大学卒業まで通算10年間続けられたのは、厳しい中でも「甲南テニス部の伝統」「テニスへの愛情」「尊敬する諸先輩方」「素晴らしい同期」があったからです。



▲ 42回大学卒業アルバムより

当時OBの先輩から「日本一厳しい甲南テニス部で頑張ったら、社会人になってどんなつらい事があっても耐えられる」と言われた事は今でも心に残っており、甲南テニス部で培われた様々な経験が「多少の辛い事ではへこたれない」「球拾い・コート整備等の下積みは決して無駄ではない」という自分のベース構築に繋がったと自負しています。

私は社会人になり25年が経過しましたが、テニス部で培われた様々な経験を今でも会社の部下指導に活かしています。現役の皆様もこれから困難な場面に遭遇されるかとは思いますが、甲南テニス部の絆と誇りを大切に、乗り切って頂きたいと思います。今後益々のご活躍を祈念いたします。

仲間と一生語れる日々を

大学 小張 慎一郎

創部100周年おめでとうございます。私達の代は引退して約30年弱ですから、現役の頃は70周年ということになりますが、当時はそんな意識もなく、日々がむしゃらに過ごしていた気がします。ほぼ毎日、日が落ちるまでコートを走っていましたが、引退後にはナイターが設置されたと聞き、時代に命を救われた思いです。

当時はどんなに疲れても、練習後に仲間と飲みに行き、翌朝、超人的な体力でコートに立っていました。甲南テニス部が会社だったら、ハンパない成果を生み出す超優良（ブラック）企業だったと確信しています。30年経とうという今も同期や上下世代で集まり、毎回同じ逸話や伝説で盛り上がりますが、すべてはこの時間のために演じた長い茶番劇だった気がします。

私達の代は3年の時に王座に行ったこともあり、勝手にプレッシャーを感じながら、阪神大震災とともに4年を迎えました。六甲アイランドへの路も断たれ、集まれる者だけで住吉川沿いをランニングし、各自自宅の復旧やボランティアに散っていったことを憶えてい



▲ 4年のリーグ最終戦後に同期で

ます。どの大学よりも春に走り込んだことで、メンバー全員が震災を言い訳にしない戦績を残せたと思います。ただ、今になれば、もっとこうしておけば良かったと思うことも多々あります。社会人になって判断、選択を迫られる日々ですが、あの時悩みながらも進んだ経験が生きていると実感します。4年間は無限なようで一瞬です。現役の皆さんが仲間と一生語れる日々を過ごすことを願っています。

やりたいことは、やれる時に挑戦を

大学 田中 友紀子

創部100周年おめでとうございます。開催するべきかどうか賛否両論が巻き起こった2021年夏の東京オリンピック。新型コロナウイルスの影響で、無観客という異例の大会でしたが、全力で戦う選手の姿に心打たれ、改めてスポーツの力の偉大さを思い知りました。そんな東京オリンピックから遡ること30年。私達の学年は女子7名。初のスポーツ推薦者、未経験者が入り混じるメンバーが集まりました。高校までの部活と違い、練習メニューや合宿、対抗戦など、自分達で考えて実行する大学の部活は、初めて経験することばかり。メンバー同士、意見の相違で、部室で長時間泣きながら話し合ったこともあり。夏の練習後には、岡本駅近くの甲南そばでかき氷を食べながら、時に熱く、時に他愛もない話を皆でよくしたものです。また、1995年1月、3年生の時に起きた阪神大震災。それまでの当たり前が突然当たり前ではなくなった日。生活が一変し、部活どころではない状況でしたが、少しずつ日常を取り戻し、練習を再開できるようになった喜び。忘れられない経験です。

学生の皆さん!やりたいことがあるなら、ぜひ挑戦してみてください。30年前にテニス部だった私達が、今の世の中を想像できなかったように、未来のことは誰にも分かりません。『やりたいことは、やれる時に挑戦を』というエールを学生の皆さんに贈らせていただくとともに、テニス部の今後益々のご発展をお祈り申し上げます。



▲ 卒業式正門前にて

高校 1993(H5)年卒

川口 純一 笹田 泰二郎 澤井 源 樋口 啓

大学 1997(H9)年卒

男子 蛭原 孝之 川口 純一 佐藤 広世 重政 淳 星野 義弘

女子 榎本(吉田) 愛 塩川(池田) 百合乃 西田 陽子



▲ 43回高校卒業アルバムより

輩や後輩に恵まれて良い4年間を過ごせたとおもいます。

最後に佐藤くん、重政くん、川口くん、星野くん、同期は最高でした。辛いこと助けあって、喜びを分かち合い、同じ時間を過ごせたことは本当に宝物になっています！

ありがとう。(ほとんど今は音信不通なので、連絡下さい)

2023年4月に息子が甲南中学校に入学し、テニス部に入部しました。継続することの大切さを自ら経験して欲しいと思います。

私の大学テニス

大学 蛭原 孝之

男子5名の少ないメンバーで4年間クラブ活動をしました。簡単に同期を紹介します。

まずは誰もが知っている重政淳。テニスではかなり活躍しました。意外と泣き虫であったり、面白い人間です。

次にキャプテンであった佐藤広世。メンバーをしっかりまとめ、関西リーグ4位に導いた頼れるキャプテンでした。

そして、唯一の甲南中高からテニス部であった川口純一。大学では主務や学連として支えてくれました。

次に会計をしてくれた星野。途中で体調を壊して練習にたまにしか参加できませんでしたが、星野くん作るポカリは絶妙な配合で、めちゃくちゃ美味しかったです。

最後に私、蛭原です。ただただ練習を休まず、継続することに意義を感じ、クラブ活動に参加しました。

私の思い出としては、やはりリーグ戦です。マリンパーク北村で白熱した団体戦が繰り広げられました。私たちの時は、相手チームの選手たちに野次を投げかけたりして、かなり周りの力が勝敗に影響してました。甲南は他の大学と比較しても人数が少ないながら、応援は他大学に負けませんでした。ゴーゴーレッツゴーレッツゴー甲南!と声が枯れるまで掛け声を連呼したことを覚えています。

体育会テニス部に入って、罰ランや理不尽な怒られ方をしたり厳しい環境だと感じますが、4年間クラブを継続したことで、最高の先

必死の4年間

大学 重政 淳

100周年おめでとうございます。

私が、大学時代に分岐点となった出来事をまとめてみました。

1年生で、いきなりテニス人生のターニングポイントになったのが春関でした。田舎の高校から何もわからない状況で甲南大学にやって来て、何とかレギュラーになって。リーグ戦で活躍する為には、インカレに出場することがチームメイトから信頼を得られるのではないかと考え、目標にしていました。高校生までの戦績があまり無かった私は、予選の下シードからスタートでした。インカレに出るには、本戦に上がって3回勝って、ベスト16に入れば確定でした。予選から、まわりのレベルも全くわからないので「油断すればいつやられるかわからない」という気持ちで、全力で試合したのを今でも覚えております。その勢いのまま、予選を勝ち上がり、本戦も2回勝ち。3回戦の対戦相手は、強豪同志社のキャプテン。ファーストセット、セカンドセットを取り合って、ファイルセット4-2リード。最悪のことに、ここで、足首を負傷するアクシデントが起きてしまいました。4-4まで追いつかれましたが、相手も走れない私にプレースタイルが変わり、ボールを置きにいつしまったことと、私の諦めない姿勢に対するプレッシャーから、ミスが増え、泥試合になり、6-4で勝利。インカレに出場できる大きな一勝だったと思います。試合直後、病院にいき、即ギブスの靭帯断裂でしたが、運良く全治1か月でトレーニング出来るまで回復しました。これが私の関西学生デビュー戦でした。

2回生は、いろいろな経験をしました。まず、春関のダブルスで予選から優勝しました。結果は覚えているのですが、内容は全く記憶に無いです。夏関ダブルスでの決勝戦。5セットマッチのファイナルセット。相手は宿敵近大。試合をしている私たちもエキサイティングしていましたが、その試合は、異様な雰囲気、両チームの応援のボルテージがあがり、場外乱闘がおきてもおかしくない感じでした。その理由は、その年のチーム目標が「近大を倒して王座に出場すること」でした。レギュラー/イレギュラー全員、同じ気持ちだったからだと思います。試合は、ファイナルセット5-4の40-30。マッチポイントで私のサービス。渾身のボディへのファーストサーブをバックハンドで強烈なリターンエースを決められて、そこから5-7の逆転負け。試合が終わった直後、近大に校歌を歌われて…。応援してくれたチームメイトに合えず顔もない状況。不甲斐なさや情けなさで、ラケットをすべて叩き折ってゴミ箱に捨てて帰ったのを覚えております。絶対マネしないでください。その悔しさがバネになり、リーグ戦までの1か月は私のテニス人生で1番真面目に練習したと思います。リーグ戦では近大にリベンジすることは出来ませんでした。念願の王座出場を果たすことが出来ました。その後、個人戦では、関西学生室内シングルス優勝。初めて関西学生をとる事ができました。その1か月後、阪神淡路大震災を経験することになりました。学校も崩壊、日常生活をするのが困難な状況で、到底テニスなんか出来る環境ではなかったのですが、早稲田大学の主務の方から「練習場所で困ったらおいでと」ありがたい連絡を頂き、1か月、早稲田で貴重な練習体験をすることが出来ました。

3回生は我慢の年でした。六甲アイランドの陸上トラックの場所は復興支援の自衛隊の基地でした。六甲アイランドの外周のランニングコースも液状化して、暗くなると怪我をしそうな感じでした。この状況で、テニスしていいのか?と思うこともありましたが、他に何が出来るかと考えた時「少しでも神戸に明るいニュースをテニスで運ぶ事くらいしか出来ない」と思い続けていました。結果は、春、夏、室内全てシングル準優勝に終わってしまいましたが、とても貴重な経験でした。

4回生最後の年、真剣にインカレ優勝と関西学生優勝を目標にやっていました。インカレは残念ながらベスト8に終わってしまいました。関西学生は春関でも準優勝で、4大会連続準優勝…。新聞にもミスター準優勝と書かれるぐらいでした。最後の夏関でなんとか優勝して結果を出し、チャンピオンスピーチで、周りの人に感謝している気持ちを伝えることができて、とても幸せでした。

甲南100年の伝統の中に、自分たちの1ページが、記されている事に光栄を感じます。後輩達には更なる繁栄を期待しております。

大学テニス部を通じて

大学 塩川(池田) 百合乃

甲南学園硬式庭球部創部100周年記念誌の発刊、誠にありがとうございます。心よりお祝い申し上げます。100年という長期に亘り、運営にご尽力頂きました様々な方々に、この場をお借り致しまして厚くお礼申し上げます。

さて、私達1997年卒部生も、社会に出てから振り返りますと早や四半世紀ほど経ち、年月の経過の速さに驚きを隠せませんが、この間、公私ともに様々な出来事がありました。就職、結婚、子育て、転勤などなど、それぞれのライフイベントに付随する思い出がたくさん出来ました。そのように各々の道を歩む中で、卒業後も時折、母校の後輩達の練習を見学に行ったり、皆で集まりテニスをしたり、年に一度のOBOG学習院戦に参加させて頂いたり、学生時代に戻ったような気持ちで過ごせる機会を持てることは、本当にかげえのない時間だと感謝しております。

これからも様々なことがあるかと思いますが、いつも甲南大学硬式テニス部で過ごした思い出と共に、笑顔で頑張っていきたいと思っております。



▲ 43回大学卒業アルバムより

高校 1994(H6)年卒

國光 宏昌 高島 一郎 竹田 憲 西森 正和 橋本 郷 山西 圭

大学 1998(H10)年卒

男子 國光 宏昌 坂戸 宏通 高島 一郎 竹田 憲 西森 正和 橋本 郷 原田 泰 森谷 智一

女子 大林(山田) 尚代 岡田(谷野) 直子 松田(宇野) まや



▲ 44回高校卒業アルバムより

私と甲南テニス部

高校・大学 國光 宏昌

記念誌執筆に関して、現役引退してから26年経った今、改めて当日を振り返る貴重な時間を作っていたいただいた、記念誌企画制作スタッフの方々に感謝申し上げます。

私は甲南高校からテニス部に所属し計7年間を甲南テニス部として過ごしました。特に大学4年間の経験は非常に濃いものであり50歳の声を聞き始めた今でも当時の「苦行」は昨日のこのように思い出せます。

まず大学テニス部最初のサプライズは“入部”のプロセスでした。未だに私は「大学テニス部に入部する」と言う意思確認をした覚えがなく、高校3年生の2月頃、「伊藤忠で練習があるから来るよう」と言われて高校テニス部の延長で伊藤忠での練習に参加しています。その時の経験はここで文字に起こす事はあえて避けようと思えます。ただ、当時の高校3年生同期が次々と脱落し、甲南大学入学時には5名のみになっていました。来る4月にはその5名で桜咲き誇る甲南大学正門近くで新入生への体育会テニス部への勧誘活動しております。「ん？僕達って勧誘される側じゃ・・・？」と口に出すどころか、想像することも許されない空気感だったと記憶しています。

入部してからも幾多の「苦行」をこなし、時には私が原因で同期全員丸坊主にも何度か陥れ、今思うと本当に申し訳ないと反省しております。問題ばかり起こす私について摂津本山駅前マクドナルドに同期全員集合して「國光をどうする・・・」と、真剣な議論になったあの時の光景は脳裏に焼き付いております。

ここまで「苦行」などと書かせてもらいましたが、当然悟りを開く境地には達しておりませんが、人生におけるかけがえの無い友人や先輩/後輩と巡り会い、その後の人生に大きな影響と幸福をもたらしてくれた事は間違いありません。今の私はそんな素晴らしいオール甲南TCに恩返しをする事が幸せに繋がっております。

Never give up!

高校・大学 高島 一郎

「絶対に辞めるな。根性をつけろ」という父からの言葉が私のテニス人生の始まりでした。

私にとっては厳しい3年間の受験勉強が終わったのもつかの間、中学入学と同時に甲南ゴルフ部出身の父から中学、高校で一番厳しかったテニス部に入部するように言われました。入部してみても本当にびっくりしましたが、当時のテニス部は本当に厳しかったです。

当時の私にとって、とても厳しい練習を終えたあと片道2時間、往復4時間をかけて姫路から通学をした道のりこそが現在の私の成長への道であり、基礎を築いたのではと思います。

中学時代の一番の思い出は、仲間と共に全中団体戦で3位になったことです。テニスを始めて3年でしたが、努力が実を結ぶことを実感しました。個人戦では中学、高校、大学と思うような成績を残すことはできませんでしたが、10年間を通じて一つの事をやり遂げたことで、父が言った根性や忍耐力も得ることが出来、どんな困難があっても乗り越えられると現在も私に大きな自信を与えてくれています。

大学時代には、関西学生テニス連盟の運営側にも参加しました。大会の運営を通じて、裏方の大切さやマネージメントを学ぶだけでなく、多くの学校の人々との出会いの機会をもらいました。そして、そこで出会ったのが当時園田学園にいた現在の妻であり、後に世界で活躍する浅越しのぶさんでした。帯同した引退試合ではUSオープンのコートにも立たせてもらい、違う形で4大会のコートに立つという夢を叶えさせてもらいました。

余談ですが中学1年生になった娘は現在、妻の母校である園田学園のテニス部でプロを目指し頑張っています。テニスが私たち家族の縁を結んでくれたことに感謝しています。

また、大学4年の引退後はテニスのコーチとしてアルバイトをすることで、幅広い世代の方々との出会いとともに、コミュニケーションを学ぶことが出来ました。その経験は、社会人となった現在も仕事で大いに役立っています。

社会人になり、現在も様々な場所で甲南出身の方々にお会いすること



▲ 中原先生・濱田・橋本・高島・大塚・竹田・清水・中山・山西

があります。同じ学校、同じ所属クラブだったということだけで、特別に可愛がっていただけるのは、伝統がある学校クラブならではの魅力だと感じています。

これまでの100年間先輩方が繋いできた良き伝統を私達後輩が絶やすことなく、次の100年に繋げてゆくことを心から願っています。

この度は甲南テニス部100周年、誠におめでとうございます。



▲ 2006年 (US OPEN)



▲ 園田学園でプロを目指す娘 (右)

花やと小学校と私

高校・大学 橋本 郷



中学時代にあまりテニスを行った記憶が薄いため、題名も今の現役の方はわからないと思われるかもしれませんが挙げさせて頂きました。罰ランのルートを示す業界用語？ですが、学校が終わってクラブ活動開始時に始まり、練習終了間際まで続くような感じで、その当時は陸上部より長距離は早かったと自負しています。我々の世代はスポコン世代であり、スクールウォーズや戸塚ヨットスクールのような、今ではコンプライアンス違反もいいとこだと思われる事が正しいと叩き込まれていたため、現在もたまにジェネレーションギャップの際悩まされます。今思えばあのような指導方針ではなく、ゆとり教育のような余裕のある考えであれば、さらにその当時の現役の方々はさらに飛躍していたかもしれませんが、後悔先に立たずで今では良き思い出です。中学3年の時は部活終わりにレッスンを受けに行き、兵庫県や近畿で優勝も出来、完全テニスバカでした。悩みと言えばボレーが下手くそで毎日鉄アレイを持ってランニングしていたことぐらいでしたが、ああいった努力を今でも出来るかというと思われませんが、その時の執着心を忘れないようにしないといけないとたまに思います。

高校時代ですが、何かと色々な誘惑に負け妥協が出てきていたのが記憶にあります。ただ中原先生が最後の試合(近畿選抜の団体?)に「今までいろんな試合会場に連れていってくれてありがとう」という言葉はとても印象深く思い出に残っています。当時は本当にありがとうございました。

現在はヨーロッパで日本商材の輸入を行っていますが、遠方でもテニス関係で繋がる事も仕事上で多く、昔話に花咲く事も多々あり、やっつけてよかったと思う事があります。そういう事が無ければよかったと思えるような思いは湧かなかったと思われませんが、今では素晴らしい人間関係を築けた事に感謝しております。

同期の友人はテニス関係の方のスポンサーなど実施しており、私も何かできないか模索していますが、ジュニアテニスがヨーロッパで活躍できるような場所を現在の仕事を通じて協賛出来ればと思っています。

現役の方のご活躍はFBなどを通じて見えています。今後とも永続的にご活躍、ご健闘して頂きたいと願っております。

大切な4年間

大学 松田 (宇野) まや

創部100周年おめでとうございます。心よりお喜び申し上げます。

入部したのは今から29年前。幼い頃よりOBの父から甲南テニス部への熱い思いを聞いて育ち、気がつけば自分もその一員になりたいと思うようになっていました。期待していた通り、学生主体の活発で温かなクラブだったことが嬉しく、ウキウキしながら住吉川横のクレイコートに足を運んだ日のことを思い出します。4年間を振り返ると、沢山の良い出会いがありました。優しく頼りになる先輩方、元気でしっかりした後輩のみんな、尊敬すべき男子部、そしてかけがえのない同期。最初7人いた同期は少しずつ減り、最後は3人になりましたが、辞めたメンバーとの楽しい思い出も沢山あります。残った3人は、主将の山田尚代(旧姓)、主務の谷野直子(旧姓)、そして私。とにかく3人で様々な話をしました。山田さんは責任感が強く、常にチームのことを一番に考えて皆を引っ張ってくれました。谷野さんはチームのお母さんの存在で、細かいところまで優しく心を寄せてくれていました。そんな2人に私はいつも励まされ、練習がキツくて心が折れそうな時もある間にか笑って乗り越えていました。4年間、最後までやり抜いたことは大きな自信になっています。

現在、山田さんは学習教室の経営兼講師、谷野さんは営業職、私は幼児教室の講師としてそれぞれが自分らしく頑張っています。テニス部での4年間が糧となっていることは間違いありません。甲南テニス部で本当に良かった。甲斐監督、直木監督をはじめ、大変お世話になったOB・OGの方々にも感謝の気持ちでいっぱいです。これからも甲南大学硬式庭球部の益々のご発展、ご活躍をお祈り申し上げます。



▲ 44回大学卒業アルバムより

高校 1995(H7)年卒

津崎 元博 山口 竜史

大学 1999(H11)年卒

男子 片山 匡 山口 竜史太

女子 東田 正美



▲ 45回高校卒業アルバムより

中高大テニス部の思い出

高校・大学 山口 竜史

甲南テニス部100周年を迎えるこの素晴らしい日に、心よりお祝い申し上げます。

私たち45回は、中学高校時代も大学時代も人数が少ない代でした。

中学入部時は10数名いましたが高校卒業時には2名。大学入部時は3名いましたが卒業時は2名。なぜか当時は人数が多い代、少ない代が交互になっており、雑用が多く損した気分になっていましたが、1学年上の先輩方に優しい方が多く、助けられていました。

私は、震災の影響で一時期大学テニス部を離れましたが、どうしても甲南大学テニス部でテニスをやりたい気持ちを捨てきれず復帰しました。迎え入れてくださった当時の主将と諸先輩方には今でも感謝しています。と同時に、その間同期の片山君には迷惑と苦勞をかけたことを今でも申し訳なく思っています。同じ愛知県民。いまだに飲みに行くと当時の思い出話に花が咲きます。

中学生時代は練習以外の部分で辛かった記憶がほとんどですが、大学生がリーグ練で中高テニスコートに来られた際の上級生の颯爽とした登場姿のカッコ良さ、練習姿のカッコ良さにあこがれを抱き、「自分もあになりたい」と思い、踏ん張り耐え抜くことが出来ました。高校時代は、もっと練習しておけばよかったと後悔の念が残っています。大学時代は、よく走り、よく打ち、これ以上出来ないくらい練習に打ち込みました。おかげで高校の時には絶対に勝てなかったような相手に勝つことも出来たりと、日々の猛練習が試合で報われる充実感、達成感も味わうことが出来ました。

「もう一度中学生に戻ったらテニス部に入るか？」と聞かれると、当時はもう二度とこんな辛い思いをしたくないと思っていましたが、今となってはYESです。もう一度やり直せるならば、もっと練習して強

くなりしたいと思います。

あの修練を乗り越えたからこそ今の今があると自負していますし、甲南中学高校大学の10年で得たものは、今では何物にも代え難い財産となっています。

テニス部100周年を心からお祝いするとともに、これからの甲南テニス部の輝かしい未来を祈念いたします。

震災直後の入学

大学 片山 匡

私が甲南へ入学したのは大学1年生の春、1995年1月の阪神大震災直後の入学でした。スポーツ推薦制度を利用し早めに合格をいただいていたのか、3月から練習に参加していました。

練習初日は、「摂津本山駅のマクドナルド前に集合」と言われ、当時2回生の先輩の車に詰め込まれて六甲アイランドのテニスコートに連れて行っていただきました。練習コートまでの交通手段は六甲ライナーも運行できていなかったの車に限られていました。道は通行止めばかりで岡本から六甲アイランドの練習コートまで1時間半を超えることはざらで、「遅刻=坊主」だけは避けないといけないので、運転の先輩も乗っている毎日冷や汗ものでした。

当時は震災直後でコートサイドにある水道は蛇口をひねると白く濁った水しかでてこなかったの、水缶やポットは体育館まで毎回汲みに行っていました。

入学後も現在は立派な校舎が建っている岡本キャンパスは半壊



▲ 仲の良い3人で

の建物が多く、校庭に建てられた無数のサティアン（プレハブ）で授業を受けていました。

私たち男子1年生の同期は私を含めたたったの3名。同期の山口は震災後の実家の家業を手伝う必要があり、もう一人の門田は体調を崩し練習に來れない日が続き、気がつけば同期は私一人。下働き→練習→下働きが永遠に繰り返される地獄の日々が始まっていました。

地獄だったのは私だけでなく、2回生の先輩方も私と一緒に練習前後の下働きを手伝っていただきました。同期が1人しかいなかったの以上級生の方も気を配っていただき、本当に感謝の日々でした。

試合は4回生の今川先輩とダブルスを組ませていただき春関、夏関共に本戦に上がり、リーグ練習とリーグ戦に出場。自分の出番が終わったらボーラーに変身し毎日クタクタでしたが、とにかく勝ってコートに入り続けないと下働きを免除されないことに気付き、試合は必死で頑張りました。冗談抜きで今では貴重な体験と思える様になりました。

それとOBの方を覚えるのも必死でした。中高テニス部の先輩方も時々「あの人誰？わからへん？」ってあてにならない事も…。

2回生になる頃には同期の山口も部活に戻り、更に後輩も8名入部し、余裕ができたのかテニスも楽しくなりました。在学中の4年間で大学王座には出場できませんでしたが、先輩、同期、後輩とOBの方に恵まれ、インカレ以外に全日本選手権にも出場できたのは甲南テニスの歴史やノウハウを叩き込まれたからだとも思っています。

卒業後は仕事の関係で愛知県に在住ですが、甲南やテニス部で仕事につながる方もあり甲南卒業生で本当に良かったです。

微力ですが甲南テニス部のさらなる発展と現役学生の活躍を心より応援しています。

甲南学園硬式庭球部100周年、誠におめでとうございます。

学びある大学時代と今

大学 東田 正美

高校から本格的に硬式テニスを始めました私は、選手として戦績は残せませんでしたが、伝統ある甲南大学硬式庭球部は、いわゆる体育会系の厳しい部でしたので、目上の方に対する立ち振る舞いを学ぶことができました。入部当時は、決められた時間より前に部活動の準備を行うことや、試合でのボーラーや無駄のない動きを行うことで、先輩方に指摘されないようにすることで精一杯でした。圧倒的な上下関係がある状況でしたが、その経験から新卒1年目で社会人となった時の懇親会などでは、目上の方々への対応を評価され、テニス部で学んだことは社会人としてとても大切なことであると思いました。

また現在はスノーボードのプロ選手兼プロ選手へのコーチとしております。競技は違いますが、懸命に練習しても結果を出すことができなかったテニス部での経験がとても役に立っています。上達するには正しい練習計画とその実施、分析と改善が必要だと学びました。大学時代にはあれほど練習に割く時間があつたにも関わらず、与えられたメニューを行うだけでした。今思えば、自分でプレーを分析して改善するなど、自身ですべきことがもっとあつたのではないかと考えさせられます。当時活躍していた選手たちは、勝つために何が必要かを考えて認識し、練習していたのだろうと想像します。今になりまして当時の選手たちを改めて尊敬しています。

プロスポーツ協会で選手会の役員として活動しておりますが、このオール甲南テニスクラブはとても良いモデルだと思います。選手を引退すると、その競技に関わる機会が減る方が多くいらっしゃいますが、毎年会費を納め、関わりを続けることができます。遠方にいる方やテニスから離れている方も、現役の活動を把握する

ことができますし、新規に施設を建設する場合などには、すぐにサポートできるような体制です。選手活動へのサポートだけでなく、就職活動のサポートや卒業後の繋がりなどもあります。

オール甲南テニスクラブが結ぶ現役選手とOB/OGの方々との縁というのは、とても素晴らしいものであると同時に、歴史を重ねるたびに、この縁が増えていくことはとても貴重なことだと思います。

これからもオール甲南テニスクラブ、並びに甲南大学硬式庭球部の益々のご発展をお祈り申し上げます。



▲ 大学リーグ戦

高校 1996(H8)年卒

梶本 周平 中井 久雄 村瀬 和哉

大学 2000(H12)年卒

男子 梶本 周平 立花 潤 富岡 秀太 春風 信介 船津 裕之 山田 倫久 吉田 剛士 米本 浩章

女子 木岡 都美 山根 江里



▲ 46回高校卒業アルバムより

硬式庭球部での学び

大学 立花 潤

この度は、甲南学園硬式庭球部の創部100周年を迎えられたことを心よりお祝い申し上げます。1世紀の間歩んでこられたことは、OB・OGの皆様と大学、テニス界関係各位のご理解、ご支援と現役選手各位の日々の精進の賜物であり、その一員でいられることを誇りに思うとともに心より敬意を表し感謝申し上げます。

さて、私が甲南大学硬式庭球部に所属したのは平成8年から12年の4年間になります。思い返せば入学当時は平成7年に発生しました阪神・淡路大震災の影響が残り仮設校舎で講義を受け、そこからテニスコートに通ったことを思い出します。

練習に明け暮れた4年間でしたが、社会人に必要な基礎スキルの一部を学ぶことができたように思います。

“チームファースト”

高校までは個人戦、個人で勝つというのが一般的ですが、大学だと団体のリーグ戦で勝つことが重要な目標になってきます。レギュラーメンバーが勝つ事と同じぐらい、その他のメンバーがどのようにサポートして“勝たせるか”大切になってきます。応援・アドバイスなど周りの方々の支えがあってこそその勝利というのが大学のテニスだと思いますが、個人競技であるテニスにおいて、「チームの中で自分が何を貢献できるか?」を常に考えるようになりました。その経験や学びが社会人になってから活かしています。

“レジリエンス”

平日は授業が終わってから、休日は朝から晩まで練習やトレーニングに明け暮れた結果、自分の思考や感情、反応を自覚できるこ

と(自己認識)、自分の思考や感情を制御し、環境や状況に応じて適応させられる力(セルフコントロール)、ポジティブな面や事柄に気づき発見し、目的に沿ったアクションを起こせる性質(現実的樂觀性)、状況に応じてフレキシブルに考え、思考できる性質(精神的柔軟性)、自分らしさ、強みを見出し、その強みを最大限に発揮し、困難も突破する強さ(キャラクター・ストレングス)、信頼関係を構築し、維持していく力(人とのつながり)を養うことができ、社会人となり逆境や困難が訪れても、自立的に立ち直ることのできる強さ・柔軟性を持つ事ができました。

硬式庭球部で過ごした日々は後々の人生においてもかけがえないものとなります。現役の皆様には今できる事に集中し、自信と誇りを持って挑戦を続けて頂きたいと思います。

甲南学園硬式庭球部の発展に尽くされたOB・OGの皆様、そして歴代のご関係各位に、創部100年の節目にあたり、あらためて感謝申し上げますと共に、今後のますますのご発展をお祈りいたします。



▲ 第17回全国選抜高校テニス大会

がむしゃらなテニス人生

大学 富岡 秀太

このたびは甲南テニス部100周年、誠におめでとうございます。46期生の富岡秀太と申します。甲南大学を卒業してから20数年が経った今、このような機会をいただき感謝いたします。

大学当時は本当に無我夢中で、あっという間の4年間でした。1996年に高校を卒業し、縁あって夢と希望を抱き入学することになった甲南大学。震災から1年後の神戸はまだまだ復興する過程の街でした。高校から大学という環境の変化に戸惑いながら、1996年3月、六甲アイランドのテニスコートでの練習に参加した当初から、甲南大学体育会硬式庭球部の伝統や厳しさに圧倒され続けました。

仲間の一人は、毎日こんな厳しい練習、生活はもう無理だと言い、それを日々の練習帰りの電車内で、また明日も一緒に頑張ろうと互いに励ましあい、支えあった日々が続きました。ただテニスを強くなりたかっただけなのに、こんなに厳しいルールの中で過ごすことに何の意味があるのだろうか…そう思うこともしばしばでした。

46期男子は8名いましたが、驚くことに実は大半が一般入学の部員でした。テニスの強豪高校出身の私には驚きでした。しかし、彼ら一人一人がいてくれたからこそ、多くの困難を乗り越えることができたと思います。立花、梶本、船津、春風、吉田、春風、米本。大切な仲間を得られたことが何よりの財産です。もちろん、女子部の皆も。

自分自身、テニスではあまり貢献できませんでしたが、テニス部の為に自らの全てを犠牲にし、なりふり構わずだがむしゃらに突き進むことができた4年間でした。

思い起こすと数えられない程いろんなエピソードがあります。ここでは具体的には述べませんが、また何かの折に同期に会った時でも、酒でもかわしながらその一つ一つを語り合えたらと思います。きっとどんな酒の肴よりも酒に合うこと間違いなしでしょう。

100周年を迎え、現役の後輩達にはぜひとも大学王座出場、そして悲願の大学日本一を勝ち取っていただきたい、そう心から願っています。

最後になりましたが、現役時、何度も何度も、暑い日も寒い日も六甲アイランドテニスコートまで足を運びご指導いただいた辻本先輩、吉田先輩、宇津原先輩、その他先輩方、本当にありがとうございました。大学関係者の皆様も本当にありがとうございました。

私自身、現在もテニスに関わる仕事を大阪でさせていただいています。今年で45歳になりますが、まだまだ私のテニス人生は続きます。甲南大学硬式庭球部OBとして、誇りを持ってこれからも日本のテニス界の発展のために出来る限り尽力したいです。

このたびは100周年、誠におめでとうございます。

まさに大人な青春?!

大学 木岡 都美

甲南大学硬式庭球部、皆様にとってどんな記憶が思い起こされますでしょうか。それぞれに楽しくもあり、苦い思い出もあつたり、濃い大学生時代だったはず。私はとにかく目から鱗でした。「大学生ってお化粧してテニスするんだ!みんな綺麗だな～」 「お酒飲んで煙草吸ってテニスプレイヤー、なんだか大人?！」一人密かに心の中で驚きの連続でした。それだけ何も知らず大学に飛び込んだのです。そして何よりも全員真剣にテニスに向き合っている、そんなのは当たり前話でもあります。私のテニスに対する今までの概念が少々覆るほどに、これほどまでに自主的にテニスをする先輩の姿を見て、もっと大人にならなきゃと思わされるほどでした。今でも色々な感情、記憶が昨日のこのように鮮明に蘇り、懐かしい気持ちになります。

1、2年生の頃は、大学テニスの環境に少し圧倒されながら、どのように練習したら今よりレベルが上がるのか迷走していました。そんな時に、OBの吉田昇生さんや当時監督をしてくださっていた宇津原さんの献身的な指導のおかげで、自分のテニスに少しずつ変化が生まれたのを覚えています。

大学時代、一度はトーナメントで優勝したいという目標だけは常にあり、その為に散々周りを巻き込んで練習に励みました。あの頃は本当に我儘放題、今考えても生意気で自分のことしか考えていなかったなと胸が痛くなります。それでも私にとっては楽しくてたまらない熱く頑張れた4年間だったのではないのでしょうか。

昔と今では、随分と様変わりしているのかもしれませんが、テニスに思い存分打ち込むことは同じだと思うので、現役の皆さん悔いなく最後まで青春してほしいです。なんとと言っても、人生の中で元気で若い時代でもありますから。

最後になりましたが、甲南学園硬式庭球部創部100周年、誠におめでとうございます。

100年という長い歴史の中、錚々たる諸先輩方のご活躍や並々ならぬご尽力、月日が経った現在も様々な場所で語り継がれていることと存じます。この素晴らしい歴史の歩みが止まらぬよう、益々のご発展を心よりお祈り申し上げます。



▲ 46回大学卒業アルバムより

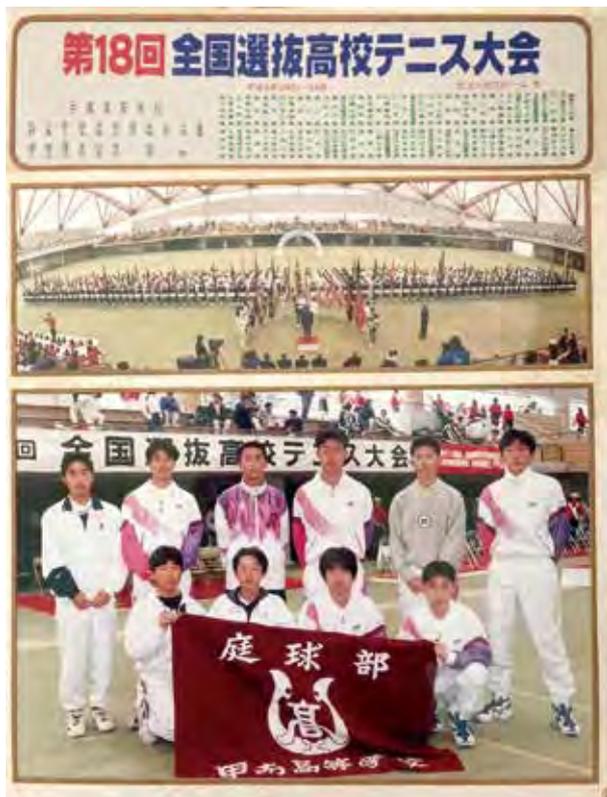
高校 1997(H9)年卒

高橋 田中 修平 津嶋 昭宏 野々山 健児 藤原

大学 2001(H13)年卒

男子 北尾 佑介 久代 貴士 城 慎太郎 田中 修平 橋本 隆

女子 木下 朋香 光野(森下) まり子 山口(三澤) 類



▲ 第18回全国選抜高校テニス大会



▲ 47回高校卒業アルバムより

甲南大学 硬式庭球部を経て

大学 北尾 佑介

大学4年間、自分の青春はほぼテニスコートの上にあったと言っても過言ではありません。そしてこの4年間こそが、将来に渡って自分を支える礎となりました。

スポーツ推薦で入学し、硬式庭球部の一員となりましたが、一年目はレギュラーにもなれず悔しい思いをしたことを今でも思い出します。しかしながら、その悔しさから、どう工夫すれば人より上手になれるのか、強くなれるのかを常に考えるようになりました。休日も先輩を誘い練習し、全体練習が終わった後に、居残り自主練を行い、人が練習していない時こそ、実力の差を埋める機会であると捉え、日々ボールを打っていました。その結果、二年目からはレギュラーとしてリーグ戦にも出させてもらえるようになり、少しずつですが、戦績を残すこともできました。三年目には、関西学生選手権ではシングルスベスト16、最後の年にはダブルスでもベスト8の成績を残し、目標であったインカレにも出場することができました。

これらの経験から、努力を続けることで結果に結びつくこと、先輩からのアドバイスを素直に受け入れること、自分を信じ続けることなど、多くのことを学びました。今となっては、経験したことすべてが、かけがえのない財産となっています。本当に、指導して下さったOBはもとより、支えて下さった先輩や練習に付き合ってくれた後輩には、心より感謝しています。

卒業後、社会人となってからも、多くの難局に直面してきましたが、あきらめることなく、それらの問題を乗り越えられたのは、甲南大学硬式庭球部に在籍していた4年間で得た経験があったからなのは間違いありません。

またテニスが続けたことで、人との繋がりが増えたことも自分の人生にとって、大きな財産となっています。

就職し企業に勤めた際、テニスが趣味であると自己紹介を行ったことで、多くの先輩に声をかけてもらい、休日テニスに誘って頂いたことで、勤めた会社以外の方とも知り合うことができ、多くの刺激を受けました。結果、海外で活躍されているような方とも知り合うことができ、自分も新たな挑戦がしたいという気持ちが芽生え、社会人経験を経て南カルフォルニア大学に進学し修士課程を修了したことも、今振り返るとやはりテニスがきっかけだったと思います。

このように過去を振り返った際、いつもテニスが起点となっており、甲南大学硬式庭球部に縁があって入部できたことが、自分の人生における最大のターニングポイントであったと思います。

テニスは野球のように一発逆転はありません。またサッカーやバスケットのように時間で終わることもありません。どのポイントも同じ1ポイントであり、その積み重ねが結果に結びつきます。これは仕事でも言えることであり、日々の努力の積み重ねが大きな結果を生むのだと信じ、今も仕事に邁進しております。

自分が在籍していた甲南学園硬式庭球部が、創立100周年を迎え新たな歴史を刻もうとしているこの時に、多くの仲間と同じ時間を共有できることを嬉しく思います。

100周年記念、誠におめでとうございます。硬式庭球部および携わる皆様の益々のご発展を祈念しております。

伝統ある甲南テニス部OBの一員として

大学 橋本 隆

100周年記念実行委員よりご推薦をいただきまして、僭越ながら文章を書かせていただきます。

平成13年卒業の橋本隆と申します。私は最も多いであろう小中学校からの内部生ではなく、大学から入学をした外部生です。ですので、内部上がりの方々と比べて、客観的な視点で甲南を見ることができました。技量が高いだけでなく、テニス以外の分野においても魅力的な先輩方が沢山おられ、「格好良くて、テニスが強い」そんな甲南に憧れを持っておりました。大学に入学が決まった時の喜びは、今でも鮮明に覚えております。

社会に出ても卒業生の方々のご活躍は、まさにテニスと同様で、東阪問わず各方面でOBの方々のお名前をお伺いします。当然のこと、自身のキャリアにおいても一助になっております。

私事で恐縮ですが、民間企業で22年勤めた後、令和5年度4月に行われた党一地方選挙におきまして、歴代最高得票数(4229票)にて芦屋市議会議員となりました。

精神的にもギリギリの選挙戦でしたが、自身の経歴に「甲南大学テニス部」と記載した手前、活動量だけは、特に根性が必要な取



▲ 大学リーグ戦

組みだけは他候補者に絶対に負られない思いで選挙戦を展開し成果を取めることができました。

私の限界指標は「リーグ練習」です。あの厳しい「リーグ練習」が精神的・体力的な分岐となり、今日の自身を形成しております。

今般の選挙戦におきましては、直接接点のなかった先輩方からも多数のご支援をいただき、改めて甲南卒業生の強い繋がりを感じ、感謝の気持ちとその誇りを一層深めることができました。

今後、甲南テニス部が更に発展し、在学生の戦績は勿論のこと、卒業生の方々のご活躍を願い、また自身においてもその一員となれるように頑張る所存です。

最高の仲間

大学 光野(森下) まり子

私の大学4年間での一番の思い出は、テニス部で仲間と過ごした濃密な時間です。入学当初は、数多くあるサークルに入るかどうか迷いましたが、テニスをするなら本気で取り組みたいと思い、先輩方が優しく声をかけて下さったので、スポーツ推薦ではない私もテニス部に入ることができました。

練習を重ねる中で、一球をあきらめないことの大切さ、リーグ戦で勝つためのチームワークの重要性を学びました。初めはリーグ戦での審判に緊張した事、リーグ戦でみんなで一丸となって応援した事を今でもよく覚えています。テニス部でつらいこともあり逃げ出したくなる時もありましたが、それでも続けることができたのは励ましてくれる仲間や先輩の支えがあったからです。

大学3回生の時に提携校であるビクトリア大学へ留学をし、4回生の春に戻ってきた時も、仲間が快く受け入れてくれた事に感謝しています。

テニスが生涯スポーツとなっている私にとって、テニス部を通してOB、OGの方々にも出会えたこと、心からうれしく思っています。

硬式庭球部、100周年おめでとうございます。テニス部のますますのご発展を心よりお祈り申し上げます。

高校 1998(H10)年卒

池本 裕介 梶本 卓司 小島 隆之 藤塚 健次 矢野 健太

大学 2002(H14)年卒

男子 安居 亮治 池本 裕介 梶本 卓司 中久保 貴司 藤塚 健次 矢野 健太

女子 松本(城下) 裕子

チームスポーツ

高校・大学 梶本 卓司

私の甲南高校テニス部での3年間は、テニスがチームスポーツとして仲間を意識することができた大切な期間であった。

1年生のインターハイ予選、レギュラーになれず、団体戦に出場することはできなかったが、ここで私は初めてテニスがチームスポーツであることを意識することになる。私が入部する直前の3月、甲南高校は久しぶりの全国高校選抜テニス大会の出場を果たし、その年は8月のインターハイに出場できるチャンスがあった。だからこそ、先輩方のインターハイ出場に掛ける思いは強かったが、当時の私はどうせレギュラーではないしと、他人事であった。そんな中で、インターハイ予選が始まったが、試合を重ねる度に、私に心境の変化が生まれた。結果としては、準決勝で敗れてしまったが、必死にプレーする先輩方の姿に感動すると共に、初めて自分以外の人が負けたことに対して悔しさを感じるようになった。

そこから、私のテニスに対する目標が、個人の戦績から、団体戦でのインターハイ出場に変わった。1年生の秋からレギュラーとなり、3月の全国高校選抜テニス大会に出場をはたすことはでき、2年生のインターハイ予選を迎えた。決勝の相手は、明石城西。シングルスNo. 1の田中さんが勝利し、ダブルスの津島さん・矢野組が負け、1-1でシングルスNo. 2の私に勝敗が掛かった。相手は格下であったが、個人戦の時には感じたことのないプレッシャーと緊張で身体が動かず、初めて団体戦の怖さを感じた。正直、緊張でどのように戦ったか覚えてはいないが、必死に応援してくれている仲間の期待に応えるために、がむしゃらにプレーし、私の勝利でインターハイ出場が決まった時には、喜びというよりは、ホッとして放心状態になってしまったことだけは今でも覚えている。そして、翌年の3年生では、団体ではインターハイ出場は叶わなかったが、春の全国選抜ではベスト8に入ることができた。

私は甲南高校テニス部での経験の中で、プレッシャーや緊張に立ち向かう勇気を得ると共に、仲間と共に何かを成し遂げることの楽しさを学んだ。その高校の経験から、さらなる高みを目指して甲南大学でもテニス部に入部することに繋がっている。

今回、この文章を書かせていただくまでは、自分の今を作っているのは大学での経験が大きいとの意識が強かったが、改めて高校時代を振り返ってみて、私の原点は甲南高校テニス部での経験にあったことに気づくことができ、感謝している。

最後に、私と同じように皆様の多くの思い出が詰まった甲南テニ

ス部が、150年、200年と発展し続いていく事を心から願っています。100周年おめでとうございます。





▲ 春の高校選抜ベスト8



▲ 48回高校卒業アルバムより

大学テニス部で学んだ大切なこと

大学 安居 亮治

私は甲南テニス部での生活を通じて、日々の積み重ねの重要性や強い信念と諦めずに努力すれば結果が現れることを学びました。大学入学時にスポーツ推薦で入学しましたが、初戦の春関の予選で敗北し、期待に応えられず、1年目のリーグ練習ではボール拾いとコート整備に専念する日々を送り、大変悔しい思いをしました。しかし、その経験から、リーグメンバーから外れることを絶対に繰り返さないという強い意志を持ちました。

2年目からは富岡秀太先輩とのダブルスで初めて本戦に進出できた喜びは今でも鮮明に記憶に残っています。その後、本戦では常に一勝し、本戦シード選手となりました。また、四年生最後の最後でリーグに出場できたことは非常に嬉しかったです。

この経験から、日々の努力と強い信念を持つことで上達し、結果が必ずついてくることを学びました。合わせて、逆にやる気のない時期もあり、その時には結果としてやる気のなさが現れることも学びました。特にその当時は後輩への思いやりと方向性を明確に示す事ができず、不満を募らせたこともあり、恥ずかしながら今では一番学びの多い経験となりました。その節は後輩のみなさん、本当に申し訳ありません。

学生時代はテニスに没頭し、4年間を集中して学ぶことに費やし、今の私の形成にもつながっています。

就職後はテニスを通じて他部署の同僚との交流ができ、仕事上の問題を円滑に解決したり、新商品の開発に協力したり、他社とのつながりを築くことができました。本当にテニスに助けられたと感じています。

特にクラブ活動で学んだ日々の積み重ねと明確な目標設定の重要性は、私が会社のメインブランドのブランドマネージャーとして任命されたときに大いに役立ちました。学生時代の数々の失敗や反省がなければ、私は現在の立場には到達できなかったでしょう。その経験は私にとって貴重な教訓となりました。

甲南テニス部の素晴らしい点は、卒業後も年齢や世代を超えて先輩や後輩との絆が深く、お互いに助け合えることです。時間が経っても、私たちは苦しい練習や時間を共有した仲間として、戦友のように互いを理解し合うことができるのだと思います。特に私が独立し会社を立ち上げる際には、先輩や後輩の皆さんに大いに助けられ、現在も協力をいただいています。今日の私があるのは、学生時代に甲南テニス部に所属していたからこそです。

社会人になる前に一つのことには没頭し、想いを持ってその道を突き詰めること。そして、その中で数々の失敗や反省からの学びを次に活かしていく事が大切だと改めて感じています。これが学生時代における最も重要な教訓です。

甲南テニス部での経験から学んだことを今後も大切にし、想いを強く持ち、日々の積み重ねを続けながら目標に向かって進んでいきたいと思っています。

甲南テニス部での経験から学んだことを今後も大切にし、想いを強く持ち、日々の積み重ねを続けながら目標に向かって進んでいきたいと思っています。

甲南テニス部の次の100年に向けて、更に良いクラブをみんなで創り上げていきましょう！

この度は甲南テニス部100周年誠におめでとうございます。

感謝。



▲ 大学リーグ戦

高校 1999(H11)年卒

池本 純平 砂原 巨彦

大学 2003(H15)年卒

男子 池本 純平 春木 昌範

中・高校テニス部で学んだこと

高校 砂原 巨彦

私がテニスを始めたきっかけは、父と母がテニスを遊びで楽しんでいたことに影響されたからです。私の家族はスポーツが好きで、週末や休暇の日にはよく公園やテニスコートに出かけていました。ある日、私がまだ子供だった頃、父と母がテニスを始めました。お互いにラケットを握り、楽しそうにボールを打ち合っている姿を見て、私も興味を持ちテニス部に入部しました。

当初甲南中学がテニスの強豪であったことも理解しておらず、いきなり入り込んだ環境に圧倒されていた事をよく覚えています。

当時の環境を考えても、ラケットの持ち方の指導、打ち方の指導等もなく、先輩方のボールを打っている姿を見ながら、自分自身で試行錯誤し、模索しながら技術を磨いていきました。

また、練習の厳しさ等から中学で入部した人間のうちほとんどが1年で辞めてしまい、雑用等の負担がかなり大変だったことを覚えております。

大会等では選手層の薄さから団体戦のオーダーに頭を悩ませ、持てる力を振り絞ってギリギリの中で成績を残していきました。他校の選手たちと競い合うことは、緊張感と興奮を同時に味わうことができました。試合前の緊張感や、相手チームとの激しいラリーの中での応酬は、私にとって貴重な経験でした。また、試合後には勝利を喜び合ったり、敗北を悔やんだりすることもありましたが、その経験を通じてさらに成長することができました。

テニス部の活動は単にスポーツを楽しむだけではなく、仲間との絆を深める機会でもありました。練習や試合の合間には、一緒にお弁当を食べたり、部活外でも交流を深めることができました。困難な時や疲れた時には、仲間たちが励まし合い、支え合ってくれました。その結束力は、私にとって非常に大切なものであり、一生忘れることのない思い出です。

テニス部での活動を通じて、私は忍耐力や努力の大切さを学びました。また、目標を持ち、それに向かって一緒に頑張ることの素晴らしさ、自分自身の頭で考え、試行錯誤しつつ目標に向かって行動する経験を学ばせていただきました。高校時代のテニス部での思い出は、私の人生において貴重な経験であり、自信と成長の源となっており、現在の自分の行動指針及び仕事に対する姿勢にかなりの影響を及ぼしております。

最後になりましたが、この度は甲南学園硬式庭球部100周年、誠にありがとうございます。甲南高校硬式庭球部の一員としてこの歴史に、携われたことを大変光栄に思います。

今後のますますの発展とさらなる飛躍を応援しております。



▲ 第19回全国選抜高校テニス大会



▲ 49回高校卒業アルバムより

私とテニス、甲南との出会い

大学 春木 昌範

私が初めてテニスに出会ったのは、小学3年生の時でした。島根県松江市という、テニス人口も少なく、競争率も激しくない中で、家の近くにあったテニススクールに週1回の習い事として通い始めました。

小学生時代は試合に出ても初戦敗退ばかり、中学生時代はなんとか県大会で上位まで行けても、中国大会出場がやっと、高校生時代は部活動とテニススクールの両立で練習量も増え、県大会でも優勝できるようになり、全国大会にも出場することができました。

大学進学を考えた時に、ジュニア時代からやってきたテニスを大学でも続けてもっとレベルアップしたい、そして進学するなら関西の強豪校に行きたい、という想いが強く芽生え、当時、関西学生リーグでも1部リーグに所属していた伝統ある甲南大学へ大変魅力を感じ、進学を決意しました。

縁あって晴れて甲南大学へ入学、そして、体育会硬式庭球部へ入部させてもらい、これからテニス中心の学生生活で忙しくなるであろう期待と不安の中、ワクワクした気持ちで、私の大学テニス人生がスタートしました。

そんな気持ちとは裏腹に、入部したての1回生時代は、2回生の先輩方に練習以外でのあらゆる決まり事や練習前後の準備・片付けなどのやり方を事細かく教えてもらい、とにかく毎日がしんどい、正直楽しくない、という思いしかありませんでした。何度か投げ出しそうになり、辞めてしまいたいという気持ちになる中、同期の池本純平に支えられて、なんとか続けていくことができました。

2回生になると後輩も数名入部し、1回生の時よりは練習に専念

する時間も増えるだろうと思っていましたが、残念ながら入部してもすぐに退部してしまう者もあり、残った者は1名だけという状況でした。

1、2回生合わせて3人しかいない中で、練習とそれ以外の雑用を毎日こなし、今思えば、この始まり2年間でかなりメンタルとフィジカルが鍛えられた気がします。

そのおかげあってか、3回生になってすぐの春関シングルスでは、前年まったく歯が立たなかったシード選手にリベンジすることができ、ベスト32という戦績でインカレ出場を果たすことができました。

それ以降、シングルスではシード選手になることができ、4回生の時にも春関シングルスでベスト32、インカレ出場という戦績を残すことができ、入部当初の実力からすると、大学4年間での伸び率は、関西の大学の中でも特に甲南大学は優れており、テニスの実力も人間力も総合的にレベルアップさせてくれたと今でも感謝しています。当時、共に切磋琢磨しながらボールを追いかけた先輩や同期、後輩とは、今でも年に数回集まって同窓会テニスをする仲です。

関西学生リーグ戦では、在学中に1部残留から2部降格を経験し、そして2部残留という結果で引退することになりましたが、後輩達に1部昇格、王座出場という目標を託し、引退して10年後にはその目標を達成されたことを耳にした時には、OBとしてとても嬉しく思い、リーグ戦では特に底力を発揮する甲南魂はさすがだなと思いました。

最後になりましたが、この度は甲南学園硬式庭球部100周年、誠におめでとうございます。伝統ある甲南大学体育会硬式庭球部の一員として、この歴史に携われたことを大変光栄に思います。今後、益々の発展と、この甲南魂をさらに継承していき、さらなる飛躍を期待しております。



▲ 一回生のリーグ戦を2人で乗り越えて(左：池本 右：春木)

高校 2000(H12)年卒

片山 順介 木村 和陸 木村 史樹也 中塚 伸二 新田 康隆 花本 亘弘 吉川 忠秀 吉澤 大輔

大学 2004(H16)年卒

男子 城下 正則

女子 今若 真樹子



▲ 50回高校卒業アルバムより

現役時代の思い出

大学 今若 真樹子

甲南大学硬式庭球部 現役の皆様並びに日頃応援下さっているOB・OGの皆様、100周年記念大変おめでとうございます。

硬式庭球部女子部50回卒の今若です。

現役時代の主な思い出と言えば、人数が少ないため、女子部の先輩・後輩はもとより、男子部員の先輩・同期・後輩にとってもお世話になったことでしょうか。

一年下の女子部が人数制限のため不在だったため、常に男子部にお世話になり、毎日男子と同じ練習をするため身体が痛く、病院通いの時が一番戦績が良かった思い出があります。

またその時も私の試合に皆さん応援に来てくださり今も大変良い思い出です。

団体戦では人数が足りないため一本捨てからの試合だったことも印象的です。

他校と交流戦・ダブルスを組むこともとても刺激になりました。

いつもOBの方が日々練習を見に来てくださり、アドバイスもとても励みになりました。社会人になった今でも現役時代の経験がとても役に立っております。

あとは毎年実施された学習院戦が楽しみでした。関西と関東を一年ごとで行き来しておりましたが、コロナ禍の現在はどのようにしているのでしょうか?社会人になっても交流は続いていくため、可能であれば貴重な経験だと思います。

現役の皆様、今しかない貴重な時間を大切に、OB・OGの方に甘えるところは十分に甘えて、それぞれ悔いのない素晴らしい時間を過ごしてください。

皆様の今後のご活躍とご健勝を心よりお祈り申し上げます。



▲ 女子部室にて



▲ 練習風景(今若)



▲ 練習風景(城下)

甲南学園硬式庭球部
KONAN TENNIS TEAM
since 1923

51回

高校 2001 (H13) 年卒

池上 真悟 井上 恵由 遠藤 修作 大林 正幸 甲斐 正樹 柴田 昌俊 野本 宗太郎 平井 正和
福田 容久 古川 智章 堀内 俊孝 丸山 隆也 武藤 晶紀 森脇 昭人 横大路 裕紀 若生 周治

大学 2005 (H17) 年卒

男子 池上 真悟 河野 剛 柴田 昌俊 菅 洋介 高木 隆宏 萩森 友寛 武藤 晶紀



▲ 51回高校卒業アルバムより

甲南テニス部が僕に教えてくれた事

高校・大学 武藤 晶紀

入部する前はテニスの強豪校である事を知らずに私は扉を叩いた。甲南テニス部に入りたくて受験勉強を頑張って入部する人が多い中、何も知らずテニスコートに足を踏み入れたが、一瞬にして皆が入りたくなる学校なのだと理解した。

今もそうだと思うが、当時高校、中学が合同で練習していた。高校生がミズノのウェア、シューズ、ラケットで統一され、私が見ていた家族テニスとはかけ離れた球のスピードでラリーをしており、一人ひとりが輝いていたからだ。「格好いい」。憧れるようになる。

※当時高3：梶本周平さん、高2：田中修平さん、津島さん、野々山さん、高1：梶本卓司さん、矢野健太さん、藤塚健二さんがコートで練習しておられたと思います。

私も諸先輩方のように強くなりたいと思い、練習に明け暮れた。どうしたらうまくなるのか悩んでいた我々に厳しくご指導頂いたのが中高テニス部OBの難波さん。難波さんが経営されている園田のテニスクラブに足を運び、ご指導頂いた。この機会が無ければ戦績は残せていなかったと当時を振り返ると強く思う。

中学2年。初めての挫折を味わう。竹内さん、水田さんを筆頭とするチームに大林、古川と私が団体戦のメンバーに選任頂く。名古屋で行われた全国中学校選手権の団体の部に兵庫県の代表として出場。シード校の国学院久我山中学を破り、シード校の名古屋学院とベスト4をかけて戦う。兵庫から沢山の方々が応援にかけてくれたが、声援もむなしく、何も出来ず敗戦。水田さんから「お前ら、もう一回この地に戻り、来年俺らの分まで頑張ってくれ」と温

かい言葉をかけて頂いたのを今でも覚えている。

この悔しさを1年間忘れず、もう一度全国の場に立って勝利したいと思うようになり、練習に励んだ。中学3年の1年間は自分自身にも様々な事が起きましたが、皆の励ましを受け、乗り越えたと強く思う。かけがえのない同期メンバーに感謝できない。

様々な事を乗り越え、迎えた兵庫県予選。決勝まで一つも土をつけず、勝ち上がる。迎え

た灘中学との決勝戦。灘のシングルス1は池村光之介。個人で準優勝した両手フォアのハードヒッターだ。大林が負けてしまうも4-1で快勝。兵庫県で圧倒的な強さを見せる事が出来た。この勢いのまま、近畿大会も勝ち進み優勝。兵庫県代表として、全国大会へ出場。

広島県で行われた全国大会の舞台。我々は前回大会ベスト8の戦績もあり、第4シードで出場する。そのドローを見て皆が驚いた。何故なら、我々の箱に前回手も足もでなかった名古屋学院がいたからだ。順当に勝ち進め、迎えた名古屋学院との戦い。ダブルスを2本奪い、迎えたシングルス。今までの努力が報われ、危なげなく勝利した。この戦いに勝つ事が出来、過信が自信になった事を今でも覚えている。ベスト4をかけた第1シードの日大三との戦い。この日、シングルス3で起用していた野本の調子が悪い。ここで、県予選、近畿大会で一度も出場の無かった福田をシングルス3にOBの難波



▲ リーグ最終戦後

さんが起用する。福田は、園田のテニスコートに嫌々ながら行っていた。しかし、嫌々ながらも頑張って園田までいき練習をしていた姿を知ってかの起用。私たちメンバーも驚いた。

日大三との準決勝。ダブルス1-1、シングルス1-1でシングルス3の福田にかかったのだ。正直諦めムードがあったが、5-2とリードした。勝利目前の中、相手も最後の力を振り絞り5-5まで追いつかれた。一進一退の攻防が続く。皆がコート周りに集まり、必死に声援を送り、福田を信じた。結果7-5で勝利する。コートになだれ込み勝利を喜び合った事は今でも忘れられない経験だ。

そして迎えた立教中学との決勝戦。ナイター照明に電気がつく長い試合になる。ダブルス0-2で奪われ、シングルス1の大林が勝利。決勝でも起用された福田と私の試合の勝敗にかかる。2つの試合はファイナルセットまでもつれた。ここで私の指に異変が起きる。5本の指が攣ったのだ。グリップがうまく握れない。皆とここまで頑張ってきた事がフラッシュバックのように駆け巡る。私はグリップと手をテーピングでぐるぐる巻きにして戦った。しかし、敗戦。準優勝に終わった。準優勝に終わったが、何故か清々しい今まで味わった事の無い達成感があった。

このような貴重な経験を出来たのも先輩との出会い、OBとの出会い、チームメイトとの出会いがあったからだ。他の学校に行っていたらこのような経験はできなかったであろう。甲南テニスの強さは人にある。皆で集まれば専らあの全国大会の話になり、今でも絆になっている。何気なく、甲南テニス部の門を潜ったが、今も仕事が出来、家族を養っていけるのも甲南テニスの経験があったからだと思える。コロナ禍で人間関係が希薄になり、有難さを忘れがちに



なっているが、甲南テニス部で学ばせて頂いた感謝の気持ちを大事に歩けている事に感謝しております。

最後になりましたが、甲南テニス部100周年誠にありがとうございます。更に50年、100年と「甲南魂」が引き継がれる事を願います。誠にありがとうございました。

戦績：1997年

・県中学校総合体育大会

個人の部 ダブルスベスト4 武藤・大林組、古川・横大路組

団体の部 優勝(武藤、大林、丸山、古川、若生、横大路、野本、柴田)

・近畿中学校

団体の部 優勝(武藤、大林、丸山、古川、若生、横大路、野本、福田)

・全国中学校選手権

団体の部 準優勝(武藤、大林、丸山、古川、若生、横大路、野本、福田)



▲ 大学同期7人

甲南の素晴らしさ

大学 萩森 友寛

高校時代、地元・愛媛県のテニス協会主催のイベントで吉田昇生さんに会い、歴史ある甲南大学体育会硬式庭球部に興味を持ち、一般入試の末に入部した私。河野剛、菅洋介、高木隆弘の推薦入試組3名が主務、学連、体育会本部を努め、池上真悟、柴田昌俊、武藤晶紀の甲南高校上りの3人と一般入試の私がテニスに没頭するという不思議な状況でボールを追いかけていた日々を懐かしく思います。

1回生の時に2部リーグ降格の悔しさを味わった私たちは、当時、1部リーグを知る最後の学年として「在籍中の1部リーグ復帰」を目標に、同期達と切磋琢磨しながら、がむしゃらにボールを打ち続けました。4回生の時に何とか辿り着いた1部・2部入替戦。シーサイドテニスガーデンで京産大との対戦でした。諸先輩方や甲南中高

生の大勢に応援して頂きながらも、1部リーグ復帰を果たせず、悔し涙を流しながら引退した日は今も忘れることはできません。

大学卒業後は地元の伊予銀行に就職し、日本リーグで活動するテニス部に入部し、8年間、実業団選手として活動させて頂きました。全日本選手権で渡辺康二さんや中西伊知郎さんにお会いしたり、日本リーグに出場する各チームの甲南関係者の皆さんにお会いしたりする度にオール甲南テニスクラブの素晴らしさを再認識し、甲南ファミリーの一員でいれることを嬉しく感じていました。2011年の全日本選手権で本戦初勝利の直後に撮影させて頂いた渡辺康二さんとの2ショット写真は今も私の宝物です。

実業団を引退後も伊予銀行の行員として日々邁進しておりますが、現在はご縁を頂き、勤務地である四国中央市立・川之江北中学校（愛媛県）の外部コーチとして地元中学生にテニス指導をさせて頂いております。昨年度、全国選抜中学校テニス大会に引率した際には、懐かしいえんじ色のユニフォームを着た甲南中学校の選手たちや福井先生、山本トレーナーとも交流でき、改めて甲南の素晴らしさを痛感しました。

最後になりますが、甲南学園硬式庭球部100周年、誠におめでとうございます。甲南学園硬式庭球部の益々の発展を願います。



▲ 2011年の全日本選手権で渡辺康二さんと



▲ 2022年の全国選抜中学校テニス大会で甲南中学生、福井先生と

高校 2002(H14)年卒

生島 喜裕 伊勢知 直樹 大江 拓真 大矢 雅人 金城了平 北岡 薫 斎藤 雅 佐渡島 進 重友 力 嶋本 武司
谷本 悠一郎 提 充洋 二階堂 拓 西川 貴夫 長谷川 浩一 山本 敦司 渡辺 悠介

大学 2006(H18)年卒

男子 重友 力 吉本 匡利

女子 酒井(田中) 千沙都 鶴谷(山田) 絵里子 村田(藤田) 遼子



▲ 秋の団体戦にて



▲ 52回高校卒業アルバムより

懐かしい中高大テニスの思い出

高校・大学 重友 力

一学年上は、全中団体準優勝。自分たちも「全中に出る」と意気込んで臨んだ県中学総体団体戦は、あえなく1回戦で三田学園に惜敗。当時の顧問の先生もあきれて、最後のミーティングでは「お前ら負けると思ってたんですわ。」と言い放たれたのは、今でも同学年の集まりの酒の肴になっています。

高校に上がっても変わらぬメンバーでしたが、新しい顧問の先生が増えました。当時新任の福井先生。(失礼かもしれませんが、) 2名いた顧問の先生たちがラケットを握っている姿をほぼ見たことの無い私たちにとって、試合で当時のレギュラーメンバーに勝ったり、体育祭のリレーでは、(物理の先生でしたが、) 体育教師並みに足が速かったりと、福井先生の登場は衝撃的でした。そんな若くて生徒に近い先生が増えたことでテニス部も活性化されたと思います。さて、中学の時に団体1回戦負けした私たちは、県新人団体では県

のベスト4、県総体ではベスト8と諸先輩方には遠く及ばない戦績でしたが、先生やOBさんに支えられ高校テニス部を全うすることができました。

最後の県総体では、実力が拮抗していた報徳学園とベスト4をかけた戦いで1-2の負け。高3メンバーは全員が悔し涙。

そんな中、高校から大学テニス部に入ったのは私1名だけ。最終的に1年生男子はスポーツ推薦の他にも2名が入り全部で4名、がしかし、すぐに2名になってしまいます。その春、東京で行われた学習院との定期戦、審判ミスで先輩の怒りを買って、私を含め3名が試合中のテニスコート横で正座を命じられ、2時間ぐらい耐えた後、他の2名はこれ以上やってられない、と去ってしまいました(私はそんな勇気もなく残ってしまいました)。1年生の夏までは、試合や応援、コート整備等ばかりで、前期が終わってみれば取得単位が5ぐらいたったと記憶しています。

また本戦会場では、翌朝の練習コートの確保のために他の大学の1年生たちと前夜から韌にいたり、試合が始まると先輩が試合に入ったことを必死に駆け回り、上級生に伝えたりと、今考えると笑ってしまいます。

歴代の中では、低迷期と呼ばれる時でしたが、難波さんをはじめ、(吉田) 昇生さん、江見さんや他多くのOBさんたちからご指導いただきました。後輩という理由だけで時間を割いて接してもらったこと、今さらですが、感謝すると同時に、贅沢な時であったとしみじみと感じます。

少ない人数から得たもの

大学 酒井(田中) 千沙都

皆さま、創部100周年おめでとうございます。心よりお喜び申し上げます。

早いもので卒業して17年が経過しました。今では二児の母親となり、育児に仕事にと奮闘しております。毎日必死に六甲アイランドのテニスコートで練習していた日々を、本当に懐かしく感じます。

私が入部したとき、女子部の先輩は3回生に1名いらっしゃるだけでした。私が在籍中はとにかく女子部の人数が少なく、1回の時4名、2回の時4名、3回の時5名、4回の時でやっと7名という部員数でした。人数が少なかったので、リーグ戦の時が非常に体力的にも精神的にもきつかったのをよく覚えています。試合に出るのも、準備

をするのも、何から何まで全て自分で行わないといけない中で、怪我や病気で試合に出れなくなってしまった場合、代わりの選手がないというのも非常にプレッシャーでした。しかしながら、今思えば皆がそういった中で戦えたからこそ、チーム一丸となれたのかもしれない。

人数が少なかったこともあり、練習は男子部と合同の期間が多かったです。練習内容はもちろんのこと、トレーニング・罰ラン等、男子部と同等のメニューをこなすのが、当時は本当に苦しかったです。今はクレーコートがなくなりましたが、重いローラーを使ってのコート整備も慣れるまで大変でした。かごに入ったボールを何故かズタと呼び、謝罪するときは「ソウ!」と言う、謎のルールがたくさんありました。

決して楽しいだけの4年間ではありませんでしたが、テニス部で汗を流した日々は、私の人生の中で大きな糧となり今でも色濃く残っています。ご指導くださった監督・諸先輩方に、この場をお借りして心から感謝申し上げます。

末筆ではございますが、皆様の益々のご活躍とご健康を心よりお祈り致します。



▲ 全学年の集合写真(4年生当時)

甲南学園との繋がり

大学 鶴谷(山田)絵里子

この度は、甲南学園硬式庭球部の創部100周年誠にありがとうございます。

私は岡山の山陽女子高校(現山陽学園)からスポーツ推薦で甲南大学へ入学しました。山陽女子は中高で部活を行っており、中1の時、高3におられた美人でテニスも強い先輩が甲南大学へ進学された事がきっかけで、甲南大学への興味が芽生えた事を覚えています。

甲南大学硬式庭球部へ入部した際、女子部の先輩は3年生にお一人のみで、一緒にスポーツ推薦で入部した田中千紗都と、一般入部の藤田遼子と私の4人だけでした。

基本的にはずっと男子と一緒に練習を行い、トレーニングや罰ラ

ン、色々としんどかった事を覚えています。部活後に摂津本山のマクドへ1回生で集まり、反省会(という名の愚痴り合い?)をしてストレスを発散する日々でした。練習中は厳しかった先輩方でしたが、練習以外ではとても優しく、相談にのってくださったり、可愛がっていただきました。大学卒業後は、当時テニス部の監督だった難波さんのテニスクラブでコーチとしてお世話になりました。

そのテニスクラブに通っていた、甲南中学の沼野や榎原との出会いもあり、兵庫のジュニアの試合を見る機会が増え、甲南中高生との面識ができました。

数年後、靉テニスセンターで働くようになり、春関や夏関で甲南大学の試合を見るようになると、なんとなくですが部員の名前と顔が分かる年が続きました。

結婚し、出産してからはテニスコートからも足が遠のき、今では庭球部の部員の顔と名前もあまり一致しませんが、子どもも成長してきたので、また自分に出来る事があれば庭球部の発展の為に尽力していきたいと考えております。

最後になりましたが、甲南学園テニス部の益々のご発展とご活躍をお祈り申し上げます。



▲ リーグ戦にて



▲ 部内スキー旅行

高校 2003(H15)年卒

宇仁 太一 億川 大洋 梶 正太郎 金光 志樹 黒木 賢秀 近藤 晋司 吹田 郁 田島 俊郎 手島 孝基 藤井 広貴

大学 2007(H19)年卒

男子 金原 大介 白根 雄一 福井 淳二 松浦 庄吾

女子 坂元(石川) 梨衣子

甲南テニス部に感謝

高校 近藤 晋司

元々テニス部に入部する気はなかった。実態を知っていれば間違いなく入部しなかっただろうと思う。飽きては辞め飽きては辞めと色々な部活への入退部を繰り返していたのだが、野球部と一緒にあった西村の誘いに乗ってテニス部に入る運びとなった。強豪だとは知らずに軽い気持ちで入部したのだが、他部とは一線を隠す全く新入生を大事にしない環境に身を置くこととなる。

中学時代、特に1年生、2年生時にはテニスをした記憶はほとんどなく、球拾いと審判と罰則による外周の思い出しかない。1バウンドで先輩に取りやすくボールを渡せなかったので小1走ってこい、と。半分小学校の新入生に隣のコートが一番遠い先輩まで安定して投げられるフィジカルはないのだが、先輩達は容赦なかった。また誤審をしたからと走らされるのだが、高校生のフラットサーブの際どこかが正確に判断つくわけもない。インカアウトか迷った瞬間走らされた。一度走らされるとエンドレスだ。時間内に走れないともう一週走らされるが、なぜか短くされる目標タイム。2周目でタイムが縮まる訳がないのでコースをショートカットするのだが、きっちり監視されており1日中徹底的に走らされたものだ。

そんなことを中学校3年間も続けなければならないと考えたら気が長すぎてやっていられないと思う子供は多いだろう。同期も1個上の学年もどンドン辞めていき、高校まで残っているほうが少数派だった。ただ残った部員達のメンタルとフィジカルは強かった。ボールが打てない中学時代の成績は芳しくなかったが、高校に上がると急に勝てるようになった。今思うとコートは限られるので人数を絞る為に必要な工程であったのかもしれない。

残念ながら自分たちの世代は城西、関学、仁川の3校に阻まれ、各団体戦ともに兵庫県でベスト4以上に進むことができず、甲南テニス部としては良い成績は残せなかったのだが、自分達と入れ替わりの世代頃からまた強くなり、中学生の練習環境も改善されたようだなによりだ。

最近20年ぶりにテニスを再開したのだが、かつての仲間達ともテニスを通じて交流を再開することとなり、中学時代の思い出も今となっては良い笑い話のネタである。

甲南以外の交友関係も増え、非常に充実した日常を送っており、厳しい部活ではあったが非常に有意義な時間であったと感じる。生涯スポーツであるテニスに誘ってくれた西村や皆、甲南テニス部には感謝するとともに今後の甲南の活躍に期待したい。



▲ 53回高校卒業アルバムより

甲南大学体育会硬式庭球部 思い出

大学 白根 雄一

私の「今」があるのはテニス部での経験があったからだと思っています。

2003年に入部し4年間、テニス漬けの日々を過ごしておりましたが、今思い出せるのは厳しい練習と先輩に怒られた事ばかりで楽しい思い出はほぼ思い出せません(笑)。なぜ謝る時が、「ソ〜」やねん!どんだけ罰ラン走るねん!と毎日思っていました。。

また一番恐ろしかったのが練習時間の長さです。朝9時から練習スタート、終わるのが20時、21時。19時頃に主将に時間を聞きに行くと、2対1のボレストつと言われた時の絶望感は今思い出しても鳥肌が立つほどです。。

ただそんな中でも頑張ったのは、テニス部全員がリーグ戦で一部復帰するという目標があり、その目標を絶対達成するんだという想いがあったからだと感じます。リーグ戦とはテニスの実力だけではなく、今までやってきた練習の成果が全て出るのがリーグ戦。現役とOBが甲南大学体育会硬式庭球部として一つにまとまり戦っていく。選手、サポーターが少しでも手を挙げれば勝てないのがリーグ戦。私はこのリーグ戦で本当に様々なことを学べたと思います。

責任感・忍耐力・礼儀、リーダーシップ、何より目標を設定し達成するという「熱い想い」。

私の代では残念ながら目標を達成することはできませんでしたが、4年間テニス部で学んだ事が今社会人として本当に役立っています。社会では理不尽な事も多いし、賢い人間もたくさんいる。若手社員の時は会社を辞めようと思ったことが何度もあったし、もう駄目だともう一度もありました。

そんな中でも辞めることなく逃げずに最後のひと踏ん張りができたのは間違いなくテニス部での経験があったからだと思っています。

現役の皆さん!テニスに打ち込めるのは今だけです。いろいろ悩みがあると思いますが、いっぱい考え挑戦し良い経験をしてください。

創部100周年

大学 松浦 庄吾

この度は、甲南学園硬式庭球部100周年、誠におめでとうございます。

甲南学園硬式庭球部の発展に尽くされた歴代の諸先輩方、後輩の皆様にはあらためて感謝申し上げます。

53期生の松浦庄吾と申します。当時を振り返る良い機会を与えて頂き、ありがとうございます。

メンバーは主将の白根雄一、副主将の金原大介、坂元(石川)梨衣子のスポーツ推薦組、一般で福井淳二、と私の5名でした。後、途中で辞めてしまいましたが、太田理、素人で一緒だった岸田も忘れてません。(みんなは岸田の事覚えてるか?)

私が下手なりに厳しい部活動を4年間続けさせてもらったのは、携わって頂きましたOB、OGの皆様、諸先輩、同期、後輩の方々のおかげです。その中でも特に1学年先輩の吉本さん、同期の白根には本当に助けて頂きました。

少しだけ私の事をお話させていただきますと、私は一般入試で大学から硬式テニスを始める未経験者でした。当時はサークルに入るのか、部活動をするのか、悩んでおりました。サークルからの勧誘は沢山あったものの、テニス部からの勧誘はたいしてなく、本来は素人同然なので、サークルに入るというのがセオリーだと思うのですが・・・選んだのは硬式庭球部でした。そうです、私は、毎年1、2人はいるかどうかという変な奴でした。成績はと言うと、恥ずかしながら本選にも出ておらず戦績はありません。

入部した当初は、直ぐに辞めると思われていたみたいで、入部当時の同期は、全く愛想も無く、優しくなかったです。初めに話をさせていただくようになったのは、帰り道が同じ方向という事もあり、1学年先輩の吉本さんでした。入部してからの私は、当時、仏と言われた3回生の柴田さんを怒らせる程の鬼畜ぶりで、数えきれないほどの罰ランに吉本さんを招待していました。(池上さん、萩森さんもその節はお世話になりました。)そして、その後は、もちろん吉本さんから追加の罰ランが出るのですが・・・大学へ向かう最終バスが発車するのを見ながら走り「吉本さん、走り終わりました」という報告を聞くまでずっと帰らずに待って下さっていた。そう、あなたはまさに生粋の甲南スピリットを受け継ぐメシアでした。吉本さんには、私が入部してから引退されるまでの3年間、本当に沢山お世話になると同時に、非常に沢山の迷惑をかけました。本当に最後まで面倒を見て頂きありがとうございます。5番コートで練習させて頂いたこ

とずっと忘れません。

同期は、こんな私が言うのもなんですが、クセが凄かった。変り者ばかりじゃないかと思います。それでも3回生、4回生になると白根は中々まとまらないチームを力技で一つにして、誰一人置いてかないように引っ張り上げながら皆の1歩、2歩前を進んでいく、熱くてカッコいい男になりました。今更、自分の同期を褒めるのも気色悪い話かもしれませんが、四六時中一緒にいたのに、何度も引っ張り上げてもらってしまいました。そんな男のおかげで自分は4年間過ごすことが出来ました。

終わってみればあっという間の4年間、あの時もっとこうしたらという後悔はあります。それでも、甲南大学硬式庭球部の一員としてこの歴史に携われたことを大変光栄に思います。

現役の皆様、4年間は終わってみればあっという間です。素晴らしいOB、OGの方々が沢山おられます。時には力を借りて、充実した熱い時間を過ごせるよう、今後益々の発展と飛躍に期待しております。

最後になりますが、この度は甲南学園硬式庭球部100周年、誠におめでとうございます。



▲ リーグ戦にて



▲ 53回大学卒業アルバムより

高校 2004(H16)年卒

有馬 康人 浦部 和也 金本 直樹 倉光 賢 瀧川 徹 谷本 達郎 友枝 俊介 林 寛 三反田 達昭 矢野 正裕
山中 靖仁 吉川 達郎 吉田 翔

大学 2008(H20)年卒

男子 岩越 彬 近藤 将宏 三反田 達昭 吉川 達郎 吉田 健
女子 飯塚(妹尾) 百笑



▲ 高校時代

10年間テニス部で過ごして

高校・大学 吉川 達郎

【中高の思い出・団結して掴み取った関西1位&全中ベスト8】

名門の甲南中学に入学し、楽しい部活生活が待っているかと思っていたが・・・待っていたのは朝から夜までの球拾いの嵐でした・・・実際にコートに立てる時間は毎日10分程度であり、辞めていくメンバーも続出する中、キャプテンの谷本君を中心に全国大会に出ることを全体目標に掲げました。まずは練習時間の確保であり、朝6時に行きつて柵を乗り越え、がむしゃらに練習していたことを思い出しました。限られた練習時間の中でどうすれば勝てるかを意識し、自分たちの弱点を分析し、弱点に特化した練習を反復して行っていたことを思い出します。

まだ中学生ながら勝つためにはどうすべきなのかをそれぞれのメンバーが自己分析し、行っていました。本気で勝ちに行く中で、社会人にも通用する課題解決力が自然と身についたのだと今になって実感しております。この年になりつくづく何かに本気で取り組む大切さを痛感しております。

そんな中高のメンバーも大学テニス部に入ったのは2人だけであり、振り返ると中高のメンバーで、大学テニス部でもっと真剣にテニスが出来たらどうなって

いたのだろうとよく考えます。

最後になりましたが、私自身甲南テニス部に人格形成をしてもらい、本当に成長できたと心から感謝しております。

特に大学に入ってから勝てない自分にイライラして、多くの方々にご迷惑を掛けながら本当に支えられた4年間でした。

社会人としてまだまだ未熟ですが、甲南テニス部での10年間の成長が今の自分を支えてくれております。

これからも甲南テニス部のために尽力致しますので宜しくお願い致します。

【大学に入ってテニス人生初めての挫折を経験】

中高ではトップクラスの選手ではなかったですが、そもそも目標があまり高くなく、最低限の兵庫県ベスト16を特に意識することなくクリアできており、正直高校の部活の練習も課題を持って取り組むのではなく、ただ毎日を楽しむ部活動で過ごしていたのを覚えています。

ベスト8をかけた試合では明石城西、関学、仁川の上位選手に対して、絶対勝ちたいとの思いで試合に臨んでいない情けない選手でした。

いざ大学に入るとレベルの違いに驚愕したのを覚えています。

ただ日々の練習は厳しい練習であり、確実にレベルアップはしているものの、何年経っても予選を突破することができず、大事な試合では緊張も高まり、自分のテニスができて悔しい思いをしていました。



▲ 大学同期メンバー

大学で自分が予選すら立ち上がれない現状から、初めて挫折を味わいました。

その中で一番成長を感じる事ができた事象としては、同時に「予選を勝ち上げるためには何が必要なのか」、「上位選手と自分とでは何が違うのか」、「自分の特性を生かして上位選手と戦うにはどうしたらいいのか」等を様々な仮説を立てるようになったことです。

今振り返ると、このような経験は真剣に勝ちたいと考えることからスタートしており、本気でテニスに向き合えた証拠だと感じています。

この経験は社会人になった今でも私の思考の根幹になる部分であり、甲南テニス部で本気でメンバーとテニスに向き合うことで醸成できたと感じております。

結果として個人としてインカレに出場することも出来、引退時にはまだまだ部活がしたいと伸び盛りでの引退が自分の中では非常に悔いの残る所ではありませんでした。

振り返ると大学時代のとても濃い4年間を過ごすことで社会に出て逆境の嵐の中で、自分を見失わず、筋の通った判断能力、仮説立案能力、最後までやりきる力が身に付き、それぞれの仕事に生かすことが出来ております。

今後もOBの立場として現役世代をサポートすると共に、甲南大学テニス部、OB会の発展に寄与したいです。



▲ リーグ戦での集合写真

80周年から100周年へ

大学 吉田 健

甲南学園硬式庭球部100周年おめでとうございます。

この歴史あるクラブの一員であることに改めて身の引き締まる思いであるとともに、非常に誇りに思う気持ちであります。

80周年の記念式典に現役生として出席させていただき、多くのレジェンド達にお会いできたことを今でも鮮明に覚えております。あれから20年の歴史がさらに重なり、これからも続いていくことを思えば感慨深く嬉しく思います。

現役当時のことは十何年も経っているので美化されてしまっているのかもしれませんが、テニス漬けの毎日でもとにかく楽しかった思い出が強く残っております。先輩・同回・後輩に恵まれ、仲間と共に熱く過ごした日々は今でも美しい思い出です。

私個人は選手としてリーグ戦や個人戦で結果は残せておりませんが、裏方仕事でチームに貢献していたと評価していただければ幸いです。

当時はOB会のお手伝いをしていたこともあり、多くのOB・OGの方の支えの元、自分たちが活動できているのだと感謝していました。今は自分がこれからの選手たちの支えになれるよう微力ながら力になればと思います。

これからも甲南学園硬式庭球部の発展を願っております。



▲ 合宿にて

高校 2005(H17)年卒

足立 皓亮 尾本 樹 角本 宗一郎 河田 裕介 北野 裕也 椎葉 大幹 吹田 大地 中田 佳伸 中野 雄介
夏山 輝之 平野 薫朗 藤井 大毅 藤原 有貴

大学 2009(H21)年卒

男子 岡田 直樹 奥村 康平 佐々木 龍矢 笹田 優一 平野 薫朗 三ツ井 隆容 宮本 貴史
女子 末松(山田) 奈緒子 西村(横田) 有紀

テニスコートでプレー以外に学んだこと

高校 55回同期一同

甲南庭球部100年の歴史の中で私共の55回卒のメンバーは特にこれといった戦績を残さず偉大な先輩方からの叱咤激励も華麗にスルーしたまま卒業してしまいました。そんな特徴を持つ代でしたので球拾いをする時間はどの代にも負けないのでは無いかと自負しております。

なので、あの奇妙な掛け声とワンバウンドさせて先輩に球は配給するといった謎のルール以上のものは社会に出てからも見当たらず、社会人のルールにスムーズに溶け込めたという点で貴重な経験をさせていただいたと感謝しております。

当時はまだまだパワハラという言葉もない時代でしたので、個性豊かな先輩達から理不尽な仕打ちも受けました。

罰ランの後にスクワットを400回もさせられて高校から阪急芦屋川までの坂道を下るのもきつかった事や、合宿中に同級生のラケットが喧嘩道具に使われるというような事件もあの時代ならではの事だと思います。

今となってはそのような特殊な思い出は中学、高校時代きりであり、その時代を過ごした仲間、先輩、後輩に久しぶりに顔をあわせれば、思い出を媒介にして、あの時代に一瞬で戻れてしまいます。

甲南テニス部は我々の原点で有り、唯一無二の人生のハイライトです。

有り難うございました。



▲ 55回高校卒業アルバムより

松浦さんの残響

大学 三ツ井 隆容

我々の代はいわゆる谷間世代。

1部降格から数年経ち、2部に甘んじている状況だった。また4年間で入れ替え戦に一度も進むことができず、2部校という殻を破れないまま過ごした4年間であった。

個人的には岩越さん、近藤さんという仁川学院の先輩の後を追って、甲南大学テニス部に入学したが、1回生の頃は高校テニスと大学テニスの違いに大いに苦しんだ。その最たる例が当時キャプテンを務められていた、吉本さんとの試合であった。

吉本さんは全球無重力のロブを打ってくるという、高校テニスでは出会うことのないプレースタイル。こちらが焦って攻めるとパッシングで横を抜いてくるという鬼畜プレイヤーであった。吉本さんには同級生達も大いに苦しめられ、皆、大学テニスの厳しさを教えていただいた。

2回生になると、ダブルスで団体戦のメンバーに入ることができた。私が在学中に1部との入れ替え戦に一番近付いたのはこの年で、京都産業大学との試合に勝てば入れ替え戦に進めるという状況であった。しかもこの試合は相手のオーダーミスが発覚しダブルス3-0スタート。シングルスも1本取ったため、4-0となり、勝利まであと1本というところだった。

しかし、ここから相手校が驚異的な粘りを見せ、シングルス5本を落とし、トータル4-5で逆転負けを喫してしまう。試合後のミーティングは非常に暗い雰囲気となった。そのムードを変えるために4回生の松浦さんが「まだ終わりじゃないから、また元気出していきましょう!」と、大きな声を出されていたが、その声が京都産業大学の体育館に虚しく響いたのを今でも覚えている。

3回生の時の思い出は、ダブルスで初めてインカレに出場できたことだ。4回生の吉川さんとペアを組ませていただき、春関でベスト16に入り、入替戦で近大のペアに勝ち、インカレ出場を決めることができた。その試合のマッチポイントは吉川さんのセカンドサーブで私が相手のリターンをポーチに出てボレーを決めての勝利だったが、これはコーチの吉田昇生さんに教えていただいた、セカンドサーブは相手もミスしたくないという意識があるから逆に攻めろ、という教えがあつたのことだった。

4回生となってからは、ダブルス1としてリーグ戦に出させてもらった。2個下の後輩の藤井君とのペアであったが、リーグ前は絶好調で他校との練習試合ではかなりの勝率だった。しかし、本番で

は重要な試合で勝ちきれず、チームに貢献できなかった。今でこそ、ピークを本番に合わせるというのはスポーツの世界では常識だが、当時はそういう考えも無く、ピークをかなり早めに持って来てしまっていたことが、敗因では無かったかと今でも悔やまれる。

大学時代の4年間は、学生主体で練習や試合をこなすため、自分で考えることが多く、非常に学ぶことが多かった。この経験は今後の人生にも大いに役立っていくと思う。大学時代に関わってくださった方々に感謝したい。

「トレーニング隊長」としての経験

大学 末松(山田) 奈緒子

私は、岡山の「山陽女子高等学校」からスポーツ推薦枠で甲南大学に入学させていただきました。当時、岡山県内での「甲南大学」の知名度はあまり高くありませんでしたが、三学年上に姉がいたということもあり、入学前から練習にも参加させていただきました。

しかし、大学ではOBさんが監督やコーチとして試合を観に来てくださることはあっても、平日の練習は学生のみ、試合会場にトレーナーは帯同しないということに驚いた記憶があります。

ありがたいことに、高校時代は部活動、テニスクラブ、そしてスポーツクラブにも通い、コーチやトレーナーが試合に帯同してくださることが当たり前でした。

そんな環境の中でも少しでもレベルアップできるよう、色々努力しましたが、結果として大学では思うような戦績が残せませんでした。

しかし、「トレーニング隊長」としては少なからずチームに良い影響を与えられたのではないかと自負しております。(山田奈緒子=トレーニングという印象をお持ちの方も多いはず?)

元々岡本キャンパスのトレーニングルームには、プロのトレーナーさんが常駐してくださっていたので、個別にトレーニングメニューを組んでいただいたり、冬の走り込みのメニューと一緒に考えたり、オンコートでのコーディネーショントレーニングを取り入れるなど、トレーニング隊長として様々な工夫をしました。

正直、トレーニングが嫌いな部員もたくさんいたはずなので、なかなか煙たい存在だったとも思いますが…(笑)

幸いにも、唯一の女子部同期である横田も、トレーニングにはかなり前向きに取り組んでくれたので、2人ともテニスでは後輩に敵わなくとも、トレーニングで先輩の威厳を保つことができていたのかなと感じております。

私事ではありますが、この「トレーニング隊長」という経験から、卒業後もスポーツや健康に携わる仕事に就かせていただいております。

ただがむしゃらに六アイを走っていたのも良い思い出なのですが、やはりトレーニングルームでの筋トレや、キャンパス裏にあった神社の階段や坂道ダッシュなどに励んだ時間は、私にとって大きな自信であり、宝物です。

最後になりましたが、4年間共に戦ってくれた同回、そして様々な形でサポートしてくださったOB・OGの皆様、本当にありがとうございました。

甲南大学硬式庭球部の更なる飛躍をお祈りしております。



▲ 仲良しランチタイム



▲ キープ引退の日



▲ 1部との入替戦

高校 2006 (H18) 年卒

石原 幸忠 稲葉 健太 黄良樹 谷垣 誓悟 谷本 鋼 山口 裕司

大学 2011 (H22) 年卒

男子 石原 幸忠 谷垣 誓悟 日和 昭博

女子 中岡(木下) 世莉

KATSUHIKO世代

高校・大学 石原 幸忠

「灘校戦なんて勝って当たり前やろ!」「なんで公立のやつ負けるねん!」そんな言葉をよくOBの方々からお声を頂く世代でした。灘甲戦に負けた日には家に帰るとOBでもある親父に3~4時間くらい説教されました・・・。

そんな我々の世代は明石城西、関西学院の2強にあわせ、全中Best4に進出した過去最強の灘、さらには通信制の高校がぼつぼつと台頭してきたまさに群雄割拠の年でした。

そんな強豪がひしめく中、甲南中学・高校強化のためにOBさんが土日の練習に関与するようになったのが我々の世代だったと記憶しています。

特に私達の代でよく練習にきてくださっていたのが坪田克彦先輩でした。

冬でも夏でもトレードマークのオレンジ色のパーカーを着て、左手にボール缶を片手に「石原~~!!」「谷垣~~!!」とよく練習中に呼ばれ、叱咤激励を頂いていたのが今でも鮮明に思い出せます。

特に練習メニューでは地獄の3点ボレースマッシュや走り込みの数々、テニスが好きだった私にとって初めて部活に行くのが嫌になった瞬間でした。それと反比例してメンバーのスマッシュがめきめき上達していきました。

しかしながらラケットの進歩とともにストローク中心の時代。明石城西のぐりぐりのスピン効いたストロークに押され、なかなかスマッシュをお披露目できなかったのが悔しかった・・・。

華々しい記録をお持ちの諸先輩方や後輩の方々には何一つ自慢できる戦績は御座いません。

しかしながら、部活時代にあった理不尽な経験が社会に出た今でも役に立っているのは皆様一緒じゃないでしょうか?

たまーに集まった同期達と先輩にされてきた数々の仕打ちを肴に飲むお酒は美味しいのは皆様一緒ではないでしょうか?

目立った戦績はなくても楽しかったクラブ活動、我々はKATSUHIKO世代です。

4年間の思い出

大学 日和 昭博

4年間を通して振り返るとあつという間でした。テニスの楽しさや技術、礼儀を教えてくださいました先輩方、顧問の先生、コーチ。辛い練習も、側で支えあってきた同回。また、自分が主将を務めてから付いて来てくれた後輩。

皆様のおかげで私の大学生活はかけがえのない時間になり、今



▲ 56回高校卒業アルバムより

社会に出てからも大きな財産となっています。

部活動で得たものは何よりも「仲間」だと思っています。テニスは個人競技でありながら、団体競技の要素があります。同じ目標に向かって日々努力をし、共に汗を流し、励まし合った事は今でも頭に残っています。1回生の時は下積みとして団体生活に欠かせない協調性、また忍耐力が培われました。2回生になると後輩もでき、試合にも出れるようになり、責任感、自発性を習得しました。3回生になってからは主将を務めさせて頂き、チーム力、集積力を最大限に上げる為に、礼儀の中にももっと後輩が自発的に発言でき、積極的に練習に取り組み、切磋琢磨し合える環境づくりに徹しました。ドラえもんではないですが、『こんな事いいな、出来たらいいな』の考えでどんどんチームが良くなる為に先輩、後輩関係なくディスカッションしました。

結果、強固なチームが出来、1部リーグに返り咲くことは出来ませんが、何年かぶりに入れ替え戦リーグに進む事が出来ました。

これらを踏まえて、何をやるにも1人ではできない事を学び、常に周りの人に支えてもらっているんだという意識が強くなりました。

これからも甲南大学硬式庭球部で培ったものを武器に社会でも頑張っていこうと思います。

逆転の発想

大学 中岡(木下)世莉

このたびは、甲南学園テニス部の創立100周年を迎えられたこと、心よりお慶び申し上げます。

私は卒業して12年ほど経ちますが、昨日のこの様に当時の記憶が蘇ってきます。

学年に女子1人という中、不安でいっぱいでしたが、同回の男子部や1つ上の先輩方に助けってもらったこと。

入部当時、独特のあいさつの仕方や声の出し方に苦戦し、声の出し方に気を取られてしまい、審判の際カウントを忘れてしまうという失態をおかし、頭が真っ白になってしまったこと。

そんな不安でうまく立ち回れなかった1回生の私に当時4回生の先輩が「私と組んで夏関の本戦にあげてあげる!」と言って頂き、初めて本戦に上がった時の喜びは今でも忘れることはありません。

そしてそんな先輩のような自分の力で立場の弱い人を助けてあげられるような人に私もなりたい、この先輩に出会えて本当によかったと思えました。

入部当初は女性部員が少ないことに戸惑いを感じておりましたが、2回生以降は環境にも慣れ、夏の合宿やリーグ練、関東遠征の際に考えたことは、

- ・少ない人数だからこそできること
- ・少ない人数だからこそ強み
- ・少ない人数だからこそ人とのつながりが濃い
- ・少ない人数だからこそほかの人にながら起きているかすぐにかかると
- ・少ない人数だからこそ連携して効率の良い練習方法を考える

一般的にみれば、ハンディのある状況でも考え方を考え変えポジティブにとらえることで状況を好転させられるということを学んだ4年間でした。

最後になりますが、夏の暑い練習の後に先輩が作るかき氷が最高においしかった!

今後の発展とご活躍をお祈りいたします。



▲ 2回生の時の忘年会



▲ 56回大学卒業アルバムより

高校 2007(H19)年卒

有本 聖吾 石川 公章 江見 奨 桶田 陽平 河野 克史 杉本 翔治 竹内 良 中村 尚樹 富士 大輔
藤井 俊介 吉川 遼平 山崎 裕史

大学 2011(H23)年卒

男子 藤井 俊介

女子 島田(小笹) 衣利可

テニス部の絆

高校 江見 奨

中学まで他校に所属していた私は、当時のダブルスパートナーと一緒に、テニス部入部を目的として甲南高校に進学しました。

毎日の登下校や夏休みの練習等、苦楽を共にした青春時代。大学は他校に進学し甲南生活は高校のみですが、これまでの人生で最も笑い、ドラマがあったのはこの甲南生活でした。

卒業後の今でもテニス仲間と連絡を取り定期的に会うこの絆は、かけがえのない財産です。

オール甲南

高校 杉本 翔治

「オール甲南」当時は当たり前のように聞いていたこの言葉。卒業して15年近く経ち、少しばかり社会人としての経験を積んだ今、この言葉の意味を本当に理解できた気がしていると同時に甲南テニス部の絆の強さを感じています。

中学・高校・大学のメンバーと一緒に練習したり、休みにはOBが教えに来てくださったり、試合の応援に来てくださったり。ハード・ソフトともに素晴らしい環境でテニスに打ち込めたおかげで、戦績こそ残せなかったものの、一生の仲間に出会えることができたし、テ

ニス部の6年間でかけがえのない経験を積み途中で自分自身も大きく成長できました。当時関わってくださった方々には今でも本当に感謝しております。

一生の仲間

高校 富士 太輔

甲南では一生を通じて大切にできる友と出会える。これは甲南OBである父の言葉で、私が甲南中高を目指したきっかけでもありました。

テニス部で出会った仲間たちとはお互い切磋琢磨しながら部活動に打ち込み、休みの日も一緒に遊んだり、とても充実した日々でした。あの時があったからこそ今の私があるのだと思っています。テニス部の仲間たちが今でも一番気を許せる存在です。現役の皆さんにも是非こうした一生の仲間を見つけてもらえればと思います。

甲南テニス部への感謝

高校・大学 藤井 俊介

大学 島田(小笹) 衣利可

2011年大学卒業の藤井俊介と島田衣利可(旧姓:小笹)です。

私たちは男女それぞれ1名ずつしかない代でした(途中まで在籍した者は数名いましたが・・・)。

そのため、藤井が代表して男女一つの文章として記載させていただきます。

私たちは2007年、藤井は甲南高校から、小笹は夙川学院から甲南大学に進学しテニス部に入部しました。

入部当時、六甲アイランドの部室はプレハブでしたが、六甲アイランドの陸上競技場と弓道場がリニューアルされたのを機に部室も改装され、現在の部室が完成したのは私たちが4回生の時でした。



▲ 57回高校卒業アルバムより



▲ 高校の思い出

現役時代を思い返すと、コート整備などの1回生の仕事、夏休みの1日練習、リーグ練習など、どうしてもこういった、いわゆる「大変だったけどいい思い出」の記憶が鮮明に思い出されます。

しかし私たちの中で1番印象的で嬉しかったことは、女子部では関西1部リーグへの復帰、男子部では私が引退した翌年に後輩たちが同志社大学を下し関西1部リーグへ復帰を果たしてくれたことです。

女子部は当時関西2部リーグで、4回生1名、3回生3名、2回生1名、1回生1名の6名の選手しかおらず、他の大学と比べていても人数は少ない方だったと思います。選手層の厚さに差があるということはケガなどで1名でも欠いてしまうと戦力に大きな影響を与えることになり、応援をはじめとするコート外からのサポートを十分に受けられないことにも繋がりますので、大きなプレッシャーを抱えていました。

そんなチーム状況ではありませんでしたが、主将の小笹を筆頭に、甲南の女子部は高い技術力とフィジカルの強さ、そして何より持ち前の明るさで、最後まで誰一人欠けることなく関西1部リーグへの復帰を果たしてくれました。

男子部も当時は関西2部リーグでした。私が3回生だった2009年は1部2部入替戦で立命館大学に

敗れ、1部昇格を果たすことができず先輩方がとても悔しい思いをされました。その先輩方の雪辱を果たすべく主将のバトンを引き継ぎ、1部昇格を目指した最後の1年間でした。

その後選手層も厚みを増し、当時ルーキーでシングルスNo.1だった沼野孝彰を筆頭に臨んだ2010年の1部2部入替戦でしたが、同志社大学に力及ばず1部昇格を果たすことは叶いませんでした。

私が主将を務めた年も1部復帰を果たすことができませんでした。翌2011年、前年と同じ同志社大学を相手に後輩たちが見事勝利を収め、悲願の関西リーグ1部復帰を果たしてくれました。

私自身は引退した身でありコートの外から応援することしかできませんでしたが、テニス人生の中で1番嬉しかった出来事であり、甲南テニス部に関わることができて本当に良かったと感じた瞬間でした。

甲南テニス部ではOB、先輩、後輩、コーチ、トレーナー、多くの方々に支えていただきテニスに全力を注ぐことができました。私たちは本当に少人数の代でありましたが、甲南テニス部100年の歴史に少しでも関わることができたことを誇りに思います。

これまでお世話になった方々、今でもお世話になっている方々に心から感謝申し上げます。



▲ たくさんの後輩に支えられた4年間でした

高校 2008(H20)年卒

相原 淳也 石瀧 友博 奥田 文也 加藤 勇人 阪本 竜生 佐藤 大起 寺井 昂治 葛 和磨 中井 俊 早瀬 亮
平岡 陽太郎 増谷 玲 宮崎 貴裕 矢野 祐貴 山本 雄万

大学 2012(H24)年卒

男子 小川 周一 坂本 祐一 阪本 竜生 篠原 直貴 寺井 昂治 早瀬 亮 平岡 陽太郎 廣瀬 公二
牧田 晃輝 宮崎 貴裕

女子 片山(吉田) ひかる 角田 奈々美 山崎(安部) 千尋



▲ 58回高校卒業アルバムより

感謝

高校・大学 寺井 昂治

この度は、創部100周年誠にありがとうございます。中学から大学まで10年間お世話になり高校・大学では主将を務めさせていただきました。たくさん苦しいことや楽しいことも経験させていただきましたが、気が付けばいつも顧問の先生方や先輩・後輩に支えられていました。甲南で過ごしたテニス部員としての充実した生活は間違いなく社会人11年目を迎えた今でも私の財産となっております。この場をお借りいたしまして御礼申し上げます。

10年間

高校・大学 平岡 陽太郎

甲南テニス部は私の人生です。中高大10年間を通じて、スポーツと仲間の素晴らしさを教えていただきました。団体戦でレギュラーに入ることは1度もできませんでしたが、先輩方や同期に応援団長と任命していただき、テニスの実力以外でチームのためにながでできるかを考え、戦うことができました。4回生の入れ替え戦、同志社大学に5-4で勝利し舞洲テニスコートで涙を流したことは未だに忘れられません。また、個人戦でも高校時代に5ポイントしか奪えず完全敗北した関学の選手に、大学3回生時、両足を攀りながらもファイナルセットで勝利し関西学生の予選決勝に進むことができたことは万年補欠だった私にとって最高の思い出です。

今でも先輩や、同期、後輩と集まりテニスをし、団体戦にも出場しています。

一生続くであろうこの繋がりを大切にし、お世話になった甲南テニス部へ少しでも恩返しをしたいと考えています。そして、願わくば私と同じ思いをしてくれる後輩が増えてくれればとても幸せです。100周年、本当におめでとうございます。

甲南高校での思い出

高校・大学 宮崎 貴裕

みなさま、創部100周年おめでとうございます。我々、2012年卒(大学)も甲南でのテニス人生を終え、10年が経とうとしております。甲南高校時代、私たちの学年は決して強いチームではありませんでしたが、団体戦では甲南高校の看板を守るという強い思いを持って強豪学校との試合に臨んでいたことを思い出します。中には大金星をあげる試合もあったことは中高6年、一緒に努力をし、練習に励んだ仲間が大きき力になったんだろうと改めて思います。今はそれぞれ社会人として多くの業界で活躍していますが、甲南高校でのテニス人生が私の礎になっていることをこの場をお借りし御礼申し上げます。皆様のご健康とご活躍を祈念し、筆をおきたいと思っております。

つながり

大学 坂本 祐一

甲南テニス部創部100周年おめでとうございます。そして当時は振り返る機会をありがとうございます。当時はデジカメの時代で、一人一台持っているような時代でした。振り返る写真は、鬼気迫る熱い写真でいっぱいです。私は、イレギュラー組としてクレーコートで練習し、レギュラー組に負けぬようナイター設備に灯りをともし練習しました。リーグ戦に出場する機会はありませんでしたが、サポートを全力で行いました。最後のリーグ戦では1部昇格が決まりみんなで夜中の舞洲で抱き合ったことを覚えています。また、個人戦前には、レギュラー組が練習に付き合ってくれ、全員で切磋琢磨しました。一つでも上に進む気持ち・何事も努力し粘り強く生きる気持ち・目標を持ち続けることを学びました。

社会人となり10年となりますが、今後も甲南テニス部OBとして恥

じめよう学び続けたいと思います。

コロナ禍で集まる機会も少ない時代ですが、お酒でも飲みながら懐かしい話に花が咲くことを願って締めたいと思います。

最後になりますが、改めて100周年おめでとうございます。今後の甲南テニス部の発展を願っています。

チームの応援に感謝

大学 篠原 直貴

私の大学での特に印象深い思い出として、4回生での1部リーグ昇格を決めた入替戦（引退試合）です。チームとしても劣勢の状況から、S6で出場し、序盤にナーバスになっていましたが、逆転で勝利し、1部昇格にも貢献できました。

あの場面で強気になれたのは、チームの応援なくてはあり得ませんでした。個の力では限界があり、チームで力を合わせることで、何倍もの力を引き出せることを学ばせていただいた4年間でした。

戦友との試合

大学 廣瀬 公二

甲南100周年おめでとうございます。記念冊子に掲載頂けることを嬉しく思います。

私は2008年4月に硬式庭球部へ入部しました。

そんな私の思い出は、2年生時に関西学生トーナメントの本戦で同期の篠原直貴と対戦したことです。結果はファイナルセットで篠原の勝利となりましたが、負けて納得いく試合であったことを今でも覚えています。

社会人になってもお互いテニスを続けて名古屋の会場で篠原と会ったことも思い出です。

貴重な経験

大学 片山（吉田）ひかる

創部100周年おめでとうございます。心からお祝い申し上げます。

在籍中、私以外は全員スポーツ推薦の女子部員が5~7人。毎日必死でした。人数が足りず、急遽リーグのメンバー入りをしたことは良い思い出です。

主務や会計として、普通の学生では経験出来ないことを沢山教えていただきました。特にOB会費の徴収や、ユニフォーム製作は、よい経験となりました。

今回振り返り、テニス部に入って、本当に良かったと改めて実感しております。

末筆ですが、部がますます飛躍されますよう、お祈り申し上げます。

素晴らしい4年間

大学 山崎（安部）千尋

創部100周年おめでとうございます。

私は中学・高校と6年一貫の女子校でテニスをしてきました。甲南大学での4年間の部活動はそれを遥かに超えるさまざまな経験と学びがあったなと思い出されます。入部してから「一部昇格」を目標に掲げて練習していた日々、私が3回生の時に叶った年は本当に忘れ難いです。OBさん・OGさんのご支援で遠征や合宿、強化練習等たくさんの協力があつたからこそだと感じています。

キャプテンを務めていた4回生では、チームを引っ張っていく立場となり「王座出場」に向けて目標にチーム一丸となって練習に取り組んだ日々が懐かしく、走馬灯のように様々な記憶が浮かんできます。これらの経験は社会生活を送る上で自身の活力に結びついていると実感しています。

今後も更に愛される部活として発展していくことを期待しています。



▲ 2012年卒業式

高校 2009(H21)年卒

上島 康治 戎 寛二 大園 純司 梶原 一義 木村 富将 小島 貴晃 田中 幸志 田丸 達也 中村 洋輔
中村 秀幸 中川 真之 前田 康宏 八島 裕平 矢谷 和也

大学 2013(H25)年卒

男子 権藤 丞 坂元 成 福本 達也
女子 出島(伊丹) 果



▲ 高校時代の集合写真勝

かけがえのない6年間

高校 上島 康治・中村 洋輔

皆様、100周年おめでとうございます。高校卒業から10年以上が経過し、記憶が薄らいだ部分があるため、中高テニス部の主将であった中村洋輔と副主将であった上島康治が共同執筆することに致します。さて、我々の学年は、中学では全国団体3位、高校では県総体団体準優勝という成績でした。

折角の機会ですので少し思い出を振り返ってみますと、我々のテニス部生活は20年前の4月、仮入部から始まりました。声出しや球拾い、ランニング、上下関係などテニスに留まらず部活動の文化を先輩から教わり、夏頃から本格的に入部となりました。本入部となつてからは、夏の炎暑も相まって、練習は更にハードなものとなり、あつという間に夏が明け、冬が明け、2年になる頃には後輩ができ、自分達が指導していくことになりました。そして中学3年、厳しい練習を経て全国大会に進出。名古屋という中学生にとって遠方での試合であったにもかかわらず、同学年の部員全員が応援にかけつけ、チーム一丸となって戦ったことは一生忘れない思い出です。

高校時代には、高校から入部してきたメンバーや中学生も合わせて約60名程のメンバーを纏める立場となり、一癖も二癖もあるメンバーを纏めるのは正直大変でしたが、これもまたかけがえのない経験でした。トレーニングメニューも強化され、週末の練習では、芦屋浜までランニングで行き、砂浜で走り込んだ後、テニスコートまでランニングで戻るといった厳しいトレーニングに取り組みました。また、練習環境としてナイター照明設備が設置され、夜遅くまで練習に励むなどテニスに真面目に向き合っていました。これらの厳しい練習を経て試合で勝つというのは何物にも変えられない喜びを感じると

同時に、負ける悔しさは次への糧となり一層練習に励みました。大人になった現在では様々なことに責任を持たなくてはならない状況で、一つのことに取り組み続ける機会は少ないですが、この頃は何の柵もなく、一意専心という言葉を体現してテニスに打ち込むことが出来ました。

部活動としての思い出は練習時だけではなく、練習後のテニスコートでの水浴び、芦屋川駅に当時あったテニスショップでの談笑、帰宅時の寄り道など、褒められたことではないですが、多少のやんちゃをしたことも今となっては良い思い出です。

現在は、33歳を迎え、各々が社会人として活躍していますが、中高6年間のテニス部生活で、かけがえのないもの得たと感じています。特に、団体行動を通じて得たチームへの貢献力、理想の先輩像、火事場の馬鹿力、厳しいトレーニングなどで鍛えあげられた成果に向かって努力し続ける精神は、テニス部で無意識に醸成されたと感じています。

最後になりますが、テニス部の伝統を築いてくださった諸先輩方、また、それらを引き継いで下さっている後輩の皆様、誠にありがとうございます。今後も時代に合わせてテニス部がテニス部らしくあり続けてほしいと心から願います。

古豪復活への挑戦 そして王座出場！

大学 権藤 丞・坂元 成・福本 達也・出島(伊丹) 果

創部100周年、誠におめでとうございます。心からお慶び申し上げます。甲南大学硬式庭球部を卒業して11年も経ちました。ふと過去の思い出を振り返ると、苦しいようで楽しかった甲南テニス部の思い出が今でも鮮明に思い出してきます。2009年新歓が終わり、オールサーフェスを完備した関西リーグ2部の甲南大学テニス部に入部したのは同期たったの4人。ここから波瀾万丈な六アイライフが幕を開けました。当時の入部同期は最終学年で男子主将の坂元成(仁川学院高卒)、副主将の福本達也(柳川高卒)、主務の権藤丞(長崎海星高卒)、女子主将の伊丹果(夙川学院高卒)であり、全員スポーツ推薦での入学でした。入学後1発目の春闘で、達也がシングルスベスト4という功績を上げた事で一気に甲南大への注目度が上がったのは間違いありません。リーグ戦では、1回生で初めての入替戦。2回生で2度目の入替戦。3回生で念願の1部昇格。先

輩方に最高のステージを与えていただきました。最終学年、新チーム体制での初ミーティングで「このチームの目標は王座出場」と部員にはっきりと伝えました。王座出場するには、強豪の関西学院大と関西大の両校に勝たなければなりません。そこで、早朝から全員で山を疾走、300段の階段を何往復も…また、別の日の早朝には柔道部と1時間の合同トレーニング。今、考えてもこれは正しいトレーニングだったのかは不明ですが、当時の部員は文句も言わずやりきってくれた事に感謝しかありません。その結果、沢山の先輩達に支えられて関西学生1部リーグ32年振りの悲願の優勝を果たすことができ、18年振りに王座出場権を獲得しました。関大戦、ダブルス1-2と、ある意味崖っぷちに立たされた中、シングルスで巻き返し4-4とし、S3の瀬古が見事に勝利してくれました。あの優勝したビーンズドームでのセンターコートで、そして当時応援に駆けつけていただいたOBOG、現役みんながはしゃいで喜ぶシーンは今でも忘れていません。その勢いそのまま10月末に「全日本大学対抗テニス王座決定試合」で有明の舞台に乗り込みました。準決勝は関東第2代表の法政大と対戦、やはり関東の壁は高く勝利する事ができませんでした。また3位決定戦では関西大と再戦するも、意地を見せつけられ敗戦。4位という結果で32年ぶりの王座は幕を閉じました。

ここまでこれたのは、当時のマネージャー含めた全部員の頑張りであり、またコーチやOBOGのサポートのお陰でもあった事を会報を受け取った際にいつも思い出します。最後まで同期4人で走り切り、最高の結果を出せた事、卒業後の人生の大きな糧になったと思います。

坂元成コメント:

我々59回卒業生は恵まれていた環境でテニスに打ち込めていたんだなとつくづく感じています。当時、王座出場する為には経験値が必要なので、遠征に行かせてほしい等沢山のわがままを全て叶えて下さりました。本当に感謝しかありません。色々な条件が見事に重なり王座に出場出来たと今でも思っています。これこそ「オール甲南テニス部」の力だと思います。歴代には様々な好成績をおさめられた偉大な先輩方がおられ、我々は足元にもおよびませんが、王座出場です少しは近づけたのではないかな?と感じています。これからも「オール甲南テニス部」の新しい歴史を見れる事を楽しみにしています。



▲ 関西リーグ1部優勝! ~ブルボンビーンズドーム センターコートにて

出島 (伊丹) 果コメント:

創部100周年、誠におめでとうございます。

甲南大学硬式庭球部に入部した頃から11年の年月が経ち、現役時代での多くのOBOGの方々の支えには今でも感謝しております。

入学した際、他校に比べ女子部員は少ないながらも2部リーグで1部昇格を目指し日々練習に励んでおりました。強い絆と信頼関係でチームメンバー全員が気持ちを一つにして、それぞれの個性等を最大限発揮して共通の目標に向かえたのは、少人数ならではの事だと振り返っています。

今でも鮮明に覚えている1番の思い出は、2回生の時に果たした一部昇格です。そこに辿り着くまでは決して簡単な事ではなく、たくさんの壁にぶつかり苦しい事も乗り越えた分、先輩後輩と共に大きな喜びを分かち合う事ができました。これも、日頃から一緒に練習に励んでいた男子部員のサポートもあったからこそだと思います。

私が4回生になり、女子部主将を務める際に最低限の目標を、先輩方から受け継いだ1部リーグ残留に設定し強い気持ちで挑みました。しかし、当初のメンバーの個人スキルやチーム力では目標達成はできないと考え、自分なりに今まで以上に後輩への接し方や練習内容についても厳しくする事を心がけました。時には、中途半端に練習を行なっている部員に対し叱り、練習を外すなど、チーム改革を行いました。少人数である一方、個性もそれぞれ強い事で空回りしてしまう日々も多く悩む事が増えました。しかしながら、一人ひとりとしっかり向き合う事で後輩達も少しずつ同じ目標に向かって練習に励んでくれた事、しんどい時もついてきてくれた事に感謝しています。

最後のリーグ戦では入替戦に回ってしまい、神戸松蔭に敗退し2部降格した事、今でもあの時の悔しい気持ちは忘れる事ができません。

甲南大学庭球部に所属した4年間を振り返ると、OBOG・コーチのサポートがあり、部活動に精進する事ができたと思います。

4年間楽しいことだけではなく苦しい事も沢山ありましたが、今後の人生で2度と出来ない経験だったと思いますし、今の社会人生活でも活かす事が出来ていると感じています。

4年間の中でも男子3人の同期に助けられ、生涯においても大切な仲間が出来たと思っております。



▲ 卒業旅行でイタリアへーボノ(笑)

高校 2010(H22)年卒

伊井 健太郎 石橋 駿一 今井 健太 川田 和輝 佐藤 政博 貴田 大史 高森 亮佑 伊達 侑作 鍋島 翔太
沼野 孝彰 藤田 湧弥 前田 芳明

大学 2014(H26)年卒

男子 大町 慶雄 小川 実 貝野 友規 下向 将志 早瀬 勇次 伊達 侑作 沼野 孝彰 松山 知史
女子 数原 沙紀 北山 由佳



▲ 60回高校卒業アルバムより

王座と最後のリーグ円陣

高校・大学 沼野 孝彰

創部100周年、誠におめでとうございます。僭越ではございますが、筆を走らせていただきます。

2013年卒の私たちはリーグ戦において全てのステージを経験をさせていただいた稀な代でした。全てのステージとは、2部リーグ戦・入替戦0-5で敗退・翌年再び入替戦を5-4で勝利し念願の1部に昇格・1部最下位から関西リーグ全勝優勝で王座出場4位・1部1位から王座を狙うも関西リーグ4位で残留でした。

4年間でここまで違う景色を戦えた学年は、他にないと思っています。当時の成功失敗体験により、甲南テニス部の伝統である、社会生活においてもリーダーシップを発揮できる「徳・体・知」に優れた人材」を同期メンバーそれぞれが実践できていると思います。

色々な方々にサポート頂き、このような経験ができたことをこの場を借りて御礼申し上げます。またこれから我々も甲南テニス部をサポートさせて頂くとともに、益々の発展と、皆様のご健康を祈念しまして、締めさせていただきます。

逆襲の甲南

大学 下向 将志

学生時代、特に印象に残っているのはリーグ戦です。

2年目に1部昇格、3年目に1部優勝&王座出場と、有難いことに夢のような学生生活を送ることが出来ました。

当時の甲南はシングルスが強く、ダブルスが0-3になろうが全く動揺しない不気味なチームでした。

監督、OBさんから「ダブルスで主導権を握れ!」「最低でも1-2

でシングルスに回せ!」と言われていましたが、唯一ダブルス専門の選手だった私以外はシングルス練習しかしていませんでした。シングルスで5勝すれば勝てる。そんな雰囲気でした。

もう少しダブルスも練習してくれと内心思っていたのは事実ですが、ダブルスで負け越してからシングルスで逆襲するチームがとても好きでした。

チーム甲南

大学 松山 知史

創部100周年誠におめでとうございます。

2014年卒の私たちは本当に様々な経験ができた貴重な代であったと自負しております。

私が入学した時はまだ2部リーグだったのですが、2部リーグ入替戦の敗退で改めて大学テニスのレベルの高さ、入替戦を突破することの難しさを痛感致しました。そしてその翌年見事リベンジを果たし一部昇格を決めました。一見、選手層はこちらの方が厚く、戦力も上だったにも関わらず結果は5-4というギリギリの戦いでした。そのプレッシャーを跳ね除け勝利を掴んだ時は本当に興奮が収まらなかった記憶があります。

そしてその翌年見事1部最下位から関西リーグを全勝し、見事王座出場を果たすことができました。

一部昇格の時もそうでしたが、更に王座出場の瞬間は選手、応援、OBの方々含め一体となって喜びを分かち合い、まさにオール甲南であったと思います。

甲南の良さは卒業してもなお、同期や先輩後輩、OBの方々と付き合いがあり、本当に繋がりの強いところだと思います。



▲ リーグ戦を終えて集合写真

OBの方々へ、このような貴重な経験をさせて頂いた背景にたくさんの方々のサポートを本当にありがとうございました。

今後は微力ながら私達も甲南テニス部をサポートをさせて頂きたいと思いますので、よろしく願い申し上げます。それでは甲南の益々の発展と、皆様のご健康を祈念しまして、締めさせていただきます。



▲ 関西リーグ1部優勝 優勝トロフィーと共に



▲ 2012年全国大学対抗テニス王座決定試合



▲ 大学卒業式

テニス部に捧げた4年間

大学 北山 由佳

甲南学園テニス部創立100周年、誠におめでとうございます。今回こちらを書くにあたり大学4年間のテニス部生活を思い返し、現役時代の様々な思い出が蘇ってきました。

入学当初は大学特有の上下関係になかなか慣れることができず、当時の先輩方にはたくさんご迷惑をおかけしました。私が女子部主将になってからは後輩を引っ張っていくことができず、主将としての役目を果たせなかったと反省しています。同期の部員は男子しかいませんでしたが、もっとコミュニケーションをとって仲良くなれば良かったなど今になって思います。

個人戦ではコンスタントに成績を残すことができず、悔しい思いをたくさんしてきました。

「インカレ1度しかでなければそれはまぐれだよ。」と言われたことは未だに忘れられません。ただその言葉で奮起し、努力し続けました。4年生のときにシングルスでインカレ16、夏関で準優勝したときのことは一生忘れることはできません。特に夏関での準優勝は自分の大学4年間の集大成でもありました。当時支えてくれた方には感謝しかありません。そして努力は決して自分を裏切りません。本気で結果を残したいのなら、誰よりも努力したと自信が持てるまで努力しなければなりません。

大学時代は辛いことの方が圧倒的に多かったですが、甲南大学テニス部に所属できたことは全く後悔しておりません。

最後に、テニス部に関わったみなさまにはたくさんのご指導、ご協力を頂いたことに変え感謝しております。

ありがとうございました。



▲ 2013年夏関準優勝

高校 2011(H23)年卒

綾部 大輝 上原 伊織 大西 潤 金江 紀幸 高本 侑甫 瀧井 瞭之祐 寺垣 雄平 花本 僚寿 伴 亮志
藤村 貴弘

大学 2015(H27)年卒

男子 綾部 大輝 上原 伊織 瀬古 悠貴 伴 亮志 藤村 貴弘 山村 寛人
女子 田中(望月) 佑起 藤原 彩葉



▲ 甲南高校テニス部集合写真

私の甲南大学4年史

高校・大学 綾部 大輝

体育会テニス部での思い出は今思い返してもつい最近の出来事のような感覚です。

入部当初は2部リーグで1部昇格という目標を胸に日々全員が切磋琢磨し練習に励んでいました。

一回生の頃は2部リーグのためレギュラーではなかった私は、リーグ戦で主審と副審をしなければいけなかった。当時の2部リーグは本戦で活躍するような選手が多数おり、痺れる展開の試合が多かったので出来ればやりたくなかったと記憶しております。他の同期の皆さんも同じ気持ちだったと思います。

同期の中でも各々役割は違いましたが、1部昇格という1つの目標に向かって邁進していたことは今でも忘れられないです。練習以外でも主審や副審、連呼の練習。そして失敗した時には連帯責任で皆で走ったことは今となっては本当に良い思い出です。

2部リーグは2位で通過し、入れ替え戦で1部5位の同志社を最終試合で勝利し昇格が決まった時は、今まで味わったことがない感情になりました。個人的には長い関西学生テニスリーグの入れ替え戦史に残る名試合だったと思っています。

迎えた翌年の1部リーグは「挑戦」というスローガンを掲げ、王座出場を目標に挑みました。昨年の2部リーグよりはるかにレベルが高かったが、レギュラー、イレギュラー全員が王座出場できると信じていたと思います。

私の同期の上原、瀬古が活躍し、リーグ戦優勝したのは心の底

から嬉しかったです。一生の思い出です。

そして4年間苦楽を共に過ごした同期の皆さんは一生の財産だと思います。

リーグ戦優勝した時のビデオを持っていますので見たい方は綾部までご連絡ください。

これが僕の部活動

高校・大学 伴 亮志

青い扉を開けてコートに入ると、白色の服で統一された部員の大きな声援が飛び交っており、「これが部活動か。」と衝撃を受けました。

初めは慣れないことばかりで大変でしたが、県・近畿・全国大会の優勝は自分1人では味わうことはできず、甲南テニス部だからこそ経験できました。また、部活動を通じて、勝利から得る喜び、敗戦の悔しさから学ぶ姿勢、組織の中で自己表現することの大切さを学べたことは、私たちの人生の財産となっています。

大学の部活動では、中高の部活以上に組織の中でのコミュニケーション能力が磨かれました。甲南中高のテニス部は他校の競合と違い、県外から集まることが少なく、兵庫県や大阪府出身者が集まるテニス部でした。大学のテニス部に入部すると様々な県からスポーツ推薦や受験を経て入部している人が多く、色々な文化や価値観に触れることができ、今のコミュニケーション能力の土台になっ

ていると思います。特に一人暮らしをしている部員と接することは今までにない経験であり、改めて親の部活動への理解や協力姿勢に気づくことができました。

部活動で培ったコミュニケーション能力や親への感謝を活かして、自分の子供が夢や目標を持った際は理解し、全力で応援できる様にしたいと思います。

価値のある7年間

高校・大学 藤村 貴弘

私は高校から入部しましたが、同期は皆実力のある選手ばかりであった為、自分がこの部活の中でやっていけるのか最初は不安でした。

ですが、そこは甲南だからこそなのか、仲間想いが強く、全員で丸となる雰囲気は高校の時から大学までずっと同じでした。いろんな形で部活に貢献する場を与えてもらいました。

正直、戦績というところで部活の役には立てませんでした。サポートする立場としても、リーグ戦では自分が試合に出ているかのように選手同士と勝利の喜びを分かち合い、負けた時には悔しさを共にして、その悔しさをバネに一緒に練習に励みました。

この経験は自分の人生の中で大きな財産になったと思います。

大学4年間は人生の誇り

大学 瀬古 悠貴

入学当初は二部リーグからのスタートだったが、一回生の時に一部リーグに昇格して二回生で王座を経験し、全国四位、一部というレベルの高いステージで戦い続けたことは自分にとって自信となった。関西学生では全員が丸となって応援して、上原が優勝したことは記憶に新しい。

関西リーグ戦の会場が変わり、レンタルコートの予算がない中でも先輩方の力を借り、練習環境を整えて頂いたことは今でも感謝しています。四年間通して同期と分かち合った時間、そして甲南大学体育会硬式庭球部に貢献したことを誇りに思います。

4年間を振り返って

大学 田中(望月) 佑起、藤原 彩葉

この度は、創部100周年を迎え、誠におめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

私が甲南大学硬式庭球部に所属しておりましたのは、平成23年から27年の4年間になります。

私たちの学年は、女子2名という少ない人数でした。学部学科ゼミも同じで、家族よりも一緒に過ごした時間が長く、小さな事でも相談し合える良きペアとして主将、主務を互いに務め、高め合いながら日々過ごしておりました。

初めてのリーグ戦では1部リーグでの圧倒される雰囲気の中、大活躍される先輩方の背中を見て、自分達の代でも頑張ろうと思ったことを今でも覚えています。

もう一度1部リーグに立ちたい、1、2回生で味わったあの雰囲気を先輩たちにも感じてもらいたい、という想いを胸に戦いましたが、先輩たちを1部リーグに連れて行くことが出来ず、振り返れば今でも悔しく思います。

私達の時代ではコーチという存在がいなかった為、練習メニューやトレーニングメニューを自分達で考え、目標の試合に向けて日々励んでおりました。

課題や練習方法を考え、チームで実践する事は大変苦労しましたが、今思い返すと、自らで考えて行動に移し実践する事は、社会人になってから仕事の目標を達成する為に何が必要かを考えて行動出来る力が身に付いていると感じております。

様々な学びを頂けた環境、仲間に対し、感謝の気持ちを忘れず過ごして参ります。

また皆さまのご健勝とご多幸を心よりお祈り申し上げます。



▲ リーグ戦後の集合写真



▲ 卒業式

高校 2012(H24)年卒

石田 陽一 岩本 拓馬 木ノ下 怜 古村 賢太 永田 薫平 成本 拓洋 山根 三慶

大学 2016(H28)年卒

男子 秋山 優太 木ノ下 怜 古村 賢太 田中 真次 前田 直人

女子 石田 紗和子 大東 彩 小川(中山) 朋子

悔しかった7年間

高校・大学 古村 賢太

この度は、甲南学園硬式庭球部の創部100周年、誠におめでとうございます。

100周年という非常に長い歴史に関われた事について、大変誇りに思います。

甲南高校・大学テニス部を卒部後、約7年経過しますが、濃い7年間だったせいか、当時の出来事を鮮明に覚えております。

私は2009年に甲南高校に入学し、高校1年生でレギュラーとして団体戦に出場しましたが、高校3年間で1度も団体戦での全国大会出場を果たす事は出来ませんでした。

その中で、高校1年生の新人戦の団体戦(対関学戦)では、全国大会出場が懸かったシングルス3で出場しましたが、接戦の末敗れたために、全国選抜大会に出場することが出来ず、非常に悔しい思いをした記憶が鮮明に覚えております。

その悔しさを糧に、甲南大学では全国大会出場を目指しましたが、関西学生本戦出場止まりでした。

結果も出ず非常に悔しい思いをしましたが、最後まで楽しく真剣に部活動に取り組めたのは同期の存在があったからだと思います。

特に大学1年生では、厳しい練習以外にも、諸先輩方から厳しいご指導も賜り、人間的に成長出来たとともに、同期での強い繋がりが生まれたような気がします。

最後になりましたが、OB・OGの皆様、先輩・同期・後輩の皆様、7年間もの間、現役時代に手厚いサポートを頂き、誠にありがとうございます。



▲ 62回高校卒業アルバムより

ございました。この場をお借りして、重ねて御礼申し上げます。

末筆ではございますが、甲南大学テニス部に関わる皆様方の、更なるご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。

濃密な4年間

大学 前田 直人

皆様、創部100周年おめでとうございます。我々62回卒は2016年卒業の今年で29歳になる年となります。卒業してから6年の時間が経過してなお、甲南テニス部で過ごした4年間は昨日のこのように思い出されます。それほどに濃密な4年間を過ごさせていただきました。

なぜこれほど充実した大学生活を送ることができたのかを振り返ると、やはり甲南ならではの交流関係が我々を人間的にも大きく成長させてくれたからなのだと感じております。

62回卒は男女合わせて8名と比較的人数も少なく、正直テニスにおいて突出したスター選手がいたわけでもありません。(同期の中に自分はスター選手だった自覚がある人がいればごめんなさい)

そんな中でも甲南の血を継ぐ皆様との人間関係に恵まれ、厳しい練習にめげることなく楽しく真剣に取り組むことができ、男子は4年間を通して関西1部というハイレベルな舞台で切磋琢磨できたことがかけがえのない経験となっております。

特に印象的な出来事としては、我々が4回生となった最後のリー



▲ 大学男子同期と共に

グ戦です。先輩方が築いてきた強い甲南を絶対に守り抜かねばならない。私自身も部長として大きな不安はありながらも、同期と一致団結し、OB・OG 諸先輩方からは手厚いサポートを頂き、後輩たちは頼りない我々を慕ってついてきてくれる。甲南であったからこそ築けた本当の意味での団結力を以てして1部4位という結果を残せたことは一生忘れられません。

このような素晴らしい人間関係は卒部した後も絶えることなく、今も私達の大きな財産となっております。これもひとえに、100年の歴史を築いてきた皆様方の功績があったからこそであり、この場をお借りして心より感謝申し上げます。

最高の仲間との思い出

大学 大東 彩

記念すべき100周年の年、30歳なります。少し大人の仲間入りでき始める頃でしょうか？ 社会人となりましたが、今でも甲南大学で試合をしている夢を見るぐらい濃い思い出です。

私は4回生で、女子主将を努めました。同期女子は中山、マネージャーの石田、私の3人です。先輩後輩も少なく、リーグ戦は連日単複出場するメンバーや、審判・ボーラーでフル回転メンバーと部員の多い他校より苦勞がありました。ダブルスのフルセット試合が終わって、ろくに休憩もできず足や腰を痛めている中でも、文句を言わずシングルスを全力で戦う同期、後輩がいて、本当に逞しいメンバーだったなと感じます。

多くの選手がシングルスプレイヤーで、前衛の動きも分からないまま、ダブルスに挑んでいた頃が懐かしく、よく前衛にボールをぶつけることもありましたが、大チャンスでスマッシュを空振りすることもありました。今では、笑い話ですが、応援してくださる皆様を冷や冷やさせてしまう試合が多かったと思います。

引退試合は、負けたら3部と入れ替え戦と手に汗を握る試合でしたが、緊張にも試合にも打ち勝ちメンバー全員と喜びあった日は、一生忘れることはないです。頼りない主将でしたが、それでもついてきてくれた、同期、後輩がいたからこそ、このような充実した大学生活を送ることができました。この場をお借りし御礼申し上げます。

末筆ではございますが、皆様のご健康とご発展をお祈り申し上げます。



▲ 同期女子3人



▲ 学習院戦後のディズニーランド



▲ 引退

高校 2013(H25)年卒

石宇 健人 上曾山 博貴 小野 真弘 小山 航平 鈴木 達也 田村 将人 当山 晋司 原口 大介 帆足 仁宏

大学 2017(H29)年卒

男子 石宇 健人 大塚 潤一 岡田 岳 鈴木 達也 高島 基 中条 智矢 帆足 仁宏

女子 本田 杏樹



▲ 63回高校卒業アルバムより

感謝の甲南生活

高校 上曾山 博貴

初めに、創部100周年おめでとうございます。100年という長く輝かしい歴史に関われたこと大変嬉しく思います。甲南高校を卒業し、早10年が経とうとしていますが、中高6年間のテニス部での日々は昨日の事のように鮮明に覚えています。このような機会を頂いた為、当時は懐かしく思いつつながら筆を執りたいと思います。

私は、2007年に甲南中学に入学し、中学3年間では全国中学生大会団体優勝2回を経験しました。特に3年時の優勝の瞬間は一生忘れないと思います。全国的に見ても甲南中学は当時から強豪で、勝つて当たり前な風潮もありましたが、試合に勝って泣くというのは後にも先にもこの時だけでした。

高校入学後は初めてのレギュラー落ちや、イップスなどもあり、テニスを嫌いになっていた時期もありました。これまでの過去の栄光に縋り、下手で勝てない自分を受け入れる事ができず、怪我や言い訳を繰り返し、部活中の態度も、良いとは言えなかったと思います。そんな中でも、私を見離さずキャプテンにして下さった顧問の八田先生を始め、先輩、同期や後輩達には感謝しています。

私の代のチームは中学の時とは違い、全国大会に出場出来れば良いかなという戦力でした。それでもチーム一丸となり全国選抜大会に出場するなど、キャプテンにならなければ出来なかった経験も沢山ある事が出来ました。社会人になった今でも、この1年間の経験は大きく活きていると感じています。

これから活躍される後輩達にメッセージを残したいと思います。チームで何かを目指す事はとても素晴らしい事です。それを達成する過程には楽しい事も辛い事も沢山ありますが、いかなる時も周り

にいる人を大切にして共に乗り越えていってほしいと思います。学生時代にしか出来ない経験も山ほどあります。日々全力で後悔ないように学生時代を過ごして下さい。

最後になりましたが、私に関わって下さった先生方、先輩や後輩方、ありがとうございました。この場を借りてお礼を申し上げます。末筆ながら甲南テニス部に関わる全ての皆様のご活躍をお祈りし、筆を擱きます。



▲ 悔いのない6年間

一生の宝

高校・大学 石宇 健人

この度は創部100周年誠にありがとうございます。心よりお祝い申し上げます。

私は中学生から大学生までの10年間、テニス部でお世話になりました。たくさんの先輩方、OB・OGの皆様、コーチ方々に支えて頂き、充実したテニス生活を送ることができました。

そんな10年間で特に思い出に残っていることは中学生の時、全国大会の団体戦で2度日本一になれたことです。あの時の感動は今でも鮮明に覚えており一生忘れることはありません。日本一という大きな目標に向かって努力した日々、優勝した瞬間みんなと抱き合い嬉し涙を流した事、そしてみんなで勝ち取った金メダルは私の一生の宝物になっています。甲南のテニス部だからこそ日本一というなかなかできない経験をする事ができました。

また、一生付き合いたいと思える最高の仲間に出会うことができました。尊敬できる先輩方、私のことを信頼してくれる後輩達、嬉し

かったことも悔しかったことも、色んなことを一緒に経験してきた同期のメンバー達に出会えました。テニス部を引退した今でも連絡を取り合い仲良くしています。私は心の底からテニス部に入って良かったと思っています。

これからは自分がOBという立場として、現役生のサポートを全力で行っていきます。再び甲南テニス部が日本一になれる日を楽しみにしております。

最後になりますが、伝統を守り続けてきた先輩方、支援して下さった全ての方々のおかげで創部100周年という輝かしい日を迎えることができました。心より感謝申し上げます。

ぼくの夏休み

大学 岡田 岳

この度は甲南学園硬式庭球部創部100周年、誠におめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

我々63回卒は2022年現在、大学コーチを務められている沼野孝彰先輩が主将をされていた2013年に入部し、ドナルド・トランプ氏が大統領選に当選した2017年に卒業いたしました。男子部8名、女子部1名の計9名の仲間と共に、4年間の人生の夏休みを部活に捧げました。

入部してすぐの春闘、当時甲南大学のエース級であった上原伊織先輩とダブルスを組ませて頂きました。その頃からとにかくリターンが下手くそだった私は案の定、緊張も相まってけたたましい数のミスをしました。結果、見事予選落ち。一方の上原先輩はシングルス

優勝。その表彰式の前に上原先輩にこんな言葉を頂きました。「岳のおかげで体体温存出来たわ!ありがとう!」、...曇りなき眼で仰られたその言葉。今でも忘れることができません。

忘れられない風景があります。3回生のリーグ戦。当時の主将であった前田直人先輩の対関学戦の試合です。負けが決定してもなお、闘志溢れるプレーで戦い抜き、そんな姿に他大学の選手達も思わず声援を送っていた、あの風景です。

様々な経験や、様々な出会いを与えて下さったテニス部には感謝してもしきれません。

最後になりますが、関わって下さったOB・OGの皆様、外部コーチ、先輩の皆様、同期、後輩の皆様、本当にありがとうございました。

このような貴重な経験ができたのも創部より伝統を築き上げた先輩方のおかげです。この場をお借りして心より感謝申し上げます。

出会いに感謝

大学 本田 杏樹

この度は創部100周年、誠におめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

我々63回卒は、2013年に入部し、2017年に卒業しました。

私の学年は男子部が8名、女子部が1名の計9の同期と共に約4年間の厳しい練習に打ち込んできました。女子が1人ということもあり、初めは心細い気持ちが強く苦しい日々が続きましたが、8名の同期が常に気にかけてくれ、4年間無事にやり遂げることができました。4回生になり主将を務めた際には、少人数という強みを生かし上下

関係なくアドバイスができるような環境を目指し、「一部昇格」という目標だけを考え練習に取り組みました。結果として2部3位と一部昇格にはあと一歩のところまで届きませんでしたが、約50人の部員で男女関係なく選手を全力で応援していた光景は今でも忘れられません。

また、卒業した今でも多くのOBの方々や先輩から同期、後輩と幅広い年代の方々と交流できていること、とても嬉しく思います。

最後になりますが、このような貴重な経験ができたのも創部より伝統を築き上げた先輩方のおかげです。この場をお借りして心より感謝申し上げます。



▲ とある日の、つかの間の休息

高校 2014(H26)年卒

綾部 翼 伊藤 大喜 小野山 真之 梶田 博之 菊池 瑛祐 北村 舜樹 河野 将史 小浦 啓太郎 田中 聡介
永田 光 野武 和司 八塚 悠暉 原 和亮 松田 涼 松村 洋和 山内 柊 古村 達哉

大学 2018(H30)年卒

男子 綾部 翼 栗原 佑也 稗島 啓司 向井 涼太 森 匡 山本 翔太郎
女子 篠倉(毎田) 光 野上(四宮) 梨沙 橋本 和



▲ 64回高校卒業アルバムより

甲南テニス部という私の財産

高校 八塚 悠暉

創部100周年おめでとうございます。伝統ある甲南テニス部OB会の一員として、このような形で携わらせて頂けること誠に光栄に思います。

私は2008年から2014年の計6年間、甲南中高テニス部に所属し、中学では副部長、高校では部長を務めさせて頂きました。未熟な私が身に余る大役を担わせて頂いたのも、一重に良き仲間にもまれたことに他なりません。

共に切磋琢磨した同級生、優しくも厳しくご指導して下さった先輩方、学ばせてくれた後輩たちあつての6年間だったと強く感じます。

私たちの代は17名が甲南テニス部として高校を卒業致しました。テニス歴・性格・キャラ・特技など、みな散り散りで、大変バラエティーに富んだ部員が集まっていたと振り返ります。そんな私たちですが、年に1度の集まりは今でも欠かすことなく行っており、話尽きることのない笑いの渦に包まれた会になっています。中でも印象に残った出来事として必ず話題になるのは、『本気でぶつかった話』の数々です。コート上での真剣勝負の話、想いと想いがぶつかり合い、時には喧嘩になった話など、話し出すと切りがありません。本気で部活に励んでいた青春時代を思い返しては、その経験がいかに貴重で役に立っているかを振り返っています。

このような私たちの人生にとって何ものにも代えられない財産を創ることができたのも、一重に受け継がれてきた伝統や実績があったからこそだと強く感じます。伝統ある甲南テニス部OB会の一員



▲ 高校引退試合後の集合写真

であることを誇りに思うと同時に、これまで支え発展させてきていただいた先輩方に心から感謝を申し上げます。

成長の4年間

高校・大学 綾部 翼

我々64回卒は2014年に入学し、2018年に卒業しました。64回卒の同期9名は非常に個性が強くユーモアなメンバーでしたが、それぞれが強い意志を持ちながら、4年間厳しい環境でテニスに打ち

込みました。

同期として至らない点多々あり、先輩からお叱りを受け約20km反省をしながら走りこむといった過酷な経験も味わいましたが、皆4年間の部活動を通じて強く成長できたと感じております。

上回生となった際は私達の代の「ユーモアさ」といった強みを活かし、甲南の伝統を継続させながら学年問わず皆が全力でテニスに打ち込められるチームを目指しました。最終的には関西学生リーグ戦で、1回生から4回生の皆が活躍し、男子は1部リーグ4位、女子は2部リーグから1部に昇格といった功績を残すことができました。テニスの実力は互角といった厳しい状況の中、総勢50名のチーム力で勝利を掴み取った光景は今でも忘れられません。

私は中学から10年間甲南テニス部でお世話になりましたが、大学で初めてチームのサポート役を経験し、改めてチームワークの大切さ等を学ぶことができました。部活動を通じて学んだチームワークと得た仲間は私達の人生の財産となっています。

最後になりますが、このような歴史ある甲南テニス部で有意義な経験ができたことを誇りに思い、100年の歴史を築き上げたOBOGの皆様へ感謝を申し上げます。今後は甲南大学体育会硬式庭球部を支える立場として同期一同努めてまいります。

感謝

大学 野上 (四宮) 梨沙

この度は、創部100周年おめでとうございます。

伝統ある甲南テニス部OGとして、このような形で関わることができ、大変光栄です。

私たち64回卒は2014年に入部し、素敵な同期や先輩・後輩たちと切磋琢磨しながら、甲南生活を送ることが出来ました。

特に同期9名は個性豊かで、時にぶつかり、時に励まし合いながら、様々な試練を共に乗り越えてきました。このような仲間と出会い、素晴らしい経験ができたのは、今振り返っても自身にとってかけがえのない財産です。

また私は2年間、女子主務を務めました。裏方で関わることが増え、想像以上にたくさんのOB・OGの方が携わってくださっていることに気が付きました。各方面から様々な形でご支援頂けるのも、これまで受け継がれてきた甲南の伝統や功績があったからこそだと感じます。

そして、4年間の部活人生で一番の思い出は、最後となるリーグ戦で悲願の1部昇格を勝ち取ることが出来たことです。監督やコーチをはじめ、OB・OGの皆様と共に喜びを分かち合うことが出来たことは、今でも忘れられません。

最後にはなりますが、このような恵まれた環境のもと部活に打ち込み、素晴らしい甲南生活を送ることができたのも、100年という歴史を築き上げてくださった、OB・OGの皆様のお力添えのお

陰に他なりません。この場をお借りして心より感謝申し上げます。末筆ながら、益々のご発展を祈念しております。

甲南だからこそ

大学 橋本 和

皆様、創部100周年誠におめでとうございます。甲南学園硬式庭球部の100年という素晴らしい歴史に、このような文章を書かせていただくこと大変嬉しく思います。

我々64回卒は2014年に入部し、厳しくも最高な4年間で同期9名と共に乗り越えてきました。同期は私も含め本当に個性が強く、刺激的なメンバーだったように思います。

時にぶつかり、大変だったことも少なくはありませんでしたが、それでも全員で手を取り合い、励まし合い、最後まで同期と駆け抜けた4年間で今も私の宝物となっております。

我々は2018年に卒業しましたが、今でも当初の部員と頻りに連絡を取り合い、先輩方とテニスや食事を通じて交流させていただいております。社会人になり部活を離れた今でも甲南大学硬式庭球部の繋がりの強さを実感しております。

私は最後の1年間は女子主務を務めさせていただきました。入部当初からの目標であった1部昇格を目指し練習に打ち込んだ1年間で、至らない点も多い主将だったかと思いますが、監督やコーチ、非常に多くのOBOGの皆様の支えがあり役目を果たすことができました。そして、先輩方の熱心な指導のおかげで、また素敵な後輩がついてくれたからこそ、1部昇格を成し遂げることができました。1部昇格のあの瞬間、あの目の前の景色を忘れることはありません。

最後にはなりますが、このような充実した環境でテニスができ、素晴らしい甲南生活を送ることができたのも、偉大な先輩方のお力添えのおかげでございます。この場をお借りして心より感謝申し上げます。そして、甲南大学硬式庭球部の今後ますますのご活躍を祈念いたします。



▲ 大学卒業式

高校 2015(H27)年卒

宇津原 陸 岡田 暁 河崎 正洋 河村 直希 五代 友太郎 駒居 佑哉 近藤 尚人 近藤 龍ノ介
鈴木 啓太 高倉 弘陽 瀧華 隆裕 西 良祐 西尾 介社 西岡 皇人 西村 勇人 南 春輝 三村 公亮
村田 龍星 吉田 有宇哉 蓮尾 亮太

大学 2019(R1)年卒

男子 青木 祐也 宇津原 陸 木元 達也 近藤 尚人 才門 昂弘 鈴木 啓太 瀧華 隆裕 田尻 将之
中出 雄太 福重 聖也 福嶋 航大 南 春輝 三村 公亮 吉田 有宇哉

女子 藤原(宮丸)奈々 山根 万奈

甲南学園硬式庭球部創部100周年を迎えて

高校 駒居 佑哉

甲南学園テニス部、創部100周年おめでとうございます。記念すべき節目に、このような寄稿の機会をいただき、とても嬉しく思います。

私は中高6年間テニス部に所属し、学生生活の大半をテニス部の仲間と共に過ごしてきました。

私たちの代は皆が真面目で、そしてテニスが大好きだったと思います。練習が終わってもコートに残り、そのままテニス続けることがよくありました。名物の“入替戦”では、普段は親友である同期と真剣勝負を繰り広げたことも忘れられません。また打倒関学に向け厳しい走り込みや長時間の練習に耐え抜き、試合当日の会場では当時流行った倍返しタオルを高らかに掲げ、関学へ挑んだことも懐かしい思い出です。

私たちの代の持ち味は、西岡皇人キャプテン、そしてエース吉田有宇哉を筆頭に確立した、「チーム力」です。試合前は他校と異なり、コート内の選手だけでなく、コート外の選手もフェンス越しに手を繋いで、大きな円陣を組んでいたことを今でも鮮明に覚えています。それぞれ立場は違えど、1人1人がチームのために自分ができることは何かを考え、主体的に動いていった経験は社会に出てからも生きています。

私は社会人になった今でも週1回テニスを続けており、テニス部の同期と時々テニスをすることもあります。甲南高校を卒業してからおよそ8年半の月日が経ちましたが、甲南テニス部の絆の強さは今なお続いています。

このような素晴らしい学生生活を送ることができたのも、多くの先生方、OBのお力添えによるものです。この場をお借りして感謝申し

上げます。

これからも甲南テニス部で培った“甲南魂”の精神を紡いでいくと共に、甲南テニス部のますますのご発展をお祈り申し上げます。

March on to victory!

輝かしい甲南生活

高校・大学 鈴木 啓太

皆さま、創部100周年おめでとうございます。そして、このような文章を書かせていただき光栄に思います。

我々65回卒は、2015年に入部し2019年に卒業、今年で26歳になる年となりました。私たち65回卒は、男女17名の同期とともに入部し、4年間の厳しい練習に打ち込んできました。部員数は総勢50名を超える大所帯となり、多くの先輩の方々、後輩の方々、同期に囲まれていたことは輝かしい甲南生活に大きく寄与したと強く感じています。

私は、大学2年生から2年間主務を務めました。この2年間で非常に多くのOBOGの皆さまにお世話になりました。その際に大変お世話になった皆さまとはテニス部を卒業した今でもテニスや食事などで交流いただき、私の甲南生活は学生時代だけでなく、この先の人生においても長く続いていくと実感しております。

私たちの学年の印象的な出来事は、吉田キャプテンを筆頭に甲南の伝統の一つである「自主自律」の体制を取り入れたことです。トレーナーやコーチの役割を部員も担うようになりました。暗中模索の状況ではあったものの、最終的には部員同士の信頼関係によりこの体制を作り上げ、関西リーグ1部3位の好成績を残せたことは今



▲ 65回高校卒業アルバムより



▲ 高校同期で円陣

も忘れません。この経験は、社会人になった今でも私たちの基盤になっております。

最後になりますが、このような輝かしい甲南生活を送ることができたのも、創部より引き継がれてきた伝統や先輩方の功績があったからこそです。この場をお借りして心より感謝申し上げます。

紡いでいく歴史と誇り

大学 田尻 将之

皆様、甲南大学硬式庭球部創部100周年、誠におめでとうございます。

創部100周年という大きな節目である「100周年史」の1ページを書かせて頂けることを非常に嬉しく思います。

私は今年で社会人5年目を迎える年になりますが、今でも汗水垂らしながら必死にテニスコート走り待って大学時代の風景をふと思い出します。数え出せばキリが無くなる程の思い出が出てきますが、その中でも色褪せなく心に刻まれているのは、大学4年生最後のリーグ最終戦です。その日は関西学院大学とのリーグ3・4位を決める一戦であり、まさに一進一退の展開でした。そして、どこかの試合で後1勝すれば甲南大学の勝ちが決まるという場面で、全コートのパワーに4年生の部員が一斉に入り、コート内で選手と共に戦ったことです。通常、下級生が行う仕事を最上級生がやるというのはまさに異様な景色で相手選手も戸惑っていましたが、私はあの瞬間こそが「甲南らしさ」を発揮できた瞬間であったと感じております。

我々は他大学のようにプロのコーチやトレーナーはおらず、技術的な部分は劣っていたかもしれませんが、だた、その差を埋めるべく「組織で勝つ」ことにおいて部員全員が当事者意識を強く持ちこたわってきました。それは、同じ学年で戦っている同期や先輩後輩は勿論のこと、日々支えて頂いている多くのOBOGの皆様の想い、そして、これまでの甲南大学硬式庭球部が築き上げてきた歴史と誇り全てを背負って戦う事が我々の強みだと信じておりました。まさに、関西学院大学とのリーグ最終戦は我々甲南大学硬式庭球部が紡いできた歴史と誇りを懸けて、「組織で勝つ」という事を体現出来た一戦であったと思います。

是非、今の現役部員の皆様やこれから甲南大学硬式庭球部の一員になる未来の選手たちにも、歴代の先輩方が築き上げてきた歴史と誇りを次の100年まで紡いでいって欲しいなと願っています。

最後になりますが、このような歴史あ

る組織を築き上げてこられた、歴代の先輩方にこの場をお借りして心より感謝申し上げます。

感謝の4年間

大学 山根 万奈

甲南OBOGの皆様、創部100周年おめでとうございます。このような貴重な文章を書かせて頂けることを大変光栄に感じております。

我々65回卒は、男子14名、女子2名 計16名という非常に人数が多く、活気のある代でした。日々の厳しい練習にも同期全員で支え合い、乗り越えてきました。

この4年間は、多くの先輩方、後輩、同期の皆様と切磋琢磨しながら、成長することができたと感じております。また、在学中はOBOGの皆様には大変お世話になりました。

仕事の合間を縫って練習に参加頂いたり、猛暑の中、多くの方々試合の応援にきて下さりました。本当にありがとうございました。

甲南大学での4年間は自分自身を大きく成長することができ、様々な経験を積むことが出来ました。私は在学中、選手、マネージャー両方の立場を経験させて頂きました。

選手時代は、女子部の人数が少なく、男子部の皆様にご協力頂きながら練習ができていたことに非常に感謝しております。

大学3年生の頃から、マネージャーとして男子部、女子部両方をサポートさせて頂きました。選手からマネージャーになり、今まで沢山のサポートを受けながら日々の練習に励むことが出来るかを改めて実感することが出来ました。私の4年間の経験は、社会人になった今でも自信となっております。

最後になりますが、このような大学生活を送ることが出来たのも、OBOGの皆様が積み上げてきた功績があったからこそです。

この場をお借りして心より感謝申し上げます。



▲ 大学引退試合後の集合写真

高校 2016(H28)年卒

池崎 巴優 石本 大明 市岡 和樹 岡田 明久 尾形 健佑 角谷 智仁 木村 靖吾 竹山 世成 龍野 惣一郎
堤 一樹 花田 貴充 原 俊輔 東野 竜治 前村 大輔 森田 雄真 藪内 英人 漁 圭祐

大学 2020(R2)年卒

男子 岩村 優友 角谷 智仁 川上 悠護 木村 靖吾 下田代 拓巳 竹山 世成 藤永 大真 渡部 耕平

女子 大田 紗矢果 田中 依里奈 中谷 琴乃 山崎 菜月



▲ 高校引退時集合写真



▲ 66回高校卒業アルバムより

わたしの甲南人生

高校・大学 角谷 智仁

この度、甲南学園硬式庭球部が創部100周年を迎えられたこと、そして卒業生として100年史に携われることを心から嬉しく思います。

私は甲南中学からテニス部に所属し、高校、大学と約10年間所属しました。私たちの代では、中学からテニス部に所属していた数少ない部員になります。

私は漫画の「テニスの王子様」を見てテニスを始め、強豪校である甲南中学で団体戦に出て活躍したいという憧れを持ちテニス部に入部いたしました。そこから私の長い甲南人生が続きます。

中学では全中、高校では全国選抜、大学では関西リーグ戦と数多くの団体戦を経験することができ、部活動を通じてかけがえのないものを得ることができました。それは今でも遊んだり呑みに行ったり語り合える同期・仲間です。

チームとして一つの目標に向かって一致団結し、その中でお互いに切磋琢磨し合える環境があり、時には部内でぶつかり合う時もありました。しかし、そんな経験をしたからこそ今の私たちがあり、今ではお互いの結婚式に招待したり語り合ったりできる仲になったのだ

と確信しています。

そして、現役時代から大変お世話になった先輩方・後輩達とのご縁にも恵まれ、甲南での学生時代は最高の思い出として私の中で残っています。

最後になりますが、現役の皆様。

まずは、人生で一度しかない今の甲南生としての学生生活を存分に楽しんでください。そして、その中で1つでも多く甲南テニス部に入ってよかったと思えることを見つけてみてください。

微力ながら、今後もOBとして体育会硬式庭球部の発展に貢献できればと思っております。

甲南生活に感謝

高校・大学 木村 靖吾

まず初めに創部100年を甲南学園硬式庭球部として迎えられた事、嬉しく思います。また、伝統ある部に所属し、練習に励んだ学生生活を誇りに思います。

私たちの代は男女13名おりました。中には全国で活躍する選手もおりましたが、決してテニスが強い代ではありませんでした。しかし、全員が仲が良く、単純にテニスが好きな選手が多かったかと思えます。少しですが、私たちの代の思い出を書かせて頂きます。

1回生の頃は、皆で昼のコート整備や練習中の声出し、ボール拾い等、下級生としての役割に必死でした。また、初めてのリーグ戦では審判やボール拾いの求められるレベルが高校時代とは異なり、戸惑いもあり、先輩方に怒られる事もよくありました。ですが、部を代表してコートで戦っている先輩方、プレーヤーを応援する先輩方の姿を見て、それぞれが様々な形で多くの刺激を貰う事が出来ました。2回生になり、後輩ができ、個々のテニスに対する取組時間が増え、中には個人戦の本戦で活躍する選手が出てきました。

3回生になると、一つ先輩の吉田主将のもと、練習時間やメニューの見直し、部内のルールの徹底、朝ランを始める等様々な取組をして下さりました。テニスの結果もテニスプレーヤーとして必要かと思いますが、人間力という部分において、部員全員が一つの目標に対して真剣に行動し、考え続けられたと思います。あの改革があったからこそ、皆が社会に出てから、目標に対する行動過程の立て方、考え続けるという姿勢を持ち続けるという精神が役に立っております。

4回生になり、学生最後の一年という事で、思う存分、全員がや

れたかと思えます。良き伝統を継続し、同期が一体となりリーグ戦に向けて、活動出来ました。男子部の同志社大学とのリーグ最終戦、女子部の同志社大学との入替戦が終わる最後まで一年を通して必死でした。

最後になりますが、同期に限らず、先輩方や後輩の皆との日々はとても大切な思い出となっております。仲間という関係は社会人になっても変わりません。学生の皆様も日々の時間を大事にし、それぞれの代で立てた目標に対してみんなで精一杯取り組んで頂きたいと思えます。微力ではありますが、私たちOB・OGは学生の皆様に応援しております。頑張ってください。

伝統校の主将として

大学 藤永 大真

この度は甲南学園硬式庭球部の創立100周年を迎えられたことを心からお祝い申し上げます。

さて、私が甲南大学体育会硬式庭球部に在籍したのは平成28年から令和2年の4年間になります。思い返せば1年生から3年生までどう部活を耐えるかという思いでいっぱいだったことを思い出します。トレーニングをサボったり、練習に行かなかったりとたくさんご迷惑をおかけしたことを今では反省しております。

そんな私ですが、4年生ではキャプテンを務めさせていただきました。ここからは、私がキャプテンを務めさせて頂いた最後の年について綴ることにします。

マスクをつけて生活をするのが当たり前となった今、私たちの代は、コロナウイルスが蔓延する前に、リーグを迎えることのできた最後の代でした。リーグ戦だけでなく全ての試合を、何一つ制限なく試合を行えたことは大変幸運だったと思います。またキャプテンをしたことで一般の部員とは違う仕事をさせて頂きました。OBの方々と多く関わりを持つことで、様々な場面でご支援を頂いていること知り、感謝の思いを持ち練習に励むことができました。

1番大きかったのは肩書きの重さだったと思います。キャプテンとはなんなのか、どういった姿なのか考えさせられる毎日でした。正直答えを出せずに終わった気がします。今では「自分らしく」が1番よかったのではないかと思います。とにかく濃い1年間で今後の自分の在り方を考える良い機会をもらえました。ありがとうございました。

末筆ながら、今後ともOBとして少しでも甲南大学体育会硬式庭球部の更なる発展に貢献できたらと思っています。

成長を感じた学生生活

大学 中谷 琴乃

甲南学園硬式庭球部が創部100年を迎えられた事、大変嬉しく思います。創部100年を迎えることができたのは、多数の関係者様の

お力添えの結果だと思います。その歴史ある庭球部に所属できた事、大変誇りに思います。

私たちの学年は男女合わせて13名で入部しました。13名中4名が女子部員で、歴代の先輩方を見ても、女子同期が多い学年でした。

私個人と致しまして、2回生の後半から女子主将を務めさせて頂きました。2年間という長いようで短い期間を主将という立場で組織に所属した経験は、社会人になった今でも、自らの経験として活かさせて頂いております。

4年生、最後のリーグ戦では色々な想いを持って戦った試合であると思っております。残念ながら2部降格という結果にはなりませんが、同期全員で先輩として後輩に何かを繋ぐことができたと思っております。

現役生へ、嫌な事や厳しい事も山のようにあると思いますが、現役の頃には気づかない事も、引退・卒業した時に経験としてかえってくると思えます。大学生活は人生の4年間しかないので、精一杯毎日を楽しんでください。

最後になりましたが、同期13名で過ごした4年間は一生の宝物となっております。厳しいお言葉を頂いたり、時には優しさを頂き、共に甲南大学体育会硬式庭球部として戦った、監督はじめ、OB・OG・先輩の方々には大変感謝しております。微力ではありますが、私たち同期13名は現役学生の皆様に応援しております。



▲ 大学卒業式



▲ 66回大学卒業アルバムより

高校 2017(H29)年卒

角谷 克仁 川端 人誌 西村 荘司 望月 赳志 林 克洋 藪 馨

大学 2021(R3)年卒

男子 岡崎 大倭 角野 大地 佐々木 康介 西本 光一 東川 将大

女子 上野 桃子



▲ 67回高校卒業アルバムより

思い切って入学した甲南大学

大学 岡崎 大倭

この度は創部100周年おめでとうございます。歴史ある甲南大学体育会硬式庭球部の一員になれたことを誇りに思います。

元々私は九州の大学に進学する予定でした。しかし、せっかく大学でもテニスを続けるならもっと厳しい環境に身を置いて挑戦してみたいという気持ちが強くなりました。そこで高校3年生の時に、お声がけいただいた甲南大学の練習に参加し、レベルの高さや練習環境、雰囲気の良さに感動し、入学を決意しました。甲南大学での日々の練習や、試合を通して得たすべての経験は、今でも私にとってかけがえのない財産です。またこの経験は、甲南大学で出会えた偉大なる先輩OBの皆様のサポート、頼りになる同期、そしてかわいい後輩の存在があってこそだと思います。皆様のおかげで、広島県から来た田舎者も、テニスの技術面はもちろん、人間性も大きく成長出来たと勝手に思っております。また、今でも週末にOB同士でテニスをしたり、ご飯に行ったりと強い繋がりが有ること、本当に幸いです。

現役生の皆様へ、私達が大学4年間で成し遂げることが出来なかった、ましてや最後の年はコロナウイルスの影響で試合すら開催されなかった関西大学対抗テニスリーグ戦で、『王座出場』を目指

して日々頑張ってください。是非ともチャンスを掴んで充実した4年間を送ってください。OB一同心から全力応援しております！

戻れるなら戻りたい大学4年間

大学 佐々木 康介

この度は、甲南学園テニス部創部100周年おめでとうございます。またこのような貴重な機会に文章を書かせていただけること、大変ありがたく思います。

私が甲南大学体育会硬式庭球部で過ごした4年間の語る上で、同期の存在は欠かすことができません。大学1回生の頃、当時から頭角を現していた岡崎、角野、西本、東川がチームの主力として活躍していた一方で、私は同じテニスコートを球拾いの主力として走り回っておりました。非常に悔しかったことを今でも覚えています。しかしながら、こんなにも身近で、気を遣う必要もない強い選手が、同期に4人もいてくれたことが、私の選手としての自覚を風化させず、実力を高めてくれたのだと思います。また最後まで私たちを支えてくれた上野マネージャーへの感謝は尽きません。これは私含め同期5人の総意で間違いございません。

私は大学3年生から男子主務を務めさせていただきましたが、誠に勝手ながら『歴代最強の主務兼プレイヤー』を目指しておりました。主務として特に関わりが多かった常任委員の皆様、主務業を疎かにして練習や試合に打ち込んだこと、今更ですがお詫び申し上げます。おかげさまで全日本学生大会には出場できました。

現役生の皆様へ。夏場のボーラーは仕事ではありません、高強度トレーニングです。という冗談はさておき、いざ試合で切羽詰まった時に信じられるのは、科学や理論ではなく努力した記憶だと私は思っています。苦しい時は岡本ランを思い出し、足が撃つたら六アイ2周を思い出してください。きっともう一踏ん張りできるはずですよ。

最後になりますが、自分の仕事に追われる日々の中で、甲南学園テニス部OB・OGの皆様の偉大さを痛感しています。私も少しずつではありますが何らかの形で恩返しをしていく所存です。皆様の更なるご活躍を、遠い香川の地から祈っております。

同期で切磋琢磨しあった4年間

大学 東川 将大

この度は創部100周年おめでとうございます。歴史ある甲南大学体育会硬式庭球部の一員になれたことを誇りに思います。

在学中は当たり前であった毎日コートに行けば、部員がいて同じ目標に向かって切磋琢磨していた日々がどれほど恵まれていたかを卒業後に強く感じる時があります。大学4年間は振り返れば短かったと感じますが、自らのテニス競技生活及び1年生時の仕事や最終学年の組織運営など、日々多くの成長の機会に恵まれていたことを社会人になり、実感します。

特に今は全国各地で離れ離れになっておりますが、4年間支え合い、切磋琢磨してきた同期の存在は自分を支える大切な存在であり、それは卒業後も変わりません。是非現在活動をされている現役生の皆さまは共に支え合い、切磋琢磨しながら同じ目標を追う仲間がいることを当たり前と思わず、活動していただきたいです。

私たち67回生はコロナの影響で最終学年のリーグ戦が行われなかったため、目標としていた王座出場を果たすことができませんでした。4年間の目標に挑戦する機会ももらえなかったことは

非常に悔しい経験でしたが、一方で最終的に部活に在籍していた5名は全員が在学中にインカレを経験しており、甲南大学で努力を行えば成果に繋がるといった一つの姿を後輩に受け継ぐことが出来たのではないかと考えております。

現役の皆さまも現在整えられている練習環境や指導者の存在を十分に活用いただき、私たちの代が成し遂げることができなかった王座出場を果たしていただきたいと考えております。自分たちが成し遂げられなかった目標を達成する後輩をいつか同期達とコートサイドで並んでみられる日が来ることを願い、今後は歴史ある甲南大学硬式庭球部のOBとして現役の皆さまを支えていけたらと思います。



▲ 生き残りの6人



▲ 引退式

高校 2018(H30)年卒

石川 雅也 岡本 良太 梶原 洋 加藤 知樹 門山 廉 櫻井 海史 高尾 尚樹 四宮 大地 近田 賢祐
中一茶 徳田 和也 長井 理 花田 輝充 橋本 雄太 八塚 和樹

大学 2022(R4)年卒

男子 有泉 智寛 池田 光 石川 雅也 高尾 尚樹 中村 雄介 野村 駿作 八塚 和樹 松浦 優成
女子 小嶋 真央 濱 未来 村上 紗里奈



▲ 2018年卒業式

全中二冠の世代

高校 岡本 良太

私はあの夏の出来事を一生忘れることはないと思います。

愛媛で過ごした1週間はあまりにも長く、気の張り詰めた時間が流れていました。

当時の目標は躊躇いなく全国制覇。伝統校として、全中の単独優勝回数に向けた生活を送っていました。

目の前の重圧からスランプや怪我もありましたが、横を見れば必死に努力する仲間の姿に全員が自らを奮い立たせていたのではないかと思います。最高のチームを目指し、OBの方やトレーナーの方と常に連絡をとっていました。またチームの全員が、練習毎に小さな目標を掲げ、試行錯誤し、切磋琢磨していました。

2014年夏、愛媛で全国大会が開幕。私たちは毎試合が決勝戦だと思い戦いました。実力差がある相手にも必死に食らいつきました。次第に関西のライバルチームからも応援が駆けつけてくれるほどになりました。

長いトーナメントはようやく終わりを迎え、結果は優勝。

改めて、私たちはいろんな方々に支えられて過ごしていたんだと当時に振り返り実感しています。

先生方をはじめ、コーチやOBの先輩方。ライバルたちの存在や家族。そして何よりチームの仲間。関わっていただいた全ての人に感謝しています。

私は努力が報われるということは、どんな無理難題にも最後まで付き合ってくれる仲間がいることではないかと思います。優勝したあの日、感じた胸のときめきを生涯大事にし、探し続けたいと思います。

余談ですが、春と合わせて私たちは史上初の全国二冠を成し遂げました。

甲南高校での青春

高校・大学 高尾 尚樹

創部100周年、心からお祝い申し上げます。

甲南高校テニス部でテニスに没頭した、かけがえのない3年間は青春の1ページに色濃く残っています。また、最高の青春時代を過ごせたことができたのは、最も近くで私たちを応援してくださった四宮さんを始めOBの皆様の多大なるご支援があったからです。甲南高校テニス部2018年度卒業生を代表して感謝申し上げます。

私たちは、特に仲間意識が強く、個性的な学年でした。団体戦ではよく他校から注意が来る程の、勢いのある応援に何度も助けられました。中学最後の全中の団体戦では部員全員が愛媛県に応援に来てくれた場面で優勝し、5度目の史上最多優勝ができ最高の経験ができました。

高校でのテニスのレベルの変化やトレーニングの厳しさに弱音を吐くことがありましたが、テニスの上手い下手関係なく、全員で支え合う事で高い意識で努力することができました。打倒相生学院高校を目標に掲げて厳しい練習やトレーニングに励みました。宿敵の相生学院高校との対戦では、中々勝ち星を挙げられず苦渋を味わいましたが、団体戦でのダブルス1での試合でチーム全員の力で勝つことができました。甲南中高での部活動を通じ、テニスの楽しさと苦しさの両方を最大限味わうことができました。

現役生にはテニスする事が時にはしんどく辛い事があると思いますが、最後の学生テニスを悔い無く終わるように頑張って貰いたいと思います。

最後になりましたが改めて創部100周年おめでとうございます。これからも現役生のご活躍を願っております。



▲ 大学引退式(同期)

コロナ禍を乗り越えてのリーグ戦

大学 池田 光

創部100周年、心からお祝い申し上げます。甲南大学体育会硬式庭球部で素晴らしい青春時代を過ごせたことができたのは、OBの皆様の多大なるご支援があったからです。男子部員を代表して感謝申し上げます。

私たち68回生は、意識の面で刺激しあえる学年でした。1回生の頃は同期内の実力差が大きかったですが、普段の練習やリーグ戦においてそれぞれができることに尽力しました。苦しい期間ではありましたが、皆で刺激し合う大切さを学ぶことができました。この経験が活きたのは最高学年で迎えたリーグ戦でした。コロナの影響で1年ぶりの開催となり、練習もコロナの影響で様々な制限が設けられた下でのものでした。

しかしチームとして王座出場の目標を掲げ、オンラインでのトレーニングやミーティング、また4回生がレギュラー、イレギュラーそれぞれの先頭で下級生を引っ張り、部員全員が高い意識を維持したままリーグ戦を迎えました。リーグ戦はコロナの状況を鑑み、応援や指導者の人数制限に加え、異例のトーナメント方式という形での開催となりました。結果目標であった王座出場は叶いませんでしたが、関西3位で後輩にバトンを繋ぐことができました。今後も各人がチーム甲南の一員として、現役生のサポートをしていきたいと考えています。

最後になりましたが改めて創部100周年おめでとうございます。これからも現役生のご活躍を男子部員一同願っております。

主将としての成長

大学 濱 未来

この度は、創部100周年を迎え、誠におめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

甲南大学体育会硬式庭球部、私の4年間の大学生活は全てこの場所にあります。

希望を持って入学した、1回生の1年間は想像していた以上に厳しい現実が待っていました。ハードな練習メニューやトレーニング、1回生がやらなくてはいけない部活内の仕事。なにより辛かったのが、その練習を乗り越えても関西学生予選落ちで本戦の舞台へ進めなかったことです。辞めたいと考えたことも1度ではありませんでした。

しかし、同期に恵まれたこともあり前向きに乗り越えることができました。

そして、1期上の先輩が退部されたことで、2回生の秋に主将に任命されました。

当時は、本戦に上がっていない私がチームを引っ張っているの



▲ いつも仲よし同期 (左:小嶋 右:濱)

かと心配もしましたが、なんでも相談でき、ダブルスパートナーでもある小嶋がいたことで不思議と自信が湧いてきました。私が目指したのは甲南としての厳しさは残しつつ、オンオフの切り替えをはっきりとした良い意味で壁がないチームです。段々とそれが形になっていき、主将になるまで本戦に上がっていなかった私も、今まで結果が振るわなかった後輩も、インカレへ出場することができました。特に私が4回生の時にはダブルス4組がインカレへ出場し、チームとして大きな結果を残すことができました。

しかし、主将を務めた2年間、コロナウイルスの影響により関西学生リーグ戦が開催されず、1番の目標であった1部昇格は叶えることができませんでした。悔いは残りますが、必ず後輩たちが1部昇格をしてくれると信じています。

4年間素敵な思い出をありがとうございました。

最後に、今後の甲南大学体育会硬式庭球部のご活躍をお祈りしております。



▲ 2020年全国日本学生テニス選手権大会

高校 2019(H31)年卒

岡村 駿史 沖津 尊弘 下岡 謙斗 高倉 壮真 高原 佑悟 棚橋 勇斗 辻之内 柊 鉄本 啓太 古川 聡一郎
宮堺 康生 宮田 真之介 森口 悟志 安留 直喜

大学 2023(R5)年卒

男子 秋月 真緒 柴倉 一太 棚橋 勇斗 藤本 拓
女子 岡橋 杏奈 松野 朋実 三宅 彩乃 望月 美香

甲南テニス部の7年間

高校・大学 棚橋 勇斗

この度は、甲南学園硬式庭球部が創部100周年を迎えられたことを心よりお祝い申し上げます。この伝統ある甲南学園硬式庭球部の一員として100周年を迎えられたこと、大変嬉しく思います。

私は高校から甲南に入学し、高校、大学と約7年間甲南のテニス部として所属しました。高校では初めて部活というものを経験し、キャプテンという貴重な経験もさせていただきました。そこでは集団として活動することの難しさや楽しさを学び、人間として成長させていただいたかけがえのない時間だったと感じています。

私は1年生の頃から団体戦に出させていただけにいたしましたが、なかなか勝つことができず先輩や同期に迷惑をかけ、自分の情けなさや申し訳なさに落ち込んでいた時もありました。そんな時に支えてくれた先輩や同期には今でもとても感謝しています。

また、キャプテンになった頃は1つ下の後輩にとっても手を焼き、練習はサボるはまともに練習しないはとストレスと疲労がマックスでした。その時は大変でしたが、今となっては自分の成長につながった貴重な経験であり楽しい思い出です。

甲南高校の私達はよく言えば真面目、悪く言えば地味、戦績も出せず特徴のない学年でした。しかしテニスへの気持ちや意欲は人一倍強く、テニスを誰よりも楽しんでいて感じています。そのため、自分が試合に出ていなかったとしても仲間を必死に応援できるそんな素晴らしい同期でした。そんな同期に囲まれてテニスのできた私

はとても幸せ者だと感じます。

高校から大学の部活に入ったのは私だけではありましたが、大学でも心の底から信用できる同期に恵まれ、甲南での学生生活は私の中で最高の思い出となり一生忘れることのない宝物です。

最後になりますが、現役の皆様。貴重な学生生活をテニスに注ぎ、嫌になる程テニスに打ち込むことができる環境があることに感謝し、全力で学生生活を充実したものにしてください。微力ながら、今後もOBとして体育会硬式庭球部の発展に貢献できればと思っております。改めて、この度は創部100周年誠にありがとうございます。

成長できた4年間

大学 藤本 拓

この度は、甲南学園硬式庭球部が創部100周年を迎えられたことを心よりお祝い申し上げます。

私が甲南庭球部で過ごした日々を振り返ると、人間的によく成長できたなと自負しております。呼吸するようにご迷惑を掛けていた1年目、コロナで何も出来なかった2年目、おそらく僕が出場していたら王座に行っていた3年目(コロナで藤本欠場)、気づいたら主将になっていた4年目、振り返ると苦しく辛い経験が大半でした。では、「なぜ最後まで辞めなかったのか」というと、苦しい辛い経験を知っ



▲ 同期

ている分、報われた瞬間があったこと、当時はしんどかった事も数年後にはお酒を飲みながら笑い話に出来る時間があること、主将を通じて沢山のバックグラウンドを持った方達と繋がりを持ったこと、このような経験をしたからこそ、ここまで不器用ながらも最後まで走り抜くことができたと思います。

これから社会に出ていく中で幾度なく、「これぐらいいいか」とたどり着いた場所をゴールにしたとき、目の前が真っ暗で何も見えなくなるときが来るとは思いますが、超えないと味わうことが出来ない達成感や苦しみ、そして成長があることを沢山の出会いとテニスが教えてくれました。

また、テニスを続けていく中で自分だけの目標だけではなく、頑張ることで喜んでくれる人がある事、チームで必死に戦う中で、「誰かのために頑張ること」の素晴らしさや心から生まれてくる最大限の原動力に気づくことが出来ました。

4歳でテニスに出会い、ほぼ全ての時間を費やし、本当に恵まれた環境の中で沢山の貴重な体験をさせて頂きました。そして、その中で「何を得たか?」と聞かれるとテニスとしての強さとかではなく、「人との出会い」と血と汗と涙を流してきた割には目では見えなくて、抽象的でふわふわとしています。言葉にしたなら「人としての成長」と一般的なことかもしれません。現役生の皆さんも、お金が出ないにも関わらず、プライベートを割いてまで、テニスから就活までご指導してくれるOB、OGの方々の有難さに気づいてほしいと思います。僕は気づくの4年かかりました。

最後になりましたが、微力ながら今後ともOBとして体育会硬式庭球部の発展に貢献できればと思っております。現役生の活躍、楽しみにしています。



▲ 女子部員全員で

庭球部で過ごした時間

大学 松野 朋実

この度は、甲南学園硬式庭球部が創部100周年を迎えられたことを、心からお祝い申し上げます。このような伝統と歴史ある庭球部に所属し、新たな代にバトンを継承できたことを、大変誇りに感じております。

私は高校3年生の時に、大学生の団体戦を知るため、リーグ戦を見に行きました。そこで目にしたのは、男女関係なく選手を応援し、チーム一丸となって試合に挑む甲南大学の先輩方の姿でした。その姿に強く惹かれた私は、憧れと希望をもって甲南大学に入学しました。

ですが、私達の代は1年生の終わり頃からコロナウイルスの影響を受け、2年生、3年生とリーグ戦のできない時間を過ごしました。特に3年生の時は、リーグ戦再開の兆しが見え始め、大好きな先輩方に笑顔で引退してもらおう為にも全力で部活と向き合いました。で

すが1部校以外は中止となり、やるせない気持ちを抱えたまま主将の座を継ぐことになりました。

そこから、気持ちの落ちた部員達を鼓舞しながら、1年後のリーグ戦に向け新たな代が始まりました。結果としては、目標であった一部昇格を果たすことが出来ず、入れ替え戦で負けてしまいましたが、同期と支え合い、ぶつかり合いながら過ごした時間は、他では経験することが出来なかった時間だと感じております。高校3年生の時に憧れたチームになれたのかはわかりませんが、私の大学生活の全てで、庭球部で過ごした時間は人生の宝物です。

最後になりましたが、甲南大学体育会硬式庭球部に関わってくださった全ての方々には、大変感謝しております。甲南大学体育会硬式庭球部の今後の更なるご活躍を、お祈りしております。



▲ 男子部員全員で

2023年学生部員



▲ 大学生部員・監督・コーチ



▲ 高校生部員



▲ 中学生部員

寄稿文

CONTRIBUTION

特別寄稿



洗練の甲南ブランド

プロテニスプレーヤー

前 日本テニス協会専務理事 福井 烈

甲南学園硬式庭球部創部100周年おめでとうございます。

私は「甲南」という響きにえも言われぬ反応をしてしまいます。

団体戦での最初の対戦はインターハイで、私が柳川商業高校（現柳川高校）1年生の時でした。その後も2年、3年でのインターハイ、中央大学時代の大学王座等、数多くの対戦がありました。

個人戦でも甲南の選手との戦いも数多く、ライバルとして切磋琢磨して来た思い出があります。

しかし、今でも「甲南」という響きには、他の学校とは違うイメージを抱いてしまうのです。

私は小学5年生の時に兄の影響でテニスを始め、今日に至るまでテニスと関わり、テニスは私の人格形成の基盤となったと言っても過言ではありません。その中でも柳川時代は唯一無二の経験でもあり、私のテニス人としての原点でもあると今では思っています。

どんな毎日を送っていたかは、現在ではコンプライアンス上問題となるやもしれない伝説的な逸話の数々で、にわかには信じていただけないような厳しい練習の毎日でした。ひたむきに、泥臭く、凡事徹底、テニスのこと以外を考えるのは悪である！との思いでひたすら日々テニスに明け暮れていました。

当時の私はまるで修行僧のようだったかもしれません。

そんな時、甲南の選手と対戦し、何か違うなあというえも言われぬ感情が湧いてきました。同じ高校生で硬式テニス部で・・・何かあか抜けていて、おしゃれで、涼しげで・・・

勝手な思い込みかもしれませんが、私が思っていたテニスとの向き合い方が全く違う事に衝撃を受けました。だからといって私には真似のできない事であり、相変わらず泥臭くテニスに向き合う毎日でしたがそこから「甲南」という響きには憧憬の念と対抗心の両方を掻き立てられるようになりました。

そして、「甲南」という響きに負けまいといつも以上の負けん気で対戦していました。

私自身、テニス以外の競技の方達と交流を持つ機会に恵まれ、様々な強化の取り組みやアイデアを吸収することができました。その中でいかに継続することが大切かを痛感しました。歴史は積み重ねによってしか作られません。甲南の硬式庭球部が100年もの歴史を刻まれたという事はそれだけで大きな財産であると思います。その基盤があってこそその革新が今後の発展に繋がると考えます。

甲南出身の歴代日本代表選手の先輩方の醸し出す雰囲気は特別で、今でも私には真似できない憧れです。その特別なカラーを継承しつつ世界にも通用する新しいスーパースター誕生を期待しています。

あか抜けていて、おしゃれで、涼しげで、そしてめっぽう強いテニス選手！

世界中が注目する事間違いないです。本当にワクワクします。

「甲南」ブランドのもと、そんなワクワクする選手の誕生を期待しています。

ライバル校
甲南を語る関西学院庭球倶楽部前会長
山口章

悔し涙

甲南学園硬式庭球部が創部100周年を迎えられたこと誠におめでとうございます。

貴校初め関西学生リーグの一部校が中心となり関西学生テニス界をリードされてきたことは過言ではありません。特に貴校が関西リーグに初優勝された昭和38年(1963年)頃からの約20年間は、貴校と関学の両校でリーグ制覇を競ってきました。個人戦・団体戦共にライバル意識を持ち、切磋琢磨して争ってきました。

特に昭和42年(1967年)の関西リーグでの戦いは両校の歴史で忘れられない試合ではなかったでしょうか。関学のレギュラーは前年度までに全日本選手権(オールジャパン)に出場した選手が5名もあり、絶対的に有利な選手揃えて関西リーグは勿論のこと全日本大学対抗テニス王座の奪還を目指しておりました。リーグ戦の最終日に芦屋国際ローンテニスで、貴校と対戦しました。当時のリーグ戦は単複共に5セットマッチであったので、初日にダブル3試合翌日シングルス6試合を行う日程でした。

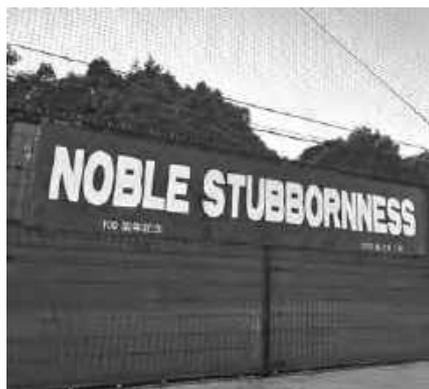
初日ダブルスは接戦の試合となり、果敢に攻めてくる貴校の勢いに押され2-0(No.1は日没順延)で貴校の優勢で終わりました。翌日ダブルスNo.1の試合が継続されて1勝を挙げた関学はシングルスで十分巻き返し出来ると思っておりました。ところが、前日の勢いそのままの貴校に攻められ、シングルスNo.6-4の試合を落とし最終的には5-3(1引き分け)で貴校が優勝する結果となりました。試合終了後のミーティングで、4年生全員が下級生の前で「すまん」と言われて頭を下げられ、頭上の水銀灯の冷たい光に照らされた姿が鮮明に残っています。

顧みれば関学は圧倒的な戦力を持って関西リーグは簡単に制覇できると過信し、油断という大敵を忘れていたように思います。逆に貴校の選手は実力差をものともせず果敢に攻めることに徹底された結果だったと思います。関学庭球部の100年史に寄稿して頂いた日本テニス協会副会長の渡辺康二氏が「関学のモットーである高貴ある粘り強さに対抗するには理性なき攻撃の継続しかないと思った」と述べられていますが、正しくあの時のリーグ戦であったと感じました。

最後になりましたが、甲南学園硬式庭球部がますます発展され、両校の現役が良きライバルとして交友されることをお祈りいたします。



▲ 昭和45年4月 関西リーグ優勝(於:香櫨園テニスクラブ)
後列 左から 荻原、中井、柏谷、玉田、松尾
前列 左から 山口、宮川、松浦



▲ 脈々と受け継がれるNoble Stubbornness

原動力

私は、甲南大学の存在があったからこそ、自分自身成長することができたと自負している。毎年4月下旬から「関西学生春季テニストーナメント」の予選が始まるが、1回生の時、単複共に予選敗退。とても不甲斐なく、悔しい思いをしながら、朝テニスセンターへ本選の応援（仕事）をしに行ったときに、私は衝撃を受けたことを今でも覚えている。自分と同学年の選手たちが雄叫びを上げながら、躍動していたことだ。その中でも、特に印象的だったのが吉田有宇哉選手だ。当時、近畿大学のレギュラーメンバーであった高橋克典選手とお互いに一歩も引かない壮絶な試合を繰り広げており、見事に7-6（5）、2-6、6-2で勝利を収めていた。当時、私は大きな実力差を見せつけられ、同学年と思うことができなく、“自分にも同じことができるのか？”という大きなプレッシャーが襲ってきたと同時に、早く練習をして“追い越したい”という思いが強くなり、いつの間にかライバル心を抱くようになっていった。その後、「関西チャレンジテニストーナメント」の決勝戦で吉田選手・福嶋選手ペアと対決する事が決まった時は、ライバル（勝手に思っただけ）と試合ができるためとても嬉しかった。少しは善戦できるかなと思っていたが、2人のコンビネーション・タッチセンス・ポーズなどのクオリティが高く、何もさせてもらう事が出来ず、2-6、3-6で惨敗を喫した。まだ全然実力が追いついていない事に気付かされ、更に練習に励んだ。

私の中で、間違いなく、この2つの経験が、大学4年間の“原動力”の一つになっており、厳しい練習にもモチベーション高くやり遂げることができたと感じている。

甲南大学との「関西大学対抗リーグ戦」も私の記憶の中に鮮明に残っている。特にリーグ戦の時の甲南大学は、他大学には無い独特な雰囲気を感じており、対戦する時はいつもプレッシャーを与えられている感覚に陥っていた。リーグメンバーは強者揃い、サポートメンバーの応援にも一体感があり、ポイントを取られると体力だけではなく、精神的にも追いつめられていた。

初めてのリーグ戦で対戦したのも、吉田選手だった。とにかくミスが少なくラリー戦に持ち込まれると劣勢に立たされた。できるだけ、コンパクトな試合展開をしようと意識をしていたが、吉田選手はそんな簡単には勝たせてくれなかった。どれだけ攻撃しても、粘り強く返球され、振り出しに戻されるため、本当にメンタルを維持することが困難だった。他にも、同期の福嶋選手、後輩の藤永選手や東川選手、岡崎選手などとも対戦したことがあったが、いつも接戦になり、苦しい試合展開になっていた。日々の血の滲むような努力があったからだと感じる。

現在、私は学生テニスを引退して会社員として仕事をしており、休日に関西学生の試合を見に行くのが楽しみの一つである。これからも関西学生OBとして、甲南大学と同志社大学の熱い試合が見られることを“原動力”として、会社員生活を頑張っていきたい。

最後になりますが、今後の甲南大学の益々の御発展と御活躍を陰ながら応援しております。



ありがとう甲南大学！

私が学生時代の甲南は関西の王者、王座にも出場、同学年の吉田昇生、吉田一宏、一つ下が江見、仁木、白石、その下が中西、三村、弘世（歴代最高の学連委員長）、市川（最強の主務）とオール甲南を主力に他にも数名おられましたが、他大学に比べ部員数は少なくまさに少数精鋭の軍団でした。1部は甲南、関学、近大、神戸で、本学は同志社、阪大、京大とともに2部でした（上記また以降も敬称略お許しください）。

そんな中で甲南と本学が少し近づききっかけとなったのは、昇生との出会いです。大阪の府立高校からテニスを始めた私にとっては、昇生は雲の上の存在、高校のころテニスマガジンで知ったくらいで大学入学後も話したこともなく、彼は一年からレギュラー、インカレ。私は一年のリーグ戦はボーラーでした。それが2年の冬の学生インドアが神戸体育館で開催された時、どちらからともなく終わってから一杯飲む話で意気投合し、その勢いでそのまま昇生の実家に泊めてもらいました。これをきっかけに甲南や神戸クラブで練習したり、そのあと飲みに行ってはまたまた泊めてもらったりとご両親にも大変お世話になりました。

そうこうしているうちに我々も3回生で幹部交代、甲南は昇生、本学は小生が主将となりました。甲南のリーグ優勝は当然、王座優勝が目標、本学は1部昇格が目標でしたが、幸い公立高校出身のインターハイ経験が私も含め5人おり絶好のチャンスでしたので、昇生にリーグ戦前に対抗戦のお願いをしましたところ、快く引き受けてもらいました。フルメンバーでは本学がかなうはずもなく、二人で考えた結果ダブルスはベストメンバー、シングルスは前年の全日本経験者4人抜き（甲南は昇生、一宏、中西、本学は小生）でやろうと決めました。甲南も本学も合宿中で、本番同様香櫨園のアンツーカーを貸し切り、ベストオブ5セットで朝9時からスタートしました。結果はシングルスNo. 5が2セットオールとなったところでコートの貸し切り時間になり、4対4の引き分け（甲南からD2-1、S2-3）となりました（甲南のNo. 5は当時2回生の三村会長です）。

関大にとっては5セットマッチの経験と甲南からポイントを挙げたことが大きな自信につながり、逆に甲南は少し緊張感を持ったのではと感じました。リーグ戦の結果、勿論甲南は優勝、本学も2部では圧勝、入れ替え戦は5-0で打ち切り無事に1部昇格できました。本当に甲南との対抗戦のおかげと今も感謝しています。余談ですがリーグの次の春関のベスト4が上記対抗戦のシングルスを抜けた4人でした（優勝は中西）。

甲南と本学はお互いに切磋琢磨して頑張ろうと話し、春関と夏関の前には合同練習を行いました。当時の本戦は香櫨園でのハードコート、予選は各大学のコートだったため、両校のインカレ選手は関西地域ではいち早くハードコートに切り替えた甲南で、予選選手は関大のクレーコートで合同練習を行いました。幸い対抗戦で少し知り合いになれたこともあり充実した練習で、会場でもお互いを応援するいい雰囲気でした。

その後も昇生にはお世話になり、インカレで本学の一つ下の下村がダブルスを組んでもらい、最後の夏関では私とのペアでしたが足を引っ張りベスト4で終わったのは申し訳なく思います（中西が海外遠征で不在のため、本学のために協力いただきました）。

卒業後も両校数名が社会人プレイヤーとしてオールジャパンや大毎、関東・関西選手権、毎ト一、国体等に出場し、遠征先では現役時代の話に花が咲きました。数年前ですが有明テニスの森公園で行われた全日本大学対抗王座決定試合に、甲南・関大両校が関西代表で参加した折には冒頭のメンバー数名でランチ、毎年この2校でやられたらな、と話したものです。両校とも現役の頑張りに期待したいと思います。

オール甲南のエリート軍団、対して本学は寄せ集めの雑草集団ではありますが、今から思えば両校とも厳しき中にも「自由闊達」な雰囲気、また貴学のスローガンである「個性を尊重し自主自律の精神を養うこと」を共有していたように思います。

末筆ながらオール甲南テニス部の益々のご活躍をお祈り申し上げます。

100周年誠におめでとうございました。



ん?ライバル校甲南を語る?

甲南学園硬式庭球部創部100周年、心よりお喜び申し上げます。

1991年、当時私が所属していた近畿大学硬式庭球部は当時甲南大学硬式庭球部を正直ライバルとは思っていませんでした。当時の近大テニス部は名門の柳川、清風やその他全国強豪校からスポーツ推薦で集められた、超のつく強者揃いで、レギュラーは全員ほぼプロ集団です。もちろん目標は王座優勝の全国制覇。

一方甲南テニス部といえば、ほぼ全員甲南中高テニス部出身。スポーツ推薦は誰もいなかったと聞いています。

王座に出るには関西一部リーグ(当時は同志社、近畿大学、甲南大学、京都産業大学)の中で二位以上に入る必要があり甲南大学との対戦がありました。

実力差は歴然です。しかし、結果は近大が勝利したもののギリギリの大苦戦!これが団体戦なんだと言う本当の本物を見せつけられ、私の記憶に今でも強く残っています。一体何が予想と違ったのか。文字では伝えられない、あの場で実際に経験した者にしかわからない異様な気迫を感じました。我々は淡々と自分の持っている個々の実力を発揮していたのに対し、甲南はそれぞれのプレーヤーが甲南大学庭球部のために魂を燃やしている。異様な雰囲気でした。甲南愛とでも言うのでしょうか、我々は大学テニス部であってプロではない。試合会場にはなぜか詰襟の学ランで登場し、試合が終わったらまた学ランに着替えて去っていく。リーグ戦で飛び交う汚いヤジにもグッと奥歯を噛み締め、仲間のために、持っている実力以上のものを出してくる姿は、我々が個人の技術や戦績を上げるために必死になりすぎ、忘れかけていた大切な物を思い出させてくれました。

なぜそこまでして母校の為に必死に戦えるのか?私は甲南大学出身では無いのでわかりませんが、近畿大学との決定的な違いはこの伝統でしょう。縦のつながりが長く、そして強く繋がっている。まさにこの「甲南学園硬式庭球部創部100周年記念誌」を作るという行為が我々近大には今の所、到底辿り着けない領域です。現役の時から甲南にはいつもOBの存在がちらついていました。そして卒業してから私が出会う甲南OBもいつも現役のことを詳しく知っている。近畿大学硬式庭球部はまだ創部67周年ですが、この期間の違いだけでは到底済まされない圧倒的な伝統力の違いを感じて羨ましく思います。試合には勝ちましたが、スポーツマンシップ、気迫、チーム力、学校愛、伝統力全て足元にも及ばず。いつか近畿大学も伝統校として甲南大学のライバルと呼んで頂ける日が来るよう夢見ております。

事実私は、甲南OBの大西太郎さんに憧れ、同じ会社に就職し大変お世話になりました。一時期家に居候までさせて頂き、甲南スピリットを少しだけ分けて頂いたような気がしています。

写真は関西学生選抜2軍チームでご一緒させていただいた時の物です。口は閉じていますが、本当は前歯がなくなっている太郎さんです。



▲ 二軍選抜

▲ リーグ戦結果



▲ 大西太郎さん

私と甲南との長い縁

甲南学園硬式庭球部創部100年おめでとうございます。神戸高校テニス部OB会「楠蘭テニス倶楽部」会長をさせていただいております、大矢敏之（1965年生）と申します。ライバル校などと呼ばせていただくのはおこがましいのですが、昔のことを少し書かせていただきたいと思います。

私がテニスを始めたのは、神戸市立本山中学時代です。甲南大学岡本キャンパスのすぐ近くに位置し、当時の公立中学では珍しかった硬式テニス部にたまたま入部したのが、きっかけでした。同級生に、中学を卒業してからアメリカに渡り、プロになった田頭健一がいたこともあり、私の1つ上の代は近畿大会の団体戦優勝、私の代は兵庫県、近畿大会共に決勝で甲南中学に敗れ、準優勝でした。

兵庫県立神戸高校テニス部時代は、1級上に関西ジュニア14歳、16歳以下のチャンピオンで、大学では早稲田大学のキャプテンをされた米谷豪恭先輩がおられました。1年生の秋の団体戦では準決勝で甲南高校と対戦し、1-2で敗れ3位となり、近畿大会には出場できたものの、全国大会出場はなりませんでした。3年生の春の総体では、個人戦で第3シードをいただいていたのですが、甲南高校で2学年下の四宮康次郎さんに負けて、インターハイ出場はなりませんでした。

大学時代には、高校の時に果たせなかった全国大会出場への思いをずっと持ち続け、4度インカレ出場を果たすことが出来ました。

今までを振り返ってみますと、中学、高校時代は常に、甲南中学、甲南高校という壁に向き合い、甲南に勝つことを目標にテニスをしてきたように思います。当時、何度も対戦した同世代のメンバーは、テニスの実力もさることながら、個性豊かで面白い人材が多く、そのうちの何人かとは40余年の時を経て今もお親しくさせて頂いております。3つ下の弟の健二も同様に、本山中学、神戸高校、同志社大学とテニスを続ける中、甲南の選手たちと幾度も戦ってきたと聞いております。

テニス以外これといった趣味もない私は、現在も休みの日にはコートに足を運びます。毎週日曜日の朝は、芦屋市のミズノスポーツプラザ潮芦屋で「ポンコツテニスクラブ」と称する甲南大学テニス部のOBの方々とともに、年齢に抗いつつ汗を流しています。

明治初期に日本へ持ち込まれたテニスは、外国人居留地のある横浜、神戸から全国に広がったとされています。競技としての楽しさはもちろんの事、さまざまな年代において心身の健康を保ち、生涯続けられる素晴らしいスポーツであると思います。

この神戸の地で、100年の歴史を持つ甲南学園硬式庭球部の、今後ますますのご繁栄と、さらなるご発展を心よりお祈り申し上げます。



▲ 神戸高校テニス部OB会「楠蘭テニス倶楽部」と現役学生



▲ 学生時代に戦った他校の仲間達と（左から三人目が筆者）

交流戦が築いたもの

甲南学園硬式庭球部創部100周年、おめでとうございます。

貴大学との交流戦をきっかけに、卒業して15年近く経った今もなお、貴大学卒の方々（主に55回卒）との交友関係を続けさせていただいていることは、私にとって大変貴重な財産であると感じています。

学生当時の交流戦では、私個人としては、毎年力の差を見せつけられる苦い記憶ばかりです。甲南女子チームは少人数でしたが、一人ひとり勢いがあり、自身のプレースタイルを貫く姿勢を強く感じ、とても勉強になったことを覚えています。

卒業してからは、関東へ転勤になったメンバーと再会し、社会人テニスサークルで交流を深めました。ここでは、関西と関東の人の和が交わり、さらに広がり、そうやってテニスを通じてたくさんの新しい出会いがあり、充実した時間を過ごすことができました。

今現在は、それぞれが家庭を持ち、なかなか会える機会も少なくなりましたが、甲南大学の友人達との関係はこれからも大切にしていきたいと、こうやって振り返って改めて思います。また近いうちに集まって、一緒にお酒でも飲みましょう。

最後になりましたが、甲南学園硬式庭球部の益々のご活躍とご発展をお祈り申し上げます。



甲南学園硬式庭球部創部 100周年のお祝い

一般社団法人日本ろう者テニス協会 代表理事 森本尚樹
NPO法人デフテニスジャパン関西支部 代表 梶野耕佑

“誰一人取り残さない”世界(SDGs)に向けて！

日本ろう者テニス協会が貴大学硬式庭球部との交流会がスタートしたのは2015年でした。それまでは体育会系の大学とのテニス交流はなく、貴大学硬式庭球の皆さまと初めてのテニス交流ではとても貴重な経験ができたと思っております。

硬式庭球部の皆さまが積極的に聴覚障がい者とコミュニケーションをとろうとした様子や、テニスコート内ではアドバイスを身振りやゆっくり話してくれたり、私たちにとって嬉しい経験であり思い出に残っております。2015年より続いた交流会は、コロナの影響で中断しておりますが、2024年には再開できることを楽しみにしております。

2025年には、日本で2025年11月に東京にて開催されます。100年近く歴史があるデフリンピックを、東京で初めて開催することは、きこえない者の手話言語とろう者の文化への理解を深めるだけにとどまりません。

東京都が策定したビジョン2025にもあるように、

- ①手話言語が日本を繋げる
- ②世界と平和に繋げる
- ③きこえない・きこえにくい子どもに夢と希望と学びを届ける
- ④誰もが活躍できる共生社会をめざすこと
- ⑤社会と市民の力で手話言語法を創る

私たちがこれまで目標としてきた運動をさらに推し進める力につながります。

私たちときこえる人がデフリンピック開催に向け、互いを尊重し共に取り組むことで、障がいの有無にかかわらず皆が活躍できる社会、“誰一人取り残さない”世界(SDGs)はきっと実現できると信じています。

最後になりますが、貴大学硬式庭球部がこれまで築き上げてきた歴史的な功績を継承し、新たな時代においても多くの人々を魅了し、発展と繁栄を続けることを願いつつ、再度お祝い申し上げます。本当におめでとうございます。ますますのご活躍を期待しております。



▲ 筆談でコミュニケーション



▲ 楽しいランチタイム。コミュニケーションは筆談や口話。そして慣れない手話のお勉強。



▲ 無音ヘッドホンでのデフテニス体験



▲ みんなで集合写真。楽しかったー！

中高部活動顧問の見てきたテニス部

1981 (S56) 年4月に赴任した甲南高校で藤原教頭先生から「君はテニスやってたんやろ、テニス部の顧問と、夏の全国中学大会の付き添いを頼む。団体優勝するから。」というお話をいただき仰天した。甲南高校テニス部は私にとって雲の上の存在であったからである。

硬式テニスを始めた時に買った『硬式テニス入門』の口絵は渡辺康二さんの写真で、キャプションに甲南高とあった。また、1974 (S49) 年の福岡インターハイで見た第2シード甲南高の選手たちは、第1シード柳川の坊主頭の選手たちに比べ、都会的で洗練されていた。

藤原先生が予言されたように、初任の私が引率をした甲南中学は、エース夏梅秀紀を中心に当然のように団体優勝し、全国中学テニス大会団体の第1回優勝校として歴史に名を残した。初期の団体戦では、第3回、第4回にも準優勝を飾り、全国にその名をとどろかせた。第4回準優勝チームは、スター選手はいなかったが、兵庫県予選からすべて3-2のスコアで決勝まで勝ち上がり、マッチポイントまで握ったことが印象深い。

中学では強さを誇った甲南であったが、仁川、明石城西、相生学院と、全県・県外・全国から選手を集める学校の壁に阻まれ、兵庫県総体団体戦を勝つことは難しくなった。学校の勉強をおろそかにせず、練習時間にも制限のある本校と同じ土俵で戦うのは不公平な状況が生まれたのである。それでも本校テニス部は、キャプテン中心の自主的運営という学校部活動の本義を守り、最低でも団体ベスト4以内というレベルを維持し続けた。与えられた状況の中で、全力を尽くしてテニス部の伝統を守ってくれた歴代部員たちに賛辞を贈りたい。

私が主顧問であった期間 (1981~1996頃) 最も印象に残っているのは、阪神淡路大震災直後の高校選抜テニス大会である。1995 (H7) 年1月17日の地震は本校を全壊させただけでなく、在校生2名を亡くした。被災直後は正直、8年ぶりに出場権を得ていた選抜大会のことまで考えることはできなかった。

それでも4日後崩壊した建物に入り、部の通帳や中・高体連の書類等を回収することから準備は始まった。1週間で1名を除いてテニス部員の無事が確認される。この間、学校では生徒の安否確認、卒業判定会議や、中学高校入試の予定変更等、当面の問題処理に追われていて、何人かの選抜レギュラーに電話をし、「余裕が出てきたら体を動かしておくように」と指示することができたのは、1月26日であった。その後は荷物を取りにきたり、たまの登校日に短時間コートで打つ程度のことしかできない日々が続いた。

2月18日ようやく、加古川在住のため参加できなかった1名を除き、7名のメンバーがコートに集合できた。この日選抜大会パンフのための写真撮影を行い、気持ち的にも1ヶ月先の選抜大会へ気持ちを向けることができたのである。

場所を変更しての高校・中学入試を終え、3月に入り高校卒業式、そしてようやく仮設校舎での補充授業が始まった。選抜大会はすぐそこである。3月12~14日、大会に向けての合宿をグリーンピア三木で何とか実施できた。OBの方々からは援助金を支援していただいた。選手諸君とこの状況でテニス合宿のできる喜びを感じた。

こうして幾つもの苦難を乗り越えてようやく3月22日の試合当日を迎えることができた。中井久雄主将は、選手宣誓の大役を仰せつかり、事前の文案作成・練習等もあり、相当のプレッシャーがあったと思う。穴生ドームで行われた開会式は、マーチングバンドの演奏も伴う華やかなものであった。中井主将は、夙川の主将とともに、全国からの温かい支援への感謝と共に全力を尽くす旨の宣誓を立派に行った。

試合は、競り負けた試合もあったが、要所でミスをしてしまう展開で、練習不足は否めず初戦敗退であった。残念な結果で何人かの選手は泣いていたが、私としては、ここまでよく頑張ってくれたなという晴れがましい気持ちであった。

この大会にでた選手たちは、秋の新人団体戦で優勝 (写真)。翌年1996 (H8) には、12年ぶりに県総体の団体優勝を果たし、3冠を取った田中修平を中心に、インターハイベスト32まで進むことになる。また、1997 (H9) 年の春の選抜では、ベスト8に進出する快挙を成し遂げる。

このあたり、選手たちの努力はもちろんであるが、OBの方々からの支援をいただいた。特に、練習のみでなく、

試合や遠征にも帯同して指導していただいた難波 徹氏の献身的な働きには感謝しかない。



▲ 高校新人戦優勝（後列左端が筆者）

この頃から、現場の世話は、八田豊司先生や、新しく加わった福井隆之先生にお願いするようになった。生徒主体の運営とOB会の厚い支援という伝統的な基本構造は変わることはない。入試制度の変更に伴い、甲南大学でも活躍した沼野孝彰、上原伊織など優秀なプレーヤーを擁して、2000年代に全国中学テニス大会で優勝を重ね（2006、2007、2009、2014）、今では5回の全国最多優勝を飾っている。高校でも春の選抜ベスト4（2009年）という快挙を成し遂げた。

振り返ると、甲南中高テニス部は、「強ければよい」という風潮から一戦を画し、勉強という学生本義を忘れず、礼儀や対人関係調整能力などの基礎人間力を養うという学校部活動の目的から逸脱せずに、学生スポーツの王道を行く伝統校としてのブランドを守り続けてきたと思う。そんな中、オーストラリア姉妹校へ二度の遠征を行うなど、海外への新しいチャレンジも行った。国際的に活躍しているOBも多い。部活で培った基礎人間力とタフネスのおかげだと思う。これからも、良き伝統を守り、これからのグローバル社会で活躍できる甲南健児を育成し続けていっていただきたい。



▲ オーストラリア遠征

強すぎて…、甲南テニス

甲南学園硬式庭球部100周年、おめでとうございます。

僭越ながら、OBではない立場から甲南テニス部との思い出を綴らせていただきます。

母校（淳心学院）には軟式テニス部しかなく、人と同じことをするのが嫌いな私は中・高ブラスバンド部に所属しつつ、高校進級とともに硬式テニスを始めました。NHKテレビスポーツ教室の映像を脳に焼き付け（ビデオのない時代）、入門書や雑誌で見るC.エバートのフォア、K.ローズウォールのバック、R.レーバーのサーブを手本に、「独習」しました。

1977年、学習院大学に入学し、体育会入部を考えるも澁谷隆良さんの打球音に畏れをなし、当時一番新しかったサークル（今は学習院最強チームとのこと）に入部。その年、中西伊知郎さんがインカレで単・複優勝されました。私は4年間、＜授業よりも＞雑草テニスに明け暮れました。

大学院（修士）に進み、非常勤先の高校テニス部夏合宿に帯同。その後、後輩たちの夏合宿に顔を出したら誰よりも色が黒く、「先輩、大学院ではテニス専攻ですか？」…。帰郷後の大学院（博士）時代も県立高校非常勤の傍らテニス部の練習に出ていました。その年、男子はシングルス6人、ダブルス3組が県大会本戦に出たものの、ほとんどが甲南高校生に敗退。神戸ローンテニス倶楽部からの帰り道、城内歩道橋での生徒の会話「甲南、憎いなあ！」「この歩道橋、来年も反対に渡ってやり返そな！」が忘れられません。

1990年甲南大学着任後、長くテニスから離れて過ごしていましたが、2008年だったでしょうか、『テニスマガジン』で拝見していた吉田昇生さんから硬式庭球部顧問就任のお話をいただき、何の迷いもなくお受けしました。その後、三村さん、四宮さん、宇津原さんをはじめ、たくさんのOB・OGの方々と交流させていただきました。日本語日本文学科教員としては2005年入学の三ツ井君、山田さん（都染ゼミOG）、2008年入学の角田さん、2021年入学の中山さんの授業を担当しました。しかし、2020年末に入院したこと、コロナ禍等々…、定年まで5年を残し2022年3月に退職、100周年を目前に顧問も退かせていただきました。

顧問としての13年間、もちろん2011年の男子1部リーグ復帰、2012年リーグ戦優勝・王座戦出場がありますが、女子入替戦敗退（2部へ）が最も印象に残っています。試合前の練習中にうち切りが決まり、コートにしゃがみ込んだ彼女の姿、目に焼き付いています。

今は、試合結果速報や学連HPで学生たちの活躍をチェックすることが楽しみです。

100周年を機に、甲南学園硬式庭球部OBではない外からの甲南テニスファンとして、かつての教え子が言った「強すぎて憎い、甲南テニス」をめざし、新たな歴史を刻んでほしいと思います。



▲ 2012年リーグ戦優勝報告会
2012年10月8日 中央：杉村 芳美学長、右：前田 忠弘学生部長
（左から2番目が筆者）



▲ 地域貢献活動：2013年1月12日 神戸市テニス協会との高校生テニス講習会

諦めない気持ち

34回の宇津原彰一です。甲南学園硬式庭球部100周年、本当におめでとうございます。

私事ですが、甲南中学入学後、念願だったテニス部にしました。中1で身長が低かったせいか、体力的に皆様にご迷惑をおかけし、ドクターストップがかかってしまいました。中1の夏に退部を余儀なくされました。家庭環境もありテニスは続けておりましたので中学3年で再度入部させていただきました。非常に不安でしたが、皆様に可愛いがってもらい、溶けこむことができました。仲間にも恵まれ、高校3年時には選抜、インハイ

ともに団体戦で3位に入ることができ、この時の経験は今でも私の宝物です。大学最後のリーグ戦を2部で過ごしたという思い出から、30歳で監督を拝命され1部優勝の思いを胸に監督を引き受けました。

他大学にはスポーツ推薦やAO入試などたくさんの選手獲得手法や援助金がある中、甲南だけが十分なスポーツ推薦もなく、援助金も無い、非常に厳しい状況でした。監督就任時は1部でしたが5年もせず2部降格となり部員も集まりづらい日々が続きました。その中で当時の樋口校長先生に「もっと学生と一緒に喜び、悲しめ!」のお言葉を頂戴し、また先輩からは「コーチとは自分より良い選手を作ることが目標」とも言われ、知恵をお借りし、推薦制度の整備や獲得に苦慮しました。中々、一足飛びとはいきませんでしたが14年の月日が流れ、ようやく一部昇格を果たすことができました。春関、夏関、リーグ戦の帯同、全日本中学や高校近畿大会、高校インターハイ、高校選抜等あらゆる試合を観戦し、全力で向き合いました。

自分自身の最後のリーグ戦で1部昇格のポイントがかり負けた悔しさもあり、当時の樋口校長に「もっと学生と一緒に喜び、悲しめ!」と言われました自分の事ごとく学生と共に頑張りました。

ちょうど次男が生まれ子育て真っ最中で家内にはいろいろ苦勞を掛けました。家内と次男を家内の実家へ連れてゆき、長男は私とともに大学のテニスコートへ連れて行くといった状況でした。その当時の学生には長男の面倒も見てもらい非常に感謝しております。その長男が中学を迷うことなく甲南中学に入学し、テニス部に入部したときは非常にうれしく、また複雑な思いでした。

そして、念願の一部昇格!! そしてその翌年に関西優勝!! 私にとって人生最高の思い出です。

まだ未熟であった事もあり、たくさんの学生ともぶつかり、嫌事も言いました。その学生たちが卒業後お会いして、懐かしそうに喋ってくれることが今は一番うれしく思います。



▲平成24年度(2012年)全日本大学対抗テニス王座決定試合ドロー



▲応援に駆け付けたOB・OGの皆さんと

甲南学園硬式庭球部の未来へ向けて

甲南学園硬式庭球部100周年誠におめでとうございます。

中高大の総監督を拝命している四宮康次郎です。

甲南学園は多くの日本代表選手を輩出し、中学は全国選抜大会団体戦優勝、全国中学選手権団体戦優勝、高校は全国高校総体団体戦優勝、大学は全日本大学王座決定戦で優勝する等、日本のテニス界をリードしてきた伝統ある硬式庭球部です。

この伝統ある硬式庭球部100周年の時期に総監督をさせていただいている事は、大変有難く冥利に尽きます。100周年を迎える事が出来たのも甲南学園や中高大、摂津会等あらゆる関係者の皆様やOBの方々のご尽力のおかげです。感謝申し上げます。本当にありがとうございます。

甲南学園硬式庭球部の良さは、中学高校大学の一貫教育のメリットを活かした育成、強化を行っているのが特徴です。総監督として甲南学園の創設者の平生先生の建学の精神を継承して、テニスだけ強ければ良いのではなく、社会生活においてもリーダーシップを発揮できる徳育・体育・知育に優れた人財を輩出する事を軸に育成して来ました。

私自身も小学校から甲南に入学し沢山の事を学びました。そして父親がテニスをしていた事もあり、庭球部に入部して毎日部活動中心の生活が始まりました。楽しい事も沢山あり、上下関係や挨拶等厳しい事も沢山ありましたが、同期の皆に助けってもらって、成長する事ができました。学生時代には理解できなかった事も沢山ありましたが、社会に出ると当たり前の事ばかりです。

硬式庭球部の良さは自主自律・チーム内競争・チーム力です。自分達で厳しい練習メニューを考え実践し、団体戦出場メンバー競いや、そして勝つ為に全員が最後まで応援してくれた事が試合で結果を残せた大きな要因だと思います。

私自身も中学高校では個人と団体で全国大会に出場、大学では全日本学生に出場する機会に恵まれ、そのお陰で、沢山の友人が出来、今でも交流があります。卒業しても先輩後輩関係なくお付き合いできるのも、大きな特徴です。

我々の現役時代からラケットもボールも進化してテニス自体が大きく変化している事に加えて、練習環境も大きく変わりましたが、変わらない事もあります。テニスが好きという事と勝ちたい気持ちを持ち続ける事だと思います。厳しい練習で精神力も鍛えられ人として成長する事で結果はついてきます。自主自律・チーム内競争・チーム力をあげて毎年のように成長して目標に向かってチャレンジして欲しいです。自分自身が経験出来なかった団体戦での全国優勝を目指して頑張ってください。

強い者が勝つのではない！！勝った者が強い

為せ大いに為せ がむしゃらに為せ

為さぬと得られない 悟られない

そしてこの先少子化になりますが、少しでもテニスに目を向けてテニス好きの子供達の育成に携わって頂けると嬉しいです。



▲ 三木谷杯で3位入賞時のメンバーと



▲ リーグ戦にてアドバイス 藤永岡崎組

後輩に伝えておきたいこと

甲南学園硬式庭球部創部100周年を11月25日に迎え、「何か書いてください」と事務局の方から言われましたが、さて何を書こうか？ 現役の諸君に何をお伝えしようか？ 悩みましたが、私も間もなく84歳に相成りますので、何かお伝えしておきたい事やはりある様な気がしてペンを取りました。

今、現役諸君が練習している様な恵まれた環境ではなかったということと、どんな気持を持って学生の現役生活4年間を過ごしてきたかという事を伝えておきたいと思います。

ここに1枚のテニス雑誌の切り抜き記事があります。「1976年12月19日、甲南大学3面のホームコート完成」の記事です。「甲南大といえば、関西はもちろん、全国の大学の中でもテニスはトップクラスの名門校。その甲南が専用コートを持っていなかったとは、びっくりする人が多いにちがいない」と書かれています。

いや！ 実際、練習コートを見つけるのに、本当に苦労しました。私が昭和35（1960）年の末にテニス部キャプテンを引き継いだ時、ウィークデーは住吉川畔の甲南テニスクラブのコートを借りて、練習していました。しかし、ウィークデーは大学の授業を受けなければならず、十分な練習が出来ない。土、日はコートがありません。どこかの企業のコートを借りていました。企業のテニス部の人と一緒に練習したこともありました。その企業のコートは兼松江商の田中（神戸市東灘区）のコートとか、伊藤忠商事の打出（芦屋市）のコートとかでした。

この様な環境のなかでしたが、私が卒業後、昭和38（1963）年に、渡辺康二キャプテンのもと、関西で宿敵・関西学院大学（以下、関学と記します）を打ち破り、大学対抗王座戦で、慶應義塾大学に打ち勝って王座につきました。

残念ながら、私がキャプテンを務めました昭和36（1961）年は、関西のリーグ戦で、森、芥川、岡本、本井、小浦氏等の選手を擁する関学に4-5の接戦の末に敗れています（その当時は関西から一校しか王座戦に出られなかった）。

甲南も私をはじめ、平野一斎、山根義弘、野々村俊雄、福永崇、渡辺康二、小林功、河盛純造の錚々たるメンバーがいましたが、4-5のもう一歩のところまで敗れました。その関学がその年の全国王座戦で、早稲田に7-2で勝って優勝しています。関西リーグ戦で、関学をやっつけさえすれば、王座戦で勝ると強く思っていました。

次にどんな気持を持って練習してきたかという事ですが、上述したようにともかく関学に勝ちたかった。私と同学年である森、芥川選手に勝ちたかった。この気持を持ってコートに立って練習していたように思います。関学は仁川に5~6面の立派なコートを当時から持っています。「NOBLE STUBBORNNESS」（気高い粘りと訳しましょうか？）という看板を大きくテニスコートに掲げていました。環境は彼らの方が圧倒的に上でした。

今の現役諸君に言いたい事は、選手一人一人がライバル（好敵手と言いましょうか？）を意識して、そのライバルに打ち勝つように努力していく事しかないのではないのでしょうか？ 「強い甲南」に復活する事を強く望んでいます。



▲ テニスマガジン誌 1977年3月号 P150より1ページ全体を転載

1. 旧制高校、新制中学校、高等学校

創部1923年～1928年

2号館（旧講堂跡）と3号館（旧尋常科教室）の間の空地で尋常科部員、9号館の北側の1面で高等科部員が練習。空地のコートはすぐに校舎にぶつかるし、9号館北側のコートは「南北に設置するテニスコート」の常識を無視した東西のコートであった。

1928年秋～1963年頃

何とかコートらしいコートがほしいと、当時の庭球部顧問教授や庭球部員が伊藤忠兵衛氏の援助を得て現在、大学の図書館となっている場所に2面のテニスコートが設置された。コート開きは、1928年10月20日、熊谷一弥、清水善造両選手の模範試合で開幕した。1936年には、興業のため、来日していたビル チルデンが、清水善造氏と甲南高校のテニスコートでテニスをしたとの記事が当時、新聞に掲載された。

（上記は旧制5回上村添次郎氏が「甲窓」に寄稿されていた文章を一部転載しました）



▲ 当時のテニスコート



▲ 当時の校内図

1963年頃～1968年

1963年に中高の校舎が芦屋市に移転するも、現在の場所にテニスコートが設置されたのは、1968年であり、それまでの間は、中学生は大学構内のテニスコート、高校生は芦屋市翠ヶ丘にあった日商岩井独身寮のテニスコートや、その他近隣にあった帝人、日本板硝子のテニスコート等をお借りして活動した。

1968年頃～現在

1968年に現在の場所にテニスコートが完成。コート開きでは、石黒修さん、藤井道雄さん、小林功さん、河盛純造さんらが模範試合を披露された。当初は4面のクレーコートであったが、現在は、ハードコート2面、オムニコート2面、クレーコート1面の合計5面完備されている。



▲ 1968年頃のコート全景



▲ 現在の中高 ハードコート

2. 大学

1951年(大学開学)~1976年

平日は民間クラブである甲南倶楽部のテニスコート、土日は、兼松江商、伊藤忠商事、日本板硝子、帝人等のテニスコートをお借りしながら活動。1964年に甲南倶楽部が閉鎖された以降は上記企業のコートをお借りしながら活動。ホームコートはなく、練習コートの確保に大変苦労された時代であった。



▲ 甲南倶楽部テニスコート(場所は現在の甲南幼稚園) ▲ 甲南倶楽部のクラブハウスと部員の方々

1976年~1994年

1976年12月、西校舎南側の東洋紡社宅跡地に念願の大学専用ホームコート3面が完成。コート開きには、多数のOB、OGが立ち会い、テニス雑誌にもその様子が記事になった。



「テニスマガジン」誌 昭和52(1977)年3月号より転載(左の写真も含む)

「甲南大学といえば、関西はもちろん、全国の大学の中でもテニスはトップクラスの名門校。その甲南が専用コートを持っていなかったとは、びっくりする人も多いに違いない(中略)決して恵まれた環境ではなかったが、その中で、デ杯選手や全日本チャンピオンを生み出している(中略)大学庭球部のコートとしては、全国で初めてのケミカルコートで、甲南の伝統である“攻撃のテニス”に一層磨きがかかるだろう」(記事の一部を抜粋して転載)

▲ OBの元デ杯選手による模範プレー。記念式に列席した先輩、関係者、現役部員も感慨深げ ▲ P203ページ 藤井道雄先輩による寄稿文に関連掲載あり

1994年~現在

1994年六甲アイランドにコートが移転。当初は、当時のリーグ戦のコートサーフェスに合わせて、オムニ(砂入り人工芝)コート3面であった。その後も試合のコートサーフェスの変遷に合わせて変化させ、2020年より現在のハードコート5面体制(全コートナイター照明付き)となった。

100年に亘り、テニスコートが確保できたのは、顧問の先生を始めとする学校関係の方々、ご協力して下さった企業、先輩方の努力によるものであった。そして、そのおかげさまで、現在、中学校・高等学校、大学共に恵まれた練習環境が整っていることに、創部100年を迎えるにあたり、改めて深く感謝の意を表したい。



▲ 現在のコート

1933 デビスカップ



神戸・山手の自宅。伊藤英吉さんは、パソコン画面を指差しながら、デ杯へ向かう船旅の様子などが写った秘蔵写真の説明をしてくれた。「寄航先でピラミッドを見たり、ラクダに乗ったり、のんきなものでした。船の上でも、ランニングや水泳をしていたので体がなまることはなかったですね」。薄いグリップでフラット系の球を打っていた伊藤さんは、「とにかくネットに出るのが好きだった……」と70年前に思いを馳せていた。

熊谷一弥、清水善造、原田武一、佐藤次郎、山岸二郎……これまで世界トップ10にランクされた日本の男子選手は5人いるが、すべて戦前のことだ。

1921年（大正10年）、熊谷と清水率いる日本チームは、初出場のデ杯でチャレンジラウンド進出。デ杯保持国の米国に完敗したものの、以来十数年間、ほぼ毎年のように米国ゾーンや欧州ゾーンの決勝か準決勝に進出していた。伊藤さんが活躍したのは、そんな日本男子の黄金時代である。

父親の忠兵衛氏は伊藤忠商事や丸紅の創始者。その父の働きかけで、元世界ランク7位の原田武一さんに基本を仕込まれた。1931年の全日本で準優勝。その2年後、初めてデ杯選手に選ばれた。

当時は海外遠征といえば船である。神戸港からマルセイユまで35日間。キャプテンの三木龍喜氏はすでに欧州滞在中だったため、佐藤次郎氏と布井良助氏とともに「伏見丸」でヨーロッパに旅立った。上海、香港と2~3日おきに寄航して給油する。その度に現地で練習を行った。港に着くと、日本人の駐在員が出迎え、テニスコートに連れて行ってくれる。夜は大使館などで歓迎会が催された。



「当時のお金で遠征費は1人1000円。今なら1000万円といったところでしょうか。国の代表でもなければ、簡単に海外に行けない時代です」。

5月、日本チームはブダペストでハンガリーを下したのを皮切りに、ダブリンでアイルランドを、ベルリンでドイツを倒し、デ杯欧州ゾーンの準決勝にコマを進めた。パリでオーストラリアに惜敗したものの3年連続欧州ゾーン準決勝に進出。

単複佐藤、布井の両氏が出たため、伊藤さんに出場の機会はなかったが、全仏では4回戦に進み、フランスの「四銃士」と呼ばれた第1シードのコシェと対戦した。

ウィンブルドンでは初戦敗退したが、2年連続準決勝に進んだ佐藤次郎氏の試合が忘れられないという。相手は数週間前の全仏準決勝で完敗したクロフォード(豪)。

「私は絶対優勝できると思って見ていました。第4セットはすごい接戦で、佐藤さんに勢いがあったから」。

結局、セットカウント1-3で負けるのだが、佐藤・布井組のダブルスは準優勝した。一行はヨーロッパからアメリカに渡り、全米に出場し、ようやく秋に帰国。半年以上の長旅を終えた。

伊藤さんはその後も2回、ウィンブルドンに出ている。神戸商大(現神戸大)を卒業後、英ケンブリッジ大学に留学。その間、出場した。1936年はシングルス3回戦進出。アメリカ選手と組んだダブルスはベスト8に入った。

それが最後の四大大会出場となったが、観戦には何度も行っている。ニューヨーク駐在中、加茂公成さんと宮城淳さんがデ杯遠征に訪れると必ず応援に駆けつけた。

7~8年前まではウィンブルドンの時期に合わせて英国旅行を組むことも少なくなかった。

「選手の時からウィンブルドンの雰囲気が好きで『別格』だと感じていました。試合観戦もいいですが、何より昔の友達とクラブハウスでお茶を飲むのが楽しいし、懐かしいです」。

かつてウィンブルドンで活躍した伊藤さんには、特別なクラブハウスに入る特権が与えられている。



上記文面は日本テニス協会ホームページ(広報部・長野宏美)より引用させていただきました
 【取材日2003年2月16日】神戸市御影のご自宅にて 本文と掲載写真は必ずしも関係あるものではありません
 ※引用元:日本テニス協会公式サイト『テニスミュージアム』「思い出に残るあの試合」2023年10月11日
<https://www.jta-tennis.or.jp/history/tabid/262/Default.aspx>

1961 デ杯東洋ゾーン準決勝／フィリピン戦

1971年に戦後初の日本人プロ選手となった石黒修さん。全日本選手権を単複各3度制し、デ杯やウィンブルドンで世界の強豪と戦ってきたプロテニス界のパイオニアである。プレーヤーとしての情熱は今も衰えることなく、選手としてベテランの部に挑戦し続けている。インタビュー場所に指定されたのも、石黒さんが普段汗を流している田園テニスクラブだった。その石黒さんが思い出の試合に選んだのは1961年のデ杯東洋ゾーン準決勝、フィリピン戦の奇跡の逆転勝利だった。国を代表して戦う団体戦特有の心の動きが興味深い。

1961年4月、デ杯東洋ゾーン準決勝。日本は東京・田園コロシアムで強豪フィリピンを迎え撃った。6年前に東洋ゾーンが新設されて以来、日本はフィリピンに1勝3敗、インドに0勝2敗と両国は大きな壁となっていた。鶴田安雄監督率いる日本チームはこの年、正月返上で合宿を行い、「打倒フィリピン」に燃えていた。初日。すり鉢状の形をしたコロシアムには強風が舞っていた。エース対決となったシングルス第1試合は宮城淳さんがデイロにストレート負け。続く石黒さんも得意のグラウンドストロークが強風のため続かず、ホセに0-3で完敗した。「初日は1セットも奪えず惨敗。地元開催で有利なはずなのに、風の計算ができなかった。今年もだめかな、と思いましたよ」

暗いムードを破ったのは2日目のダブルスだった。初日に2-0とリードしたフィリピンはデイロを温存し、若手のホセ・ドンゴ組を起用。日本は宮城・長崎正雄組を配した。デ杯代表2年目の長崎さんは端から見ても緊張しているのが分かった。立ち上がりは極度のプレッシャーから動きが硬く、イーゼスマッシュを空振り。だが、この1球で肩の力が抜けた。力強いボレーで攻め続け、ストレート勝ちで日本に1勝をもたらした。

午後7時、石黒さんは宿泊していた旅館のテレビでダブルス勝利を伝えるニュースを見た。「日本は長崎の活躍で何とか一矢を報いて最終日を迎えることができた……」とヒーローを讃えている。

複雑な心境になった。団体戦なのだから、仲間の活躍はうれしいはず。だが、素直に喜べなかった。「年齢もランキングも僕の方が上。明日自分が負けて終わったらえらいことだ」と大きなプレッシャーを感じた。

最終日の第1試合、宮城さんはホセに苦戦を強いられた。2セットオールになり、2-3、2-4とじりじりと追いつめられていく。石黒さんは練習コートでウォームアップしていても落ち着かず、コロシアムを何度ものぞきに行った。結局、宮城さんは第5セットを6-4で制し、勝負は石黒さんにかかった。

襟に三色の縞の入ったセーターを着た石黒さんは、大股で階段を降りてコートに向かった。その途中、慶大庭球部の大先輩である小泉信三元塾長に「石黒、オイ、思い切ってやれ」と声をかけられた。だが、あまりにもナーバスになったせいで、まったく覚えていないという。ゲームが始まってからも無我夢中で周りは何も見えなかった。

デイロはドロップショットやロブが得意なベテラン選手。一方、当時24歳の石黒さんは海岸経験も少ない“駆け出し”だった。「デイロが百戦錬磨の横綱なら、僕はやっと思幕内力士。それほどの差があった」。デ杯コーチの鶴原謙造さんには「技巧派のデイロを相手に粘ってもダメ。攻めまくるしか活路はない」とアドバイスされ



▲ 勝利の瞬間

た。その戦略通りの展開となった。石黒さんがサーブとストロークで圧倒し、相手につけ入る隙を与えなかった。バックハンドのパスもさえていた。当時、バックハンドのトップスピンを打つ選手は日本にほとんどいなかったが、石黒さんは世界のトップだったロッド・レーパー選手のフォームを研究して、身につけていた。マッチポイントもバックハンドのクロスパスだった。6-1、6-4、6-4。石黒さんはうれしさのあまりラケットを放り投げ、ネットを飛び越えてデイロに駆け寄って握手した。

小泉元塾長は振り返ってこう記している。

<石黒の脚は軽らく、縦横に走り廻り、サーブは続けさまに入り、正確にして力強いバックハンドのパッシングは、しばしばネット際のデイトロを茫然たらしめた。石黒は最後まで勝敗のことを考えなかったのかも知れない。最後の一球が、ネット際のデイトロのラケットの端を掠めて飛び過ぎ、満場総立ちの拍手が起こったときに、彼れははじめて自分の望外の勝ちを知ったかのように、私には見えた。(事実、「テニスゼミナール」の記事によると、決勝後石黒は、虚脱状態のようで、最後の一球は「どんなボールだった」と他人にきいていたという。)このような瞬間は、人の一生にそう幾度もあるものではない。多くの人は終にそういう瞬間を知らずに生を終えるのである> (慶應庭球100年より)

これを機に、石黒さんは飛躍を遂げた。同年、初出場のウィンブルドンで初戦を突破。同大会の前哨戦では当時ナンバー1のニール・フレイザーを破る大金星をあげた。さらに同年秋の全日本では念願の初優勝を果たした。「どのスポーツでもそうですが、ある時チャンスをつかむと自信を得てぐっと伸びる。僕はこのデ杯をきっかけに上昇気流に乗ったわけです」。

当時はまだ、コンピュータで管理された世界ランキング制度は確立されておらず、「日本代表」や「有名選手を破った」ことなどが出場権につながった。トーナメント主催者に実績などを書いた手紙を送って返事を待つ。実力に応じて宿泊費や交通費などのギャランティーが異なるので、大会レベルや条件面を考え合わせて出場大会を決めていた。石黒さんは海外遠征を始めて間もなかったにもかかわらず、フレイザーなど世界のトップ選手に勝った実績が評価され、有利な条件で規模の大きな大会に出場できた。

テニスを始めたのは甲南中学1年の時。2つ上に松岡修造さんの父で元デ杯代表の功さんがいた。当時は球足の遅いクレークコートが主流で、粘り強いグラウンドストローカーが多かった。

だが、長身の松岡さんはサーブ&ボレーで積極的に攻めるプレーヤーだった。「松岡さんには影響をものすごく受けた。練習姿を見ては僕もサーブ&ボレーをまねたりしました」。

全日本ジュニア、インターハイ、インカレ、全日本選手権など、数々のタイトルを手中に収め、日本のトップ選手になってからも研究熱心さは変わらなかった。ライバルの試合を見て大学ノートに長所や短所を書き込んだ。「試合に負けてうんざりしている時でも、観戦してメモを取っていました。テニスの持つゲーム性が楽しくて。激しい練習をしても嫌になったことは1度もありません。ゲームの楽しさや相手を倒さないと上にはいけないところなど、テニスには何とも言えない魅力がある」。

その情熱は今も続いている。現在は65歳以上の部で活躍しており、プレーヤーとして「生涯現役」を貫いている。



◀ 首相官邸で当時の佐藤栄作首相から激励を受ける

上記文面は日本テニス協会ホームページ (広報部・長野宏美) より引用させていただきました
本文と掲載写真は必ずしも関係あるものではありません

※引用元: 日本テニス協会公式サイト「テニスミュージアム」『思い出に残るあの試合』2023年10月11日
<https://www.jta-tennis.or.jp/history/tabid/283/Default.aspx>

1966 デ杯・フィリピン戦



渡辺康二さんが初めてグリップの持ち方を教わったのが石黒修さんだった。甲南中1年でテニス部に入った初日、甲南高のキャプテンだった石黒さんから新入部員全員が指導を受けた。熱心に説明を聴く同級生の中には後のデ杯選手、河盛純造さんと小林功さんもいた。「海外の大会の回り方から酒の飲み方まですべて石黒さんに教えていただいた。もちろんデ杯でも頼りにしていた」と話す。だが、1966年(昭和41年)のデ杯フィリ

ピン戦は石黒さん敗退後、渡辺さんに勝負がかかった。重圧を乗り越えて日本に勝利をもたらした試合は、当時24歳だった渡辺さんに大きな自信を与えた。

満員の3000人の観客が見守る中、デイロのスマッシュがネットにかかる、渡辺さんはネットを飛び越えて相手に握手を求めた。最後のポイントがどうだったかは、当時の記事を読んでも思い出せない。だが、「あまりのうれしさに勢いあまって、ネットを飛び越えたことはよく覚えています」と苦笑する。

1966年5月、マニラで開催されたデ杯東洋ゾーンAセクション決勝。ナンバー2の渡辺さんは、勝負のかかった最終試合に登場した。それまで宿敵フィリピンとは何度も対戦していたが、日本が敵地で勝ったことは東洋ゾーンができた55年以来1度もなかった。40度近い暑さ、貝殻を砕いた独特のコート、騒がしい観客……。アウェーでは数々の過酷な条件下で戦わなければならなかった。そのうえ、主力のアンボンとデイロはドロップショットとロブの名手。猛暑の中、前後に緩い球で振り回されると、集中力と体力を維持するのが容易ではなかった。

「石黒さんが大黒柱でいましたから、私は気楽だったんです。でも、マニラに着くと、『今回は俺だめだ』って弱気な言葉をもらした。天下の石黒さんだから大丈夫だろうと思っていましたが……」。

第1試合は渡辺さんがアンボンと対戦した。エースが控えているという気楽さから、伸び伸びとプレーできた。7-5、6-4、6-3。出足が悪く第1セットは2ブレイクを許したが、積極的にネットにつめてまずは1勝を挙げた。

第2試合の石黒さんとデイロの戦いはファイナルセット1-2で日没順延。翌日再開すると、前日のけいれんの影響もあって石黒さんは4ゲーム連取されて敗退した。2人で組んだダブルスはストレート勝ちし、2-1と王手をかけたものの、それまでと違うプレッシャーがのしかかってきた。

最終日。渡辺さんは第1試合の石黒さんとアンボンの試合を見ずに、控え室で待機していた。プレッシャーを感じて、スタンドにいたことができなかった。室内には木のいすと、なぜか扉がなくむき出しのトイレがあった。「何だか牢屋にいるみたいだな」と思いながら1人で出番を待った。デ杯メンバーの小西一三さんと柳恵誌郎さんが交代で進行状況を伝えに来てくれたが、「お前にかかるぞ」と言われ、寒気がするような感じだった。

だが、音楽を聴きながら集中力を高め、「思い切ってやるしかない」と覚悟を決めた。午後3時、鶴田安雄監督から「倒れるまで頑張れ」と声を掛けられコートに入った。1ポイント目、デイロはリターンでいきなりドロップショットを放った。だが、ネットの白い部分にあたり、ボールはデイロのコートに落ちた。

「これが大きかった。もし入っていたら流れを奪われて攪乱戦法にやられたかもしれない」と振り返る。その後は一方的だった。立ち上がりから強烈なフォアで相手をベースラインに釘付けにした。サーブも好調で常に主導権を握った。6-2、6-4、6-2。若さと力で1時間20分の戦いを制した。

「デ杯で2-2の重圧を味わったのは最初で最後。特別なプレッシャーのかかった試合に勝てたことで大きな自信になった。『俺は2-2を勝ったんだ』というのが、いつも心の中にありました」と語る。

63~70年までデ杯代表に選ばれ、単複40試合に出場し、25勝を挙げた。引退後はすぐにデ杯監督に就任。71年5月に50年ぶりにオーストラリアを破った時の指揮官を務めた。この時は1か月前に敵地マニラで行われたデ杯フィリピン戦で2勝を挙げた九鬼潤さんや伸び盛りの神和住純さんではなく、30歳のベテラン柳さんを出場させた。29歳の若い渡辺監督の戦略が当たり歴史的勝利を取めた。「監督として最高の思い出はこの選手起用にある。意外な選手起用がまんまと当たった心地よさは忘れられない」と語る。

同年から全日本のシングルスで三連覇した神和住さんは選手発表を聞いて激怒し、後々まで「あの時は本当に頭にきた」と言ったそうだが、当時は「柳さんでいくしかない」という信念があったという。「オーストラリアの速いサーブとネットプレーに対抗するには、正反対の緩い球を打つ柳さんで相手のリズムを崩すのが最良だと思った」と振り返る。

74年まで4年間デ杯監督を務め、現在は日本テニス協会専務理事。穏やかな笑みを浮かべて話す渡辺さんだが、選手として、そして監督として重圧を乗り越えてきた経験が熱い思いとなって、テニス界を支えている。



上記文面は日本テニス協会ホームページ（広報部・長野宏美）より引用させていただきました

【取材日2003年1月10日】 本文と掲載写真は必ずしも関係あるものではありません

※引用元：日本テニス協会公式サイト「テニスミュージアム」「思い出に残るあの試合」2023年10月11日
<https://www.jta-tennis.or.jp/history/tabid/288/Default.aspx>

1971 デ杯・オーストラリア戦 / 1963 全国大学テニス王座決定戦



河盛さんは日本が50年ぶりに勝利を取めた71年のデ杯豪州戦でダブルスに出場、自身は黒星を喫したが歴史的瞬間に立ち合った。全国大学テニス王座決定戦では甲南大を初優勝に導いた。勝負を決する2つの試合が忘れられないという。中でも親友の松本鐵一さんを相手に、2日がかりの死闘を演じた慶応大との王座最終戦は最も思い深いという。河盛さんが常務取締役を務める東京・日本橋兜

町の証券会社で話しを聞いた。

河盛さん、渡辺康二さん、小林功さん。一緒にテニスを始めた甲南中学の同級生3人がデ杯選手になった。良きライバル、良き先輩に恵まれたことが大きかったようだ。

河盛さんは甲南中学に入学し、同級生の渡辺さんとともにテニス部に入った。だが、1学年約120人のうち、80人もの入部希望者が殺到。ボール拾いとランニング、コート整備に明け暮れた。1週間すると新入部員は半分に減り、さらに1カ月でそのまた半分に。結局残ったのは十数人。希望者が多すぎるため、本当にやる気のある者だけが残るよう厳しい環境が用意されていた。

グリップの握り方やテニスの基本は高校3年の石黒修キャプテンに教わった。中学と高校で2面しかなく、石黒さん以下うまい順にコートに入った。ようやく順番が回ってきても初心者同士ではラリーが続かない。5、6球ラケットに球が当たったかと思うとすぐ交代だった。

だが、運が良いことに、同級生の松本さん宅にテニスコートがあった。土日は同級生みんなで彼の自宅を訪れ、朝8時ごろから日没までボールを打った。高校や大学に日本のトップ選手が大勢いたことも幸いした。ちょうど河盛さんが中学生のころ、松岡修造さんの父功さんが大学生だった。「一緒に練習することはなかったけど、プレーを見て育った」。

みるみる上達し、甲南は関西地区でも指折りの強豪校になった。だが、今度は同級生に勝たないとレギュラーになれない。練習試合も真剣だった。

高校の途中から、医師をしていた父の転勤にともない熊本県立熊本高校に編入。大学は甲南に戻り、再び渡辺さんらと練習をすることに。だが、河盛さんはまったく練習についていけなかった。「体力が全然違った。彼らが簡単にこなしていることを自分ではできない。高校時代の2年間のギャップは大きかったね」。

渡辺さんや小林さんは大学1年からレギュラー。ニューボールを使って優先的に練習する傍らで河盛さんは球拾い。そのままでは技術的にも体力的にもどんどん差が広がってしまう。河盛さんは球拾いをしながら蛙跳びをして足腰を鍛えた。さらに、足りない分は練習前にコートに出て補った。2つ上の先輩、那須善彦さんが朝7時から約1時間半、サーブを徹底的に教えてくれた。それまではスライス系だったが、特訓の成果でスピンスーブを覚えた。「幸せなことに有望視してくれたんだと思う。大学の先輩には藤井道雄さんや平野一斎さんとか、強い選手がたくさんいて、よくめんどろを見てもらいました」。

強豪揃いの甲南だったが、ライバルの関西学院や慶応に阻まれ、大学王座とは縁がなかった。河盛さんが大学4年の63年7月、初出場で初優勝のチャンスがめぐってきた。甲南大と慶応の決勝、芦屋コートで行われた第一日のダブルスで甲南が2勝1敗とリード。初優勝を期待する甲南OBが50人以上も見守る中、翌日のシ

ングルス6試合はもつれにもつれた。「ナンバー6のシングルスが6時間半もかかった。結局フルセットで負けたんですが、僕はその後で試合に入ったから日没になった」。

甲南はナンバー4から6の下位を落とし、慶応に逆転を許す。ナンバー3の小林さんはフルセットで勝ったが、最後の2試合は日没順延。3-4で最終日を迎えた。翌日は2-0でリードしていた渡辺さんが早々と勝利。勝負はナンバー2の河盛さんと松本さんの試合にかかった。「松本君は親友で、僕が熊本の高校に転校した後も、関西で試合があると彼の家に泊めてもらっていた。勝負のかかる試合で対戦するなんて皮肉なことでした」。

前日は6-8、7-5、6-8、1-2の大接戦。「普段練習している甲南のコートは速いんですが、松本君のサーブはすごい遅い。しかも球足の遅いアンツーカーで山なりのボールを打ってこられ対処できずミスしていた」。

だが、翌日は緩いボールへの対策を考え、ペースを合わせず積極的に打っていった。一転、河盛さんが主導権を握り、6-2、6-1でゲームセット。その晩はOBが盛大な祝勝会を開いてくれ、優勝カップで酒を飲んで盛り上がった。

卒業後は日本生命に就職。ダブルスで強さを発揮し、68年から4年連続でデ杯代表に選ばれた。特に71年豪州戦の歴史的勝利の前年は、小浦武志さんとのペアで全日本優勝を始め無敵。海外の大会でも強豪を次々破り、「ひょっとしたら俺ら強いかも」と2人で言い合うほど自信を深めていた。

そんな中めぐってきた豪州戦。29歳の河盛さんはチーム最年長。監督は同級生の渡辺さんだった。「僕さえおさえておけば若手にもおさえがきくと思ったんでしょう。僕には厳しかった」。

初日のシングルスで柳恵誌郎さんと坂井利郎さんが2勝を挙げ「快挙まであと1勝」に迫った。「勝てると思ってコートに入りましたよ。プレッシャーはなかったけど、ファーストはものすごい気負ってしまった」。セカンドから本来のプレーを取り戻したが、惜しくも敗退。だが、坂井さんが2日かかりで勝って50年ぶりに豪州戦勝利を決めた。

「僕たちは負けましたが、感激しましたね。チームが良かったと思います。試合に出ない選手がスピードサーブ攻略のため、サービスラインからサーブを打つなど練習台になってくれたしね」。

豪州戦勝利の後、周囲の見る目も変わったという。ヨーロッパ遠征に行くと、他の選手が「グレートデビスカップが来たから席を譲れ」と席をあけてくれたこともあった。

「僕は周りにすごく恵まれた。絶えずライバルがいたし、先輩たちもよくめんどろみでくれた。『テニスの河盛』というのは引退後もついてまわって仕事にも生きた」。

引退後もテニスで得た経験が、河盛さんを支えている。



上記文面は日本テニス協会ホームページ（広報部・長野宏美）より引用させていただきました

本文と掲載写真は必ずしも関係あるものではありません

※引用元：日本テニス協会公式サイト「テニスミュージアム」『思い出に残るあの試合』2023年10月11日
<https://www.jta-tennis.or.jp/history/tabid/266/Default.aspx>

松岡功先輩の思い出

私が新制甲南大学テニス部に入学したのは、昭和29年(1954年)大阪府立池田高校より(スポーツ枠第一号)として入学しました。松岡功先輩の1年後輩に当たります。今回表題の件に関し、編集委員の方からの寄稿を依頼され、又松岡功先輩のご了解も得ましたので、誠に僭越ではございますが、松岡功先輩にご指導いただいた3年間のテニス部時代を(ON・OFF)に分けて思い出すままに綴り、寄稿させていただきます。

【松岡功先輩(以下「先輩」)とのONとOFF】

1) ON-の思い出

先輩は甲南学園幼稚園に入園してから、小・中・高・新制大学卒業に至るまで生粋の“甲南ボーイ”です。テニスは中学時代より始められ、ジュニア時代には教々のシングルス・ダブルスに優勝の実績を持ち、大学では全日本学生テニス選手権大会において、2回生時にはダブルス優勝(パートナー 小林要氏)、3回生時シングルス・ダブルス優勝、4回生時ダブルス優勝し、全日本学生ランキング一位となり、昭和31年(1956年)デビスカップ日本代表選手に選出されました。

関西学生から初めてであり、勿論甲南大学テニス部始まって以来の歴史的快挙であり、我々部員一同の誇りでありました。180センチ以上の長身より繰り出す強烈なサーブとそれに伴うネットプレーは、当時の大学テニスのグランドストロークを主体とする、どちらかと言うと“粘りのテニススタイル”より“サーブ&ボレー”の攻撃的なテニススタイルに変わる近代テニスへの第一人者の出現であると、大きく評されました。その後日本代表選手としてインドネシア・フィリピン等国際試合にも数多く出場、活躍されました。

尚、先輩のデ杯戦参加により、その年の我々テニス部の最も重要な全日本学生対抗王座決定戦の優勝の可能性が有る千載一遇のチャンスであった年で有りましたが、日程が重なり出場出来ず、優勝戦で関西学院大学に敗れたことは残念で有りました。尚、本件については2016年6月日本経済新聞にご自身寄稿の「私の履歴書」にも述べておられます。

2) OFF-の思い出

先輩の4年生主将時、部内に於いてOFFの過ごし方は比較的開放的であり、禁煙以外には特に厳しい規則は無く、一言でいえばテニスの練習、試合に基づく実績を出しておればかなり自由でありました。パチンコ・麻雀・アルコール等はご自身も強く、我々後輩も共に結構楽しく影響を受けました。個人的なエピソードの一つとして当時某ウキスキーメーカーのセールスキャンペーンにて「トリスを飲んでハワイに行こう」というCMが流行し、調子に乗って飲み過ぎたにも関わらず、ある日に何杯飲みました、と報告することも多々有りました。(当時トリスハイボールは1杯50円)軽く10杯以上飲んでました。先輩もご多分に漏れずお酒は相応に楽しまれていたので鷹揚な気持ちで聞いてもらえていたのでしょう。又、練習後には神戸三宮界隈の居酒屋や屋台で共に飲み過ぎ、乗り継ぎ終電間に間に合わず先輩の芦屋のご自宅に泊めていただく羽目になり、ご家族にご迷惑をおかけした事も度々あり、懐かしく思い出されます。OFFの時のご指導は私の後の社会生活に於いて人間関係の構築に大いに役立ったと自負し、感謝しております。

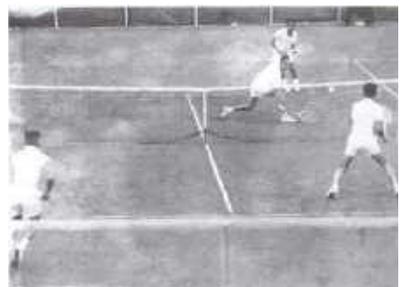
先輩のご卒業後は社業に専念される為、対外的なテニスは一切辞められましたが、ご子息お二人を学生テニス選手に育てられ、特にご次男の修造氏はプロテニスプレイヤーとして世界の舞台で活躍されたことは周知の事実では在りませんが、先輩のご次男という事は余り知られていない様に存じますので、ここで改めてご披露させていただきます。

尚、先輩ご自身は株式会社東宝に入社後42歳にて社長に就任され、その後会長、名誉会長として日本の映画、演劇界を牽引されました。

先輩とご家族の今後益々のご健勝をお祈りしつつ、拙い文章ではございますが、先輩の思い出話とさせていただきます。



▲ 向かって右が松岡先輩(4回生時)
左が小生(3回生時) 甲南テニスクラブにて



▲ 日比對抗戦(昭和30年6月) 毎日新聞提供
手前:(右)松岡、(左)加茂選手
相手:アンボン、ホセ選手

小林 功とのダブルス

「コバン」こと小林功とは独特のダブルスだった。

甲南中学一年に入学し、テニス部に入部するまでコバンとは一面識もなし。小学校から一緒に同じデ杯選手になった河盛純造とはまったく異なる。

この時からコバンが49歳の短い生涯を閉じるまで、中学、高校、大学、会社と36年間を共に過ごした。

甲南中学テニス部に入部した時からコバンのテニスはオーソドックスなテニスで流れるようなフォームが印象的でメキメキと頭角を現し、1956年、中学3年生で小柄な吉田泰忠とダブルスを組み、全日本ボーイズ（ジュニアで15歳以下）で東京の神童との噂が高かった渡辺功、力兄弟を5-7 6-1 6-4で破り優勝して全国にその名を知らしめた。

この時同じ甲南の同期の松本鐵一がシングルスで渡辺功に敗れ準優勝している。

3年後の1959年、コバンは、今度は松本鐵一と組みインターハイのダブルスを制した。

この後、松本鐵一、吉田泰忠の両選手は慶応義塾大学に進学、この時点から遂に私とコバンとのペアが誕生する。しかしなかなか勝てない。二人の意気が統合して盛り上がるのがなかなかないのだ。ここぞというところでも何かお互い冷めていた記憶がある。

普段の生活でもそうだった。コバンは大の読書好きでどんなジャンルの本でも熱心に没頭する。あるときは天文学に熱中したり、ある時は井上靖の小説を読み漁ったり、そして単行本で時代小説の著者を選ぶとそればかりを読む。遠征で新幹線に隣り合わせで座っても東京～大阪間一言も喋らないことが多かった。しかしながらそれを気にしない関係で、お互いそんなもんだと割り切っていた。彼はパチンコはじめ麻雀などの勝負事が好きだったが、この時代からポーカーフェイスを学んだのだろうか。

現代のテニスは、男子ダブルスでも1ポイントごとにハンドタッチして次のポイントの作戦を囁きあっている。男がチャラチャラしてみっともないと昔の人間だから思うのかも知れないが、私とコバンとのダブルスはこれとは正反対。オンコートで話し合うこともなければ、「ナイスショット!」、「ドンマイ!」などという誉め言葉も慰めも掛け合わない。パートナーのモチベーションを高めようという意識もない。とにかく冷静にその時の戦況を分析しているだけなのだ。それでも二人でインカレダブルスを制した。それほど感動するでもなく、大喜びすることもなく、勝って当然というような表情を残しながら。

昔はサインも相談もしないダブルスペアが存在した。メキシコのオスナ・パラフォックス組、オーストラリアのエマソン・ストーレ組などがそれで、見ていて実に面白かった。阿吽の呼吸でポーチに出、パートナーはその穴



を見事にカバーする。目まぐるしく左右に交互に動くダブルスを見てこれこそ本当のパートナーシップだと感動した。コバンの兄上小林要先輩と松岡功先輩のダブルスもそうではなかったかと想像する。

今のダブルスは作戦に時間がかかり過ぎる。だから時短のためにファイナルセットタイプブレイク方式など採用して伝統を破壊する。コバンとのダブルスは伝統破壊に加担しなかったことを誇りとしている。

デビスカップ元日本代表選手への想い

10回 高校・大学 1964年卒 渡辺康二

甲南高校 生涯テニス人生

甲子園球場の近くで生まれ育った私は、言わずと知れた野球少年。しかし、実は親父が大のテニス好きで、テニスをやりたい一心で甲子園球場の隣にある甲子園テニスクラブの近くに居を構えていたのである。我流でプレーする父に、毎週日曜日の夕方に甲子園テニスクラブに来るように言われ、テニスの手ほどきを受けたのが始まりだ。

市民大会、県大会で負け知らずで優勝して来た私が近畿大会の準々決勝でデラニーというアメリカ人にファイナル8-10で負けた。初めて負けたその時の悔しさとテニスの面白さを知り、絶対にテニスでトップになってやるぞとメラメラした気持ちが湧いてきた。六甲学院中等部に通っていた私は、このまま国立大学に進むべく勉強をしていたが、人生の方向をすっかり変更。

テニスと言えば名門「甲南」。この時私のテニス人生の幕があき、甲南高校、早稲田大学と進むことになる。力量発揮し始めたのは高校2年生の時のインターハイからであった。

インターハイでシングルスベスト4、ダブルスで準優勝、アジアジュニアシングルス優勝のタイトルを持って早稲田大学へ。

人生の指針を決めたテニスの礎は甲南時代と言って過言ではない。

早稲田大学は当時も強く、全日本に出場している選手が数多くおり、私は365日テニスづけ。1年生の時は家に帰らず汚い部室で寝泊まりしていた。

OBでもありデビスカップ選手の坂井利郎さんもよくテニスコートに来て下さり、練習をして頂いた。強くなる環境が整っていた。

私が4年生の時に、高校3年間無敗の福井烈君が柳川から筑波大学に入学してきた。噂通りの力を持っており、インカレ優勝してもおかしくない選手。しかし1年生に負けるわけにはいかない、絶対にインカレのチャンピオンになってやるという気持ちの高まりがシングルス優勝に繋がった。私にとってインカレ単複優勝が、プロの選手になれるのではないかと思うようになったきっかけであった。

トッププロの神和住純さんに勝てたら、との約束で堤義明さんにお世話になり西武と契約。プロになった。全日本選手権シングルス優勝2回、ダブルス優勝3回、ミックスダブルス優勝1回出来た。また10年間デ杯の代表選手として活躍出来た事は私の誇りだ。



▲ 本人：右から2人目
堤義明氏：右から4人目。西尾選手の左横は坂井利郎氏。



▲ ビヨンボルグと対戦

ウィンブルドンの本戦でテニスの聖地、芝のコートの上に立った時の興奮は忘れられない。今年もウィンブルドンに行って来た。世界No1に君臨していたビヨンボルグと戦った事もあった。

野心を持って、夢を持って、ガムシャラに練習をしたこと、チャンスを掴んだと思った時に自分を信じて勝ちにいったことが良かったのではな

いだろうか。夢を叶えることは、本当に大変だと思うが、トライしないことには叶えられない。

生涯現役。これからもずっと体を鍛えてテニスをやっていきたい。



▲ ウィンブルドンにて

海外遠征奮闘記

8回 高校・大学 1962年卒 藤井道雄

(1962・63年ウインブルドン出場)

ウインブルドンの思い出

2011年、今年のウインブルドン大会も終わりました。御承知の通り、男子はセルビアの24歳、ノバク・ジョコビッチが、女子はチェコの21歳、ペトラ・クビトバがそれぞれ、シングルスに優勝しましたね！私もテレビで観戦しましたが、素晴らしい内容の試合でした。このグラスホッパーの試合に出ておられる方もテレビで見られ、そして感激された事と思います。将来は自分もあのような選手になりたいと、きっと思われたことでしょう。

私がウインブルドンに初めて出場したのは1962年、今から49年前ことです。皆さんのおじいちゃん、おばあちゃんの時のことです。今の時代のジェット機はまだ飛んでいません。〇〇のプロペラ機が就航したばかり。日本の羽田から出発し、南周りで香港、ラングーン、バンコック、カルカッタと4,5時間毎に給油しながら次々と停まり、丸2日間かけてイギリス、ロンドンに着きました。

そして前哨戦（ウインブルドンのグラスコートに備えるためロンドン郊外で行なわれる大会）に出場。いきなり決勝に進出したのです。そして決勝戦ではパートナーの石黒修氏（第4回のウインブルドンの思い出に寄稿されています）と戦いました。そして次の週に私は、バンク・オブ・イングランドで行なわれたウインブルドン予選に出場しました。ベスト・オブ・5セットマッチを3回戦い、やっと勝って本戦入りを果たしました。初めてのウインブルドン挑戦で、本戦に出場。本当に嬉しかったのを覚えています。しかしそれには後日談がありました。グラスコートではネットプレーが有利。前哨戦、予選と、くる日もくる日もサーブ・アンド・ネットを続けてきました。僕の肩は極度に疲労。肝心の本戦の1回戦でついに肩がさがらなくなってしまいました。

1回戦で英国のデ杯選手であるトニー・ピッカードと対戦しましたが、第1セットを6-2で僕が取って、第2セットに入ってついに肩がさがらなく、下からアンダーサーブをしました。その時運悪く、英国の新聞記者が見ていました。ウインブルドン史上、初めて日本人のプレーヤーがアンダーサーブをしたと翌日の新聞に出てしまいました。結局第4セットでトニー・ピッカード選手に負けてしまいましたが、アンダーサーブした選手はウインブルドン歴史上、僕が初めてとのことです。

今回「グラスホッパー全国ジュニアテニス IN 佐賀」に出場している皆さん！

皆さんもグラスコートで初めて、という方も多いと思います。将来ウインブルドンでプレーする事を夢見て、思う存分芝生のうえでプレーしてください。その時に素晴らしい、この芝生の上でプレー出来る事に感謝の心を持ってください。グラスコート佐賀テニスクラブの方々が一生懸命芝生のコートを守ってくださっています。それらの方々への感謝の心を忘れないで、プレーを楽しんでください。御健闘を祈っています。

（グラスコート佐賀テニスクラブで行われた14才以下の「グラスホッパー大会」に寄稿）



▲ウインブルドン前哨戦で石黒さんとの決勝戦前に

沢松姉妹 河盛夫妻との欧州遠征

沢松姉妹とは1968年、1969年と二度にわたり欧州ツアーを一緒した。

沢松家と渡辺家はテニスでは面白い縁があり、沢松姉妹の叔父様（父豊様の実弟）にあたる沢松正さんと私の兄の健一は灘中時代にダブルスを組み、1946年の第36回全国中学校庭球選手権大会（現インターハイ）で優勝している。ちなみに1948年の第38回全国高等学校庭球選手権大会（この年から全国高校と名称が変わり、女子の第1回大会単複が新設された。）の女子シングルス優勝者は田村（現姓：重光）知津子さん（甲南女子高校）。まさに歴史的な第1回大会の優勝者が甲南の女子高校生であったというのは甲南の永遠の誇りである。

沢松姉妹の姉順子は妹和子の面倒をすごくよく見る母親のような姉だった。和子は未だ17歳のジュニア。あんな立派な体つきなのにチーズをはじめ乳製品はすべて嫌い。飛行機の中ではどんなに長いフライトでもほとんど食事は摂らない。なかなか厄介な子だったが、お姉さんは常に何かしらの食べ物を持ち、妹のお腹具合を気遣っていた。

1968年、この年は渡辺功君と共に沢松姉妹の引率者の役柄もあり、日本を出発はしたものの、パリがゼネストのため全仏を断念。いきなりウィンブルドンの前哨戦の芝生の大会から出場することになった。

第1戦、ロンドン郊外のLowser大会で和子と混合複を組みいきなり初優勝と実に幸先良いスタートを切った。ロンドンの民宿たるBed&Breakfast（1泊1ポンド=1,000円）に泊まりながら大会さし迎えるのベントレーでコートに通う毎日。賑やかで楽しい日々だった。

1969年、私にとっては6回目の欧州挑戦。この年は小学校から一緒に河盛純造夫妻が加わり、私も新婚で妻帯ツアー、二夫婦、一姉妹の団体転戦となった。ツアー2年目となった和子は、いきなり全仏ジュニア、続くウィンブルドンジュニアでもそれぞれ単優勝と破竹の勢いを発揮した。家族同伴というのは実に心強いというか、落ち着いてテニスに集中できることを初めて知った。

この年私は単で3回、河盛との複でも3回、和子との混合でも1回優勝を果たした。中でも全英、ウィンブルドンの混合では3回勝ち抜き、第1シードのマーガレット・スマス／ケン・フレッチャー組に敗れたがベスト8の成績を残した。私と和子のコンビは続き、この年は実に9大会に出場した。日本選手はみんなアマチュアで、賞金目当てではなかったが3種目にエントリーするのが常識だった。

後に知ったのだが、グランドスラム（GS）大会では、「The last eight club」なるものが存在する。ウィンブルドンが100回大会（1986年）を記念して創設したベスト8以上の記録を残したものだけが受けられる名誉ある会員の称号だ。GSの中ではウィンブルドンが最高級のもてなしとの評価があり、この資格を持つ者には、生涯の観戦チケットと専用レストランが保障されているという。

えっ！ということは我々も資格あり？ 全豪も石黒修さんと組んでベスト8だ。と喜んだが早とちりだった。この資格の条件は、単でベスト8以上、複ではベスト4以上、混合複では決勝進出者だけが自動的に会員登録となるとのこと。ただ、和子は、その後1975年アン・清村と組んでダブルスに優勝、堂々と日本人の最も古いラストエイト会会員として燦然と輝きながら今に至っている。ウィンブルドンでは、男子では松岡修造、錦織圭、女子では和子の他伊達、杉山、青山、二宮、柴原が資格保持者だ。

我がオール甲南テニスクラブからも早くラストエイトクラブ会員が生まれないうものだろうか。同伴して思い切りウィンブルドンを楽しみたいものだ。



▲ 1969年ウィンブルドン
混合複3回戦でブラジル組に勝ってコート
を後にする渡辺・沢松（和）組（現・吉田）



▲ 1969年欧州遠征の日本チーム
後列左から2人目 渡辺 康二
前列左端 河盛 純造 左から4人目 沢松 和子



初の海外派遣選手としてオレンジボウル出場

昭和34(1959)年12月、日本テニス協会からの戦後初の海外派遣選手として米国フロリダ州、マイアミで年末年初開かれているオレンジボウル(個人戦)とオレンジカップ(団体戦)に参加しました。(注:オレンジカップの現在の大会名はサンシャインカップ)

出発が12月20日、帰国が翌、昭和35年1月27日。40日間近くにわたる大型海外遠征でした。日本テニス協会からは航空券と50ドルが支給されました。一緒に行ったのは菅(現姓:森)清吉さん(当時、法政大学1年)でした。菅さんは前年(昭和33年)のインターハイ優勝、私は昭和34年のインターハイと全日本ジュニアに優勝した事で選ばれました。忘れていましたが、高校の卒業アルバムに、高校グラウンドに全校生徒集合で立派な壮行会をやっていたという写真が載っていて、日本代表選手として参加していたんだと改めて感じいったことでした。

宿泊先はマイアミビーチのプール付きの豪華な邸宅でのホームステイ。親切なご夫婦に食事、送迎等大変お世話になりました。Miami Univ.の女性、また神戸女学院で英語教師をしていたという老夫婦が応援に来てくださいました。マイアミで日本人に出会うのは初めてと云われ驚きました。晩餐会が度々あり、持参した略礼服を着用し、多くの美女に囲まれ、大変楽しいひと時を過ごしました。

戦績は下記の通りでした。

会場:Flamingo Park at Miami in Florida

◆ORANGE BOWL from Dec.29,1959

△Junior Boys'Singles

・First Round

T.Mtsumoto d. JurioVon KherKovan(Arg.) 6-4, 6-1

・Second Round

Seikichi Suga d. Antonio Domadio(Mex.) 6-0, 6-1

Bo Larssen(Swed.) d. Matsumoto 6-3, 1-6, 7-5

・Third Round

Suga d. Hammil(So. Afr) 6-2, 6-3

・Fourth Round

Suga d. Schunuk(USA) 6-4, 4-6, 6-4

・Quarter Final

Juan Gisbert (Spa.) d. Suga 6-0, 6-0

△Junior Boys'Doubles

・Second Round

Matsumoto-Suga d. Shneider-Nijboer(Denm.)

14-12, 3-6, 6-3

・Third Round

Matsumoto-Suga d. Carlstein-Olsson 6-3, 6-1

・Quarter Final

Mandelstarm-Hammill(So.Afr) d. Matsumoto-Suga

6-3, 6-2

◆ORANGE CUP from Jan.3.1960

・Second Round

JAPAN d. DENMARK 3-0

Suga d. Vaupel 6-0, 5-0

Matsumoto d. Larsen 6-1, 6-2

Suga-Matsumoto d. Vaupel-Larsen 7-5, 6-2

・Quarter Final JAPAN d. SWEDEN 2-1

Suga d. Land 6-3, 6-2

Larssen d. Matsumoto 3-6, 6-3, 6-1

Suga-Matsumoto d. Land-Larssen 6-1, 6-2

・Semi Final SPAIN d. JAPAN 3-0

Arilla d. Suga 6-3, 6-1

Gisbert d. Matsumoto 6-4, 6-0

Arilla-Gisbert d. Suga-Matsumoto 6-1, 6-2

ORANGE CUPの参加国20ヵ国(北・中・南アメリカ10ヵ国、欧州8ヵ国、南アフリカと日本)の中で準決勝まで戦えたのは、菅清吉選手の功績が大きいとは云え、よく頑張ったと自負しております。

その後バス(99days 99dollars)でタンパ、オーランドに移動し、Senior Tournamentに参加しましたが、2~3回戦で敗退。大学受験もあり、已む無く残念ながら帰国せざる得なくなったと記憶しております。



▲ 高校グラウンドで行なわれた壮行会
花束を受け取る松本選手



▲ マイアミへ出発
(左・菅選手 右・松本選手)



▲ 帰国時 マイアミ国際空港にて
左端: オレンジボウルの創始者
エディー・ハー大会会長
松本選手の両サイド: ホームステイ先のご夫妻

オーストラリアオープン遠征

甲南学園テニス部100周年おめでとうございます。中学・高校・大学10年間お世話になり、1966年に卒業しました。

オーストラリアオープンに出場したのは60年位前の事で忘れていた事も多々あり、思い出す事を当時の日本のテニスとオーストラリアのテニスの状況を報告させていただきます。

大学3年時、1964年12月から2月上旬迄、日本テニス代表強化選手として、石黒さん（甲南OB）、（渡辺さん甲南OB）、他2名と私との5名（学生は私だけです）遠征しました。

当時は直行便はなく、香港、マニラ経由でシドニーに着きました。甲南の先輩2名おられましたので大変心強かったです。当時オーストラリアはテニス王国と言われ、世界ナンバーワンの国でした。写真とかテレビでしか見た事のない世界のトッププレーヤーが目の前で練習。試合を見て感動しました。

当時は1ドル360円固定の時代でお金の持ち出しも厳しく制限されており、あまり余裕のない遠征ですが、一番若かったので楽しくて仕方ありませんでした。宿泊も小さなビジネスホテルか民宿の様な所で、ホテルでは3人同室で、私はラッキーな事に最年長者（キャプテン）と同室で、付き人の様な感じで色々用事もしましたが、石黒さんは国際大会の経験も多く、色々教えて頂き勉強になりました。以後も長年お世話になりました。

英国領でもあったので英国色が強く、広大な国土、自然が豊かでのんびりしていました。当時の人口は1000万人位です。日本は1億人位だったと思います。毎日の行動は電車、バス、歩くか、タクシーに乗った記憶はありません。1月下旬のオープンの試合までは広い国土の中、毎週のように各地で試合があり、色々な場所に行きました。ローカルの試合で芝生のコートに慣れる迄が大変で、若い選手（17才から18才）に敗けて先輩から叱咤激励され、次の試合までよく練習しましたが、オーストラリアでは15才から16才位の選手がプロを目指して厳しい練習をしていました。現在の日本の選手の様ですが、日本は40年位遅れている様に思います。

オーストラリアに在住している日本人は少なく、時々、商社の人々が応援に来て、バーベキューパーティー等に招待して頂きました。メルボルンでは正月（1月1日）に領事館でお祝いし、美味しい食事を頂いたのもよい思い出です。

オーストラリアオープンは1965年1月下旬、メルボルン郊外の名門クーヨンテニスクラブ（芝生コート）で開催されました。会場までは電車で駅からゆっくり歩いていきました。テニスはオーストラリアでは大変人気のあるスポーツで、多くの人々が試合を見に来ていました。1回戦で世界のトッププレイヤーと対戦して完敗し、唖然としました。あの様なレベルの高い所で試合をして、又練習をしないと強くなれないとも思いました。

以後ずっと芝生コートでしたが、オーストラリアオープンは1988年からメルボルン市内のダウンタウンの近くの広大な公園の中にあるメルボルン・パーク・ナショナルテニスセンターに移転し、長年の芝生コートからハードコートに変わりました。

先輩の方々と一緒に行動させて頂き、70日位の長い遠征でしたが、楽しい思い出しか残っていない、私のテニス人生の中貴重な経験でした。4名の先輩の方々に感謝して終わらせて頂きます。

甲南のテニス部が再び日本一になる事を夢見ています。



▲ 海外でも活躍された浅井選手のフォアハンド



▲ 浅井さんが出場した全豪オープン会場の近影

眞野邦彦さんの思い出

眞野邦彦さんとは中学1年から大学4年までの10年間、一緒にテニス部でまさに暮らしていました。

学生時代にはダブルスを組んでいたことがあり、彼は小さな身体に元気一杯のプレイをするのですが、プレイスタイルは私と同様に粘りが身上でした。

私は「負けるかもと思ったら絶対に勝てない」ので相手のミスを待つプレイをしていましたが、彼は少し違って「勝てない」と思うと一転、攻撃的なプレイをします。

結果は同じかもしれませんが、普段練習を積んでいないプレイはミスが多く自ら負けてしまうようで、格上と思われるペアには歯が立たなかったことを思い出します。

大学卒業後は眞野さんは東京勤務が長く、顔を合わせる機会も少なくなりました。

彼は大先輩の多い東京のテニス部OB会で先輩の皆さんのお世話役を務めておられ、私と東京在住の先輩との絆をつくることができたのは彼のおかげと、感謝しています。

また、私がオール甲南テニスクラブの副会長を務めていた時に、OB会の運営が難しい事態が発生し、OB会幹部を一新することになりましたが、丁度、眞野さんが神戸に戻っておられたこともあり、私の後任を引き受けて、OB会の責務である学生達を支援することに率先して行動し、見事にOB会をとりまとめられました。

学生達の相談相手となり就職活動にも尽力され、多くの学生達から慕われる存在でした。

同時に大学テニス部同期会のお世話役も独りでこなし、全員の近況を確認し男女合わせて15名ほどの食事会を手配してくれていました。

神戸に戻られてからはご両親の介護で大変な中、皆んなのお世話役に奮闘され、体力的にも精神的にも厳しかったように思いつつ、懸命に生きていた眞野さんに心から感謝し、追悼の言葉とします。

ありがとう！



▲ 13回同期と



▲ 眞野さん、片山さん、甲斐さん

阪神淡路大震災の中での部活動 ～日常の当たり前を大切に～

甲南学園硬式庭球部創部100周年おめでとうございます。このような歴史のあるクラブで一時期を過ごせたことは、私の中で大きな財産となっています。現役を卒業して30年近く経過していますが、この4年を一緒に過ごした同期、先輩、後輩はもちろん、世代を超えて先輩、後輩との強い繋がりを強く感じ、私の人生の中でも大きな柱の1つになっています。

今回、本寄稿文の依頼を受け、改めてですが、現役だった頃の4年間を振り返ってみました。そうすると、他の年代と比較すると色々な“変化”を経験した代だったと感じました。

まず、1年生の時には関西リーグが4校制から6校制になり、1部6位が自動降格（入替戦なし）、試合も5セットから3セットへ、また4月開催が9月開催へと大きな変更がありました。今から思えば、この6校制への変更がなければ、間違いなく2部に降格していたと思いますし、3年生の時の王座出場もなかったのでは?と思います。

そして、我々の代からスポーツ推薦が始まりました。この制度は今では当たり前のようですが、当時は推薦制度がなく、甲南中高出身者が中心でしたが、外部の部員が増える大きなきっかけになったと思います。

更に練習環境も大きく変わりました。2年生までは岡本本校近くの西校舎の下にあったツルツルのハードコート3面だったのが、3年生からは現在の六甲アイランド施設に変わりました。当時はリーグ戦がオムニコートで行われることもあり、オムニコート3面でした（現在はハードコート5面）。

そして3年生の1月17日に犠牲者約6,000名を出した阪神淡路大震災という、これまでにない大災害を経験しました。大学ではこの時期、後期試験直前で、普段ただでさえ授業に出ていない（正確には出してもらえない）ので、無事卒業できるかが決まる大事な時期でした。また当時は、12月初旬に開催されていた「関西学生室内選手権」が終了すると、1月末まで長期オフでしたので、全くテニスははしておらず、この1か月半は束の間の「普通の学生生活」をエンジョイできる唯一の時期でした。地震の前日も、翌日の試験に備えて、同じ学部の友人を頼って御影の下宿に泊めてもらい、まじめに直前の追い込みの勉強を朝の3時ぐらいまでやっていました。そして、寝た直後に地震に襲われました。比較的頑丈な建物だったので倒壊はありませんでしたが、御影周辺は地震の影響が大きかった地域でしたので、古い住宅だったら、と思うと背筋が凍る思いです。当時スマホはありませんから、この段階では町全体がどうなっているかなど、全く想像もつきませんでした。ただ、外に出ると近くの建物の多くが倒壊し、御影周辺はコンビナートが爆発するなどの噂も流れ、近くの小学校に一時避難するという経験もしました。何とか2日後に実家に帰れましたが、帰宅後、テレビで初めて神戸の様子を見て愕然とした記憶があります（写真は三宮）。

例年、部活は2月1日から始まる予定でしたが、電車が動いていないため、そもそもコートに行くことができず、集まれる人だけ（実際は全員来いという指示..）集まっただけの始動でした。2月はテニスができる状態ではなかったので、住吉川をひたすら走るだけという「陸上部か?」という期間が続きました（お陰で体力だけはつきました）。3月からはようやくテニスができるようになり、4月から入学する1年生も3月14日（当時1年だった片山談）から練習に参加しました。卒業式は無事開催された（写真ご参照）のですが、入学式は4月中旬まで延長されたようです。また、大学の建物も多くが損壊していたため、本校のグラウンドに、当時「サティアン」と呼んでいた仮設の教室が建てられて、しばらく（といってもその後3年）はそこでの授業でした。4月になると少しずつ日



▲ 地震後の三宮（建物が傾いているのが分かります）

常を取り戻しつつありましたが、足元を見ると倒壊したままの家がまだまだ残っていたり、六甲アイランドには仮設住宅が立ち並び、これまでの日常とはかけ離れた状態でした。「これまで当たり前であったものがそうで無くなってしまう」。地震は、そのような感覚を実際に味わう初めての機会になりました。

幸い、神戸以外の地域は正常でしたので、その後、春関、当時あった新人歓迎合宿@六甲山（恒例だった仮装はなし）、学習院戦、東京遠征、夏関、インカレからリーグ戦まで、全ての行事、試合が通常通り行えたのは、今思えばラッキーだったかもしれません。今と比べて比較のおおらかな空気があったことが、このような状況であってもテニスができた要因ではないでしょうか？

ここ数年、Covid19によるパンデミックが発生し、我々が体験した地震以上に当たり前だったものがそうで無くなってしまったという経験を、最近の卒業生や現役はしたと思います。普通に大学に通い、部活動をし、試合に出場できること、また好きな時に会いたい人にとって食事をする、旅行をするなど、平凡な日常が、実は当たり前ではなく、すごく大切であることを私自身も改めて気づかされました。

4年間は長いようですが、あっという間です。伝統のある硬式庭球部で過ごせるこの貴重な時間、テニスだけに集中できる時間を「当たり前」だと思わずに、同じ目標を目指している仲間達と、一生の思い出に残るような時間を過ごして欲しいと思います。もちろん良い思い出ばかりではなく、理不尽なこともあります。それも後になると話のネタになり、お酒のつまみになり、いつでも当時に戻れて楽しいものです。因みに我々が当時の話をするときには、ほとんどが理不尽だったなあという話ばかりで、リーグ前日に1年全員、見せしめ坊主になったり、某先輩が、いつも機嫌が悪い時に着ているTシャツを分からないように捨てたりとか、。是非、現役の皆さんにはそういった話が将来できるように、密な時間を過ごしてくれたらと思います。



▲ 地震直後の卒業式(当時の正装は中高と同じ学ランでした)



▲ 4年生の部員集合写真(この時のリーグウェアはリーボックでした)

コロナ禍での部活動

2020年から本格的に流行したコロナウイルスにより、当たり前に行われていた練習や試合の開催などが難しくなり、例年とは異なる部活の進め方をせざる得なくなりました。社会全体にとって全てが初めての出来事であり、多くのOBや学生部の支援をいただき、後輩にも協力を得た中での部活運営でした。例年と異なり悔しく、やりきれない思いも実際になかったわけではありませんが、同様に多くの方に応援していただいていたことと日常の活動に対する感謝を感じた期間でした。

100周年記念誌でコロナ禍での活動を今後の世代へと伝えるという目的で当時の状況や苦悩、またそこから得た後輩へのメッセージを中心として記載させていただきます。

まず当時の状況としては社会全体としてコロナへの対応の正解が全くない状況でした。実際に試合に影響が出たのは3月に行われた新進テニストーナメントからでした。大会前日まで開催の予定であり、実際に大会前日は部員とともに私も試合会場の万博テニスガーデンで調整を行っていた際に明日開催しないかもしれないといった情報が入り、実際に練習が終わる前に開催中止の決定が前日に急遽されました。普段の大会運営では前日に相談がなく開催自体の中止が発表されることはあり得ませんが、コロナ禍ではこのような運営が当たり前のようにありました。新進中止後の部活動や新進後の春闘、インカレ、リーグ戦など多くの大会が自分たちの意思や想いを伝えきれぬまま、開催可否が決定されることが多くありました。

特にリーグ戦の中止は私たち67回生のモチベーションに直結しました。私たち67回生は実力が追いついていない1回生から四宮総監督をはじめとした強化コーチ陣や65回生の吉田さんをはじめとした先輩たちに日頃から支えていただき、高校時の戦績では考えられない成長を支えていただいたので、王座出場によって返返しをしたいという想いが強くありました。個人でのインカレ出場や関西学生での上位進出など競技者にとって達成感を感じる瞬間はありますが、甲南大学硬式庭球部に所属し、リーグ戦に出場させていただき、チームに貢献することは他の瞬間と比較にならない程の達成感があり、引退をした今でもコートサイドをみた時のチームメイトの表情や、かけてもらった言葉は学生時代の思い出として残っています。競技人生の集大成として同期全員が考えていたリーグ戦の開催がなくなったことは、私たちにとって当時は目標がなくなったことに等しいものでした。個人でのインカレ開催は予定されていたが、当時の私たちにとってリーグ戦への想いは大きなものであり、その想いは現在も変わっていないことを願っています。

コロナ禍により通常の活動ができずに悔しい想いも多くありましたが、同様に多くの学びもありました。コロナ禍では通常の1日練習が認められず、1面4人までの2時間が最大練習時間であり、当然その時間だけでは足りない判断し、部員全員でランニングアプリを入れて練習後の自主トレーニングやオンラインでのWEBミーティングを実施しました。実際に自分も主将をするまでは他人に全く興味がなく、意味のないトレーニングの共有や時間の共有は大嫌いでしたが、この期間での経験で大きく価値観が変わりました。ひとりで自分に負けずに積み上げていく練習や努力も必ず意味のある重要なものですが、それ同様に切磋琢磨し、日々築き上げていく成果物にも大きな意味があると感じました。ひとりでは限界を決めてしまい、自分の可能性を活かしきれなかった選手もチームでの個人の目標管理と刺激により、大きな成果を残す選手が多くいました。実際にコロナ禍で行われた試合では、自分の中で本戦出場・インカレ出場が厳しいと予想していた選手が多く結果を残し、驚きとともに個人として多くの学びを得ました。当然ではありますが、結果報告では自分の成果であるように、最初から予定していたようにチーム運営がうまくいっていることを当時の四宮監督と平野コーチには行ったことは時効なので自白します。

最後に後輩へのメッセージとしては、毎日当たり前のように行われている練習や試合に対して感謝を忘れず、隣にいる同期や多くの指導や刺激を与えてくれる先輩、自分の背中をみている後輩を大切にしていきたいです。自分ひとりでは達成できない戦績や個人の成長も甲南大学硬式庭球部での繋がりを最大限活かせば、十分に達成できると思います。実際に私もコロナ禍で甲南大学のつながりの強さは強く感じました。いつか私たち67回生が達成できなかった王座出場及び古豪復活を果たし、毎年のように王座で戦う勇姿を目にできることを楽しみにしております。私も一人のOBとして微力ながら、支えていきますのでみなさまの活躍を期待しております。



女子マネージャーとしての4年間

皆様、創部100周年おめでとうございます。マネージャーという立場から4年間、活動に携わらせていただきましたこと、嬉しく思っております。

2014年に入部し、先輩方から教わりながら選手をサポートする中で、はじめは手探りではありましたが、次第にやりがいを感じることができました。

特に最後のリーグ戦、男子は1部リーグ4位、女子は2部リーグから1部に昇格することができ、男女両方の試合を間近で応援、サポートできたことが良い思い出です。

歴史ある甲南で、素晴らしい大学生活を送ることができたのも、先輩や後輩、OBOGの皆様のお力添えのおかげです。ありがとうございました。甲南大学硬式庭球部の今後ますますのご活躍を祈念しております。

(64回 篠倉(毎田)光)

受け継いでいきたい輪

創部100周年おめでとうございます。

私の甲南テニス部との出会いは、学生時代に何か打ち込めることをしたいというぼんやりとした気持ちで見学に行ったことでした。みんなスティックに練習に打ち込んでいながらも、和気藹々とした楽しい雰囲気があり、私もこの一員に加わってサポートできたらと思い入部を決めました。

毎日試合に向けてぎりぎりまで追い込み、疲れ切っている姿や、試合で一喜一憂しながら次に向けて努力する姿を見て日々過ごしていくうちに、サポートする側の私はたくさんの活力をもらっていたように思います。

最後のリーグ戦はコロナの流行により中止となり、選手がこれまで期待やプレッシャーを活力に変えて努力したのに目標を見失ってしまったのを目の当たりにしました。どう声を掛けたら良いのかわかりませんでしたが、それでも個人戦に向けて何とか気持ちを切り替えて選手たちは試合に全力を注いで、4年間の最後を締めくくってくれました。そんな選手たちとの関わり以外にも、月一回の常任委員会や様々な行事のお手伝いをさせていただくうちにOBOGの方々への甲南テニス部に対する深い思い入れや愛情に触れることもできました。

部活動で共に過ごした仲間たち、そして何十年とサポートをしてくださっているOBOGの方々との繋がりが私の大学生活での財産となりました。私もこれからOBOGの一員として甲南テニス部を応援していきたいと思えます。

今後もこの温かい繋がりを大切に、ますますの発展をお祈りしております。

(67回 上野 桃子)



▲ 67回同期と



▲ 後輩のマネージャーたちと

67回 64回
大学 大学
2021年卒 2018年卒
上野桃子 篠倉(毎田)光

11年振りの1部復帰

甲南学園硬式庭球部に関わる全ての皆様、この度は創部100周年誠におめでとうございます。11年ぶりの1部復帰につきましての思い出を振り返らせて頂くということで僣越ながらご指名頂きましたので、当時の主将として部員を代表してお話させていただきます。

私は中学から大学まで10年間甲南校でお世話になり、中学では全国中学生出場、高校では県総体ベスト4と6年間でも多くのことを学びました。

ご縁があり大学に進学した後も硬式庭球部に入部させて頂きましたが、高校までとは違い練習から試合の運営や遠征など学生が主体となる事が多くなり、全く新しいステージに来たという印象でした。先輩方のご指導のもと、我々も男女併せて13名で最上回生としてチームを引っ張っていく立場となりましたが、時代の変化もあり練習体制や時間など必然的に環境を変えなければならぬことも出て参りました。しかし学生の我々だけで変えられない部分もあり悩んでいる時期がございましたが、辻本豊様や眞野邦彦様をはじめOBの皆様方にも相談に乗って頂くこともできました。当時は良く言えば何か変革しなければ次のステップにいけないという感覚があり、自主的にチャレンジしたい部分も増え、宇津原監督をはじめOBの皆様方に意見を求める事があり、若気の至りからか未熟な部分も多くご迷惑をおかけしましたことこの場をお借りいたしましてお詫び申し上げます。大変申し訳ございませんでした。多くの経験からメンバーが責任感を持つことで一致団結したと感じておりますが、県外への遠征・合宿やアーバン六甲での猛練習・練習試合なども男女で協力し合い、リーグ戦を迎えることができました。試合前には4回生で住吉神社へ一部昇格祈願のためお参りにいったことも懐かしく思います。

例年に比べると関西学生本選出場者が増え、層が厚くなったこともあり2部1位で通過できると考えておりましたが現実はその簡単ではなく、2部2位という結果で1部5位の同志社大学との入れ替え戦に挑むこととなりました。そして2011年10月8日(土)舞洲、試合当日は陣と黙想を行い、気持ちの昂りと併せてどこか落ち着いた雰囲気です試合に入れました。戦略的にはダブルスは1-2になったとしてもシングルスで4本以上取れると想定していました。いずれも接戦で2-1になりそうでしたが、ダブルス終了時点では結果的に1-2とリードを許す展開に。3面進行ということもあり流れによっては3面とも勝利か、もしくは敗北かという一進一退の攻防でしたが、終盤S4の瀬古選手(当時1回生)が最終セット1-4からの逆転で勝利すると選手、応援団ともにボルテージが一段と上がった記憶があります。気づけば朝から始まった団体戦は日も暮れ、カウント4-4とS2沼野選手(当時2回生)の結果次第となりました。最後はオープンコートへのボレーで見事に勝利し5-4で11年ぶりの1部昇格を果たすことができました。あの時の光景は10年以上たった今でも鮮明に覚えておりますが、試合に出場した選手はもちろんですが、試合に出られなかったサポートメンバー、監督・コーチ・トレーナー・マネージャー・OBOGの皆様・そのご家族から多くの温かい応援やご支援をいただくことができこのような結果に繋がりました。改めて心より感謝申し上げます。

最後に現役部員の皆様へ、苦しい時や辛い時もあるかと存じますが、甲南で出会った仲間と助け合い悔いのない最高の学生生活にしてください。いつも応援しております。末筆ながらますますのご活躍をお祈り申し上げます。



▲ 住吉神社で一部昇格祈願



▲ 2011年1部リーグ昇格

最終学年で最初のシングルス本選 ～成し遂げたいことがあるとき～

今でも初めてシングルスで本選に上がった日のことは鮮明に覚えています。相手のマッチポイントをしのいだ瞬間、自分のマッチポイントを獲った瞬間、試合終わりの吊った手の感覚、ミーティングのため六アイへ戻るピーター車内の様子。人生のなかで最も心地よい日の一つです。

甲南の硬式庭球部は僕のなかで憧れでした。高校時代は同じ兵庫県内の仁川学院テニス部でした。もちろん仁川学院も大好きですが、団体戦で甲南高校の選手たちを見るたびに「なんて自由で楽しそうなんだ」と衝撃を受けていました。大学でもテニスをしたかったので、志望校は甲南大学の一択でした。

憧れの甲南大学硬式庭球部に入学してからはとにかく、本選を目指して練習しました。僕が思うに甲南大学の硬式庭球部は「自分次第」という要素が非常に強い環境だと感じます。サボっているからといって叱る顧問の先生もいなければ、OBさんやコーチも毎日いるわけではない。振り返ってみると100%の力を部活に注げていなかった時期もありました。2回生のとき、ペアの啓太とはじめてダブルスで本選に上がりました。すごく嬉しかったと同時に、シングルスでも本選に出たいという想いが強くなりました。しかし、思うように結果は出ず4回生になってしまいました。この学年で過ごした時間が、のちの自分の人生にも生きる貴重な時間でした。

引退後は留学することを決めていたので、就活に時間を割く必要がありませんでした。秀でた才能もなかった僕は「ラリーでミスをしたくないこと・必ず入るセカンドサーブ」だけに絞って練習しました。練習後は毎日納得がいくまでサーブを打ちました。同期の友人から練習後の食事などいろいろ誘ってもらったときは、めちゃくちゃ行ききたかったことも多々あります。ただ、シングルスで本選に上がるためにはこの楽しみをいま取るべきではないと思い断ってきました。この時の経験が、自分のなかで今でも生きています。「成し遂げたいことがあるとき、一心にそのことに向き合う」。これが甲南大学硬式庭球部を通して、僕が気付いた大切なことです。

結果的に4回生最後の夏関シングルスで本選に上がることができました。4時間ほど試合をしましたが自分から決めたポイントは3回ほどで、そのほかは相手のミスというなんともねちっこいテニスをあの炎天下でよくやっていたなと思います。

「成し遂げたいことがあるとき、一心にそのことに向き合う」。これを気付かせてもらった甲南大学硬式庭球部には本当に感謝しています。

これから先もTEAM KONANは僕にとって特別な存在です。100周年おめでとうございます。



▲ 最後のリーグ戦後に同期との一枚



▲ 女子リーグ戦応援後に同期との一枚



▲ 思い出が詰まった友人たちとの一枚

甲南テニスから学んだこと

私は中高大と甲南テニス部に所属し、中学では全国団体2連覇・個人ベスト16、高校では全国団体・個人ベスト4、大学では全国団体ベスト4・関西大会で個人2連覇、JTAの最高ランキングは37位等の戦績を残すことができました。

弁護士を志したのは大学3回生の時でした。小さい頃から、海外ツアーで活躍できるようなトップのプロ選手に憧れてはいましたが、「今の自分のレベルでは無理。テニスの替わりとなるような何か熱中できるものを」と考えた末「日本で最難関」といわれる司法試験への挑戦を決め、甲南大学法科大学院に進学しました。

最初は難解な理論や想像を絶する勉強範囲の広さを目の当たりにして「進む道を間違えたか」とも思いましたが、後に引くわけにもいかず、3年間、大晦日も元日も休むこともなく1日12時間、机に向かい、大学院修了後のその年に司法試験に一発合格することができました。

弁護士4年目の現在は大阪市内の法律事務所（弁護士法人朝日中央総合法律事務所）に所属し、裁判や交渉などの業務に日々奮闘しています。



法科大学院に進学する際、「合格するまではテニスをしない」と決めていましたので、司法試験の受験後、約3年半ぶりにテニスを再開したときは、軽くラリーするだけでも息が切れ、手の皮も捲れるため1時間以上は練習できない状態でした。

しかし、「趣味や娯楽としてではなく、競技としてのテニスを続けたい」との思いから、仕事に影響が無いように週末しか練習時間は確保することができませんが、短い時間の中で徐々にプレーの質を高めていきました。その結果、去年は栃木国体に兵庫県代表として出場し、ベスト8に入ることができました。

私は甲南学園の教育の基本方針である「人格の修養と健康の増進を重んじ、個性を尊重して各人の天賦の特性を伸張させる」という、学園創立者である平生鈺三郎の精神を学んできました。

その平生先生の残された「ことば」の一つに「人生三分論」があります。それは、人生を三期に分けて考えると、第一期は「教育を受ける時期」、第二期は「全力で働く時期」、第三期は「社会に奉仕する（蓄積した能力（や富）を社会に還元する）時期」というものです。

これを自分なりに考えてみると、「精神を学ぶ時期」、「社会に奉仕するための能力（や富）を蓄積する時期」、「蓄積した能力（や富）を社会に還元する時期」の三期に分けることができるのではないかと思います。

私は第一期として、テニスを通じて夢や目標を持つことの素晴らしさ、努力の仕方、自分を支えてくれる周囲のサポートの大切さ、現実の厳しさ等々を学ぶことができました。テニスを通じて学んだ精神は何を為す上でも活かされています。

現在は第二期に位置し、法律を学び、弁護士となって実務や様々な社会経験を日々蓄積しています。これからも様々なことに挑戦し、多くの経験を積みたいと思います。

第三期は将来の話になりますので、自分がどのような形で蓄積した能力(や富)を社会に還元することができるのか、これからゆっくと考えたいと思っています。

本稿をお読みいただいている方々は、上記の第一期から第三期にそれぞれ位置しておられることと思います。

学生においては、人物教育を何よりも尊重する甲南で、テニスという素晴らしいスポーツを通じて、「正志く 強く 朗らかに」社会を生き抜く精神を学んで欲しいと思います。

また、我々OBは、初心を忘れることなく、生き活きと社会で活躍することが、自分の人生を豊かにするとともに、後輩にも明るい道を指し示すことができるのではないかと思います。そして、蓄積した貴重な経験や能力を後輩に還元することにより、時代を経る度に甲南テニス部が益々発展するという連鎖が続けば素晴らしいと思います。

甲南テニス部100周年は、上記のような甲南テニス部の結束力を改めて強めることができる良い機会になることを願います。



甲南高等学校校歌

東京音楽学校教授 岡野 貞一／作曲

沈黙の鐘の鳴り響き
ほのぼの明くる朝ぼらけ
花雲宿る秀峰の
六甲の麓に霧はれて
緑の森に彩られ
しるくも浮ぶ学びの舎
鉄の腕を振りあげて
知徳の燈翳す時
崇き希望を歌ひつつ
わが世の森に分け入らば
未知の世界は開かれて
栄冠つひに吾がものぞ
いざや甲の緒を締めて
正義の下に戦わん
五百の健児集ひては
吾が白城の影深く
永久に大地に宿るべし
起て甲南の快男児
起て甲南の快男児

甲南学園歌

寿岳 文章／作詞
信時 潔／作曲

みはるかす 茅渚の海
日にひかり 雨にけむり
わこうどの 夢をさそつ
甲南 この学び舎
さわやかに 山のかげ
目にしたし 木々のみどり
わこうどの 心は澄む
甲南 この学び舎
わがみちを すすめとの
遺訓あり まもり活かす
わこうどの 誓い固し
甲南 この学び舎
世の常に 媚ふるなく
わがくるま 星につなぐ
わこうどの 誇り高し
甲南 この学び舎



戦績

BATTLE RECORD

■ デビスカップ

選手名	出場年度	戦績		監督歴
		シングルス	ダブルス	
伊藤 英吉	1933			
松岡 功	1956			
石黒 修	1958、1960、1961、1962、1963、1964、1965、1966	15勝16敗	4勝3敗	1965
藤井 道雄	1962、1963、1965	3勝0敗	0勝1敗	
渡辺 康二	1963、1964、1965、1966、1967、1968、1969、1970	18勝11敗	7勝4敗	1971~1974
小林 功	1967、1970	4勝2敗	1勝0敗	
河盛 純造	1969、1970、1971		2勝2敗	
西岡 茂之	1977、1978、1980、1981、1982、1983、1984、1985	6勝5敗	5勝2敗	

■ グランドスラム

選手名	年度	全豪	全仏	全英	全米
伊藤 英吉	1933		単 R16	単 R128 R64 (三木 龍喜)	単 R16
	1935			単 R128 R64 (C.Kingsley)	
	1936			単 R32 QF (M.Cuninggim)	
石黒 修	1961			単 R64	
	1962			単 R64 複 R64 (藤井 道雄)	
	1963			単 R32 複 R32 (藤井 道雄)	単 R64
	1964		単 R64	単 R128 複 R32 (E.Scott)	
	1965	単 R16 複 QF (渡辺 康二)	単 R64 複 R64 (渡辺 康二)	単 R128 複 R64 (渡辺 康二)	
1966	単 R48	単 R120 複 R32 (渡辺 康二)	単 R128 複 R64 (渡辺 康二)		
藤井 道雄	1962			単 R128 複 R64 (石黒 修)	
	1963			単 R128 複 R32 (石黒 修)	単 R64
	1964		単 R120		単 R64
渡辺 康二	1964		単 R64 複 R64 (小西)	単 予選	
	1965	単 R56 複 QF (石黒 修)	単 R120 複 R64 (石黒 修)	単 R128 複 R64 (石黒 修)	
	1966		単 R64 複 R32 (石黒 修)	単 R64 複 R64 (石黒 修)	
	1967		単 R120 複 R64 (渡辺 功)	単 R64	
	1968			単 R128 複 R64 (渡辺 功)	
	1969	単 R48 複 R32 (河盛 純造)	単 R128 複 R64 (河盛 純造) 混合 R64 (沢松和)	単 R64 複 R32 (河盛 純造) 混合 QF (沢松和)	
	1970		単 R128 複 R64 (九鬼) 混合 R32 (沢松和)	単 R128 複 R64 (九鬼) 混合 R80 (沢松和)	
1971			単 予選 複 R64 (柳)		
河盛 純造	1969		複 R64 (渡辺 康二) 混合 R64 (沢松順)	複 R32 (渡辺 康二)	
	1971		複 R64 (小浦)		
小林 功	1967		単 R120		
浅井 正順	1965	単 R56			
辻本 隆	1968	単 R64 複 R32 (緒方)			

世界ジュニア

選手名	年度	Orange Bowl			Wimbledon Jr.			Sunshine Cup (国別対抗戦)
		単	複	パートナー	単	複	パートナー	
平野 一斎	1957				QF			
松本 鐵一	1959	R64	QF	菅				松本・菅の日本チームQFでスペインに敗北
渡辺 康二	1960	R16	QF	田中				渡辺・田中の日本チームQFで豪州に敗北
吉田 昇生	1974	R64						吉田・江見の日本チーム1Rで英国に敗北
江見 浩平		R64						
吉田 昇生	1975	R32						吉田・江見の日本チーム1Rでウルグアイに敗北
江見 浩平		R32						
中西 伊知郎	1976	2R		米沢				中西・米沢の日本チーム1Rでイタリアに敗北
藤井 淳	1985							

全日本テニス選手権

		男子シングルス	男子ダブルス	女子シングルス	女子ダブルス
昭和2年	1927年	R64 伊藤 英吉			
昭和4年	1929年	R16 伊藤 英吉	QF 伊藤 英吉・福田(住吉ク)		
昭和5年	1930年	R32 伊藤 英吉			
昭和6年	1931年	R64 不破 栄一 R64 楠本 忠次	R16 不破 栄一・楠本 忠次		
昭和7年	1932年		R32 不破 栄一・光村 正一		
昭和8年	1933年		R32 片岡 一郎・不破 潤三		
昭和11年	1936年	R32 不破 潤三			
昭和14年	1939年	R64 大石 勝			
~~~~~					
昭和29年	1954年	R16 松岡 功 R32 石黒 修 R64 高石 勝	QF 松岡 功・小林 要 R32 清水 博一・松本 恭一		
昭和30年	1955年	R16 松岡 功 R32 小林 要 R32 傍士 俱明 R64 高石 勝 R64 松本 恭一	QF 松岡 功・小林 要 R16 高石 勝・傍士 俱明 R32 清水 博一・松本 恭一		
昭和31年	1956年	SF 松岡 功 QF 小林 要 R64 傍士 俱明 R64 高石 勝 R64 松本 恭一	SF 松岡 功・小林 要 R16 高石 勝・傍士 俱明		
昭和32年	1957年	R32 高石 勝 R64 傍士 俱明 R64 稲鍵 雄康	QF 高石 勝・傍士 俱明 R32 濱崎 忠三・長尾 武典		
昭和33年	1958年	R32 稲鍵 雄康 R64 長尾 武典 R64 平野 一斎	R16 平野 一斎・藤井 道雄 R32 稲鍵 雄康・長尾 武典		
昭和34年	1959年	R32 藤井 道雄 R32 平野 一斎 R64 稲鍵 雄康 R64 長尾 武典 R64 松本 鐵一	R32 平野 一斎・藤井 道雄 R32 稲鍵 雄康・長尾 武典		
昭和35年	1960年	R16 藤井 道雄 R32 平野 一斎 R32 長尾 武典 R32 小林 功 R64 北条 守 R64 渡辺 康二	SF 平野 一斎・藤井 道雄 R32 渡辺 康二・小林 功 R32 河盛 純造・前川 治一郎	R32 田淵 順子	
昭和36年	1961年	R16 藤井 道雄 R32 平野 一斎 R64 小林 功 R64 河盛 純造 R64 渡辺 康二	V 平野 一斎・藤井 道雄 R32 渡辺 康二・小林 功		SF 村上 登美子・木村 洋子
昭和37年	1962年	QF 渡辺 康二 R16 小林 功 R32 野々村 浩 R64 河盛 純造 R64 浅井 正順	R16 渡辺 康二・小林 功 R32 河盛 純造・浅井 正順	R16 村上 登美子 R16 木村 洋子	QF 村上 登美子・木村 洋子
昭和38年	1963年	QF 渡辺 康二 R16 小林 功 R64 野々村 浩 R64 河盛 純造 R64 浅井 正順	SF 渡辺 康二・小林 功 QF 河盛 純造・浅井 正順 R32 野々村 浩・甲斐 建樹	QF 村上 登美子 R16 木村 洋子	R20 村上 登美子・木村 洋子
昭和39年	1964年	R16 浅井 正順 R32 甲斐 建樹 R64 野々村 浩 R64 平野 洋治	R32 浅井 正順・甲斐 建樹	R32 木村 洋子	QF 木村 洋子・後神(日大)
昭和40年	1965年	R32 浅井 正順 R64 甲斐 建樹 R64 平野 洋治	R16 平野 洋治・津山 隆三 R32 浅井 正順・甲斐 建樹		

		男子シングルス	男子ダブルス	女子シングルス	女子ダブルス
昭和41年	1966年	R64 甲斐 建樹	R16 甲斐 建樹・渡辺(住金) R32 高木 祐・圓崎 勝		
昭和42年	1967年	R64 木本 結一郎	R32 京谷 光雄・圓崎 勝		
昭和43年	1968年	QF 木本 結一郎 R64 辻本 隆	R16 木本 結一郎・辻本 隆	R32 田原 みどり	
昭和44年	1969年	R16 木本 結一郎 R64 辻本 隆	R16 木本 結一郎・辻本 隆 R32 柴田 啓嗣・辻本 豊	R32 田原 みどり	
昭和45年	1970年	R64 辻本 豊	R16 柴田 啓嗣・辻本 豊 R32 廣瀬 知正・山崎 純		
昭和46年	1971年	R32 辻本 豊	R16 柴田 啓嗣・辻本 豊		
昭和47年	1972年	R64 西尾 茂之		R16 安保 恵利子	
昭和48年	1973年			R48 安保 恵利子	
昭和49年	1974年	R64 中川 純二			
昭和50年	1975年	R32 吉田 昇生	R32 中西 伊知郎・江見 浩平		
昭和51年	1976年	R32 吉田 昇生 R64 中西 伊知郎			
昭和52年	1977年	R16 中西 伊知郎 R16 吉田 一宏 R64 吉田 昇生	R16 吉田 昇生・中西 伊知郎		
昭和53年	1978年	R16 中西 伊知郎 R32 吉田 一宏 R64 吉田 昇生	R16 吉田 昇生・中西 伊知郎 R32 仁木 信夫・白石 政次 R32 吉田 一宏・江見 浩平		
昭和54年	1979年	R16 中西 伊知郎	R16 中西 伊知郎・藤原 純一		
昭和55年	1980年	R16 中西 伊知郎 R64 藤原 純一	R32 中西 伊知郎・藤原 純一		
昭和56年	1981年	R64 藤原 純一	R32 藤原 純一・前田 健志		
昭和57年	1982年	R64 藤原 純一 R64 前田 健志	R16 藤原 純一・前田 健志		
昭和58年	1983年	R64 前田 健志	R32 広瀬 浩二・前田 健志		
昭和59年	1984年		R32 前田 健志・坂元 俊一		
昭和60年	1985年	R64 石本 茂			
昭和61年	1986年	R64 藤井 淳			
昭和63年	1988年	R96 藤井 淳	R32 四宮 康次郎・佐伯 孝平 R32 藤井 淳・加藤(同大)		
平成元年	1989年		R64 四宮 康次郎・佐伯 孝平		
平成2年	1990年		R64 佐伯 孝平・安藤 正人(同大)		
平成6年	1994年	R64 中村 総一郎 R64 重政 淳	R32 中村 総一郎・重政 淳		
平成7年	1995年	R32 重政 淳			
平成9年	1997年	R64 重政 淳	R32 片山 匡・森谷 智一		

※出場(本選)以上の結果を記載。

## ■ 全日本室内テニス選手権大会

		男子シングルス	男子ダブルス	女子シングルス	女子ダブルス
昭和40年	1965年	R19 浅井 正順			SF 木村 洋子・後神(日大)
昭和44年	1969年	R19 木本 結一郎	R9 木本 結一郎・辻本 隆		
昭和45年	1970年	R16 木本 結一郎	SF 木本 結一郎・辻本 隆		
昭和47年	1972年	R18 辻本 豊			
昭和51年	1976年	R17 吉田 昇生			
昭和53年	1978年	QF 中西 伊知郎	準V 吉田 昇生・中西 伊知郎		
昭和54年	1979年	R16 吉田 昇生 R16 中西 伊知郎	QF 吉田 昇生・中西 伊知郎		

※出場(本選)以上の結果を記載。

## ■ 全日本大学対抗テニス王座決定試合

和暦	西暦	順位	出場選手
昭和38年	1963年	V	F 甲南大学5-4慶応義塾大学 (複2-1 単3-3) 渡辺 康二・河盛 純造・小林 功・野々村 浩・浅井 正順・前川 浩一郎・甲斐 建樹
昭和40年	1965年	準V	F 甲南大学2-7慶応義塾大学 (複0-3 単2-4) 浅井 正順・平野 洋治・甲斐 建樹・津山 隆三・西尾 博文・京谷 光雄・山中 達夫
昭和42年	1967年	準V	F 甲南大学2-7慶応義塾大学 (複1-2 単1-5) 京谷 光雄・圓崎 勝・辻本 隆・木本 結一郎・山本 敏雄・上崎 和之・柳田 等
昭和46年	1971年	準V	F 甲南大学3-6法政大学 (複1-2 単2-4) 辻本 豊・柴田 啓嗣・山崎 純・木村 隆史・片山 和寛・辻田 敏
昭和53年	1978年	準V	F 甲南大学2-7中央大学 (複1-2 単1-5) 吉田 昇生・吉田 一宏・江見 浩平・白石 政次・仁木 信夫・中西 伊知郎・三村 晃久
昭和54年	1979年	V	F 甲南大学5-4早稲田大学 (複2-1 単3-3) 江見 浩平・酒井 龍二・白石 政次・仁木 信夫・廣部 雅仁・中西 伊知郎・三村 晃久・坪田 克彦・直木 隆明・藤原 純一
昭和55年	1980年	準V	F 甲南大学4-5中央大学 (複2-1 単2-4) 中西 伊知郎・三村 晃久・坪田 克彦・直木 隆明・上村 敏朗・石原 守・藤原 純一・是枝 宏二・中川 康・溝本 一人
平成6年	1994年	SF	SF 甲南大学3-6日本大学 (複1-2 単2-4) 中村 総一郎・新原 英世・今川 究・重政 淳・坂戸 宏通・森谷 智一
平成24年	2012年	SF	SF 甲南大学2-7法政大学 (複0-3 単2-4) 福本 達也・沼野 孝彰・貝野 友規・早瀬 勇次・上原 伊織・瀬古 悠貴・下向 将志

※ SF 以上を記載  
※ 1992年・男女6大学制開始

## ■ 関西学生テニスリーグ戦

和暦	西暦	男子	女子	和暦	西暦	男子	女子
昭和30年	1955年	2部1位・1部昇格		平成2年	1990年	1部3位	3部2位
昭和31年	1956年	準V		平成3年	1991年	1部3位	3部3位
昭和32年	1957年	準V		平成4年	1992年	1部5位	3部5位
昭和33年	1958年	準V	3部トーナメント	平成5年	1993年	1部4位	3部3位
昭和34年	1959年	準V	2部1位・1部昇格	平成6年	1994年	準V	3部1位・2部昇格
昭和35年	1960年	準V	1部4位	平成7年	1995年	1部4位	2部5位
昭和36年	1961年	準V	1部	平成8年	1996年	1部3位	
昭和37年	1962年	準V		平成9年	1997年	1部4位	
昭和38年	1963年	V		平成10年	1998年		
昭和39年	1964年	準V	V	平成11年	1999年		
昭和40年	1965年	V	1部3位	平成12年	2000年	1部5位	2部4位
昭和41年	1966年	準V	1部4位・2部降格	平成13年	2001年	1部6位・2部降格	2部3位
昭和42年	1967年	V	2部1位	平成14年	2002年	2部2位	2部6位
昭和43年	1968年	1部3位	2部1位・1部昇格	平成15年	2003年	2部	
昭和44年	1969年	準V	準V	平成16年	2004年	2部2位	2部5位
昭和45年	1970年	準V	1部3位	平成17年	2005年	2部4位	2部5位
昭和46年	1971年	V	1部3位	平成18年	2006年	2部4位	2部4位
昭和47年	1972年	V	準V	平成19年	2007年	2部3位	2部2位
昭和48年	1973年	1部3位	準V	平成20年	2008年	2部4位	2部2位
昭和49年	1974年	1部3位	準V	平成21年	2009年	2部2位	2部3位

和暦	西暦	男子	女子	和暦	西暦	男子	女子
昭和50年	1975年	準V	1部3位	平成22年	2010年	2部2位	2部1位・1部昇格
昭和51年	1976年	1部3位	1部4位・2部降格	平成23年	2011年	2部2位・1部昇格	1部4位
昭和52年	1977年	1部2位	2部4位・3部降格	平成24年	2012年	V	1部6位・2部降格
昭和53年	1978年	V	3部1位・2部昇格	平成25年	2013年	1部4位	2部3位
昭和54年	1979年	V	2部3位	平成26年	2014年	1部4位	2部6位
昭和55年	1980年	V	2部3位	平成27年	2015年	1部4位	2部3位
昭和56年	1981年	準V	2部2位	平成28年	2016年	1部6位	2部3位
昭和57年	1982年	1部3位	2部2位	平成29年	2017年	1部4位	2部1位・1部昇格
昭和58年	1983年	1部3位	2部3位	平成30年	2018年	1部3位	1部6位
昭和59年	1984年	準V	2部3位	令和元年	2019年	1部3位	1部6位・2部降格
昭和60年	1985年	準V	2部4位・3部降格	令和2年	2020年	中止	
昭和61年	1986年	1部4位・2部降格	3部・トーナメント	令和3年	2021年	1部3位	未開催
昭和62年	1987年	2部2位	3部1位・2部昇格	令和4年	2022年	1部6位	2部2位
昭和63年	1988年	2部1位・1部昇格	2部2位	令和5年	2023年	1部5位	2部1位・1部昇格
昭和64年	1989年	準V	2部4位・3部降格	※全結果を記載（空白は資料なし） ※1992年・男女6大学制開始			

## ■ 旧制高校 高専大会 (インターハイ) 関西ゾーン

		団体	[監督] 選手
昭和5年	1930年	V	伊藤 英吉・上谷 鋭吉・楠本 忠次・不破 栄一・伊藤 順吉
昭和8年	1933年	V	片岡 一郎・豊原 廉次郎・野村 正五郎・中山 素邦・不破 潤三
昭和9年	1934年	V	片岡 一郎・不破 潤三・灰谷 彬・堀田 正朝
昭和11年	1936年	V	不破 潤三・神沢 得之助・鈴木 恒弥・灰谷 彬・片岡 健二郎
昭和12年	1937年	V	片岡 健二郎・堀田 正朝・田中 実・杉生 篤亮・高松 秀二
昭和13年	1938年	V	岩井 周三・高松 秀二・大石 勝・藤原 邦雄・須藤 泰守

## ■ 旧制高校 高専大会 (インターハイ) 全国ゾーン

		シングルス	ダブルス	団体	[監督] 選手
昭和14年	1939年			V	高松 秀二・大石 勝・大野 英和・濱崎 良男・片岡 幸三郎
昭和22年	1947年	準V 陌間 啓芳	V 陌間 啓芳・松岡 通夫		
昭和23年	1948年			V	大久保 忠彦・溝部 拡・林 孝雄・武居 敦・中根 守久

## ■ インターハイ

		シングルス	ダブルス	団体	[監督] 選手
昭和26年	1951年		準V 松岡 功・岸本 禎夫		
昭和27年	1952年	QF 高石 勝	SF 小林 要・吉川 浩司	準V	松岡 功・小林 要・高石 勝・吉川 浩司・金森 輝雄・濱崎 忠三
昭和28年	1953年	QF 石黒 修	SF 高石 勝・石黒 修 QF 濱崎 忠三・大橋 一元		
昭和29年	1954年	V 石黒 修	QF 石黒 修・阿部 晴彦	SF	石黒 修・阿部 晴彦・田中 道郎・倉田 勝弘・稲鍵 雄康
昭和30年	1955年	QF 菅谷 定彦	準V 四宮 睦男・平野 一斎		
昭和31年	1956年	V 平野 一斎	準V 四宮 睦男・平野 一斎 QF 藤井 道雄・那須 善彦	SF	(メンバー表データなし)
昭和32年	1957年	準V 四宮 睦男	V 四宮 睦男・平野 一斎 準V 藤井 道雄・那須 善彦	V	平野 一斎・四宮 睦男・藤井 道雄・那須 善彦・野々村 俊雄・山根 義弘
昭和33年	1958年	QF 静敬太郎	SF 松本 鐵一・静敬太郎	V	静敬太郎・松本 鐵一・小林 功・渡辺 康二・前川 治一郎
昭和34年	1959年	V 松本 鐵一 準V 渡辺 康二 QF 小林 功	V 松本 鐵一・小林 功	V	渡辺 康二・松本 鐵一・小林 功・前川 治一郎・吉田 泰忠・西尾 忠朋
昭和35年	1960年	V 浅井 正順 QF 野々村 浩	QF 野々村 浩・西尾 忠朋	準V	野々村 浩・浅井 正順・西尾 忠朋・後藤 泰三・鈴鹿 勇一・片山 勉・甲斐 建樹
昭和36年	1961年	QF 平野 洋治	SF 平野 洋治・甲斐 建樹	準V	[藤原 邦雄] 平野 洋治・甲斐 建樹・西尾 博文・片山 勉・真野 邦彦・真鍋 千之
昭和37年	1962年	V 甲斐 建樹	QF 甲斐 建樹・伊藤 久雄	SF	[藤原 邦雄] 甲斐 建樹・稲鍵 尚吾・片山 勉・真野 邦彦・高垣 俊輔・伊藤 久雄
昭和38年	1963年		SF 高垣 俊輔・伊藤 久雄	SF	[藤原 邦雄] 京谷 光雄・高垣 俊輔・伊藤 久雄・沢田 隆・山根 義治・木村 肇
昭和39年	1964年		V 森 博・春日 徹	V	[藤原 邦雄] 森 博・藤原 英一・春日 徹・増成 治保・山岡 靖幸・柴山 隆彦
昭和40年	1965年	SF 藤原 英一 QF 山岡 靖幸	準V 藤原 英一・山岡 靖幸	QF	[藤原 邦雄] 藤原 英一・山岡 靖幸・柴山 隆彦・政岡 基重・神沢 雄次郎・廣瀬 知正
昭和42年	1967年	QF 堀田 義男			
昭和43年	1968年		SF 堀田 義男・小湊 孝	SF	[藤原 邦雄] 堀田 義男・木村 隆史・小湊 孝・片山 和寛・福原 庸介・望月 礼三
昭和44年	1969年		QF 近江 伸次・中川 純二	SF	[藤原 邦雄] 近江 伸次・横山 公一・片岡 道昭・池田 和正・中川 純二・小川 隆司
昭和45年	1970年			SF	[藤原 邦雄] 小川 隆司・中川 純二・池田 和正・川岸 尚行・松江 秀一郎・山本 雅英
昭和46年	1971年	QF 西尾 茂之	QF 松江 秀一郎・西尾 茂之	準V	[藤原 邦雄] 松江 秀一郎・西尾 茂之・山本 雅英・渡辺 豊・長瀬 佳彦・沼田 信弘
昭和47年	1972年	SF 西尾 茂之	準V 西尾 茂之・山根 敏彦	準V	[藤原 邦雄] 西尾 茂之・沼田 邦宏・山根 敏彦・渡辺 裕・難波 徹・橋本 滋
昭和48年	1973年		QF 難波 徹・吉田 昇生	QF	[藤原 邦雄] 吉田 昇生・難波 徹・橋本 滋・阪口 嘉雄・吉田 一宏・桑田 正彦
昭和49年	1974年	準V 吉田 昇生 QF 中西 伊知郎	QF 吉田 昇生・中西 伊知郎 QF 桑田 正彦・白石 政次	準V	[渡辺 義克] 吉田 昇生・江見 浩平・吉田 一宏・桑田 正彦・中西 伊知郎・白石 政次
昭和50年	1975年	SF 中西 伊知郎 SF 江見 浩平	準V 江見 浩平・中西 伊知郎 SF 桑田 正彦・白石 政次	準V	[渡辺 義克] 江見 浩平・中西 伊知郎・白石 政次・桑田 正彦・仁木 信夫・廣部 雅仁
昭和51年	1976年	準V 中西 伊知郎	準V 中西 伊知郎・坪田 克彦		
昭和52年	1977年		SF 坪田 克彦・直木 隆明 SF 藤原 純一・石原 守	SF	[渡辺 義克] 藤原 純一・坪田 克彦・溝本 一人・直木 隆明・石原 守・是枝 宏二
昭和53年	1978年		SF 藤原 純一・石原 守 QF 是枝 宏二・中川 康		
昭和55年	1980年	QF 前田 健志	QF 大内 義彦・前田 健志		
昭和56年	1981年		SF 石本 茂・坂元 俊一	QF	[藤原 邦雄] 坂元 俊一・石本 茂・菅原 竜生・池田 亨・松村 敏治・吉田 正治
昭和57年	1982年	QF 夏梅 秀紀			
昭和58年	1983年	準V 夏梅 秀紀		SF	[藤原 邦雄] 夏梅 秀紀・四宮 康次郎・石原 卓・藤井 淳・宇津原 彰一
昭和59年	1984年	SF 田中 智	準V 四宮 康次郎・藤井 淳 QF 夏梅 秀樹・木下 康	QF	[藤原 邦雄] 夏梅 秀紀・四宮 康次郎・藤井 淳・田中 智・四宮 慶太郎
昭和64年	1989年			R16	[中原 敬] 田中 修平・梶本 卓司・矢野 健太・津嶋 昭宏・野々山 健児
平成21年	2009年	QF 上原 伊織 R128 沼野 孝彰			
平成22年	2010年	QF 上原 伊織 R128 金江 紀幸			
平成26年	2014年		R64 吉田 有宇哉・近藤 龍之介		

※2003年(80周年)までは団体・個人戦ともにベスト8以上の結果を記載(団体メンバーも記載)。2004年以降は出場以上の結果を記載。

■ 兵庫県高等学校総合体育大会 テニスの部 (インターハイ県予選)

		シングルス	ダブルス	団体
昭和31年	1956年	V 四宮 睦男 準V 平野 一斎 SF 藤井 道雄	V 四宮 睦男・平野 一斎 準V 松岡 功・藤井 道雄 SF 野々村 浩・那須 善彦	V
昭和32年	1957年	V 平野 一斎 準V 四宮 睦男	V 四宮 睦男・平野 一斎 準V 藤井 道雄・那須 善彦	V
昭和33年	1958年	準V 静 敬太郎 SF 松本 鐵一 SF 吉田 泰忠	V 静 敬太郎・松本 鐵一 SF 吉田 泰忠・小林 功 SF 渡辺 康二・前川 治一郎	V
昭和34年	1959年	V 渡辺 康二 準V 松本 鐵一	V 松本 鐵一・小林 功 準V 渡辺 康二・前川 治一郎 SF 吉田 泰忠・西尾 忠明	V
昭和35年	1960年	V 野々村 浩 準V 浅井 正順 SF 平野 洋治	準V 野々村 浩・後藤 泰三	V
昭和36年	1961年	SF 浅井 正順 SF 平野 洋治	V 浅井 正順・平野 洋治 SF 山根 義治・京谷 光雄	V
昭和37年	1962年	V 甲斐 建樹 SF 伊藤 久雄	V 稻織 高吾・片山 勉 準V 甲斐 建樹・西尾 博文 SF 高垣 俊輔・山根 義治 SF 伊藤 久雄・京谷 光雄	準V
昭和38年	1963年		V 高垣 俊輔・伊藤 久雄 準V 京谷 光雄・山根 義治	準V
昭和39年	1964年	準V 森 博 SF 藤原 英一	V 森 博・春日 徹 SF 増成 治保・藤原 英一	V
昭和40年	1965年	SF 藤原 英一	V 藤原 英一・山岡 靖幸	V
昭和41年	1966年			SF
昭和42年	1967年	V 堀田 義男 SF 木村 隆史		準V
昭和43年	1968年	準V 堀田 義男	準V 堀田 義男・小湊 孝	V
昭和44年	1969年	SF 近江 伸次	V 近江 伸次・中川 純二	V
昭和45年	1970年	準V 小川 隆司 SF 中川 純二	V 小川 隆司・松江 秀一郎 準V 中川 純二・池田 和正	V
昭和46年	1971年	V 松江 秀一郎 準V 西尾 茂之	V 松江 秀一郎・西尾 茂之 SF 山本 雅英・渡辺 裕	V
昭和47年	1972年	V 西尾 茂之	V 西尾 茂之・山根 敏彦	V
昭和48年	1973年	V 吉田 昇生	V 吉田 一宏・難波 徹	V
昭和49年	1974年	V 吉田 昇生 準V 江見 浩平 SF 桑田 正彦 SF 吉田 一宏	V 吉田 一宏・中西 伊知郎 SF 桑田 正彦・白石 政次	V
昭和50年	1975年	V 江見 浩平 準V 中西 伊知郎	V 江見 浩平・中西 伊知郎 準V 桑田 正彦・白石 政次 SF 仁木 信夫・三村 晃久	V
昭和51年	1976年	V 中西 伊知郎	V 中西 伊知郎・坪田 克彦	準V
昭和52年	1977年	V 藤原 純一 SF 溝本 一人 SF 坪田 克彦	V 藤原 純一・石原 守 準V 坪田 克彦・直木 隆明 SF 是枝 宏二・中川 康	V
昭和53年	1978年	V 藤原 純一	V 是枝 宏二・中川 康	準V
昭和54年	1979年			SF
昭和55年	1980年	SF 坂元 俊一 SF 前田 健治	V 大内 義彦・前田 健志	準V
昭和56年	1981年	SF 石本 茂	V 石本 茂・坂元 俊一	V

		シングルス	ダブルス	団体
昭和57年	1982年	準V 夏梅 秀紀	V 松村 敏治・夏梅 秀紀	準V
昭和58年	1983年	V 夏梅 秀紀 SF 四宮 康次郎	準V 夏梅 秀紀・石原 卓 SF 宇津原 彰一・四宮 慶太郎	V
昭和59年	1984年	V 夏梅 秀紀 準V 四宮 康次郎 SF 藤井 淳 SF 田中 智	V 四宮 康次郎・藤井 淳 準V 夏梅 秀紀・木下 康	V
昭和60年	1985年			SF
昭和61年	1986年	SF 四宮 康次郎	準V 四宮 康次郎・塩田 哲也	SF
昭和62年	1987年	SF 大西 太郎	SF 大西 太郎・平野 卓雄	SF
昭和63年	1988年	SF 青木 伸二	SF 青木 伸二・阿部 文彦	SF
平成2年	1990年			SF
平成5年	1993年			SF
平成6年	1994年			SF
平成7年	1995年		SF 田中 修平・梶本 周平	SF
平成8年	1996年	V 田中 修平	V 田中 修平・津嶋 昭宏 SF 梶本 卓司・矢野 健太	V
平成9年	1997年	SF 梶本 卓司	準V 矢野 健太・梶本 卓司	SF
平成11年	1999年			SF
平成12年	2000年			SF
平成15年	2003年			SF
平成18年	2006年			SF
平成19年	2007年			SF
平成20年	2008年			準V
平成21年	2009年	準V 沼野 孝彰 SF 上原 伊織	SF 沼野 孝彰・上原 伊織	SF
平成22年	2010年	準V 金江 紀幸 SF 上原 伊織	SF 古村 賢太・上原 伊織 SF 大西 潤・金江 紀幸	準V
平成23年	2011年			SF
平成24年	2012年			SF
平成25年	2013年			SF
平成26年	2014年		準V 吉田 有宇哉・近藤 龍之介	SF
平成27年	2015年			SF
平成28年	2016年			SF
平成29年	2017年			SF
平成30年	2018年			準V
令和元年	2019年			SF
令和2年	2020年			未開催
令和3年	2021年			準V
令和4年	2022年		SF 黒川 陽・中元 奏太	SF

※団体戦はSF以上を記載。個人戦はベスト4以上の結果を記載。

## ■ 全日本ジュニアテニス選手権大会

		少年の部		幼年の部			
		シングルス	ダブルス	シングルス	ダブルス		
昭和3年	1928年	-	準V 上村 添治郎・増田	-	-		
昭和5年	1930年	SF 伊藤 順吉	V 伊藤 順吉・楠本 忠次	-	-		
昭和13年	1938年	QF 片岡 幸三郎	-	-	-		
昭和14年	1939年	V 大石 勝／準V 片岡 幸三郎／ SF 大野 英和	準V 片岡 幸三郎・大石 勝	-	-		
昭和15年	1940年	SF 大野 英和／QF 片岡 幸三郎	V 片岡 幸三郎・大野 英和	-	-		
昭和23年	1948年	V 溝部 拓	-	-	-		
昭和24年	1949年	準V 溝部 拓	V 溝部 拓・坂巻 (住吉ク)	-	-		
昭和26年	1951年	-	-	SF 高石 勝	V 高石 勝・中村 憲司		
昭和27年	1952年	-	V 松岡 功・伊藤 (池田ク) SF 小林 要・高石 勝	-	-		
昭和28年	1953年	SF 石黒 修／QF 高石 勝	準V 小林 要・高石 勝	-	-		
昭和29年	1954年	V 石黒 修	V 高石 勝・傍土 俱明 SF 石黒 修・阿部 晴彦	-	-		
昭和31年	1956年	SF 平野 一斎／QF 藤井 道雄／ QF 四宮 陸男	準V 平野 一斎・四宮 陸男 SF 藤井 道雄・那須 善彦	-	-		
昭和32年	1957年	V 平野 一斎／準V 四宮 陸男	準V 藤井 道雄・那須 善彦	V 吉田 泰忠／準V 渡辺 康二／ SF 田村 豊一郎	V 吉田 泰忠・渡辺 康二 準V 田村 豊一郎・後藤 泰三		
昭和33年	1958年	V 平野 一斎／QF 静 敬太郎／ QF 松本 鐵一	SF 渡辺 康二・前川 治一郎	準V 平野 洋治	-		
昭和34年	1959年	V 松本 鐵一／QF 渡辺 康二	-	-	-		
昭和35年	1960年	V 渡辺 康二	-	-	SF 山根 義治・京谷 光雄		
昭和36年	1961年	SF 浅井 正順	準V 浅井 正順・平野 洋治	-	SF 高垣 俊輔		
昭和37年	1962年	準V 甲斐 建樹	-	-	-		
昭和40年	1965年	QF 藤原 英一	-	-	-		
昭和41年	1966年	-	-	SF 小湊 孝	SF 近江 伸二・横山 公一		
昭和42年	1967年	-	-	SF 横山 公一	V 高田 典明・中川 純二		
昭和43年	1968年	SF 堀田 義男	準V 木村 隆史・小湊 孝 SF 辻本 豊・山崎 純	-	-		
昭和44年	1969年	-	-	-	準V 山根 敏彦・池田 和正		
昭和46年	1971年	QF 西尾 茂之	SF 西尾 茂之・松江 秀一郎	-	-		
昭和47年	1972年	QF 西尾 茂之／QF 山根 敏彦	SF 西尾 茂之・山根 敏彦	SF 中西 伊知郎	準V 中西 伊知郎・桑田 正彦		
昭和48年	1973年	QF 吉田 昇生	-	V 中西 伊知郎	準V 中西 伊知郎・中舎 敏明		
		18歳以下		16歳以下		14歳以下	
		シングルス	ダブルス	シングルス	ダブルス	シングルス	ダブルス
昭和49年	1974年	SF 江見 浩平	V 吉田 昇生・中西 伊知郎 SF 桑田 正彦・白石 政次	-	SF 三村 晃久・中舎 敏明	-	-
昭和50年	1975年	V 吉田 昇生 QF 江見 浩平	V 江見 浩平・中西 伊知郎 SF 桑田 正彦・白石 政次	-	-	-	-
昭和51年	1976年	V 中西 伊知郎	準V 中西 伊知郎・坪田 克彦	-	-	-	-
昭和53年	1978年	QF 藤原 純一	-	-	SF 大内 義彦・前田 健志	-	-
昭和55年	1980年	SF 前田 健志	-	-	-	準V 夏梅 秀紀	準V 井上 雷太・夏梅 秀紀
昭和56年	1981年	-	-	QF 夏梅 秀紀	-	-	-
昭和57年	1982年	QF 夏梅 秀紀	-	-	-	-	-
昭和58年	1983年	SF 夏梅 秀紀	-	-	SF 藤井 淳・四宮 康次郎	-	-
昭和59年	1984年	-	SF 藤井 淳・四宮 康次郎	-	-	-	-
昭和60年	1985年	SF 藤井 淳	-	-	-	-	-

		18歳以下		16歳以下		14歳以下	
		シングルス	ダブルス	シングルス	ダブルス	シングルス	ダブルス
平成18年	2006年	-	-	-	-	SF 大西 潤	R16 大西 潤・上原 伊織 R32 金江 紀幸・榎原 貴志
平成19年	2007年	-	-	R32 上原 伊織	R32 上原 伊織・北野 盛也 R32 沼野 孝彰・大西 潤	R32 金江 紀幸	R32 金江紀幸・岩佐 (ルクルータ)
平成20年	2008年	-	R32 沼野 孝彰・中村 洋輔	R32 上原 伊織	R32 綾部 大輝・西川 勇輝 (明石城西高)	-	R32 山本 将隆・中村 錬
平成21年	2009年	R16 上原 伊織 R32 沼野 孝彰 R64 金江 紀幸	R32 沼野 孝彰・上原 伊織	-	-	QF 中村 錬 QF 矢多 弘樹	V 中村 錬・矢多 弘樹 QF 綾部 翼・兼任 勇士郎 (難波徹NAMP)
平成22年	2010年	R32 上原 伊織 R64 金江 紀幸	R32 金江 紀幸・大西 潤 R32 上原 伊織・古村 賢太	-	R32 石宇 健人・山本 将隆 (相生学院高)	-	-
平成23年	2011年	-	-	-	QF 綾部 翼・田中 聡介	R64 村田 龍星	QF 村田 龍星・松本 樹 (Noah I.S.)
平成24年	2012年	-	-	-	R16 吉田 有宇哉・西岡 皇人	-	-
平成25年	2013年	-	-	-	-	R16 藪田 司	SF 藪田 司・村田 龍紀 (トップラン)
平成26年	2014年	R32 吉田 有宇哉	-	-	-	-	R32 高尾 尚樹・中 一茶
平成27年	2015年	-	-	-	R32 四宮 大地・梶原 洋	-	-
平成29年	2017年	-	-	-	R32 日野 健太・森田 篤郎	-	-
平成30年	2018年	-	-	-	QF 日野 健太・森田 篤郎	R64 柴田 畝那	-
令和元年	2019年	-	R32 奥平 駿・森田 篤郎	-	-	-	-

※2003年(80周年)までは単ベスト8・複ベスト4以上の結果を記載。2004年以降は出場以上の結果を記載。

## ■ 関西少年幼年庭球選手権大会

		少年の部		幼年の部	
		シングルス	ダブルス	シングルス	ダブルス
昭和41年	1966年	準V 辻本 隆	V 辻本 隆・木本 結一郎	準V 小湊 孝	SF 小湊 孝・間野
				QF 近江 伸次	SF 近江 伸次・横山 公一
昭和42年	1967年	QF 堀田 義男		SF 横山 公一	V 高田 典明・中川 純二
				QF 中川 純二	
昭和43年	1968年	SF 山崎 純	V 辻本 豊・山崎 純	QF 松江 秀一郎	SF 松江 秀一郎・山本 雅英
		SF 堀田 義男	準V 堀田 義男・片山 和寛		
		QF 辻本 豊	SF 木村 隆史・小湊 孝		
昭和44年	1969年	SF 中川 純二	SF 中川 純二・近江 伸次	SF 山根 敏彦	準V 山根 敏彦・池田 和正
昭和45年	1970年	V 中川 純二	V 中川 純二・池田 和正		SF 西野・松藤
			準V 小川 隆司・松江 秀一郎		
昭和46年	1971年	SF 西尾 茂之	V 西尾 茂之・松江 秀一郎	記録なし	
		SF 松江 秀一郎			
昭和47年	1972年	準V 西尾 茂之	V 西尾 茂之・山根 敏彦	SF 中西 伊知郎	
		SF 土持 耕治			
		QF 沼田 邦宏			
		QF 山根 敏彦			
昭和48年	1973年	SF 吉田 昇生	V 難波 徹・吉田 昇生	V 中西 伊知郎	V 中西 伊知郎・中舎 敏明
		QF 江見 浩平		SF 中舎 敏明	

## ■ 関西ジュニアテニス選手権大会

		18歳以下		16歳以下		14歳以下	
		シングルス	ダブルス	シングルス	ダブルス	シングルス	ダブルス
昭和49年	1974年	V 吉田 昇生	V 吉田 昇生・中西 伊知郎	準V 中舎 敏明	準V 中舎 敏明・三村 晃久	SF 直木 隆明	V 直木 隆明・石田 将人
		SF 江見 浩平	準V 吉田 一宏・江見 浩平	QF 坪田 克彦			SF 石本 幸市郎・前田 昭
		QF 仁木 信夫	SF 仁木 信夫・廣部 雅仁				
		QF 中西 伊知郎					
昭和50年	1975年	V 中西 伊知郎	V 江見 浩平・中西 伊知郎	準V 坪田 克彦			
		準V 江見 浩平	準V 桑田 正彦・白石 政次				
		QF 中舎 敏明					
昭和51年	1976年	V 中西 伊知郎	V 中西 伊知郎・坪田 克彦	準V 藤原 純一	V 直木 隆明・石田 将人		
				SF 直木 隆明	準V 石原 守・藤原 純一		
昭和52年	1977年	SF 藤原 純一	準V 坪田 克彦・直木 隆明			SF 福永 成樹	準V 三浦 耕史・坂元 俊一
			SF 是枝 宏二・中川 康			SF 三浦 耕史	SF 石本 茂・福永 成樹
昭和53年	1978年	準V 藤原 純一	V 石原 守・藤原 純一	記録なし			準V 古畑 龍・菅原 竜生
昭和54年	1979年			QF 福永 成樹	準V 石本 茂・福永 成樹		
昭和55年	1980年	V 前田 健志	V 大内 義彦・前田 健志		SF 池田 亨・松村 敏治	V 夏梅 秀紀	SF 井上 雷太・夏梅 秀紀
						QF 井上 雷太	SF 明瀬 周二・田中 智
昭和56年	1981年		SF 石本 茂・坂元 俊一	V 夏梅 秀紀	SF 石原 卓・夏梅 秀紀	QF 田中 智	
				QF 石原 卓			
昭和57年	1982年	QF 夏梅 秀紀		QF 宇津原 彰一	V 井上 雷太・熊谷 定男		
				QF 井上 雷太	SF 木下 康・田頭 (神戸クラブ)		
				QF 四宮 康次郎			
昭和58年	1983年	SF 夏梅 秀紀	SF 木下 康・夏梅 秀紀	V 四宮 康次郎	V 四宮 康次郎・藤井 淳	SF 阿部 元彦	
		QF 四宮 慶太郎		QF 塩田 哲也	SF 田中 智・藤本 拓司		
				QF 田中 智			
				QF 藤井 淳			
昭和59年	1984年	準V 夏梅 秀紀	V 四宮 康次郎・藤井 淳				
		SF 四宮 康次郎					
		QF 木下 康					
		QF 田中 智					
昭和60年	1985年	QF 塩田 哲也					
昭和61年	1986年	QF 塩田 哲也			SF 阿部 元彦・青木 伸二		
~~~~~							
平成18年	2006年	-	-	QF 沼野 孝彰	-	SF 大西 潤	V 上原 伊織・大西 潤
							準V 金江 紀幸・榎原 貴志
平成19年	2007年	-	-	QF 上原 伊織	SF 上原 伊織・北野 盛也	SF 金江 紀幸	準V 金江 紀幸・岩佐 (ルケールTA)
					QF 沼野 孝彰・大西 潤		
平成20年	2008年	-	QF 沼野 孝彰・中村 洋輔	SF 上原 伊織	R32 綾部 大輝・西川(明石城西高)	-	準V 山本 将隆・中村 錬
平成21年	2009年	準V 沼野 孝彰	準V 沼野 孝彰・上原 伊織	-	-	V 矢多 弘樹	V 中村 錬・矢多 弘樹
		SF 上原 伊織				準V 中村 錬	QF 綾部 翼・兼任(難波徹NAMP)
平成22年	2010年	V 上原 伊織	SF 上原 伊織・古村 賢太	-	QF 石宇 健人・山本(相生学院高)	-	-
		QF 金江 紀幸	QF 金江 紀幸・大西 潤				
平成23年	2011年	-	QF 古村 賢太・石宇 健人	-	QF 綾部 翼・田中 聡介		準V 村田 龍星・松本 (Noah I.S.)

		18歳以下		16歳以下		14歳以下	
		シングルス	ダブルス	シングルス	ダブルス	シングルス	ダブルス
平成24年	2012年	-	-	-	QF 吉田 有字哉・西岡 皇人	-	-
平成25年	2013年	-	-	-	-	QF 藪田 司	QF 藪田 司・村田 (トップラン)
平成26年	2014年	-	-	-	-	-	QF 高尾 尚樹・中 一茶
平成27年	2015年	-	-	-	QF 四宮 大地・梶原 洋	-	-
平成29年	2017年	-	-	-	QF 日野 健太・森田 篤郎	-	-
平成30年	2018年	-	-	-	SF 日野 健太・森田 篤郎	QF 柴田 敏那	QF 野村 光平・中村 奏太
令和元年	2019年	-	QF 奥平 駿・森田 篤郎	-	QF 野村 光平・中村 奏太	-	-

※2003年(80周年)までは単ベスト8・複ベスト4以上の結果を記載。2004年以降は単複ベスト8の結果を記載。

■ 兵庫県春季ジュニア選手権大会 (旧：楽天杯)

		少年		幼年			
		シングルス	ダブルス	シングルス	ダブルス		
昭和47年	1972年	V 西尾 茂之	V 西尾 茂之・山根 敏男				
昭和48年	1973年		V 吉田 昇生・難波 徹	V 中西 伊知郎	V 中西 伊知郎・中舎 敏明		
		18歳以下		16歳以下		14歳以下	
		シングルス	ダブルス	シングルス	ダブルス	シングルス	ダブルス
昭和49年	1974年	V 吉田 昇生	V 吉田 昇生・中西 伊知郎				
昭和50年	1975年	V 江見 浩平	V 仁木 信夫・江見 浩平	V 坪田 克彦	V 溝本 一人・是枝 宏二		
昭和51年	1976年	V 中西 伊知郎	V 中西 伊知郎・坪田 克彦				
昭和52年	1977年		V 藤原 純一・石原 守			V 三浦 耕史	準V 福永 成樹・石本 茂
昭和53年	1978年	V 藤原 純一				準V 菅原 竜生	
昭和54年	1979年				V 福永 成樹・石本 茂		
昭和55年	1980年					V 夏梅 秀紀	V 夏梅 秀紀・井上 雷太
昭和56年	1981年		V 石本 茂・坂元 俊一		V 夏梅 秀紀・石原 卓		
昭和57年	1982年			V 田中 智 準V 宇津原 彰一	V 井上 雷太・熊谷 定男		準V 塩田 哲也・小川 武志
昭和58年	1983年	V 夏梅 秀紀		V 四宮 康次郎	V 四宮 康次郎・藤井 淳	V 阿部 元彦	V 小川 武志・阿部 元彦
昭和59年	1984年	V 四宮 康次郎	V 四宮 康次郎・藤井 淳				
昭和60年	1985年	V 藤井 淳	V 藤井 淳・塩田 哲也				
昭和61年	1986年	準V 塩田 哲也			V 阿部 文彦・青木伸二(神戸ク)		
平成6年	1994年				V 中井 久雄・田中 修平		
平成7年	1995年				V 田中 修平・津嶋 昭宏		
平成8年	1996年	V 田中 修平	V 田中 修平・矢野 健太				
平成18年	2006年	-	-	-	-	-	V 大西 潤・上原 伊織 準V 金江 紀幸・榎原 貴志
平成19年	2007年	-	-	準V 沼野 孝彰	準V 沼野 孝彰・大西 潤	V 金江 紀幸	V 金江 紀幸・岩佐 飛鷹(ルクルTA)
平成20年	2008年			V 金江 紀幸 準V 上原 伊織	準V 上原 伊織・大西 潤		
平成21年	2009年	V 上原 伊織	-	-	-	V 中村 錬	V 中村 錬・矢多 弘樹 準V 綾部 翼・ 兼任 勇士郎 (REX KOBE)
平成22年	2010年	準V 上原 伊織	-	-	-	-	-
平成24年	2012年				準V 吉田 有字哉・西岡 皇人		
平成25年	2013年						V 藪田 司・村田 龍紀(宝塚TCO)
平成26年	2014年	準V 吉田 有字哉	準V 吉田 有字哉・近藤 龍之介				
平成28年	2016年	-	-	-	-	-	V 森田 篤郎・日野 健太

※優勝・準優勝者を記載

■ 全国中学生テニス選手権大会

		回	シングルス	ダブルス
昭和49年	1974年	1	-	SF 坪田 克彦・大橋 一徳
昭和50年	1975年	2	-	準V 藤原 純一・石原 守 SF 是枝 宏二・廣部 永隆
昭和55年	1980年	7	QF 夏梅 秀紀	-
昭和57年	1982年	9	-	SF 藤井 淳・四宮 康次郎
昭和59年	1984年	11	-	QF 平野 卓雄・大西 太郎
平成5年	1993年	20	-	QF 田中 修平・津嶋 昭広

		回	シングルス	ダブルス
平成18年	2006年	33	QF 夏梅 秀紀	QF 榎原 貴志・金江 紀幸
平成21年	2009年	36	-	V 中村 錬・矢多 弘樹
平成22年	2010年	37	-	QF 綾部 翼・田中 聡介
平成23年	2011年	38	-	QF 吉田 有宇哉・西岡 皇人
平成26年	2014年	41	-	QF 梶原 洋・四宮 大地 QF 藪田 司・高尾 尚樹
平成29年	2017年	44	-	SF 森田 篤郎・日野 健太

※単複ともQF以上の結果を記載

■ 全国中学生テニス選手権大会

		回	団体	[監督] 選手
昭和56年	1981年	1	V	[中原 敦] 弘世 芳嗣郎・明瀬 周二・夏梅 秀紀・小泉 英助・田中 智・熊谷 定男
昭和58年	1983年	3	準V	[中原 敦] 小川 武志・延原 孝二・阪本 真司・塩田 哲也・佐伯 孝平・阿部 元彦
昭和59年	1984年	4	準V	[中原 敦] 平野 卓雄・須部 哲司・阿部 文彦・小林 銀次郎・大西 太郎・前川 満太郎・長野 孝治
平成9年	1997年	17	準V	[八田 豊司] 武藤 晶紀・大林 正幸・野本 宗太郎・丸山 隆也・古川 智章・横大路 裕紀・福田 容久・若生 周治
平成18年	2006年	26	V	[八田 豊司] 上原 伊織・金江 紀幸・大西 潤・伴 亮志・永田 薫平・上曾山 博貴・鈴木 達也・山本 将隆・中村 錬・石宇 健人
平成19年	2007年	27	V	[八田 豊司] 沼野 孝彰・上原 伊織・大西 潤・金江 紀幸・榎原 貴志・北野 盛也・北 賢人・岸本 良介・三宅 祥隆・貴田 大史
平成21年	2009年	29	V	[八田 豊司] 中村 錬・矢多 弘樹・山本 将隆・石宇 健人・綾部 翼・上曾山 博貴・鈴木 達也・吉田 有宇哉・田中 聡介・村田 龍星
平成26年	2014年	34	V	[福井 隆之] 藪田 司・梶原 洋・四宮 大地・高尾 尚樹・中 一茶・岡本 良太・武本 新平・徳田 和也・近田 賢祐・溝辺 慶師
平成28年	2016年	36	準V	[福井 隆之] 宇津原 陽・佐々木 心丸・篠原 ユーコン嶺・柴田 畝那・杉本 孝行・西村 瑛人・西村 圭人・日野 健太・藤原 朋也・森田 篤郎
平成29年	2017年	37	準V	[福井 隆之] 石丸 翔一・宇津原 陽・大路 京・柴田 畝那・高橋 志和・中田 圭・日野 健太・藤原 朋也・森田 篤郎・山邑 孔三朗

※優勝・準優勝のみ

★現在・最多優勝記録を保持

■ 全国選抜中学テニス選手権大会

		回	団体	[監督] 選手
平成26年	2014年	2	V	[福井 隆之] 藪田 司・梶原 洋・四宮 大地・高尾 尚樹・中 一茶・岡本 良太・武本 新平
平成28年	2016年	4	準V	[福井 隆之] 宇津原 陽・篠原 ユーコン嶺・柴田 畝那・杉本 孝行・西村 瑛人・日野 健太・藤原 朋也・森田 篤郎
平成29年	2017年	5	V	[福井 隆之] 宇津原 陽・大路 京・柴田 畝那・高橋 志和・中田 圭・日野 健太・藤原 朋也・森田 篤郎

※優勝・準優勝のみ

■ 全日本学生テニス選手権大会

		男子シングルス	男子ダブルス	女子シングルス	女子ダブルス
昭和30年	1955年	V 松岡 功	準V 松岡 功・小林 要		
昭和31年	1956年	QF 松岡 功 QF 小林 要	V 松岡 功・小林 要 SF 高石 勝・傍士 俱明		
昭和32年	1957年	QF 高石 勝	V 高石 勝・傍士 俱明		
昭和34年	1959年	QF 藤井 道雄	準V 稲鍵 雄康・長尾 武典 SF 藤井 道雄・平野 一斎		
昭和35年	1960年	準V 藤井 道雄	-		
昭和36年	1961年	SF 藤井 道雄 QF 渡辺 康二	V 藤井 道雄・平野 一斎	QF 村上 登美子	V 村上 登美子・木村 洋子
昭和37年	1962年	QF 渡辺 康二			V 村上 登美子・木村 洋子

		男子シングルス	男子ダブルス	女子シングルス	女子ダブルス
昭和38年	1963年	V 渡辺 康二	V 渡辺 康二・小林 功	QF 村上 登美子	準V 村上 登美子・木村 洋子
昭和39年	1964年	QF 浅井 正順		QF 村上 登美子	準V 村上 登美子・木村 洋子
昭和40年	1965年	QF 浅井 正順	-		
昭和43年	1968年		SF 木本 結一郎・辻本 隆	QF 田原 みどり	
昭和44年	1969年	SF 木本 結一郎	準V 木本 結一郎・辻本 隆		
昭和45年	1970年	-	SF 辻本 豊・柴田 啓嗣		
昭和46年	1971年	SF 辻本 豊	-		
昭和52年	1977年	V 中西 伊知郎	V 吉田 昇生・中西 伊知郎		
昭和53年	1978年	SF 吉田 昇生	-		
昭和54年	1979年	V 中西 伊知郎/SF 江見 浩平	V 中西 伊知郎・江見 浩平		
昭和55年	1980年	準V 中西 伊知郎	SF 中西 伊知郎・藤原 純一		
昭和57年	1982年	-	準V 藤原 純一・田淵 (近大)		
昭和59年	1984年	QF 前田 健志	V 前田 健志・坂元 俊一		
昭和63年	1988年	QF 藤井 淳	準V 藤井 淳・四宮 康次郎		
~~~~~					
平成6年	1994年	R32 重政 淳			
平成7年	1995年	R16 重政 淳	R16 重政 淳・坂戸 宏道		
平成8年	1996年	R16 重政 淳	R16 重政 淳・坂戸 宏道		
平成13年	2001年			R32 城下 裕子	
平成24年	2012年	R32 上原 伊織/R32 沼野 孝彰			
平成25年	2013年	R32 早瀬 勇次/R32 瀬古 悠貴/R32 上原 伊織/R32 沼野 孝彰		R16 北山 由佳	
平成26年	2014年	R32 上原 伊織			
平成29年	2017年		R16 吉田 有字哉・福嶋 航大	R32 中谷 琴乃	
令和元年	2019年			R16 中谷 琴乃	
令和2年	2020年	R32 岡崎 大倭/R32 東川 将大			
令和4年	2022年		R16 藤本 拓・秋月 真緒		

※1988年までは単ベスト8・複ベスト4以上の結果を記載。1989年以降は単R32・複R16以上の結果を記載。

## ■ 全日本学生室内テニス選手権大会

		シングルス	ダブルス
昭和39年	1964年	SF 浅井 正順	SF 浅井 正順・甲斐 建樹
昭和44年	1969年	SF 木本 結一郎 QF 辻本 隆	SF 木本 結一郎・辻本 隆
昭和45年	1970年	-	SF 辻本 豊・柴田 啓嗣
昭和46年	1971年	V 辻本 豊	準V 辻本 豊・柴田 啓嗣
昭和51年	1976年	QF 吉田 昇生	-
昭和52年	1977年	V 吉田 昇生	V 吉田 昇生・中西 伊知郎
昭和53年	1978年	SF 中西 伊知郎 QF 吉田 昇生 QF 吉田 一宏	V 吉田 昇生・中西 伊知郎
昭和54年	1979年	SF 中西 伊知郎	V 中西 伊知郎・藤原 純一
昭和55年	1980年	準V 中西 伊知郎	-
昭和56年	1981年	準V 藤原 純一	-
昭和57年	1982年	QF 藤原 純一	SF 藤原 純一・田淵 光仁(近大)
昭和58年	1983年	QF 前田 健志	-
昭和60年	1985年	QF 石本 茂	-

		シングルス	ダブルス
昭和61年	1986年	QF 藤井 淳	
昭和62年	1987年	QF 藤井 淳	
昭和63年	1988年	QF 藤井 淳	
平成6年	1994年	-	SF 中村 総一郎・重政 淳
~~~~~			
平成23年	2011年	R20 上原 伊織 R28 沼野 孝彰	
平成24年	2012年	R20 上原 伊織 R16 沼野 孝彰	
平成25年	2013年	R16 上原 伊織 R16 沼野 孝彰 R20 北山 由佳	
平成29年	2017年	QF 中谷 琴乃	QF 吉田 有字哉・福嶋 航大
平成30年	2018年	R32 中谷 琴乃	
令和元年	2019年	R16 東川 将大 R32 岡崎 大倭	

※2003年(80周年)までは単ベスト8 複ベスト4以上の結果を記載。
 ※2004年以降は出場(本選:単R32・複R16)以上の結果を記載。

■ 関西学生選手権大会

		男子シングルス	男子ダブルス	女子シングルス	女子ダブルス
昭和4年	1929年	SF 伊藤 英吉	-	-	-
昭和5年	1930年	SF 伊藤 英吉	SF 伊藤 英吉・伊藤 順吉	-	-
昭和7年	1932年	-	SF 不破 栄一・光村 正一	-	-
昭和15年	1940年	-	SF 大石 勝・片岡 幸三郎	-	-

■ 関西学生春季テニストーナメント

		男子シングルス	男子ダブルス	女子シングルス	女子ダブルス
昭和29年	1954年	SF 松岡 功	V 松岡 功・小林 要	SF 豊田 良江	準V 豊田 良江・村松
昭和30年	1955年	SF 小林 要	準V 清水 博一・松本 恭一		
昭和31年	1956年	-	準V 高石 勝・傍土 俱明		
昭和32年	1957年	準V 高石 勝	V 高石 勝・傍土 俱明 SF 阿部 晴彦・稲鍵 雄康		
昭和33年	1958年	準V 平野 一斎	SF 稲鍵 雄康・長尾 武典		
昭和34年	1959年	SF 平野 一斎/SF 稲鍵 雄康	V 平野 一斎・藤井 道雄		
昭和35年	1960年	SF 藤井 道雄	準V 平野 一斎・藤井 道雄	SF 田淵 順子	SF 田淵 順子・斎藤 ひろみ
昭和36年	1961年	準V 平野 一斎/SF 藤井 道雄	V 平野 一斎・藤井 道雄	V 村上 登美子	V 村上 登美子・木村 洋子 準V 田淵 順子・斎藤 ひろみ
昭和37年	1962年	V 渡辺 康二	準V 渡辺 康二・小林 功 SF 河盛 純造・浅井 正順	SF 村上 登美子/SF 木村 洋子	V 村上 登美子・木村 洋子
昭和38年	1963年	V 渡辺 康二/SF 河盛 純造	準V 河盛 純造・浅井 正順 SF 野々村 浩・甲斐 建樹 SF 渡辺 康二・小林 功	準V 木村 洋子/SF 村上 登美子	準V 村上 登美子・木村 洋子
昭和39年	1964年	準V 浅井 正順/SF 平野 洋治	SF 野々村 浩・浅井 正順	準V 村上 登美子/SF 木村 洋子	V 村上 登美子・木村 洋子 SF 中島 仁子・津山 久子 SF 加藤 洋子・田崎 恵子
昭和40年	1965年	準V 浅井 正順/SF 平野 洋治	V 浅井 正順・甲斐 建樹 SF 平野 洋治・津山 隆三	SF 田崎 恵子	SF 斎藤 ゆたか・橋本 雅子 SF 田崎 恵子・羽根 民枝
昭和41年	1966年	SF 甲斐 建樹	準V 高木 祐・圓崎 勝		
昭和42年	1967年	SF 京谷 光雄	SF 京谷 光雄・圓崎 勝 SF 木本 結一郎・辻本 隆		SF 斎藤 ゆたか・田原 みどり
昭和43年	1968年	SF 木本 結一郎	V 木本 結一郎・辻本 隆	SF 田原 みどり	SF 田原 みどり・鈴木 みな
昭和44年	1969年	V 木本 結一郎	V 木本 結一郎・辻本 隆	SF 田原 みどり	
昭和45年	1970年	準V 辻本 豊	準V 柴田 啓嗣・辻本 豊		
昭和46年	1971年	V 辻本 豊	V 木村 隆史・辻田 敏	-	
昭和47年	1972年		準V 片山 和寛・中川 純二 SF 木村 隆史・辻田 敏 SF 望月 礼三・榎本 博行	-	
昭和48年	1973年			SF 安保 恵利子	
昭和51年	1976年	SF 吉田 昇生	-		-
昭和52年	1977年	V 中西 伊知郎/準V 吉田 昇生	-		-
昭和53年	1978年	V 中西 伊知郎/準V 吉田 一宏/ SF 吉田 昇生	V 吉田 昇生・中西 伊知郎 準V 仁木 信夫・白石 政次		
昭和54年	1979年	V 中西 伊知郎/SF 江見 浩平	V 江見 浩平・中西 伊知郎		
昭和55年	1980年	V 中西 伊知郎	V 中西 伊知郎・藤原 純一 SF 三村 晃久・坪田 克彦		
昭和56年	1981年	V 藤原 純一	SF 藤原 純一・石原 守		
昭和57年	1982年	V 藤原 純一/SF 前田 健志	V 藤原 純一・前田 健志		
昭和58年	1983年	V 前田 健志	V 広瀬 浩二・前田 健志		
昭和59年	1984年	SF 前田 健志/SF 坂元 俊一	SF 前田 健志・坂元 俊一		
昭和60年	1985年	V 石本 茂/SF 坂元 俊一	準V 坂元 俊一・石本 茂		

		男子シングルス	男子ダブルス	女子シングルス	女子ダブルス
昭和61年	1986年	SF 藤井 淳			
昭和62年	1987年	V 藤井 淳	準V 藤井 淳・四宮 康次郎		
昭和63年	1988年	V 藤井 淳/SF 四宮 康次郎	準V 藤井 淳・四宮 康次郎		
昭和64年	1989年	SF 藤井 淳	-		
平成2年	1990年	SF 四宮 康次郎/SF 佐伯 孝平	SF 佐伯 孝平・四宮 康次郎		
平成4年	1992年	SF 中村 総一郎	-		-
平成6年	1994年	SF 中村 総一郎/SF 重政 淳	V 中村 総一郎・重政 淳		
平成8年	1996年	準V 重政 淳/SF 坂戸 宏通	-		-
平成9年	1997年	準V 重政 淳	-		-
~~~~~					
平成21年	2009年	SF 福本 達也	-		-
平成23年	2011年	QF 沼野 孝彰/QF 上原 伊織	-	QF 北山 由佳	-
平成24年	2012年	QF 上原 伊織	SF 沼野 孝彰・上原 伊織		
平成25年	2013年	V 上原 伊織/SF 沼野 孝彰	SF 下向 将志・瀬古 悠貴		
平成26年	2014年	V 上原 伊織	-		-
平成27年	2015年	-		-	SF 中山 朋子・藤本 真子
平成29年	2017年		SF 福嶋 航大・吉田 有字哉 SF 岡崎 大俊・西本 光一	QF 中谷 琴乃	SF 中谷 琴乃・田崎 菜々子
平成30年	2018年	QF 吉田 有字哉/QF 岡崎 大俊	-		-
令和元年	2019年	QF 岡崎 大俊/QF 東川 将大	-		-
令和3年	2021年	QF 奥平 駿			

※2003年(80周年)までは単複ベスト4以上の結果を記載。2004年以降は単ベスト8・複ベスト4以上の結果を記載。

## ■ 関西学生テニス選手権大会

		男子シングルス	男子ダブルス	女子シングルス	女子ダブルス
昭和28年	1953年	SF 松岡 功	V 松岡 功・小林 要		
昭和29年	1954年	V 松岡 功	V 松岡 功・小林 要 SF 高石 勝・傍土 俱明		
昭和30年	1955年	SF 小林 要	SF 清水 博一・松本 恭一 SF 高石 勝・傍土 俱明		
昭和31年	1956年	V 松岡 功/SF 小林 要	V 松岡 功・小林 要 SF 高石 勝・傍土 俱明		
昭和32年	1957年	SF 高石 勝	V 高石 勝・傍土 俱明		
昭和33年	1958年	-	SF 稲鍵 雄康・長尾 武典	-	
昭和34年	1959年	SF 長尾 武典	準V 稲鍵 雄康・長尾 武典		SF 田淵 順子・斎藤 ひろみ
昭和35年	1960年		V 藤井 道雄・平野 一斎	SF 田淵 順子	SF 田淵 順子・斎藤 ひろみ
昭和36年	1961年	SF 渡辺 康二/SF 小林 功	準V 渡辺 康二・小林 功		V 村上 登美子・木村 洋子
昭和37年	1962年	準V 小林 功/SF 野々村 浩	SF 福永 崇・小林 功	SF 村上 登美子/SF 木村 洋子	準V 村上 登美子・木村 洋子
昭和38年	1963年	V 浅井 正順/準V 河盛 純造	V 小林 功・河盛 純造 準V 野々村 浩・浅井 正順 SF 後藤 泰三・鈴鹿 男一		V 村上 登美子・木村 洋子 SF 中島・津村
昭和39年	1964年	V 浅井 正順	V 浅井 正順・甲斐 建樹	準V 木村 洋子	V 村上 登美子・木村 洋子
昭和40年	1965年	準V 浅井 正順/SF 甲斐 建樹	準V 山中 義治・京谷 光雄 SF 西尾 博文・甲斐 建樹		
昭和42年	1967年	-	準V 京谷 光雄・圓崎 勝 SF 木本 結一郎・辻本 隆	-	
昭和43年	1968年	V 木本 結一郎	V 木本 結一郎・辻本 隆		SF 田原 みどり・鈴木 みな
昭和44年	1969年	V 木本 結一郎	V 木本 結一郎・辻本 隆	SF 田原 みどり	

		男子シングルス	男子ダブルス	女子シングルス	女子ダブルス
昭和45年	1970年	準V 辻本 豊	V 廣瀬 知正・山崎 純 SF 辻本 豊・柴田 啓嗣		
昭和46年	1971年	-	V 辻本 豊・柴田 啓嗣	-	
昭和47年	1972年	-	SF 片山 和寛・中川 純二	-	SF 鈴木 みな・安保 恵利子
昭和48年	1973年	SF 中川 純二	SF 中川 純二・松江 秀一郎		
昭和50年	1975年	SF 吉田 昇生	-		-
昭和51年	1976年	準V 吉田 昇生/SF 吉田 一宏	-		-
昭和52年	1977年	V 中西 伊知郎	V 吉田 昇生・中西 伊知郎		
昭和53年	1978年	準V 吉田 昇生/SF 吉田 一宏	V 仁木 信夫・白石 政次 準V 吉田 一宏・江見 浩平 SF 吉田 昇生・宮南 潔(関大)		
昭和54年	1979年	V 中西 伊知郎	V 中西 伊知郎・藤原 純一		
昭和55年	1980年	V 中西 伊知郎/SF 藤原 純一	V 中西 伊知郎・藤原 純一		
昭和56年	1981年	SF 藤原 純一	V 藤原 純一・前田 健志		
昭和57年	1982年	V 藤原 純一/準V 前田 健志	-		-
昭和58年	1983年	V 前田 健志	-		-
昭和59年	1984年	SF 前田 健志	準V 前田 健志・三竿 葉一(関学大) SF 坂元 俊一・石本 茂		
昭和60年	1985年	SF 坂元 俊一/SF 三谷 友孝	-		-
昭和61年	1986年	V 藤井 淳	準V 石原 卓・藤井 淳		SF 坪井 実紀・坂田 昭子
昭和62年	1987年	V 藤井 淳	-		-
昭和63年	1988年	準V 藤井 淳	V 藤井 淳・四宮 康次郎		
昭和64年	1989年	SF 佐伯 孝平	SF 佐伯 孝平・四宮 康次郎 SF 塩田 哲也・阪本 真司		
平成2年	1990年	-	V 佐伯 孝平・安藤 正人(同大)	-	
平成4年	1992年	SF 中村 総一郎	-		-
平成6年	1994年	SF 中村 総一郎	準V 中村 総一郎・重政 淳		
平成8年	1996年	V 重政 淳	SF 重政 淳・坂戸 宏通		
~~~~~					
平成22年	2010年	-		-	SF 小笹 衣利可 SF 伊丹 果
平成23年	2011年	SF 沼野 孝彰/QF 上原 伊織		QF 安部 千尋	
平成24年	2012年	準V 沼野 孝彰/SF 上原 伊織		QF 北山 由佳	準V 伊丹 果・北山 由佳
平成25年	2013年	QF 上原 伊織	SF 下向 将志・瀬古 悠貴	準V 北山 由佳	
平成26年	2014年	QF 上原 伊織	-		-
平成28年	2016年		SF 福嶋 航大・吉田 有宇哉	QF 中谷 琴乃	
平成30年	2018年		SF 福嶋 航大・吉田 有宇哉	QF 中谷 琴乃	
令和元年	2019年		-	SF 中谷 琴乃	-
令和2年	2020年	SF 東川 将大	-		-
令和4年	2022年		-	QF 川上 幸夏	-
令和5年	2023年			SF 中山 桜	

※2003年(80周年)までは単複ベスト4以上の結果を記載。2004年以降は単ベスト8・複ベスト4以上の結果を記載。

■ 関西学生室内テニス選手権大会

		男子シングルス	男子ダブルス	女子シングルス
昭和41年	1966年		SF 山本 敏雄・柳田 等	
昭和42年	1967年		V 京谷 光雄・圓崎 勝 SF 木本 結一郎・辻本 隆	
昭和44年	1969年	準V 木本 結一郎 SF 辻本 隆	V 木本 結一郎・辻本 隆 SF 辻本 豊・柴田 啓嗣	
昭和45年	1970年	SF 柴田 啓嗣		
昭和46年	1971年	準V 辻本 豊	V 辻本 豊・柴田 啓嗣	
昭和47年	1972年		準V 木村 隆史・辻田 敏 SF 片山 和寛・中川 純二	SF 安保 恵利子
昭和49年	1974年	準V 中川 純二		
昭和51年	1976年	V 吉田 昇生	V 吉田 昇生・吉田 一宏	
昭和52年	1977年	V 吉田 昇生 準V 中西 伊知郎	V 吉田 昇生・中西 伊知郎 準V 吉田 一宏・江見 浩平	
昭和53年	1978年	V 中西 伊知郎 準V 吉田 昇生	V 吉田 昇生・中西 伊知郎 準V 白石 政次・仁木 信夫 SF 吉田 一宏・江見 浩平	
昭和54年	1979年	V 中西 伊知郎	V 三村 晃久・坪田 克彦	
昭和55年	1980年	V 中西 伊知郎	V 中西 伊知郎・藤原 純一	
昭和56年	1981年	V 藤原 純一	準V 藤原 純一・前田 健志	
昭和57年	1982年		V 藤原 純一・前田 健志	
昭和59年	1984年		準V 前田 健志・三竿 (関学大) SF 大内 義彦・三谷 友孝	
昭和61年	1986年	SF 藤井 淳		
昭和62年	1987年	V 藤井 淳		

※単複ベスト4以上の結果を記載。

■ 甲南学園硬式庭球部 創部100周年記念事業 寄付者芳名録 (法人様)

宇津原 株式会社・テニスショップラリー (株式会社 宇津原商会)

34回 宇津原 彰一 様

神明倉庫 株式会社

36回 藤尾 憲弘 様

株式会社 布引コアコーポレーション

37回 佐伯 孝平 様

旭興 株式会社

38回 藤井 範彰 様

スモカ歯磨株式会社

7回 藤野 洋一 様

柴田音吉洋服店

18回 柴田 音吉 様

ナイス株式会社

29回 中西 信之 様

延原商事株式会社

37回 延原 孝二 様

ネットヨタゾナ神戸株式会社

42回 坂戸 秀彰 様

Astem Cloud株式会社

51回 柴田 昌俊 様

株式会社 奥村商会

55回 奥村 康平 様

■ 甲南学園硬式庭球部 創部100周年記念事業 寄付者芳名録 (個人様)

2回 清水 博一 様

6回 稲鍵 雄康 様

11回 西尾 忠朋 様

13回 片山 勉 様

16回 宇野 怜二 様

19回 片山 和寛 様

23回 森岡 孝太 様

27回 三村 晃久 様

29回 井上 雅之 様

29回 中西 信之 様

32回 石本 茂 様

36回 藤本 拓司 様

36回 直木 俊樹 様

37回 佐伯 孝平 様

44回 國光 宏昌 様

■ 甲南学園硬式庭球部 創部100周年記念事業 寄付者芳名録 (個人様)

ご卒業回	ご芳名
6	落合 滋 様
8	藤井 道雄 様
9	静 敬太郎 様
9	福永 崇 様
10	神原 武昌 様
10	前川 治一郎 様
10	前川 怜子 様
10	松本 鐵一 様
10	吉田 泰忠 様
10	渡辺 康二 様
12	浅井 正順 様
12	木村 恵子 様
12	高木 民枝 様
12	津山 隆三 様
12	真鍋 千之 様
13	久保田 民子 様
13	外村 和貴子 様
14	圓崎 勝 様
14	山本 敏雄 様
16	井上 みどり 様
16	滝澤 謙介 様
16	辻本 隆 様
17	西尾 佳三 様
17	廣瀬 知正 様
17	本田 夏子 様
18	有馬 市郎 様
18	岩 由美子 様
18	岡橋 輝和 様
18	辻本 豊 様
18	畑尾 道廣 様
18	山崎 純 様

ご卒業回	ご芳名
19	大山 守 様
19	木村 隆史 様
19	辻田 敏 様
19	堀田 義男 様
19	山田 幸男 様
20	片岡 道昭 様
20	瀧川 俊治 様
21	小川 隆司 様
21	久次 禮子 様
21	中川 純二 様
21	中原 三枝子 様
22	土持 耕治 様
22	山本 雅英 様
23	福島 忠敬 様
23	山根 敏彦 様
24	難波 徹 様
25	名和 順子 様
25	袴田 悦子 様
25	原 元子 様
26	至田 保彦 様
26	仁木 信夫 様
26	藤岡 克朗 様
27	市川 典男 様
27	田中 政明 様
27	中西 伊知郎 様
27	弘世 晃嗣郎 様
28	井上 正美 様
28	岡本 郁子 様
28	下村 慶子 様
28	坪田 克彦 様
28	直木 隆明 様

ご卒業回	ご芳名
28	西尾 義輝 様
28	福井 裕子 様
28	山中 祐子 様
29	是枝 宏二 様
29	中川 康 様
29	西畠 陽子 様
29	廣部 永隆 様
29	藤原 純一 様
29	細西 克弘 様
29	松岡 隆昭 様
30	井上 潤子 様
30	岩城 俊弘 様
30	島村 由美子 様
30	中西 次郎 様
31	長谷川 次郎 様
32	古畑 龍 様
32	菅原 竜生 様
32	徳重 敦之 様
32	中山 真理子 様
32	三宅 恒治 様
33	松村 敏治 様
33	三谷 友孝 様
34	石原 卓 様
34	井上 雷太 様
35	水谷 俊彦 様
35	横山 和典 様
36	石塚 雅子 様
36	尾崎 真二郎 様
36	戸田 孝 様
36	馬殿 太郎 様
36	深田 恭史 様

ご卒業回	ご芳名
36	升 祥史 様
36	山本 祥史 様
37	大地 篤司 様
37	奥田 泰之 様
37	阪本 眞司 様
37	塩田 哲也 様
37	谷内 宏隆 様
37	延原 孝二 様
38	大西 太郎 様
38	須部 哲司 様
38	平野 卓雄 様
39	小谷 英一郎 様
39	袖岡 恵子 様
40	阿部 文彦 様
40	村上 典由 様
41	東野 勝 様
42	春日 勉 様
42	小林 亮輔 様
42	小張 慎一郎 様
45	坂戸 宏通 様
45	津崎 元博 様
46	船津 裕之 様
47	北尾 佑介 様
48	安居 亮治 様
51	柴田 昌俊 様
54	吉川 達郎 様
55	奥村 康平 様
55	平野 薫朗 様
55	三ツ井 隆容 様
57	江見 奨 様

ご卒業回	ご芳名
59	權藤 丞 様
59	坂元 成 様
60	下向 将志 様
60	沼野 孝彰 様
60	松山 知史 様
61	上原 伊織 様
61	伴 亮志 様
63	岡田 岳 様
64	八塚 悠輝 様
65	宇津原 陸 様
65	才門 昂弘 様
66	角谷 智仁 様
66	木村 靖吾 様
67	東川 将大 様
68	野村 駿作 様
68	松浦 優成 様
68	八塚 和樹 様

寄付者芳名録は、オール甲南テニスクラブ
ホームページ (OB会ページ) にも記載しております。
ホームページアドレス <https://konan-tennis.jp/>

甲南学園硬式庭球部創部100周年記念誌編集委員会

委員長 石本 茂 (32回)

静 敬太郎 (9回)	吉田 泰忠 (10回)	山崎 純 (18回)	山中 祐子 (28回)
石塚 雅子 (36回)	直木 俊樹 (36回)	藤井 淳 (36回)	藤本 拓司 (36回)
下郷 麻子 (37回)	宇津原 陸 (65回)	吉田 有宇哉 (65回)	上野 桃子 (67回)
中村 雄介 (68回)	野村 駿作 (68回)	小林 恵梨子 (70回)	

学年幹事会幹事長 中西 信之 (29回)

グループ幹事

田中 隆雄 (37回)	村上 典由 (39回)	國光 宏昌 (44回)	安居 亮治 (48回)
柴田 昌俊 (51回)	奥村 康平 (55回)	平岡 陽太郎 (58回)	鈴木 啓太 (65回)
東川 将大 (67回)			

特別協力 児玉 英昭 (10回)

編集後記

甲南学園硬式庭球部のOB・OG組織であるオール甲南テニスクラブでは、2か月毎に(2020年10月からは毎月)、常任委員会が開催されています。通常は住吉の平生記念セミナーハウスで開催されており、東京からは支部長が出席していましたが、コロナ禍でZoomでの開催となったため、東京在住の私も2020年11月から出席するようになりました。

常任委員会に出席して驚いたのは、総会などのイベントの準備状況、会費の入金状況、また現役学生の戦績、就職活動支援について、毎回、細かく報告、協議が行われていたことです。常任委員の方々が、現役学生のため、OB会のため、本当に多くの時間と労力を費やされていること、特に、監督、コーチ、就職活動支援など、学生と直接関わる方々は、土日のほとんどを指導、応援に充てられていることを知り、頭が下がる思いでした。

「甲南学園硬式庭球部創部100周年記念事業」の準備も本格化した頃に、「100周年記念誌」の作成も決まりましたので、何かお役に立てればと思い、編集に参加させていただきましたが、いざ打ち合わせが始まると、世代間の考え方に違いがあり、どのような記念誌にするのか、なかなか意見がまとまりませんでした。

資料については、100年前のものはほとんど残っていませんでしたし、戦績についても、どこに保管されているのかということから調べる必要がありました。また、学年ページについても、学年によってテニス部への温度差もあり、原稿が集まらないことが多く、原稿依頼と回収を担当していただいた方々には、大変なお手数をおかけしたと思います。それでも、最終的にかなりの原稿や資料を集めることができたのは、中高大10年間テニス部に在籍した人たちを中心とした縦横の繋がりのおかげでした。特に「輝かしい活躍の歴史」については、渡辺康二先輩のご友人の児玉英昭様に、大変ご尽力いただきましたことに厚くお礼申し上げます。

この記念誌が、今までテニス部に関わってくださった方々にとって当時を振り返るきっかけとなり、現在テニス部で頑張っている中高大の学生の皆さんへのエールになれば幸いです。

最後になりましたが、原稿、写真、資料をお寄せくださった皆様、編集にご協力いただきましたすべての方々に心より感謝申し上げます。

山中 祐子 (28回)

甲南学園硬式庭球部 創部百周年記念誌

発行日 2023年11月25日

発行所 オール甲南テニスクラブ

〒658-8501 神戸市東灘区岡本8-9-1

甲南学園硬式庭球部内

印刷・編集 株式会社トライス

〒650-0016 神戸市中央区橘通1丁目1番9号

TEL: 078-341-2241